デジモンフロンティア〜ファイナル〜

竜気

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
デジモンフロンティア～ファイナル～

【Ｎコード】
Ｎ８２６９Ｗ

【作者名】
竜気

【あらすじ】
これは私のもう１つの作品、デジモンフロンティア～改～の続編です。そちらを読まれていない方は、読む事をお勧めします。出来るだけ、読んでいなくても分かるように書くので、よろしくお願いします！

1話：世界の異変（前書き）

1話、参ります！

1話：世界の異変

「兄ちゃん兄ちゃん！」

「何だよ、朝から騒がしいぞ～」

眠い中、弟の信也に叩き起こされる拓也。

「いいからテレビ！テレビ見て！」

「はぁ？俺ニュース嫌いなんだよな」

「いいから見る！黙って従う！」

信也に強制でベットから下ろされ、1階へ降りる。

「おはよ～」

「あ、おはよう。早いじゃない」

母にそう言われる拓也は、ノボ～ッとしていた。

「信也にテレビ見ろって、叩き起こされた」

「あぁ、なるほど。でもすごい事になってるから、見てみなさいよ」

母親にも促され、拓也は居間へと向かう。

因みに、あの冒険をしてから1ヶ月が経ち、今は9月だ。

『ご覧下さい！カメラから撮影している映像ですが、富士山山頂に何かが！何かが空から接近しています！』

テレビに映っているナレーターが、そう言っているが拓也はその映像に見入っていた。

富士山山頂の空から、逆さまになった山や大地が接近し、それを人のような者が止めている。

「おい、こいつは・・！」

拓也は映っているその人物を見て、目が覚めた。

『おっと、また何か飛んできます！！』

ナレーターの言うとおり、赤い装甲を纏った巨大な生き物らしき物体が、撮影中のヘリコプター近くを通過する。

（まさか・・・デジモン！？）

その時、

【おい拓也、ニュース見たか！？】

輝二から魂話が入る。

魂話は魂の会話なので、人間界でも使用可能という事が分かっていた。

【あぁ見た！っていうか今見てる！これ何処から如何見てもデジモンだよな！？】

【お前もそう思うか・・・。如何する、進化出来ない今じゃ、何も出来ないぞ】

輝二のお前も、という言葉で輝二も拓也と同じ考えという事が分かる。

【如何にもこうにもないな。如何しようもない】

【なら様子見でいいな？】

【・・・しゃ～ねぇだろ】

スピリットもデジヴァイスも無い今では、この選択しか出来なかった。

テレビを見ていたら白いデジモンが出てきたり、それに人間やデジモンが立ち向かったりと、とにかく目が離せない。

黙って見ているというのが、こんなに歯がゆいものとは知らなかった。

「拓也、学校！」

母親が時計を見て、慌てだす。

拓也は朝御飯も食べていない。

それどころかまだ寝巻だった。

「あ～くそ！」

拓也は急いで着替え、朝食を胃へ収める。

気づいた時には、すでにあの戦闘は終わっていた。

テレビ局は何が起こったのか理解していない。

ただどの番組も、

『3年前、東京の人達がビックサイトに集められた時の事件で、あのような生き物が出て来ましたが、今回もそれなのでしょうか?果たして――』

これと似たような事を言っている。

（3年前?・・・あぁ、あれか）

拓也が小学2年の時で、あまりよく覚えていなかったが確かにそんな事があった。

そんな事を思いながら、拓也は信也と共に、家を出た・・・。

学校に到着し、輝二、泉、輝一のいる隣のクラスへ駆け込んだ。

輝一は2週間くらい前に転校して来て、両親が再婚したらしい。

生憎、教室の中はニュースの事で騒ぎになっていた。

「輝二ぃぃぃっ！」

「来たか」

「おう！」

軽く拳をぶつけ合い、朝のあいさつを済ませる。

「で、ニュースの事についてだろ？」

「当然だ」

「如何考えてもデジモンよね」

泉は悩みながらそう言った。

教室の中は皆の声で溢れている為、少しくらい大声をだしても問題無い。

「今は様子見だけど・・・戦闘終わったらしいな」

「3年前の事、覚えてるな？」

輝二にそう尋ねられ、拓也はぁぁと頷いた。

「あれも今覚えばデジモンだったな・・・」

何故デジタルワールドを冒険中に、思い出さなかったのだろうか。

そうすればプロットモン達に相談出来たものを・・・。

――キーンコーンカーンコーン・・！

「やばい！」

拓也は予鈴を聞いて、急いで自分のクラスに帰った。

ホームルームもニュースの事が出たが、先生は気にするなとしか言わない。

それが妙に気になったが、普通に流しておく。

何事も無かったかのように授業が進んだ。

１０月始めにある運動会の為の練習もあったが、ニュースの事が気になって身に入らなかった。

（何も無きゃ・・・良いんだけど）

家に帰りながら、ずっとその事を考えていた・・・。

そして１２月中旬を過ぎた頃・・・。

またニュースになっていた。

『見て下さい！この怪しげな黒いタワーを！これと同じ物がオーストラリアやフランス、その他多くの国にも出現したのです！』

ナレーターがそう言っている間にも、デジモン達が映像に映っている。

これも前と同じく、何も出来ずに見守った。

更に3月始め・・・。

西新宿に赤いスライムのような生き物が現れ、テレビなどの回線が混乱する。

その騒動が収まった中旬の頃だった。

――ピリリリッ、ピリリリッ

拓也の買ってもらった携帯に、メールが入る。

内容を開く前に、それが表示された。

スタートしますか？しませんか？

ＹＥＳ　ＮＯ

「ッ！？」

あの時と同じメール内容に、一瞬唖然とする拓也。

迷わずＹＥＳを選択し、渋谷駅へ向かった。

そして地下に到着すると、すでに皆がそろっている。

「早いな」

「そりゃぁね」

「急ぐぞ」

６人は慌てて、待機していたトレイルモンに乗り込んだ・・・。

1話：世界の異変（後書き）

もう年代が滅茶苦茶ですが、あしからず・・・。

それでは、これからも頑張っていきます！

よろしくお願いします！

2話：再会と説明（前書き）

今回はちょっと短いです・・・。

気を取り直して2話、参ります！

2話：再会と説明

トレイルモンは長いトンネルを抜け、炎のターミナルに到着する。

到着したのは良かったのだが・・・。

「だぁかぁらぁ！もうちょっと丁寧に走行しろって毎回毎回、言ってるだろうが！」

デジタルワールド到着早々、拓也がトレイルモンに怒る。

「また頭打ったね」

友樹が苦笑しながら、後頭部をさすった。

「丁寧に走れって言われても無理だぞ～。第一線路が出鱈目なんだぞ～」

トレイルモンがこの期に及んで言い訳する。

「何処が出鱈目だ！ピッカピカに整ってんじゃねぇか！」

拓也は整備され、傷1つ無い線路を指差すと、

「・・・♪～♪」

トレイルモンは鼻歌を歌い出す。

「こんの野郎・・！」

拓也は今にもキレそうだが、デジタルワールドに来た訳だし、怒りを無理矢理抑え込んだ。

「特に何も起こってなさそうだな」

輝二は辺りを見回しながら、駅を出る。

「外見はそうですね」

外に出ると、オファニモンが待っていた。

「あ、進化したんだ」

友樹が笑みを浮かべてそう言うと、オファニモンもはい、と笑い返す。

「来ていただけると思っていましたよ。それでは単刀直入に言いましょう。ルーチェモンの事は覚えていますね？」

オファニモンの問いかけに、拓也達は顔を見合わせ頷いた。

「ならば話が速いですね。では、ルーチェモンが何者かは知っていますか？」

「何者って・・・ただの悪い奴じゃないのか？」

「違います。後ほどの調べで分かったのですが、ルーチェモンは七大魔王の１人です」

「七大・・魔王？」

拓也は訳分からんとでも言いたげな顔で、聞き返す。

「そうですね・・・。‘７つの大罪’を知っていますか？」

「む、難しいのが出てきたな・・・。えっと、純平？」

拓也は全く分からず、６年の純平に振った。

「確か、傲慢（ごうまん）・暴食（ぼうしょく）・色欲（しきよく）・強欲（ごうよく）・嫉妬（しっと）・憤怒（ふんど）・怠惰（たいだ）の７つだったと思うけど・・・」

「はい、全て正解です」

「おぉ、純平流石！」

何１つ分からなかった拓也は、純平に賞賛の言葉をおくる。

「雑学は得意だからな」

純平は軽く笑ってそう返した。

「七大魔王はそれらを司る者達です。ルーチェモンは傲慢なる天使でした」

「傲慢、か」

「問題はここからです。その七大魔王が復活しました。恐らくルーチェモンの仕業でしょう」

「い！？七大魔王全員か！？」

拓也はルーチェモン以外の者と闘った事は無いが、ルーチェモン程の強さを持った者が、あと6人もいる事になる。

「全員です。敵はこれだけではありません。四獣は分かりますか？」

「四獣？えっと確か・・・青龍とか、玄武とか？」

拓也は記憶の中から、絞り出すように答えた。

「その4体が向こうの手に渡ってしまいました」

「それはあれか？操られたみたいな事か？」

「そう・・・ですね。後、他にもオリンポス十二神やデーヴァ達も同じくです。オリンポス十二神は現在、5体しか確認されていません。デーヴァとは十二支の事です」

オファニモンは淡々と話していくが、状況の整理に追いつかない。

「デーヴァ達は12体ですが、全て完全体ですのでそこまで苦労はしないでしょう」

「そいつは助かる」

拓也達はオファニモンの言葉に、ほっと安心した。

「ですが、七大魔王は新たなデジモンを連れているようです。そし

て復讐を胸に抱いている者達も味方につけたようで・・・」

「新たなデジモン？」

輝一が首を傾げて聞き返す。

「私も知らないデジモンです。十分注意して下さい。敵全体のデータはデジヴァイスに送っておきましょう。四聖獣やオリンポス十二神、デーヴァは大丈夫でしょうが・・・流石に七大魔王は無理と判断しました。ですので、他の選ばれし者達にも声をかけさせていただきましたよ」

「他の・・・選ばれし者達？」

もしや人間界で起こった事と、関係があるのではと思う拓也達。

「その者達は、近くの草原に到着する予定です」

「あ、うん分かった」

すると拓也達の携帯が、デジヴァイスへと変化する。

すでにスピリットは入っていた。

「地図くれるか？」

「あ、はいどうぞ」

純平はオファニモンから、デジタルワールドの地図を受け取る。

「よぉし、行くか！」

その選ばれし者達を迎える為、拓也達は草原へと向かった・・・。

2話：再会と説明（後書き）

次回は、アドベンチャーや他の選ばれし子供の話になるかと・・・。

上手くかけるか分かりませんが、頑張ります！

あと、Dアークやらナキャナやらは、何が何か分からなくなってきたので、全てデジヴァイスにまとめようかと思います。

すいませんが了承して下さい。

・・・次回、上手く出来るでしょうか。←ちと不安

3話：冒険者達よ（前書き）

今回はアドベンチャーの世界です。

では3話、参ります！

3話：冒険者達よ

―――ピロリンッ、ピロリンッ

1人の少年の携帯が鳴る。

「ん？何だ？」

―――

本宮大輔（もとみやだいすけ）

小学5年生。サッカー部所属。

―――

茶色がかかった髪にゴーグルを掛ける、元気バリバリの小学生。

自分の部屋にいたのだが、突如入ってきたメールに向かい合う。

「えっと何々・・・『デジモンを知っているあなたに頼みがあります。助けが必要です。助けてくれますか？しませんか？ＹＥＳ　ＮＯ』・・・何ぃっ！？」

「如何したの？だいしゅけ」」

大輔の近くにいた青いデジモンが、大輔に声をかけた。

―――

チビモン

幼年期後半。幼竜型。必殺技は＜ホップアタック＞。大輔のパートナーデジモン。

――――

「如何もこうも無い！とにかく・・・学校行くぞ！」

「デジタルワールドに行くの？」

「そんなとこだ！」

大輔は準備をしながら、チビモンの問いに応答する。

――ピリリリッ、ピリリリッ

忙しいというのに、電話が入ってきた。

「あ、はい。大輔です」

『大輔、俺だ。太一だ』

「太一先輩！？」

――――

八神太一（やがみたいち）

中学2年生。サッカー部所属。

――――――

『お前のところにもメール来たな？』

太一が大輔に確認を取る。

「ってことはそっちにも？」

『そうだ。皆のところにも来たらしい。とりあえず小学校集合で良いな？』

「はい！」

大輔は電話しながらチビモンを掴み、家を飛び出した。

「大輔遅い！」

学校のコンピューター室到着早々、女子に怒られる大輔。

「わ、悪ぃ」

思わず大輔は苦笑した。

そこにはデジタルワールドを旅した、多くの仲間達がそろっている。

――――――

井ノ上（いのうえ）　京（みやこ）

小学６年生。パソコン部所属。パソコン部部長。

火田伊織（ひだいおり）

小学３年生。剣道を習っている。

高石岳（たかいしたける）

小学５年生。バスケットボール部所属。

八神ヒカリ

小学５年生。写真部所属。太一の妹。

一乗寺賢（いちじょうじけん）

小学５年生。サッカー部所属。

石田（いしだ）ヤマト

中学2年生。「ＴＥＥＮ　ＡＧＥ　ＷＯＬＶＥＳ（ティーンエイジ・ウルブス）」のバンドに所属し、ボーカル兼ギターをしている。名字は違うが、岳の兄。

武之内空（たけのうちそら）

中学2年生。女子サッカー部所属。

泉光子郎（いずみこうしろう）

中学1年生。パソコン部所属。

太刀川（たちかわ）ミミ

中学1年生。アメリカへの在住が多い為、部には所属していない。

城戸丈（きどじょう）

中学3年生。受験が近く、部は引退した。

―――――

「あれ？パートナーデジモンは？」

大輔は皆がデジモンを連れていない事に気づき、尋ねてみると先にデジタルワールドへ行ったらしい。

中学生チームは珍しく私服姿だった。

「助けて下さい、というメールをいただきましたが・・・何処へ行けばいいのでしょうか？」

伊織がもっともな発言をする。

「それは分からないが・・・とりあえずアグモン達と合流しよう」

太一の言葉に京が頷き、デジヴァイスをパソコンの画面に向けた。

「選ばれし子供達、出動っ！」

京が叫ぶと、パソコンの画面へと全員が吸い込まれる。

光が収まった時、皆の姿は無かった。

「はい、到着しました～！」

京が大空へとそう叫ぶ。

小学生チームは服が変わっていた。
チビモンはデジタルワールドに来た事で、成長期へと進化している。

ブイモン

成長期。小竜型。必殺技は＜ブイモンヘッド＞。大輔のパートナーデジモン。

すると、向こうから多くのデジモン達が走って来る。

「太一～！」

「よぉアグモン！元気にしてたか？って聞くまでもないな」

太一はデジモン達の元気ぶりを見て、笑った。

ホークモン

成長期。鳥型。必殺技は＜フェザースラッシュ＞。京のパートナーデジモン。

アルマジモン

成長期。哺乳類型。必殺技は＜ローリングストーン＞。伊織のパートナーデジモン。

パタモン

成長期。哺乳類型。必殺技は＜エアショット＞。岳のパートナーデジモン。

テイルモン

成熟期。聖獣型。必殺技は＜ネコパンチ＞。ヒカリのパートナーデジモン。

ワームモン

成長期。幼虫型。必殺技は＜ネバネバネット＞。賢のパートナーデジモン。

アグモン

成長期。爬虫類型。必殺技は＜ベビーフレイム＞。太一のパートナーデジモン。

ガブモン

成長期。爬虫類型。必殺技は＜プチファイアー＞。ヤマトのパートナーデジモン。

ピヨモン

成長期。雛鳥型。必殺技は＜マジカルファイアー＞。空のパートナーデジモン。

テントモン

成長期。昆虫型。必殺技は＜プチサンダー＞。光子郎のパートナーデジモン。

パルモン

成長期。植物型。必殺技は＜ポイズンアイビー＞。ミミのパート

ナーデジモン。

――――

ゴマモン

成長期。海獣型。必殺技は＜マーチングフィッシーズ＞。丈のパートナーデジモン。

――――

太一達はメール内容をアグモン達に伝える。

「如何やって助けに行くの？」

パルモンが首を傾げて聞き返すが、太一達は顔を見合わせ苦笑した。

「まさか皆はん・・・知りまへんの？」

テントモンの鋭い突っ込みに、光子郎は素直に頷く。

――ピロリンッ、ピロリンッ

今度は全員のデジヴァイスに通信が入った。

『これから転送させていただきます。準備はよろしいですか？』

その問いに全員が頷き、転送が開始される。

太一達は自分達のいるデジタルワールドから、別のパラレルワール

ドへ飛ばされた・・・。

3話：冒険者達よ（後書き）

し、しんどい・・・。

デジモンや人物紹介がありすぎで、少し見にくいです・・・。

次は・・・テイマーズかな？

４話：準備は良いか（前書き）

今回はテイマーズとセイバーズ両方です。

ですが・・・短い。

短すぎる！

すいません！

４話、参ります！

4話：準備は良いか

西新宿の公園。

木が生い茂った中、コンクリートの家のような所に、少年少女合計4人がいた。

それぞれパートナーデジモンがいる。

松田啓人（まつだたかと）

小学5年生。

李健良（リージェンリャ）

小学5年生。日本人と中国人のハーフ。

牧野留姫（まきのるき）

小学5年生。

秋山遼（あきやまりょう）

小学5年生。

ギルモン

成長期。爬虫類型。必殺技は＜ファイアーボール＞。啓人のパートナーデジモン。

テリアモン

成長期。獣型。必殺技は＜ブレイジングファイア＞。健良のパートナーデジモン。

レナモン

成長期。獣人型。必殺技は＜狐葉楔（こようせつ）＞。留姫のパートナーデジモン。

モノドラモン

成長期。小竜型。必殺技は＜ビートナックル＞。遼のパートナー

デジモン。

――――――

「驚いたなぁ。3人にも同じメールが来てたなんて」

啓人が軽く笑って健良達を見る。

4人の手にはデジヴァイスが握られていた。

「で？如何やって行くのよ」

留姫が手っ取り早く、皆に聞くと誰も答えられない。

「ん～・・・助けたいけど、行きようが無いな」

健良が困ったように頭をかく。

「お腹空いた～」

――ギュルルル～・・・

空気が読めないギルモンは、ただ腹を鳴らした。

「啓人、ギルモンの腹の虫、止めてくれない？」

「ご、ごめん。無理。パン持ってないし」

留姫の言葉に苦笑して、啓人は手を振る。

――ピピッ

そこへ新たに通信が入った。

『これから転送させていただきます。準備はよろしいですか？』

「えっと・・・」

啓人は確認の為皆を見るが、全員頷き返してくれる。

「準備出来ました」

啓人がそう返すと同時に、転送された・・・。

神奈川県、横浜市周辺の海岸沿い。

そこの建物内で、同じくメールを受け取った者達がいた。

ＤＡＴＳ。

Ｄｉｇｉｔａｌ　Ａｃｃｉｄｅｎｔ　Ｔａｃｔｉｃｓ　Ｓｑｕａｄ（デジタル脅威戦術部隊）の略で、人間界に現れたデジモンをデジタルワールドへ送り返す。

それがこのチームの役割。

建物の中、指令室にはそのメンバーが集まっていた。

「助けてくれ、か」

メンバーの1人、金髪の青年が考え込む。

「俺は行くぞ！」

茶髪の青年はやる気満々で頷いた。

大門大（だいもんまさる）

中学2年生。

トーマ・H（エイチ）・ノルシュタイン

14歳。その若さでストックホルムの王立科学大学を首席で卒業。
日本人とオーストラリア人のハーフ。

藤枝淑乃（ふじえだよしの）

18歳。DATSメンバーの正式リーダー。

イクト（野口郁人（のぐちいくと））

１０歳。人生のほとんどをデジタルワールドで過ごしてきた為、日本語が不安定。

アグモン

成長期。恐竜型。必殺技は＜ベビーフレイム＞。腕に赤いベルトをしており、大のパートナーデジモン。

ガオモン

成長期。獣型。必殺技は＜ローリングアッパー＞。トーマのパートナーデジモン。

ララモン

成長期。植物型。必殺技は＜ナッツシュート＞。淑乃のパートナーデジモン。

ファルコモン

成長期。鳥型。必殺技は＜手裏裏剣（しゅりりんけん）＞。イクトのパートナーデジモン。

――――――

緊急の呼び出しだった為、大達４人は私服だ。

ただ、イクトはサンダル布の服、皮のマントという変わった格好をしている。

腰にはブーメランを装備していた。

「隊長、如何します？」

淑乃がＤＡＴＳチームの隊長に、出撃するか如何かの確認を取る。

「・・・出撃を許可する」

「「っしゃぁっ！」」

隊長の一言で、好戦的な大とアグモンが喜んだ。

――ピピッ！

その時、更に通信が入る。

『これから転送させていただきます。準備はよろしいですか？』

「全然ＯＫだぜ！」

大はデジヴァイスを握り、そう叫んだ・・・。

4話：準備は良いか（後書き）

ふぅ・・・。

やっと次で集合ですね・・・。

集合メンバーはこんな感じで・・・。

次は拓也達と会う話です。

よろしくお願いします！

5話：招かざる客（前書き）

なんとか集合しましたが・・・メンバーの性格とか、こんな感じでしょうか？

5話、参ります！

5話：招かざる客

草原に選ばれし者達が、次々と転送されてきた。

「ここは・・・何処だ？つ～かお前ら誰だよ。デジモンつれてるみてぇだけど」

到着して大が一番に口を開く。

「俺達はメールを見て、ここに転送されて来た」

太一がそう答えると、

「じゃぁ、僕達と同じだ」

啓人がデジヴァイスを見て、そう返す。

「って、同じアグモン！？」

淑乃が、太一のアグモンと大のアグモンを見比べた。

唯一の違いは、大のアグモンが腕にベルトをしている、という事だけ。

「とりあえず・・・同じ目的でここに来たんだったら、自己紹介でもするかい？」

トーマが他の皆にそう言うと、全員異論は無いようで頷いた。

「でもよ、ここにも選ばれし者達がいるんじゃないか？」

太一が疑問に思って辺りを見回す。

「そうだな。如何やら別のデジタルワールドみたいだし・・・」

ヤマトも太一に続いて周囲を見回すが、姿は見えない。

その時、

――ピピッ、ピピッ

何処からか機械音が聞こえた。

全員が辺りを見回すと、見つけたのは紫色の装甲を纏うデジモンの群れ。

いつの間にか囲まれている。

「こいつは！」

そのデジモン達を見て、大達が顔色を変えた。

「ギズモン・・・ＡＴ（エーティ）！」

「何でこんなに！」

大がデジモンの名を叫び、淑乃がデジヴァイスを構える。

――――

ギズモンＡＴ

世代不明。種族不明。技不明。

――――――

「何だこいつら！敵なのか！？」

大輔が同じくデジヴァイスを構えるが、判断に困っていた。

何せ、数は２０を超えているであろうからだ。

「敵だ敵！１００％敵だ！」

大はそう叫び、１体のギズモンに接近。

「おぉぉらぁぁっ！」

そして拳を握り、殴りつける。

ギズモンは物ともしないが、大の拳にオレンジ色のオーラが纏われた。

デジソウル。

大達が、パートナーデジモンの進化に使用する言わばデジコードのような物。

「行くぞアグモン！」

「おう！」

すでに闘う気満々の２人。

「デジソウル・・・チャージッ！」

大は手に宿ったデジソウルを、デジヴァイスの先端に叩きつけ、膨張したデジソウルをアグモン目がけて放つ。

「アグモン、進化！」

アグモンのデータが上書きされ、進化した。

「ジオグレイモン！」

オレンジ色の巨竜が立っている。

――――――

ジオグレイモン

成熟期。恐竜型。必殺技は＜メガフレイム＞

――――――

「ジオグレイモン？グレイモンじゃないのか？」

太一は進化系統に疑問を抱くが、すぐに振り払った。

「光子郎、あのデジモンは？」

光子郎に声をかけ、ギズモンを指差す。

「ちょっと待って下さい」

光子郎は背負っていたノートパソコンを下ろし、起動させた。

光子郎のパソコンにはデジモン図鑑が搭載されており、そのデジモンのデータを見る事が出来る。

が、

「データ、出ません！」

光子郎がどれだけ待っても、そのデータが表示される事は無い。

「データが無い、か。こいつはまた厄介だな」

ヤマトがそう言って警戒する。

因みに、啓人達のデジヴァイスにもデジモン図鑑が搭載されていたが、同じようにデータは出なかった。

「ジオグレイモン、行っけぇ！」

「おうよ！」

大はジオグレイモンの方に乗り、一気に突進する。

「また考えも無しに突っ込んで！」

トーマはそんな大を見て、拳を握った。

「行くぞ、ガオモン」

「イエス、マスター」

トーマの手に、青いデジソウルが宿る。

「デジソウル・・・チャージ！」

「ガオモン進化！」

同じように、ガオモンへ膨張したデジソウルを送ると、ガオモンのデータが上書きされた。

「ガオガモン！」

青い狼が現れる。

――――

ガオガモン

成熟期。獣型。必殺技は＜スパイラルブロー＞

――――

「＜スパイラルブロー＞ッ！」

ガオガモンは口から竜巻を放った。

一瞬、ギズモン1体の動きが止まるが、再び平然と動き出す。

「やはり強いか」

トーマが考えている時、ギズモン1体が太一達に向けてレーザーを発射した。

そのレーザーへ、イクトが腰につけていたブーメランを放つ。

「大丈夫か!?」

イクトがレーザーによって消えかけたブーメランを掴み、太一達に聞いた。

「あ、あぁ。けどそれ・・・」

太一は、消えかけたブーメランを指差す。

「これ、もう使えない。あの攻撃、とても危険。気をつけろ」

イクトはまだ不安定な日本語で、太一達に注意した。

「イクト、僕達も闘おう!」

ファルコモンがそう言って翼を広げる。

「おう!」

イクトの手に、紫色のデジソウルが宿り、

「デジソウル、チャージ！」

それをファルコモンに送った。

「ファルコモン、進化！」

ダチョウのようなデジモンが現れる。

「ペックモン！」

ペックモン

成熟期。鳥型。必殺技は＜スパイラルクロー＞

ペックモンは己の素早さを活かし、ギズモン1体の背後へ回り込む。

「＜スパイラルクロー＞ッ！」

体を回転させ、脚を突き刺すが、効果は無い。

「相変わらず固いわね」

淑乃の手に、桃色のデジソウルが宿り、ララモンへ送った。

「デジソウル・・・チャージ！」

「ララモン、進化！・・・サンフラウモン！」

――――

サンフラウモン

成熟期。植物型。必殺技は＜サンシャインビーム＞

――――

「＜サンシャインビーム＞ッ！」

サンフラウモンは太陽光の砲撃を発射するが、簡単に弾かれる。

「＜メガ・・・フレイム＞ッ！」

ジオグレイモンが火球を直撃させるが、ギズモンは平然としていた。

その時、

「お～い！大丈夫か～！」

このデジタルワールドの選ばれし者達――拓也達が森を抜けて走ってくる。

「って、なんかやばそうな予感・・！」

拓也は魂広して龍魂剣を握った。
そして全身に炎を纏い、1体のギズモン目がけて跳躍。
「おぉぉぉっ！」
龍魂剣を横に一閃し、ギズモンを一刀両断する。
「か、かてっ！」
ジーンと痛みが腕に伝わり、ギズモンの固さに驚く拓也。
それでも大達には、あのギズモンを一撃で半分にしたのが信じられなかった。
成熟期のデジモンが必殺技を放っても、物ともしなかったギズモン。
更に、自らの身を炎に包んでいるというのも、驚愕に値する。
「まぁた勝手に突っ込んで！」
泉がそんな拓也に注意するが、
「いいからいいから」
拓也は全く聞こうとせず、次のギズモンへと走った。
「ったく！」
泉は怒りながらも、ギズモンから浮かび上がったデジコードをスキ

ャンする。

「せぇぇいっ！」

また1体、また1体と少しずつ減っていった。

「って、輝二も手伝えよっ！」

「ん？あぁ、そうだな」

拓也は思わず叫び、輝二も納得して頷く。

輝二の両手にリヒト・シュベーアトが出現し、ものすごい速さでギズモンを斬り刻んだ。

「固い・・！」

輝二もその固さには驚いていた。

「頑張れ～」

そんな様子を、友樹は呑気に見ている。

「何でそんなに落ち着いてられるんだ！そういう状況じゃないだろう！？」

丈がそんな友樹にそう言うと、友樹がそっかと頷き、同調した。

拓也と輝二を援護する為、氷塊を作り出す。

「友樹！８時の方向１体に！」

拓也が友樹にそう指示すると、友樹は瞬時に反応し、氷塊を投げた。

それは見事直撃し、ギズモンが動きを止めた一瞬で輝二が接近して、斬りかかる。

また１体減った。

「なんて奴等だ・・・」

太一は拓也達の強さに、半ば呆れかけている。

残り１体。

「＜炎龍撃＞ッ！」

拓也が燃える刀身を放って、戦闘の幕を閉じた。

「いっちょ上がりっ！」

大剣を肩に担ぎ、魂広を解く。

「あ～、ひっさしぶりに運動したぜ～」

そう言って伸脚やら屈伸やらをして、足をほぐした。

成熟期に進化していたデジモンは、成長期に戻る。

――ギュルルル・・・

「兄貴〜、腹減った〜」

大のアグモンが、そう言って大に詰め寄っていく。

「はぁ？朝飯食ってきただろうが！」

「腹減ったんだよ〜、悪いか！」

いきなり開き直るアグモン。

「何だ？腹減ってんのか？だったらこれ食えよ」

拓也はそう言って、森を通過したついでに取って来た肉リンゴを渡す。

「おぉ！ありがとな！」

アグモンは早速かぶりつくが、

――ガブッ

「一口で食べやがった・・・」

その食べっぷりに、拓也も唖然とする。

「うんめぇ〜！何だこれ！すんごいうめぇじゃんかっ！」

アグモンは眼を輝かせて喜んでいた。

「ギルモンも～！」

それを見たギルモンが、拓也に駆け寄る。

「あ、えっと・・・泉」

もう持っていなかった拓也は泉に振ると、泉が代わりに肉リンゴを渡した。

――ガブッ

こちらも一口で食べる。

「おいし～！」

もう1個欲しいと言って来るアグモンとギルモン。

「ギルモン、わがまま言っちゃダメだよ！」

啓人がギルモンの頭を、ポンポンッと叩く。

「アグモン、お前ぇもだ！」

大が、ガシッとアグモンの腕を掴んで止めた。

「別に良いぞ。まだまだいっぱいあるしな。ついてこいよ、たらふく食わせてやるぞ！」

「おぉ～！」

「やった～！」

2体は拓也と共に森へと入って行く。

「もうすぐ昼だから、皆さんも行きます？」

泉が先に進む拓也達を見て、皆に尋ねると誰も異論は無いようで、全員森の中へ入った・・・。

5話：招かざる客（後書き）

何か拓也達、無双並みですね・・・。

でも戦闘の経験量からすれば、これくらいだと思うんですけど・・・。

何せ、デジタルワールドに3年いた訳ですし、こんな感じかと。

性格で変なところがあれば、注意して下さい！

6話：探し求めよ（前書き）

6話、参ります！

6話：探し求めよ

一行は森の中へ入り、肉リンゴがなる木へと歩いていた。

「そうだ。今のうちに自己紹介しません？」

光子郎が思いだしたようにそう言い、皆に提案する。

「確かにな。じゃぁ俺から。俺は八神太一。中学2年だ」

太一が一番手にそう言った。

「その妹のヒカリです。小学5年生。よろしくお願いします」

妹であるヒカリが、太一に続く。

「俺は石田ヤマト。で、こっちが弟の・・・」

「高石岳です。よろしく」

「弟？名字が違うけど・・・」

ヤマトの言葉に、淑乃が首を傾げた。

「両親が離婚してるんで」

「あ、ごめんなさいね」

淑乃は悪い事を聞いてしまったかと、苦笑いして謝る。

「僕は城戸丈。中学3年だ」

「私は太刀川ミミ。中学1年で～す！」

流石アメリカ人のハーフだけあって、気分を明るくしてくれた。

「私は武之内空。太一やヤマト同じく、中学2年よ。よろしく」

「俺は本宮大輔。ヒカリちゃんや岳と同じ小学5年！」

「僕は一乗寺賢。右に同じく5年です」

「はいは～い！次私！井ノ上京、6年生です！」

少しテンションが高い京。

「えっと、火田伊織。小学3年です。よろしくお願いします」

「では僕ですね。僕は泉光子郎。ミミさんと同じく、中学1年です」

「泉・・・光子郎さん？」

光子郎の言葉を聞いて、泉が聞き返した。

「あ、はい。そうですが」

「奇隅ですね。私、織本泉って言います！」

「あ、そうなんですか。よろしくお願いします」

「こちらこそです」

泉と光子郎は早速仲が良くなり、握手し合う。

「んじゃ続きで、俺は大門大！よろしくな！」

「僕はトーマ。トーマ・Ｈ・ノルシュタイン。長いからトーマで構わないよ」

「俺はイクト。野口郁人。よろしくな！」

「私は藤枝淑乃。一応チームリーダーよ」

大達も紹介が終わった。

「え、じゃぁ僕で。僕は松田啓人。小学５年生だよ」

「僕は李健良。よろしく」

「私は留姫。名字は牧野。よろしく」

「俺は秋山遼。１４歳。よろしく頼むよ」

啓人達も終わり、残るは泉を除いた拓也達。

「僕は氷見友樹。伊織君と同じ小学３年生。よろしくお願いします！」

「俺は柴山純平。６年だ」

「俺は源輝一。5年。よろしく。で、こっちが双子の弟で・・・」

「源輝二だ。あいつは神原拓也。馬鹿って言うとキレるから気をつけた方が良いぞ」

輝二が拓也の事を軽く紹介した時、前方を歩いていた拓也が止まる。

「輝二っ！何か言ったか！？」

振り返ってそう叫んだ。

「ほれ」

輝二はそう言って拓也を指差す。

「な、なるほど・・・」

それを見て思わず苦笑する太一だった・・・。

「着いたぞ！」

拓也が歩みを止めると、肉リンゴが実る木が辺りに幾つも生えている。

早速アグモンとギルモンが食いついた。

「よっと」

拓也は同調して身体能力を上げ、一気に木の枝へと跳び移る。

「どれくらいいるんだ？」

下にいる皆に聞くと、かなりという返事が返ってきた。

「ま、そうだろうな」

拓也は手に届く範囲の肉リンゴを、片っぱしから下へ落としていく。

「今のもそうだけど・・・拓也の体が燃えてたのは何なんだ？」

大輔が不思議に思って泉に聞くと、

「あぁ、あれ？あれは同調って言ってね。拓也は炎の闘士だから火を纏えるの。因みに輝二が光の闘士。輝一が闇の闘士。友樹が氷の闘士。純平が雷の闘士。で、私が風の闘士よ」

「闇の闘士って・・・大丈夫なのか？」

普段、闇と言われれば悪のイメージが強い為、太一が心配になる。

「大丈夫だ」

輝一は瞬時に同調し、闇を纏うが危険は感じない。

「うん。全然悪い感じがしないよ」

ヒカリが近づいてそう言った。

「どうも」

輝一はヒカリに礼を言っておく。

「お～い、それくらいで良いか？」

拓也に言われて周りを見るが、地面は肉リンゴで埋まっていた。

「取りすぎよ！」

泉が思わず言い返すと、

「ん？そうか？かなりって言われたからかなり取ったぞ」

拓也は笑みを浮かべて地面に降りる。

「‘かなり’の領域越えてるわよ・・・」

泉が額を手で押さえて呆れた。

「お～い、こっち来いよ！いっぱいあるぜ～！」

拓也はアグモンとギルモンを呼ぶ。

「おぉ～！」

「いっぱいだ！」

すぐに食べ始める2体。

「案外少なかったりするかもな」

拓也は肉リンゴの減り具合を見て、思わず苦笑した。

昼飯を食い終え、相談に入る一同。

「で、何でここに呼ばれたんだ?」

太一があのメールの意味を尋ねる。

「あ~、これがまた敵が多くてな。如何考えても、俺達だけじゃ倒すの無理なんだよ」

拓也はそう答えながら、デジヴァイスを取り出した。

「えっとぉ・・・どれだっけ?」

拓也は、敵全体のデータが入っているはずなのだが、そのデータが何処に入っているのか分からない。

「これ、じゃねぇな・・・。あ~くそ!こういうの苦手なんだよな~!」

「ほれ」

そんな拓也に純平が手を伸ばす。

「悪い。任せた」

「こうやって・・・こうやるんだよ」

純平が拓也のデジヴァイスを操作し、画面から浮き出てデータが表示された。

「相変わらず機械に強いな」

「まぁな」

純平はそう言って、拓也のデジヴァイスを返す。

「えっと・・・げ、多いなこりゃ」

拓也はデータを見て、嫌そうな顔をした。

「ほい」

拓也は皆にも見えるよう、拡大してから見せる。

「あぁっ！」

それを見た瞬間、全員が同じ反応した。

「ダークマスターズッ！？」

太一達がそう叫び、

「ベリアルヴァンデモンッ！？」

「ベルフェモンにロイヤルナイツ！？」

「デーヴァッ！？」

各チームも同じく驚いている。

「へ？何、知り合い？」

拓也がキョトンとして聞き返すと、

「「「「「「「「いやいやいや！敵だからっ！」」」」」」」」

複数の者が大声で言い返し、拓也の言葉を改めさせる。

「あ、そなの」

拓也もそれを理解し、苦笑した。

「これ、結構な数ね」

留姫が真剣に考え、頭を悩ませる。

七大魔王の総勢力はかなりの物になっていた。

四聖獣やデーヴァ、ロイヤルナイツ、四大竜、ダークマスターズ、ファンロンモン、ベリアルヴァンデモン、古代聖獣型デジモン多数、

その他多くのデジモン達を配下にしている。
如何やら、他のデジタルワールドで選ばれし子供に倒された者達を蘇らせ、操っているようだ。
それだけで、七大魔王の力が伺える。
「でも変だな・・・。デーヴァのアンティラモンは倒してないけど・・・」
健良がそう言うと、そこは純平が補足した。
「あ、四聖獣やデーヴァ、ロイヤルナイツ、四大竜、ファンロンモン、古代聖獣型デジモン辺りは、もともとこっちにいたデジモンだと思う」
「って、ロイヤルナイツ13人に増えてんじゃねぇか！」
拓也はデータを見直して、その事に気付いた。
「何？」
輝二もそれには驚く。
「デュナスモンとロードナイトモンも生きかえってら・・・」
拓也は苦笑いを浮かべて、そう呟いた。
「生きかえってって・・・まさかその2人倒したのか？」

ロイヤルナイツと戦闘経験のある大が、拓也に聞くと頷き返される。

「最初は2人だけだったのかい？」

トーマにそう言われ、拓也はあぁと頷いた。

「まぁでも・・・またあいつらと闘えるんなら、ちと嬉しいかな」

拓也はバトルマニア独特の笑みを浮かべる。

「勝手にしてくれ・・・」

輝二はそんな拓也に呆れ果て、額を押さえた。

「んまぁ、とにかく・・・何処から倒す？」

太一はデータを見ながら、作戦を考える。

「もう何処からでも良いけどなぁ。こんだけいたら、どっから倒しても同じ気がすんだけど・・・」

大が足を組み直した。

「た、確かに・・・」

その言葉に、岳が苦笑する。

「はい地図」

純平はポケットから、デジタルワールドの地図を取り出した。

「地図見ても俺達は分からんぞ～」

遼が意味不明とでも言いたげに、首を振る。

「そうだよなぁ」

拓也も困ったように考え込んだ。

「さぁて?何処にどいつがいるのかねぇ」

拓也は地図とデータを見比べながら、場所を推測する。

「四聖獣はそれぞれの方角にいると・・・思うんだけど」

啓人が地図の四方を指差した。

「四方か・・・」

「スーツェーモン南だよ。火の鳥だけど」

「火の鳥で南?じゃぁ火山か・・・」

「えっとね・・・。バイフーモンは西で、鋼の属性なんだけど・・・」

「鋼なら、鋼のターミナル付近で良いな。他は?」

「チンロンモンは東で、属性は雷だよ」

「えぇっと・・・西、西・・・この湖か。確か1日中、嵐で雷鳴ってたから、たぶんここだ」

「残る四聖獣はシェンウーモンで、北にいると思う。属性は水だったと思ったけど・・・」

「北で・・・水ぅ?難しいな。えっと北で水。北で水は・・・ここ、か?雪山の奥に海があったと思うんだが・・・」

「海は違うと思うよ。シェンウーモンは巨体で、潜るタイプじゃないから」

「そうなのか・・・。あ、ならここだ。雪山抜けて森がある。霧が立ち込めてたはずだ」

「霧?じゃぁそれだ。シェンウーモンは霧を使ったはずだから」

拓也と啓人が次々と場所を推測していく。

四聖獣は、場所が決定した・・・。

6話：探し求めよ（後書き）

はぁ、流石に人数多いと大変ですね・・・。

自己紹介辺りが悩みました。

次も推測が続いて、少し動くんじゃないかと・・・。

では、頑張ります！

7話：吼えよ、炎竜（前書き）

7話、参ります！

7話：吼えよ、炎竜

「んじゃ次！」

拓也は地図と睨めっこしながら、敵の居場所を考える。

「七大魔王は知らん！四大竜も検討つかねぇ！オリンポス十二神とか会った事無い！よそから来たデジモンも分からん！」

苦手な考え事で約３０分程経過している為、拓也は若干怒り気味だ。

「つ～かお前らも手伝えよっ！」

そして隣にいた輝二達にそう叫ぶ。

「ん？あぁ、悪い」

輝二も今気づいたように、地図を眺めた。

「んで？残ってるのは？」

「は？・・・あぁ、えぇっと・・・何処まで言ったっけ？あ、そうそう残ってんのは、デーヴァとロイヤルナイツ、古代聖獣型デジモン・・・だな」

「・・・知らん」

輝二は早々に考えるのをやめた。

「「「「「「「「「「「「「「「「おいっ！」」」」」」」」」」」」」」

それに、思わず肩すかしを食らう面々。

「デ、デーヴァはそれぞれ四聖獣に仕えてるよ」

健良がそう言った。

「そうなると・・・デーヴァ除外で。ロイヤルナイツって、何処拠点にしてるんだよ」

拓也は困ったように頭をかく。

デュナスモン達はデータを集める為、デジタルワールドを行ったり来たりしていた。

特に拠点は無かったように思う。

古代聖獣型デジモンなど論外だ。

会ったことすら無い。

「七大魔王ってさ・・・ダークエリアにいそうじゃない？」

友樹がふとそんな事を言い出す。

「あ～・・それは無いだろ。ルーチェモン倒した時、ダークエリア消えてたじゃねぇか」

拓也が記憶を手繰り寄せ、友樹の考えを否定した。

「え～、でも造れそうな気がするよ」

「た、確かに・・・」

これだけのデジモンを配下にしているのだから、ダークエリアを再創生する事は可能だろう。

「七大魔王はダークエリアでいいか・・・。四大竜は・・・」

拓也はふと皆を見るが、どの者も首を振って知らないと表現した。

「だよなぁ・・・。じゃぁ、これにて終了！あ～死ぬ・・・」

拓也は熱のこもった頭を冷やすべく、帽子を取って寝転がる。

――シュゥゥゥ・・！

拓也の頭から湯気が立ち昇っているのは、気の所為という事にしておこう。

「はい氷」

友樹が同調して、拓也の頭に氷を当てた。

「お～、サンキュ～・・・」

拓也は気の無い声で返す。

「で、如何するよ？」

大が頭の後ろで腕を組んだ。

「お互いにどれくらい進化出来るか、知っておいた方が良いんじゃないか？」

丈がそう言って提案する。

「それもそうですね」

光子郎がコクンと頷き、丈の意見に同意した。

「模擬戦、か」

輝二がそう言った途端、

「模擬戦か！？」

拓也が復活する。

「いや、空耳だろ」

そんな拓也に、輝二は嘘をついた。

「嘘つけ！今言っただろっ！」

「気の所為だな」

「違うね！確かに言った！よっしゃ模擬戦すっぞ～！」

拓也は立ち上がってそう叫ぶ。

「言うんじゃなかった・・・」

その背後で輝二は、密かに後悔を抱いていた。

「いいぜ！模擬戦しよう！」

「おぉ～！」

大とアグモンも立ち上がる。

「こっちもか・・・」

トーマが呆れてため息を吐いた。

「最悪なんですけど・・・」

草原に立った一同の中で、淑乃がそう呟く。

「お～し、模擬戦いってみよ～！」

「「おぉ～！」」

拓也の掛け声に、大とアグモンが応えた。

「すんごいやる気だなぁ、あの3人・・・」

太一が半ば呆れながら、デジヴァイスを握る。

因みにルールがあったりした。

・それぞれチームに分かれ、自分のチームとは違う者と闘う事。

・チームは拓也、太一、大輔、大、啓人をリーダーとする。

・最初から全力で闘う事。

・相手を倒さなければいけないが、やりすぎない事。

・デジコードをスキャンしない事。

「大がリーダーで良いのか？」

淑乃にトーマが問いかける。

「もう良いのよ。こういう時は大に任せた方が良いし」

淑乃は適当にそう促した。

「大、淑乃があぁ言ってるぞ」

イクトが大にそう言う。

「へっ、良いぜ！俺がリーダーな！」

大はすでにやる気満々だった。

「誰が誰と闘うんだ？」

「俺は拓也と闘う！」

大輔の言葉に、大が拓也を指名する。

「っしゃぁ！良いぞ！」

拓也もそう返して、デジヴァイスを構えた。

〈戦闘相手〉

拓也ＶＳ大、アグモン　輝二ＶＳトーマ、ガオモン

輝一ＶＳイクト、ファルコモン　泉ＶＳ淑乃、ララモン

太一、アグモンＶＳ啓人、ギルモン　ヤマト、ガブモンＶＳ健良、テリアモン

友樹ＶＳ留姫、レナモン　純平ＶＳ遼、モノドラモン

空、ピヨモンＶＳ京、ホークモン、ヒカリ、テイルモン

光子郎、テントモンＶＳ伊織、アルマジモン、岳、パタモン

大輔、ブイモン、賢、ワームモンＶＳミミ、パルモン、丈、ゴマモン

「行っくぞぉぉぉっっ！！」

大が拓也へ拳を握りしめ、突き進む。

拓也は同調して両腕に意識を集中し、防御力を高めた。

そして腕を前で交差し、大の拳を防ぐ。

「おわっ！？」

人間だというのに、その威力で後方へ押される拓也。

――ヴンッ

大の右手にデジソウルが宿り、それが体全体へ走る。

「アグモン！こいつが欲しいか！？」

「おう！」

「ならいくぞ！デジソウルチャージッ！オーバードライブッッ！！」

今まで以上のデジソウルが、アグモンに送られた。

「アグモン！進化ぁっ！！」

アグモンのデータが上書きされ、巨大化する。

「シャイングレイモン！」

―――――

シャイングレイモン

究極体。光竜型。必殺技は＜グロリアスバースト＞

―――――

光子郎がシャイングレイモンにパソコンを向け、データを読み取る。

「『ライズグレイモンの究極体。太陽のエネルギーを使って闘い、ジオグレイソードを召喚する能力を持つ』・・・だそうです」

隣にいた太一達にそう伝えた。

「へっ、上等！」

拓也の右手に紅いデジコードが浮かび上がる。

――ヴヴヴヴッ！

デジコードはぶれており、今にも暴れ出しそうだ。

「エンシェントスピリット・・・エボリューションッッ！！」

紅いデジコードの渦が拓也を包み、巨大化する。

「エンシェントグレイモン！」

光子郎がそちらにもパソコンを向けた。

「『エンシェントグレイモン。究極体。古代獣型。必殺技は＜オメガバースト＞。超竜闘士の異名を持ち、不滅の炎を纏う。天変地異を引き起こすとされる』・・・炎同士ですね」

光子郎が読み終わった時だった。

「ゴォオオオオオオオオオアアアアアアアアアアアアアアアアアッッッ！！！」

エンシェントグレイモンが咆哮し、衝撃波がまき散らされる。

「おわっ！？」

「何だ！？」

大とシャイングレイモンが驚き、思わず構えた。

「耳が痛い・・！」

「何て声だ！」

他の者も思わず耳を押さえている。

「早速吼えたか！」

輝二は笑みを浮かべ、デジヴァイスを構えていた。

エンシェントグレイモンの制御に成功しているか。

それを見極める。

「・・・」

目を凝らして、エンシェントグレイモンの眼光を見つめた。

エンシェントグレイモンの瞳孔は閉じている。

「大丈夫そうだな」

一安心し、息を吐いた・・・。

7話：吼えよ、炎竜（後書き）

今思ったんですけど・・・。

これかなり大変ですよね！？

全員の戦闘場面書かなきゃいけないって事ですよね！？

私って馬鹿だぁぁぁっっ！！！

８話：燃え尽きろ（前書き）

拓也ＶＳ大、アグモン編です！

では８話、参ります！

8話：燃え尽きろ

〈拓也ＶＳ大、アグモン〉

「行っけぇっ！」

「おう！」

大の声で、シャイングレイモンが突撃する。

「ガァァッ！」

エンシェントグレイモンは軽く一吼えし、衝撃波を放った。

シャイングレイモンは腕を振ってそれをかき消し、更に突き進む。

紅い機械翼を広げ、炎を集中させた。

「＜グロリアス・・・バースト＞ッ！」

それをエンシェントグレイモンに放つ。

エンシェントグレイモンは、避ける素振りを見せず直撃した。

「っしゃぁ！」

それを見た大が声を上げる。

「ッ！？兄貴、まだだ！」

シャイングレイモンは、炎の中で揺らめく眼光を捉え、大に注意の声を飛ばした。

「何!?」

大も慌てて眼を凝らす。

「熱い炎だな。けど・・・まだ温(ぬる)い!」

エンシェントグレイモンは、シャイングレイモンの炎を身に纏っていた。

「俺に勝ちたければ・・・これくらいやってみろっ!」

エンシェントグレイモンの口に大地の気が集中し、炎が渦を巻く。

「＜ガイア・・・トルネード＞ォッ!!」

不滅の炎が唸りを上げて、シャイングレイモンを包みこんだ。

「ぐぁぁっ!」

「シャイングレイモン!?」

炎の闘士が放った火の温度に、シャイングレイモンは驚愕する。

「く!・・・こうなりゃしゃーねぇ!ジオグレイソードッ!」

大はデジヴァイスの側面部分に手をかざし、そう叫んだ。

シャイングレイモンは地面に手を突き刺し、剣を取り出す。

対して、エンシェントグレイモンは身に纏う炎を沸騰させ、溶岩の温度まで上昇させた。

――ジュウウウッ！

草原の草が、その炎で溶けていく。

炎の闘士にとって、炎は栄養に値した。

シャイングレイモンが火を使って攻撃すれば、エンシェントグレイモンの攻撃力は上がる。

ならば剣で闘えば、と考えたのだ。

「シャイングレイモン、突っ込めぇっ！」

前言撤回。

大の場合、野生の勘に近いようだ。

「おぉぉぉっ！」

シャイングレイモンは、エンシェントグレイモンに斬りかかる。

エンシェントグレイモンは、振り下ろされたジオグレイソードをそのまま受けた。

「待ってたぞ・・！」

「何！？」

エンシェントグレイモンの周囲を炎が取り巻く。

「＜オメガ・・・バースト＞ォッ！！」

――ズドォォォォォォォォォォンンッッ！！」

エンシェントグレイモンを中心として、超爆発が起こった。

「ぐぁぁぁっ！？」

シャイングレイモンは至近距離からダメージを食らい、爆風と爆炎で吹き飛ばされる。

「シャイングレイモン！大丈夫か！？」

大は心配して声をかけるが、

「大丈夫だ兄貴！」

シャイングレイモンは根性で立ち上がった。

「はぁ・・・はぁ・・・」

とはいえ、肩で息をする程ダメージは受けている。

「シャイングレイモン、本気でいくぞ！デジソウル・・・バースト

オオッッ！！」

大はデジヴァイスから、大量のデジソウルを放った。

「シャイングレイモン、バーストモード！」

シャイングレイモンの装甲色が変わり、炎の剣と盾が現れる。

背中の機械翼は、灼熱の翼へと変化した。

シャイングレイモンバーストモード

究極体。光竜型。必殺技は＜ファイナルシャイニングバースト＞

「そうこないとな・・・」

エンシェントグレイモンは身に纏う炎の温度を、更に上げた。

シャイングレイモンは剣を構え、エンシェントグレイモンに接近。

「＜コロナブレイズ・・・ソード＞ッ！」

炎の剣を振り下ろす。

それは、エンシェントグレイモンの首筋に直撃した。

「ぐ・・！」

炎自体のダメージはほとんど無いが、剣の痛みは伝わる。

「はぁぁっ！」

――ジュゥゥッ！

エンシェントグレイモンは、溶岩の如く煮えたぎる炎で、剣を溶かした。

「何!?」

溶かされた事に驚愕し、シャイングレイモンは跳び退る。

溶かされた剣の部分は、炎でかばった。

「＜ガイア・・・トルネード＞ォッ！！」

シャイングレイモンが溶岩を操り、竜巻と化して放つ。

「く・・！」

流石に溶岩を食らうと拙い為、シャイングレイモンは飛翔してかわした。

「逃がさねぇ・・！」

エンシェントグレイモンは軽く首を振って、竜巻を上へ向ける。

「な・・！？」

シャイングレイモンはそのまま飲み込まれた。

「熱っ！」

盾で防ぐものの、多少食らってしまう。

「溶岩って、んなのありかよ！」

大は思わず叫んだ。

――ボコボコッ、ボコンッ！

エンシェントグレイモンの周りを流れる溶岩は、煮えたぎっている。

その中にいるエンシェントグレイモンが平気でいられる事が、大には化物に思えた。

「シャイングレイモン、一か八かで突っ込めっ！」

「おうっ！」

シャイングレイモンは盾を構え、エンシェントグレイモンに急接近する。

「いくぞ！＜ファイナルシャイニング・・・バースト＞ォォッ！！」

――ドゴォォォォォォォォォンンッッ！！

シャイングレイモンは大爆発を引き起こした。

「ぐ・・・!?」

エンシェントグレイモンは、突然の事に驚き、もろに食らう。

シャイングレイモンは爆発で力を使い果たし、進化が解けた。

「大丈夫かアグモン!」

「な、なんとかぁ・・・」

大はアグモンに駆け寄り、様子を確認する。

「く・・・!」

エンシェントグレイモンは爆発のダメージを振り払うように、頭を振った。

そして進化を解く。

「っはぁ!しんどっ!」

拓也はそう言って大きく息を吐いた。

「強ぇなお前!久しぶりに燃えたぜ!」

大は笑いながら、拓也の背を叩く。

「俺もだ!でも俺を指名したのは拙かっただろ。俺に火は効かねぇ

から」

「おう、驚いたぜ。溶岩放ってくんだから！」

アグモンが拓也の言葉に笑って返した・・・。

8話：燃え尽きろ（後書き）

次は・・・輝二ＶＳトーマ、ガオモン編だと思います。

ふぅ・・・大変すぎる・・・。

拓也「お前馬鹿だろ」

竜気「何を言うか！って、馬鹿の拓也に言われたくないね」

拓也「んだと！？」↑キレた

竜気「あ、言っちゃった・・！」

拓也「覚悟・・・しやがれぇぇっ！！」

大「拓也の奴、キレてるな」

アグモン「頑張れ～！」

大「お前どっち応援してんだよ？」

アグモン「・・・拓也」

大「作者見捨てるのか！？」

9話：翻弄せよ（前書き）

輝二ＶＳトーマ、ガオモン編です！

では9話、参ります！

9話：翻弄せよ

〈輝二VSトーマ、ガオモン〉

――ヴヴヴヴッ

輝二の右手に浮かび上がった白いデジコードが、小刻みにぶれていた。

「エンシェントスピリット・・・エボリューションッッ！！」

デジコードが渦を巻き、輝二を包んで巨大化する。

「エンシェントガルルモン！」

エンシェントガルルモンは2対の大剣――シャープネスクレイモアを構えた。

啓人がデジヴァイスを向け、データを読み取る。

「『エンシェントガルルモン。究極体。古代獣型。必殺技は＜アブソリュート・ゼロ＞。超獣闘士の異名を持ち、闇を瞬斬する。電子をも凍結させると言われている』・・・」

啓人はそこまで読み上げ、顔を上げた。

「ガオモン、いくぞ！」

「イエス、マスター！」

トーマの体に、青いデジソウルが走る。

「デジソウル・・・チャージ！オーバードライブッ！！」

「ガオモン、進化っ！」

ガオモンが大量のデジソウルに包まれ、データが上書きされた。

「ミラージュガオガモン！」

紅いマントを纏い、クロンデジソイドの鎧を身につける巨大なデジモンが現れる。

留姫がデータを読み取った。

「『ミラージュガオガモン。究極体。獣騎士型。必殺技は＜フルムーンブラスター＞。桁違いの速さで移動する為、敵は蜃気楼のような現象を目にする。』・・・あの巨体で桁違いの速さって・・！」

留姫は、思わずミラージュガオガモンを見上げる。

「ミラージュガオガモン、プランAだ！」

「イエス、マスター！」

ミラージュガオガモンはトーマの指示で、エンシェントガルルモンに急接近。

ミラージュガオガモンが通過した所は、幻像が残っていた。

「＜ゲイルクロー＞！」

ミラージュガオガモンは両手の刃で斬りつけるが、エンシェントガルルモンは姿を消す。

「何！？」

辺りを見回すが、見当たらない。

「ミラージュガオガモン、後ろだ！」

遠くから見ていたトーマが、指示を出す。

エンシェントガルルモンは、ミラージュガオガモンの首筋に移動していた。

「遅い」

エンシェントガルルモンは、２対の大剣で斬りつける。

「ぐ！」

攻撃を食らいはしたものの、ミラージュガオガモンは跳び退った。

「まさか、ミラージュガオガモンより速いのか・・！？」

トーマはあり得ないとでも言いたげに、驚愕の表情を浮かべる。

「なら遠慮してる場合ではないな・・・。ミラージュガオガモン、

いくぞ！」

「イエス、マスターッ！」

ミラージュガオガモンは、一旦トーマのもとへ戻った。

「デジソウル・・・バーストォッ！！」

トーマはデジヴァイスの側面部分に手をかざし、デジソウルを膨張させる。

「ミラージュガオガモン、バーストモード！」

ミラージュガオガモンの装甲色が変わり、三日月型の薙刀とハンマーが一体化したような武器を装備していた。

ミラージュガオガモンバーストモード

究極体。獣騎士型。必殺技は＜ファイナルミラージュバースト＞

ミラージュガオガモンが変化したのを見て、エンシェントガルルモンは大剣を構え直す。

ミラージュガオガモンは素早さを上げ、急接近した。

「＜ルナハーケン・・・スラッシャー＞ッ！」

そして薙刀を一閃する。

――ガキィンッ！

エンシェントガルルモンはエンシェントガルルモンは、大剣で防いだ。

（力点をずらしていなされた！？）

ミラージュガオガモンは、エンシェントガルルモンの剣術に驚愕する。

「＜アブソリュート・・・」

シャープネスクレイモアに光が集中し、冷気と化した。

「・・・ゼロ＞ッ」

ミラージュガオガモンの背後に回り込み、凍結の冷気を放つ。

――ビキビキ・・！

ミラージュガオガモンの体が、一部凍ってしまった。

――ダンッ！

エンシェントガルルモンは跳躍し、ミラージュガオガモンの正面にくる。

大剣を振って、衝撃波を放った。

「ぐぁっ！」

ミラージュガオガモンはもろに食らい、怯む。

無理矢理氷を破壊して、抜け出した。

「＜フルムーン・・・メテオインパクト＞ッ！」

ミラージュガオガモンはハンマーに高エネルギーを纏わせ、叩きつける。

「く・・！」

ギリギリでかわしたその時、

――ズドォォォォォォォォォンンッッ！！

別の場所で超爆発が起こった。

ふとそちらを見ると、エンシェントグレイモンを中心に爆発が起こり、その爆発でシャイングレイモンが吹き飛んでいく。

「フ・・・」

それを見て、エンシェントガルルモンが笑みを浮かべた。

そして、今だ見続けているミラージュガオガモンへ、駆けて行く。

「余所見（よそみ）している場合か・・？」

「ッ！？」

その声で、ミラージュガオガモンが接近されている事に気づいた。

「はぁぁっ！」

エンシェントガルルモンは、大剣を横に一閃する。

「ぐ・・！」

痛みをこらえ、後方へ跳び退るミラージュガオガモン。

「ミラージュガオガモン、プランB！」

「イエス、マスター！」

トーマの指示に、ミラージュガオガモンが動き出す。

ミラージュガオガモンは、エンシェントガルルモンの周囲を高速で移動し、残像を残した。

エンシェントガルルモンは、大剣を交差させて警戒する。

（速いな・・・）

ミラージュガオガモンの残像を見ながら、エンシェントガルルモンは考え込んだ。

（が、それほどではない・・・）

シャープネスクレイモアを握る手に、力がこもる。

――ヴンッ

ミラージュガオガモンは、エンシェントガルルモンの正面に現れた。

「＜ファイナルミラージュ・・・バースト＞ッッ！！」

ミラージュガオガモンの武器が、爆発する。

――ドゴォォォォォンンッ！

「爆発・・！？」

大剣を構えていた為、微量のダメージで済んだ。

――ズザザザッ！

が、爆風で後方へ押される。

爆煙が漂って、視界を塞いだ。

「いくか・・・」

エンシェントガルルモンはこの爆煙を利用し、ミラージュガオガモンの背後へ回り込む。

気づかれぬよう光を集中し、冷気と化した。

「＜アブソリュート・ゼロ＞ッ！」

その冷気を放つ。

「ぐ！何！？」

いきなりの攻撃に、驚愕するミラージュガオガモン。

大きさが違う為、姿を見つけられなかったのだ。

トーマは距離が遠く、爆煙の所為でミラージュガオガモンの姿さえ見えない。

そこを突いた。

――ビキビキッ、バキッ！

再び凍っていくミラージュガオガモン。

エンシェントガルルモンは、シャープネスクレイモアを低く構えた。

「はぁぁっ！」

一気に肉薄し、斬りかかる。

「ぐぁぁっ！」

――バキィンッ！

氷が砕かれ、ミラージュガオガモンは解放された。

が、進化が解けてガオモンに戻る。

それを見たエンシェントガルルモンは、同じく進化を解いた。

（魂広の修行が役に立ったな・・・）

ふとそう思う輝二。

魂広の修行が無かったら、今の戦闘は敗れていただろう。

「大丈夫か？」

輝二はガオモンに体調を確認した。

「あ、あぁ」

声をかけられた事に驚きはしたものの、ガオモンはそう返す。

「大丈夫かガオモン！」

トーマがガオモンのもとに駆け寄って来た。

「あ、はい」

「なら良かった。強いんだな君は」

トーマは笑みを浮かべて、輝二に手を差しだす。

「・・・どうも」

輝二はそう返し、手を握り返した・・・。

9話：翻弄せよ（後書き）

次は・・・輝一ＶＳイクト、ファルコモンです。

輝二「頑張るな・・・」

竜気「まぁね。さぁ、張り切っていってみよ～！」

トーマ「テンション高いんだな、この子は・・・」

ガオモン「何か良い事でもあったのでは・・？」

竜気「無いよ」

輝二「こいつがテンション高いのは、いつもの事だ。やかましくてな」

竜気「失敬な！」

輝二「拓也並みだな・・・」

竜気「何ですと！？あんな馬鹿と一緒にしないでいただきたい！」

トーマ「・・・後ろにその彼がいる事を、知ってて言っているのかい？」

竜気「・・・ほぇ？」

拓也「竜気ぃ～、今のは如何いう事かなぁ～・・！」

竜気「・・・ヤバしっ！」↑逃亡

拓也「逃がすかぁぁっ！」

１０話：死者は去れ（前書き）

タイトルがアレですけど、気にしないで下さい。

１０話、参ります！

10話：死者は去れ

〈輝一VSイクト、ファルコモン〉

輝一は戦闘を始めた輝二を見て、

「やってるなぁ・・・」

そう呟き、デジヴァイスを握った。

輝一の右手に、漆黒のデジコードが宿る。

「エンシェントスピリット・・・エボリューションッッ！！」

――ヴィィィィッ！

デジコードが巨大化し、輝一を包んだ。

「エンシェントスフィンクモン！」

黄金の機械翼を持つ、漆黒の獅子が現れる。

健良がデジヴァイスを向けた。

「『エンシェントスフィンクモン。究極体。古代幻獣型。必殺技は＜ネクロエクリプス＞。超闇闘士の異名を持ち、死を招く闇の獣と呼ばれる。消滅と破壊を司り、その紅き瞳は冥界で闇と死を見据えている』・・・死を招く闇の獣！？」

驚きの表情を隠せない健良。

「ファルコモン、行くぞ！」

「おう！」

気を引き締め直すイクトの体に、紫色のデジソウルが走った。

「デジソウルチャージ！オーバードライブッ！！」

「ファルコモン、進化っ！」

ファルコモンがデジソウルに包まれる。

「レイヴモン！」

漆黒の翼とクロンデジソイドの片翼を持つ、人型デジモンが現れた。

遼がレイヴモンにデジヴァイスを向け、データを見る。

「『レイヴモン。究極体。サイボーグ型。必殺技は＜天之尾羽張（あまのおはばり）＞。黒き翼で姿を隠し、白き翼で敵を斬ると言われる。隠密行動を得意とする』・・・か」

レイヴモンが先に動き出した。

「＜ブラストウィング＞！」

レイヴモンは白銀の翼で、エンシェントスフィンクモンに斬りかかる。

――バッ！

エンシェントスフィンクモンは機械翼を広げ、空へ駆け上がった。

まるで、道があるかのようである。

「＜スパイラル・・・レイヴンクロウ＞ッ！」

レイヴモンは左手の爪を光らせ、回転しながら突撃した。

それを、容易に避けるエンシェントスフィンクモン。

何事も無かったかのように、地上に降り立った。

「ガァァァァァァァァアアアッッ！！」

そして咆哮し、黒い衝撃波を放つ。

エンシェントスフィンクモンの必殺技、＜ダークブラスト＞だ。

レイヴモンは、腰の鞘に納めていた鳥王丸（ちょうおうまる）を取り出し、衝撃波を弾く。

「レイヴモン、行くぞ！デジソウル、バーストォッ！！」

レイヴモンの装甲色が白へ変化し、両翼が紫色に変わる。

「レイヴモン、バーストモード！」

レイヴモンバーストモード

究極体。サイボーグ型。必殺技は＜無双天翔翼之陣（むそうてんしょうよくのじん）＞

――――――

すると、エンシェントスフィンクモンの紅い瞳が怪しく輝いた。

「＜ネクロエクリプス＞・・・」

その途端、レイヴモンが黒いオーラに包まれる。

「レイヴモン！？」

イクトが声をかけるが、レイヴモンは反応を示さなかった。

暗い空間に、レイヴモンは佇んでいた。

「何処だ・・・」

周りを見回すが、誰の姿も見えない。

――ヴゥン・・！

突如、闇の空間から影が襲いかかった。

「何！？」

レイヴモンは両翼で、その影を斬りさく。

が、その1体だけではなく、次々と現れた。

「ならば・・！＜雷光一閃之突（らいこういっせんのつき）＞ッ！」

レイヴモンは両翼に黒紫のオーラを纏わせ、雷の如く影を突き刺していく。

影は続々と斬り裂かれ、消えていった。

すると、影がエンシェントスフィンクモンを形造る。

「ここは何処だ！」

レイヴモンは、エンシェントスフィンクモンに問いかけた。

「・・・冥界」

「何・・！？」

「先程、お前が斬った者達はすでに死んだ者。死者の魂だ・・・」

スピリットの影響か、口調がいつもと少し違う。

「俺は死者の番人。この者達の断末魔が、相手だ」

再び影が浮かび上がり、レイヴモンに襲いかかった。

「く！」

レイヴモンは後方へ跳び退る。

「＜雷光一閃之突＞ッ！」

そして黒紫の翼で、全て斬り裂いた。

が、影は止まる事を知らず、現れては襲いかかる。

「＜怒涛闇供之舞（どとうやみくものまい）＞ッ！」

レイヴモンは地面に攻撃し、爆煙を巻き起こした。

「・・・」

エンシェントスフィンクモンは、そう様子を見届ける。

煙が晴れた時、レイヴモンだけが立っていた。

影は全て倒される。

「・・・礼を言おう」

「何・・？」

「影を消し去ってくれた礼だ。死者は死者の国へ・・・」

エンシェントスフィンクモンがそう言った途端、周りが光に包まれた。

「――モン！レイヴモン！」

「ッ！？」

レイヴモンはイクトの声で、意識を取り戻す。

「イク・・ト？」

「おう！」

レイヴモンは何があったのか理解出来ず、立ち上がった。

エンシェントスフィンクモンがデジコードに包まれ、輝一に戻る。

「はは、まさか負けるなんてな」

輝一は苦笑して笑みを浮かべた。

レイヴモンはそれを見て、進化を解く。

「今、何した？」

イクトが輝一に尋ねると、

「ちょっと試しただけだ。ついでに死者送りも、してもらっちゃっ

たけど」

「え!?」

ファルコモンが、少し青い顔をする。

「まさかあの影、本当に死者!?」

「そのとおり。死者を生者が斬ることで、死者の国へ送るんだ」

「は、はぁ・・・」

「ファルコモン、試されたのか?それで勝ったのか?良かったな!」

イクトは1人、納得していた・・・。

１０話：死者は去れ（後書き）

ファルコモン「死者を斬らせるなんて、ひどいぞ！」

輝一「あ、ごめんごめん。一石二丁かな～、って」

イクト「ファルコモン、文句言うな。勝った。それだけで十分」

ファルコモン「もう！」

輝一「あはは・・・」

次は・・・泉ＶＳ淑乃、ララモンです！

１１話：やりすぎの末に（前書き）

今回は泉ＶＳ淑乃、ララモンです。

１１話、参ります！

11話：やりすぎの末に

〈泉ＶＳ淑乃、ララモン〉

――スドォォォォォォォォォォンンッッ！！

エンシェントグレイモンの爆発音は響く。

「まぁた出鱈目な事してる・・！」

それを見た泉は、拳を作って怒りのマークを浮かべた。

――ドゴォォォォォォォンンッッ！！

「輝二まで・・！」

続いて、エンシェントガルルモンの方で爆発が起こる。

「違うわ。あれはミラージュガオガモンね」

淑乃が目を凝らして、そう言った。

そして、体全体に桃色のデジソウルを走らせる。

「ララモン、準備良い？」

「勿論よ！」

「でしょうね。いくわよ！デジソウル・・・チャージ！オーバード

ライブッ！！」

デジヴァイスの先端に手をつけ、ララモンに大量のデジソウルを送り込んだ。

「ララモン、進化っ！」

ララモンのデータが上書きされ、進化する。

「ロゼモン！」

赤いマントをはおい、いばらを両翼に巻きつけていた。

胸元に愛と美のシンボルが刻まれた宝玉、ティファレトを身につけている。

光子郎が戦闘から一時、目を離して、パソコンでデータを読み取った。

「『ロゼモン。究極体。妖精型。必殺技は＜ローゼスレイピア＞。草花の女王と呼ばれる、薔薇のような姿をした妖精型デジモン。その実力は他の究極体とも、引けを取らない』・・・薔薇のデジモンですか。ミミさんのリリモンに似ていますね・・・」

1人頷いている光子郎。

「いくわよ！」

泉の右手に、黄緑色のデジコードが浮かび上がった。

「エンシェントスピリット・・・エボリューションッッ！！」

デジコードが膨張し、膨れ上がる。

「エンシェントイリスモン！」

光子郎が、今度はエンシェントイリスモンにパソコンを向けた。

「『エンシェントイリスモン。究極体。古代鳥人型。必殺技は＜ストームゲイザー＞。超嵐闘士の異名を持ち、黄金の翼を使って大空を駆け巡る。天候を操り、嵐を呼ぶと言われる』・・・風、ですか」

光子郎は少しデータを見た後、自分の戦闘に戻る。

「いくわよ！」

ロゼモンが先手を打った。

「＜ローゼスレイピア＞！」

ロゼモンは、腕に巻きつけていた棘の鞭を剣のように扱い、エンシェントイリスモンに攻撃する。

エンシェントイリスモンは風のレイピアで、鞭を弾き返した。

そしてレイピアを天へ向ける。

――ビュォォォッ！

突如風が吹き荒れ、雲が空を覆った。

嵐だ。

「何？嵐？」

「いきなりか！？」

他の者も、空を仰ぐように見上げる。

「＜ストームゲイザー＞！」

エンシェントイリスモンはロゼモンへ、暴風雨を巻き起こした。

「く・・！」

ロゼモンは距離を取ろうとするが、巻き込まれる。

「きゃっ！」

風の刃が襲いかかった。

「ロゼモン！？」

淑乃が心配するが、ロゼモンは自力で脱出する。

「大丈夫？」

「まぁね」

淑乃の問いに、ロゼモンは頷き返した。

「それじゃ、バーストモードいくわよ！」

「ＯＫ！」

「デジソウル・・・バーストッッ！！」

ロゼモンに、大量のデジソウルが降りかかり、ロゼモンの装甲色が白になる。

マントが桃色へ、鞭が黒へ変化した。

ロゼモンバーストモード

究極体。妖精型。必殺技は＜ティファレト＞

ロゼモンはエンシェントイリスモンに急接近。

黒い鞭で斬りつける。

エンシェントイリスモンは、素早くかわして後方へ飛んだ。

「＜ティファレト＞ッ！」

ロゼモンの周囲にティファレトが多く飛び交い、エンシェントイリスモンへと放たれる。

「＜レインボーシンフォニー＞！」

エンシェントイリスモンは、レイピアの剣先から融解レーザーを放ち、ティファレトを消滅させていった。

ある物は溶かし、ある物はレイピアで斬り裂く。

「＜ストームゲイザー＞ッ！」

先程の物とは比べ物にならない、巨大暴風雨を発生させ、自分を中心として嵐を巻き起こした。

周りのティファレトは吹き飛ばされる。

風の闘士は、嵐などそよ風同然だ。

エンシェントイリスモンは平然としている。

暴風雨をロゼモンへと放った。

「＜ティファレト＞ッ！」

ロゼモンがティファレトを放つが、竜巻は物ともせずに吹き飛ばす。

ロゼモンは仕方なく鞭で斬り裂き、竜巻をかき消した。

が、

「こっちよ」

その隙に、エンシェントイリスモンが背後に回り込む。

「＜ストームゲイザー＞ッ！」

再び同じ規模の嵐を放った。

「え！？きゃぁっ！」

「ロゼモン！」

淑乃が心配して叫ぶ。

「このままやられたくは・・・ないわよ！」

ロゼモンがそう言うと、ティファレトがエンシェントイリスモンの背後に回り込み、突撃した。

「きゃっ！？」

背後から、いきなりの攻撃に驚くエンシェントイリスモン。

（根性、って訳ね・・・）

エンシェントイリスモンは、レイピアを握る手に力を込めた。

「これで終わりよ！＜ストーム・・・ゲイザー＞ッッ！！」

天空の黒雲から大規模の竜巻が発生し、ロゼモンに襲いかかる。

「＜ティファレト＞ッッ！！」

ロゼモンも負けておらず、最大勢力でティファレトを放った。

――ドゴォォォォォォォンンッッ！！

突如ティファレトが爆発し、竜巻の風と共に爆風が吹き荒れる。

「「きゃぁぁっ！！」」

「ロゼモン！？」

2人は吹き飛ばされ、淑乃は荒れる風の中、パートナーの名を叫んだ。

風が収まり、黒雲が晴れる。

ララモンは眼を回して倒れており、泉が頭を押さえながら立ち上がろうとしていた。

「ラ、ララモン！？」

淑乃は眼を回している相棒に、駆け寄る。

「ふぇぇぇ・・・」

ララモンは完全に気を失っていた。

というより星が見える。

「ご、ごめん。やりすぎたかも・・・」

泉も若干眼を回しながら、淑乃に歩み寄った。

「と、とりあえず・・・休みましょうか」

淑乃は眼を回す1体と1人を見比べ、苦笑する。

泉はその後、倒れたとか倒れなかったとか・・・。

11話：やりすぎの末に（後書き）

泉「竜巻の威力強すぎだったわ・・・」

ララモン「本当・・・」

淑乃「まだ眼、回ってる・・・」

竜気「ちゃんと治しなよ～」

泉・ララモン「「ふぁ～い・・・」」

竜気「ダメだ・・・」

１２話：惑わされるな（前書き）

今回は・・・えっとぉ？

あ、太一、アグモンＶＳ啓人、ギルモン編ですね。

では１２話、参ります！

12話：惑わされるな

〈太一、アグモンＶＳ啓人、ギルモン〉

「け、結構半端無いね・・・」

啓人は数々の爆発を見て、苦笑いを浮かべた。

「ギルモン、闘う！」

ギルモンはすでにアグモンと向き合っている。

「行くぞ、アグモン！」

太一の持っているデジヴァイスが、異常なまでに輝き出した。

「アグモン、ワープ進化ぁっ！！」

アグモンが光に包まれる。

「ウォーグレイモン！」

クロンデジソイドの黄金鎧を纏い、両手にはドラモンキラーを装備していた。

背中の外殻を合わせると、最強硬度の盾――ブレイブシールドとなる。

啓人はデジヴァイスを向けた。

（『ウォーグレイモン。究極体。竜人型。必殺技は＜ガイアフォース＞。最強の竜戦士であり、グレイモン系の究極形態。完全体デジモンの攻撃程度では、倒す事は不可能』・・・）

「不可能、か。じゃぁ究極体で・・・。ギルモン、久しぶりにやるよ！」

啓人がデジヴァイスを構える。

「マトリックス・・・エボリューションッッ！！」

『Ｍａｔｒｉｘ　Ｅｖｏｌｕｓｉｏｎ』

啓人のデジヴァイスからそんな言葉が響き、啓人とギルモンが光に包まれた。

「ギルモン、進化っ！」

光が膨れ上がり、赤いマントをはおったデジモンが現れる。

「デュークモン！」

右手に聖槍――グラム、左手に聖盾――イージスを装備していた。

すでに戦闘を終え、それを見た大が、

「ロ、ロイヤルナイツのデュークモン！？」

と、声を上げる。

光子郎もそれに気付き、パソコンを向けた。

「『デュークモン。究極体。聖騎士型。必殺技は＜ファイナル・エリシオン＞。オメガモン、マグナモンと共にロイヤルナイツと呼ばれ、主君に対して忠義の士である』・・・オメガモン同様、ロイヤルナイツですか。頼もしいですね」

光子郎はそう言ってウォーグレイモンを見る。

「行くぞ！」

デュークモンが先手を打った。

「＜ロイヤルセーバー＞！」

聖槍グラムを突き出す。

「く！」

――ガキィン！

ウォーグレイモンはブレイブシールドを構え、弾き返した。

が、その隙にデュークモンがイージスに力を集中させている。

「＜ファイナル・・・エリシオン＞ッ！」

盾から砲撃を放ち、ウォーグレイモンを盾ごと吹き飛ばした。

「ぐぁっ！」

――ズザザザッ！

盾で砲撃自体は防ぐものの、威力の振動が伝わってくる。

ウォーグレイモンは後方へ押された。

ウォーグレイモンは背中に外殻を戻し、それを広げて飛び立つ。

天へ両手を上げ、エネルギーを集束させた。

「＜ガイア・・・フォース＞ッ！」

超高密度の高熱エネルギー弾を、デュークモン目がけて解き放つ。

デュークモンはイージスを構え、防いだ。

「＜ドラモンキラー＞ッ！」

受け止めている間に、ウォーグレイモンは接近。

両手の刃で斬りつける。

デュークモンは砲撃を防ぐ事を断念し、ウォーグレイモンの攻撃をかわした。

「＜ロイヤルセーバー＞ッ！」

そして反転し、グラムを薙ぎ払い突き出す。

「がっ！？」

背後からの攻撃に、ウォーグレイモンはダメージを食らった。

「ウォーグレイモン！」

「大丈夫だ太一！」

お互いに一言かわし、無事を確認後ウォーグレイモンは再び力を集束する。

「＜ガイア・・・フォース＞ッ！」

「＜ファイナル・・・エリシオン＞ッ！」

ウォーグレイモンが集束する時間は、デュークモンの時間でもあった。

お互い力を溜め、エネルギー弾と砲撃がぶつかる。

――ドゴォォォォォォォォォンンッッ！！

「く・・！」

「見えん・・！」

爆煙と爆風で、視界が奪われた。

ウォーグレイモンはブレイブシールドを構え、デュークモンはイージスを構える。

爆煙が収まる直前、デュークモンが動いた。
爆煙をグラムで斬り開き、突き進む。
ウォーグレイモンの影を捉え、
「＜ロイヤルセーバー＞ッ！」
グラムを突き出した。
――ガキィンッ！
「何！？」
が、そこにあったのは地面に突き刺さったブレイブシールドだけ。
ウォーグレイモン本体の姿は無い。
「かかったな！＜ガイア・・・フォース＞ッ！」
爆煙が晴れ、ウォーグレイモンがエネルギー弾を発射する。
「ぐぁぁっ！」
ダメージを食らいながらも、デュークモンは力を溜め続けた。
「＜ファイナル・・・エリシオン＞ッッ！！」
砲撃を放ち、威力の残ったエネルギー弾を押し返す。

「何!?」

盾が無く、驚いていたウォーグレイモンは、そのまま飲み込まれた。

「ぐぁぁぁぁっ!?」

エネルギー弾と砲撃の威力が合わさり、ウォーグレイモンに直撃する。

耐え切れずに進化が解けた。

対して、ダメージを負いながらも力を溜めるという無理をした為、デュークモンも進化が解ける。

「ギルモン、お腹空いた〜。タカト〜、ギルモンパンちょうだ〜い!」

「えぇ〜!?さっきあんなに食べたのに!?」

「お腹空いた〜!」

「残念だけど、ギルモンパンは無いよ」

えぇ〜!と不満げなギルモン。

「太一〜、僕も〜!」

アグモンもお腹を抱え、太一に歩みよる。

「お前もか！」

太一は似たような2体に、思わず苦笑した・・・。

12話：惑わされるな（後書き）

ギルモン「お腹空いた～！」

啓人「だからギルモンパンは無いんだって！」

太一「ギ、ギルモンパン？」

アグモン「って何？」

啓人「あ、僕の家パン屋なんですよ。それで、ギルモンの顔をしたパン作ってあげたんです」

ギルモン「おいしいよ～！」

アグモン「いいな～！今度僕のも作って！」

啓人「アグモンの？良いよ」

太一「はは、悪いな」

啓人「良いですよ。これくらい♪」

――ビリッ

竜気「じゃぁ私のも作って！」

太一（空間破って来た！？）

啓人「え、えっと・・・人間は難しいです」

竜気「あ～、そっか。残念」

啓人「が、頑張るから」

竜気「おぉ！ありがとう啓人！」

拓也「竜気(あいつ)って性格変わるよな・・・。相手によって」

１３話：撃ち落とせ（前書き）

今回は・・・ヤマト、ガブモンＶＳ健良、テリアモン編みたいですね。

１３話、参ります！

13話：撃ち落とせ

〈ヤマト、ガブモンVS健良、テリアモン〉

「太一の奴、やってるな・・・」

ヤマトは戦闘中の太一を横目で確認し、健良へと視線を戻す。

「いくぞ、ガブモン！」

「いつでも！」

ヤマトのデジヴァイスが、青白く輝き出した。

「ガブモン、ワープ進化ぁっ！！」

ガブモンが光に包まれ、全身を装甲でつくられた狼が現れる。

健良はデジヴァイスを向けた。

「『メタルガルルモン。究極体。サイボーグ型。必殺技は＜コキュートスブレス＞。メタル化しても持ち前の俊敏さは失っておらず、全身に隠されているミサイル兵器で敵を粉砕する』・・・か。俊敏なのはちょっと不利かな・・？」

健良はそう言って苦笑するも、デジヴァイスをテリアモンにかざす。

「いくよ、テリアモン！」

「モ～マンタ～イ！」

テリアモンはその場でクルクルと回転し、準備万端を示した。

「マトリックス・・・エボリューションッッ！！」

『Ｍａｔｒｉｘ　Ｅｖｏｌｕｓｉｏｎ』

健良とテリアモンが光に包まれる。

「テリアモン、進化ぁっ！！」

人型で、巨大なデジモンが現れた。

「人間とデジモンが融合した・・？」

ヤマトは目の前の進化に疑問を抱く。

光子郎がそのデジモンにパソコンを向けた。

「『セントガルゴモン。究極体。マシーン型。必殺技は＜ジャイアントミサイル＞。メタルガルルモン並みに兵器を搭載している。スピードは低いが、攻撃力に特化している』・・・ミサイル戦になりそうですね」

光子郎は思わず苦笑して、２体から距離を取った。

メタルガルルモンが体中のミサイルを、一斉発射する。

「＜バーストショット＞！」

対してセントガルゴモンも、ミサイルを大量に発射した。

――スドドドドドドドォォォンンッッ！！

ミサイル同士が激突し、腹の底に響く鈍い爆音が木霊する。

「く・・！」

ヤマトは爆風に吹き飛ばされぬよう、足を踏ん張った。

――ザザザァッ！

そんなヤマトのそばに、爆風でメタルガルルモンが押されて来る。

至近距離である程度食らったのか、メタルの体に焦げ目がついていた。

「無事か！？」

「当然！」

ヤマトはその返答に安堵し、爆煙の中を見つめる。

――ヒュゥゥ・・！

何か接近してくる風音が聞こえた。

「後ろ！？」

不可視のレーザーを持つメタルガルルモンは、背後からミサイルが飛来してくるのに気づく。

「＜コキュートス・・・ブレス＞！」

口から絶対零度の冷気を吐き、飛来してくるミサイルを凍らせらた。

が、新たにまた飛んで来る。

「一体何処から・・！」

「ここだよ～！」

「ッ！？」

突然頭上から声が聞こえ、メタルガルルモンは空を見上げた。

上空にジェットエンジンで飛翔する、セントガルゴモンの姿が見える。

「眩しい・・！」

丁度太陽の位置で、眼を開けていられない。

「＜ジャイアント・・・ミサイル＞ッ！！」

セントガルゴモンの両肩にある、特大のミサイルが発射された。

「く・・！＜コキュートスブレス＞ッ！」

眩しすぎてよく見えないが、やってくるであろうミサイルに冷気を放つ。

「狙わなきゃダメだよ～」

セントガルゴモンの声が聞こえたかと思うと、ミサイルの気配が移動した。

ミサイル2発は、メタルガルルモンの背後にグルリと回り込み、直撃する。

――ズドォォォォォォンンッ！！

「ぐぁぁぁっ！」

「メタルガルルモン！？」

ヤマトは爆煙内にいる相棒を呼ぶが、返答は無い。

直後、爆煙を突き破りミサイルが大量に宙を走って行く。

「え！？」

セントガルゴモンは思わぬ反撃に驚愕し、判断が遅れた。

――ズドドドドドドォォォォンンッッ！！

「うわぁぁぁぁっ！」

『く・・！』

セントガルゴモンの中にいる健良は、そのダメージを噛み締める。

「どうだ！一泡吹かせてやったぞ！」

メタルガルルモンはダメージを負ったものの、負けじとそう言い返した。

「じゃぁ最後に、最大勢力で！＜バースト・・・ショット＞ッッ！！」

セントガルゴモンは態勢を立て直し、遠慮無しでミサイルを一斉射撃する。

「だったらこっちもだっ！！」

メタルガルルモンもミサイルを全て発射した。

――ズドドドドドドドドォォォォンンンッッ！！！

ミサイルが広範囲で相殺していく。

「く・・！」

「うわっ！」

「ぐぅ・・！」

とてつもない爆風にメタルガルルモン、セントガルゴモンは吹き飛ばされ、遠くにいたヤマトも必死に耐える。

「如何なった!?」

そして顔を上げ、爆煙内を見つめた。

「メタルガルルモン!」

名を叫ぶと、爆煙内に3つの影が見える。

「あいたた・・・」

「ほわぁ~・・・」

「っつ~・・・」

ガブモン、テリアモン、健良だ。

そのうち、テリアモンは完全に眼が回っている。

「だ、大丈夫か!?」

急いで3人に駆け寄るヤマト。

「な、何とか・・・」

「引き分けだ~」

ヤマトにそう返す健良と、引き分けという結果に不満げなガブモン。

テリアモンに至っては、返事さえ出来ない。

「テリアモン、起きろ～」

「う～・・・」

健良が、テリアモンの頬を引っ張ったり叩いたりするが、反応はいつも、

「う～・・・」

であった。

「ま、まぁ無事で良かった。若干無事じゃない奴もいるが・・・」

ヤマトは苦笑する健良を見て、そう言った・・・。

13話：撃ち落とせ（後書き）

テリアモン「ふかぁ～つっ！」

健良「あ、起きた」

ガブモン「大丈夫～？」

テリアモン「モ～マンタ～イ！」

ヤマト「は？」

健良「あ、中国語で‘無問題’って意味です」

ヤマト「あぁ、なるほど」

テリアモン「モ～マンタ～イ！」

ガブモン「モ～マンタ～イ！」

ヤマト「何真似してるんだよ？」

ガブモン「面白いよ？」

ヤマト「あぁ、そうかい」

テリアモン・ガブモン「「モ～マンタ～イ！」」

１４話：冷やして燃やせ（前書き）

えっと・・・友樹ＶＳ留姫、レナモン編ですね。

では１４話、参ります！

１４話：冷やして燃やせ

〈友樹ＶＳ留姫、レナモン〉

「さぁ、いくわよレナモン」

「私はいつでも構わない」

留姫の声に、レナモンは頷いた。

留姫はデジヴァイスを握り、レナモンにかざす。

『Ｍａｔｒｉｘ　Ｅｖｏｌｕｓｉｏｎ』

「レナモン、進化っ！」

留姫とレナモンが光に包まれ、黄金の装甲と杖を持つ人型デジモンが現れた。

友樹はデジヴァイスを向け、浮かび上がったデータを見る。

（『サクヤモン。究極体。神人型。必殺技は＜飯綱（いづな）＞。神の意志を代行する巫女の役割を持ったデジモン。陰陽道の技を駆使して闘い、神獣系のデジモンを使役する能力を持つ』・・・陰陽道の技って何だろ？）

いまいち分からない友樹は首を傾げるが、手に水色のデジコードを宿した。

「エンシェントスピリット・・・エボリューションッッ！！」

デジコードは渦を巻いて巨大化する。

「エンシェントメガテリウモン！」

近くにいた遼がデジヴァイスを向け、データを読み取った。

「『エンシェントメガテリウモン。究極体。古代獣型。必殺技は＜グレートファイラング＞。超冷闘士の異名を持ち、天候を操り吹雪を呼ぶとされる。敵はその寒さで体力を削られ、弱っていく』・・・だそうだ。頑張れよ～」

適当にサクヤモンに声を送る遼。

『あんたは黙っててて！』

中にいた留姫がそう返す。

「へいへい」

遼は腕を振り、相手の純平に向き直っていた。

「ヴォォォォォォオオオオッッ！！」

エンシェントメガテリウモンが天に向けて吼える。

突然、暗雲が立ち込め風が吹き荒れた。

吹雪が呼ばれ、ビュウビュウと風音が響く。

「寒っ！」

「嵐の次は吹雪！？」

皆もその天候の変わりように驚愕した。

そもそも十闘士は天候を操作するデジモンが多い。

炎の闘士は太陽を呼び、風の闘士は嵐を、氷の闘士は吹雪を、雷の闘士は稲妻を、水の闘士は雨を、光の闘士は昼の明るさを、闇の闘士は夜の暗さをそれぞれ味方につけ、闘う。

「＜飯綱＞！」

サクヤモンのそばから４匹の霊狐が出現し、エンシェントメガテリウモンに襲いかかった。

この４匹は、それぞれ火、水、風、雷の属性を持っている。

水、風、雷は大して効かなかったが、火は流石に効果があった。

「ぐ・・！」

エンシェントメガテリウモンはそれに耐え、前足を振り上げ地面に叩きつける。

「＜グレートファイラング＞！」

――ズズズズ・・！

突如、大地が揺れ出した。

「何・・！？」

サクヤモンは警戒し、杖――金剛錫杖（こんごうしゃくじょう）を構える。

――ドゴォンッ！

サクヤモンがいた足元の地面から、氷の柱が突き出した。

「きゃぁっ！？」

突然の事に、何が起きたのか理解出来ないサクヤモン。

そこへエンシェントメガテリウモンが突進する。

「＜グレートスノーブロー＞！」

「く・・！」

――ガキィンッ！

サクヤモンは金剛錫杖でそれを受け止めた。

錫杖と角が激突する。

「＜フリージングブリザード＞ッ！」

エンシェントメガテリウモンは、至近距離から冷気を放った。

「く・・！」

サクヤモンの杖が凍り、体も凍(い)てついていく。

「＜飯綱＞ッ！」

それでも霊狐を放った。

火で氷を溶かし、攻撃させる。

「ぐぁっ！」

その熱さで、エンシェントメガテリウモンは後方へ怯んだ。

「ッ！？」

サクヤモンは自分の体の違和感に気づく。

この寒さで、体の感覚が鈍っていた。

『早く終わらせないと拙いわよ！』

「同感！」

留姫の声にサクヤモンは頷き、震える手で杖を構える。

エンシェントメガテリウモンはこの吹雪の中、平然をしていた。

それどころか、吹雪を自らの体に纏い、力を蓄えている。

「＜フリージング・・・ブリザード＞ッ！」

そして冷気に変換し、サクヤモンに放った。

「つ・・！」

寒さを無理矢理抑え込み、サクヤモンは飛行能力で飛び立つ。

「＜飯綱＞ッ！」

再び霊狐を放って攻撃。

が、エンシェントメガテリウモンは体に纏う吹雪で、全て吹き飛ばす。

「＜グレートファイラング＞ッ！」

エンシェントメガテリウモンは、前足を地面に叩きつけた。

――ドゴォッ！

氷柱が突き出し、地上へ伸びる。

サクヤモン付近まで伸びきると、砕け散った。

「ッ！？」

飛び散る氷の破片で、思わず顔を覆うサクヤモン。

「＜飯綱＞ッ！」

「＜フリージングブリザード＞ッ！」

霊狐と吹雪が押し合い、周りに衝撃波が飛び交う。

――ドゴォッ！

突如氷柱が突き出し、サクヤモンを攻撃した。

「きゃぁっ！」

サクヤモンは地面に落ちる。

「く・・・」

錫杖を支えに、サクヤモンは立ち上がった。

霊狐を放てば吹雪で消され、離れれば氷柱で突かれる。

近づけば冷気で凍らされる。

『だったら・・！サクヤモン！』

「えぇ！＜飯綱＞ッ！」

サクヤモンは霊狐全てを火へ変換し、向かわせる。

「ぐぁっ！」

火の霊狐４匹では吹雪で消し飛ばせず、エンシェントメガテリウモンはダメージを負った。

「＜飯綱＞ッ！」

「＜グレートファイラング＞ッ！」

サクヤモンは霊狐を放ち、エンシェントメガテリウモンは氷柱を突き出す。

「きゃぁっ！」

「がぁっ！」

両者共に攻撃を食らい、進化が解けた。

「熱～・・・」

「冷た～・・・」

友樹は冷気を纏って熱気を冷やし、留姫は肌をさすって温める。

「立てる？」

「大丈夫よ」

レナモンの言葉に、留姫は立ち上がった。

友樹が留姫に歩み寄る。

「効きました、あの狐」

「そ、ありがと・・・」

軽く言葉をかわし、お互いに笑みを浮かべた・・・。

１４話：冷やして燃やせ（後書き）

留姫「あんた寒くない訳？っていうか早く吹雪止めなさいよ！」

友樹「あ、そうだった。忘れてました・・・」

レナモン「早くしてくれ」

竜気「さ、寒っ！何でこんなに寒いの！？」

１５話：一撃早く（前書き）

えっと・・・あ、純平ＶＳ遼、モノドラモンでしたね。

１５話、参ります！

15話：一撃早く

〈純平ＶＳ遼、モノドラモン〉

「っていうか・・・何でお前成長期？」

遼が、デジタルワールドにいる間は完全体のはずのモノドラモンに問いかける。

「知らねぇ。分からねぇ」

「・・・あっそ」

遼は如何でもいいか、と純平に向き直った。

純平は純平で、戦闘が終わった友樹に声をかけている。

「友樹、悪いけど・・・もう少し吹雪よろしく」

「はい？・・・あ、なるほど。ＯＫ！」

友樹は純平の言葉の意図を悟り、コクンと頷いた。

「モノドラモン、ちと寒いけど良いな？」

「勿論だぜ！」

遼はその返答を聞き、デジヴァイスをかざす。

『Ｍａｔｒｉｘ　Ｅｖｏｌｕｓｉｏｎ』

「モノドラモン、進化っ！」

遼とモノドラモンが光に包まれ、人型のデジモンが現れた。

純平がデジヴァイスを向ける。

（『ジャスティモン。究極体。サイボーグ型。必殺技は＜ジャスティスキック＞。正義感が強く、不正な行為や悪戯を嫌う。必殺技の破壊力は４５トンにも達するという』・・・）

「４５トン！？んな阿呆な・・・」

純平は思わず額に手を当てた。

そして右手に黄色のデジコードを宿す。

「エンシェントスピリット・・・エボリューションッッ！！」

黄金のデジコードが渦を巻き、巨大化した。

「エンシェントビートモン！」

留姫がデジヴァイスを向ける。

「『エンシェントビートモン。究極体。古代昆虫型。必殺技は＜テラブラスター＞。超甲闘士の異名を持ち、クロンデジソイドに匹敵する程の外殻である。天候を操り轟雷を落とすと言われる』・・・ちょっと、轟雷ってまさか・・！」

留姫は嫌な予感を覚え、耳を押さえた。

「ガァァァァァァァァァァァッッッ！！」

――ピカッ！

エンシェントビートモンが吼えると、暗雲が光り輝き一条の稲妻が落ちる。

「雷！？」

「もう嵐の領域越えてるぞ！」

皆が強風、吹雪、稲妻を確認して、思わず叫んだ。

「俺は知らね・・・」

拓也は半ば呆れてそう呟く。

「＜カラミティ・・・サンダー＞ッ！」

エンシェントビートモンは、黒雲より災厄の稲妻を撃ち落とした。

「く・・！」

ジャスティモンはそれらをかわす。

――ドゴォォォォォォォンンッッ！！

直後、別の戦闘場所で爆発が起こった。

「ん？」

そちらを見ると、空と京、ヒカリが戦闘中である。

「余所見は良くないぞ」

エンシェントビートモンの声で、再び向き直るジャスティモンだが、すでに力が溜まっている状態だった。

「＜テラブラスター＞ッッ！！」

極大の黄金砲撃が発射される。

「な・・！」

ジャスティモンはそれに飲み込まれた。

「ぐぁぁぁっ！！」

砲撃に乗せられ、近くの岩に叩きつけられる。

「がっ・・！」

『ぐぁ！』

遼も思わず息が苦しくなった。

エンシェントビートモンは、再び雷を集束し始める。

ジャスティモンは立ち上がり、エンシェントビートモンへと駆けた。

「＜テラブラスター＞ッッ！！」

一気に砲撃が発射される。

ジャスティモンはそれを避け、更に接近した。

あれ程の特大砲撃を放った直後は、如何しても無防備になってしまう。

そこにつけ込めば良い。

「＜ジャスティスキック＞ッ！」

足に炎を纏い、蹴りを繰り出す。

「ぐぁっ！」

流石の超装甲を持つエンシェントビートモンでも、４５トン（？）の力には耐えられずにダメージを負った。

「く・・！＜カラミティサンダー＞ッ！」

エンシェントビートモンは自分を巻き込んで、ジャスティモンに稲妻を落とす。

「がっ！？」

ジャスティモンは、エンシェントビートモンが己を巻き沿いにした

のが信じられず、対処が遅れた。
稲妻によって吹き飛ばされる。
エンシェントビートモンは雷の闘士だ。
どれだけ稲妻を食らっても、ダメージを負う事は無い。

「ぐ・・」
（化物か・・！）

ジャスティモンは驚きながらも、立ち上がる。

「＜トリニティーアーム＞！」

ジャスティモンの右腕がメタル化し、アクセルアームに変化した。

「はぁぁっ！」

ジャスティモンはその腕を振り上げ、エンシェントビートモンに叩きつける。

「ぐ！？」

エンシェントビートモンも、その力に驚愕した。

「＜カラミティサンダー＞ッ！」

再び落雷を落とすが、ジャスティモンは素早く回避する。

「同じ手が、何度も効くか！」

そう言って跳び上がった。

「＜ジャスティスキック＞ッ！」

再度蹴りを繰り出す。

「ぐぁぁぁっ！」

ダメージが重なってきたエンシェントビートモンは、悲痛の叫びを上げた。

「これで・・！」

ジャスティモンは、エンシェントビートモンの正面に接近する。

「終わりだ！」

腕を叩きつけた。

「ぐ・・！＜テラブラスター＞ッッ！！」

エンシェントビートモンは、負けずに至近距離から砲撃を発射する。

「何！？」

ジャスティモンは成すがまま、飲み込まれた。

「ぐぁぁぁっ！？」

そのまま吹き飛ばされ、進化が解ける。

「っつ～・・・」

「てて・・！」

遼はモノドラモンを支えながら、立ち上がった。

エンシェントビートモンは進化を解き、純平に戻る。

「あ、危なかった。あと一撃でこっちも倒れてたな・・・」

純平は思わず冷や汗を拭った・・・。

15話：一撃早く（後書き）

遼「で、誰がこの嵐・・・っていうか台風止めるんだよ？」

純平「・・・」↑ジー

モノドラモン「・・・」↑ジー

拓也「何故俺を見る！？」

純平「お前が太陽呼べば良いんじゃないか？」

モノドラモン「炎の闘士って聞いたぞ！」

拓也「し、知らん！何も知らん！」

１６話：遠慮無しで（前書き）

今回は・・・そうそう、空、ピヨモンＶＳ京、ホークモン、ヒカリ、テイルモンでしたね。

では１６話、参ります！

16話：遠慮無しで

〈空、ピヨモンVS京、ホークモン、ヒカリ、テイルモン〉

純平VS遼、モノドラモン戦が始まった頃・・・。

「いくわよ、ピヨモン！」

「うん！」

空の紋章とデジヴァイスが、同時に輝き出す。

「ピヨモン、超進化っ！」

ピヨモンが光に包まれ、巨大化した。

「ガルダモン！」

ガルダモン

完全体。鳥人型。必殺技は＜シャドーウィング＞

大空を自在に舞う事の出来る紅き翼と、巨大な鉤爪を持ったデジモン。

京と光もデジヴァイスを構えた。

「空先輩、いきますよ！」

京の言葉と共に、ホークモンが光に包まれる。

「ホークモン、進化ぁっ！・・・アクィラモン！」

赤い巨鳥が出現した。

アクィラモン

成熟期。巨鳥型。必殺技は＜ブラストレーザー＞

「それじゃ、ジョグレスやるわよ～！」

京は少々テンション高めだが、

「はい！」

それはヒカリも同じくだった。

2人のデジヴァイスから放たれた光が、空中で交差する。

「アクィラモン！」

「テイルモン！」

「「ジョグレス進化っ！！」」

2体が輝き出し、合わさった。

「シルフィーモン！」

融合進化である。

シルフィーモン

完全体。獣人型。必殺技は＜トップ・ガン＞

頭部にヘッドマウントディスプレイを装備し、敵の位置を正確に補足する。

「頑張ってシルフィーモン！」

「先輩だからって遠慮してたらやられちゃうよ！」

京とヒカリはやる気満々で応援した。

「あ、あの2人って・・・いつからあんな性格になったのかしら・・・」

思わず空は苦笑する。

「ガルダモン、ＧＯよ！」

「うん！」

空の声で、ガルダモンは翼を広げて飛び立つ。

「＜シャドー・・・ウィング＞ッ！」

ガルダモンの体から黒い影が浮かび上がり、シルフィーモンに襲いかかる。

シルフィーモンは両手に赤いオーラを纏わせ、腕を回しながら１つにした。

「＜トップ・・・ガン＞ッ！」

凝縮した赤いエネルギー弾を発射する。

――ドゴォォォォォォォンンッッ！！

両者の技が激突し、爆発した。

シルフィーモンは全身にオーラを纏い、腕をグライダーのように広げ滑空する。

「＜デュアル・・・ソニック＞ッ！」

両腕を閉じ、開くと同時に赤い鳥がガルダモンに放たれた。

「く・・！」

ガルダモンは更に上昇して、それを回避する。

「＜シャドーウィング＞！」

急降下しながら黒い影を放つガルダモン。

「＜トップ・ガン＞ッ！」

シルフィーモンはエネルギー弾を放って応戦するが、何より重力という味方がガルダモンについている為、黒い影はシルフィーモンに着弾した。

「ぐぁぁぁっ！！」

「「シルフィーモン！？」」

京とヒカリは思わず声を荒げる。

「だ、大丈夫」

シルフィーモンは、そう言って態勢を立て直した。

（戦闘経験はそんなに変わらないけど・・・やっぱ年の差かしら・・・）

空はそんな事を考え、ため息を吐く。

年寄りのような事を考えている自分に、思わず呆れてしまったのだ。

「遠慮はしなくて良いのよ！」

空が２人にそう言うと、

「分かってま～す！」

「わ、分かってるんだ・・・」

空は思わぬ返答に、苦笑する。

「だそうよガルダモン！」

空は遠慮無しで来いと言ったので、こちらも遠慮無しで行くのは当然だ。

（後で大人げない、とか言われそうね・・・）

その事も考えると、どうもやる気になれない空である。

ガルダモンはそこまで考えず、追撃を仕掛けた。

「＜シャドー・・・ウィング＞ッ！」

「く・・・＜デュアル・・・ソニック＞ッ！」

黒い影と赤い影が激突する。

――ドォォォォォンンッッ！！

両者共に吹き飛ばされぬよう、力を込めた。

が、吹雪や強風の影響もあってか、ズルズルと後方へ押される。

「ガルダモン、大丈夫!?」

「大丈夫!まだまだいける!」

空はガルダモンの返答を聞き、安心して頷いた。

「シルフィーモンは!?」

「大丈夫です!」

シルフィーモンの中の、アクィラモンの意志が応える。

「それじゃ、GOGO!」

京はいつものテンションで、そう言った。

ガルダモンとシルフィーモンは、同時に動き出す。

ガルダモンは大空へ飛翔し、黒い影を纏った。

シルフィーモンは腕を回し、赤いオーラを1つにする。

「<シャドー・・・ウィング>ッッ!!」

「<トップ・・・ガン>ッッ!!」

双方、最大力で技を解き放った。

――ズドォォォォォォォォンンンッッ！！！

「うわぁぁっ！」

「ぐぁぁぁっ！」

爆風で吹き飛ばされ、地面や岩に叩きつけられる。

「がっ！」

「か・・はっ！」

共に肺が潰れるような感覚を抱いた。

そして進化が解ける。

「ピヨモン！」

「ホークモン！」

「テイルモン！」

3人は、それぞれパートナーデジモンに駆け寄った。

「大丈夫？」

「私は大丈夫だよ、空」

「そう、良かった」

空はピヨモンが無事である事を確認し、安堵の息を吐く。

そして京達のもとへ駆け寄った。

「そっちは如何!?」

「あ、大丈夫みたいです!」

「ピヨモンが、ちゃんとコントロールしてくれたみたいで」

空の心配を、京とヒカリがそう返す。

「そうなの?」

ふとピヨモンを見る空。

「してないよ。空が遠慮無しで良いって言ったから・・・」

「そう・・・よね」

ピヨモンがそう言うので、空も頷いた。

「ほんとに?じゃぁテイルモン達が無事だったのは・・・」

ヒカリが首を傾げて考える。

「あ!もしかしてこの吹雪で、威力が落ちたとか」

京がふと思い、そう言ってみた。

「それも一理あるわね。まぁ、無事で良かったわ」

空も笑顔になる。

「そうそう♪」

ピヨモンもコクンコクンと頷いた・・・。

１６話：遠慮無しで（後書き）

空「無事で何よりね♪」

京「遠慮無しで闘ったにしては、良い結果ですね」

ヒカリ「お互い倒すつもりは無かったし・・・結果オーライで」

竜気「・・・・・・結果オーライ・・・。でもこの嵐は・・・」

竜気以外「「「「「・・・」」」」」

１７話：撃ち抜け（前書き）

こ、これで今日６話目・・・。

初めてです・・・。

えっと、光子郎、テントモンＶＳ伊織、アルマジモン、岳、パタモン編ですね。

では１７話、参ります！

17話：撃ち抜け

〈光子郎、テントモンＶＳ伊織、アルマジモン、岳、パタモン〉

「寒いだぎゃ～！」

この吹雪の為、アルマジモンが震えている。

「仕方ありません。この模擬戦が終わったら、元に戻してもらいましょう」

伊織は表面上はそう言うが、内心本当に戻せるのかと不安だった。

「戻せるのかな～？」

パタモンも同じ考えのようである。

「出来そうな気がするけど・・・」

岳は戦闘していた拓也を横目で見た後、光子郎へと視線を戻した。

「・・・何で俺を見るんだよ」

拓也は意味不明とばかりに呟く。

「よぉし、いくよ。パタモン！」

「うん！」

「アルマジモンもお願いします！」

「分かっただぎゃ！」

岳と伊織のデジヴァイスが輝き出した。

「パタモン、進化ぁっ！・・・エンジェモン！」

「アルマジモン、進化っ！・・・アンキロモン！」

天使のようなデジモンと、アンキロザウルスのようなデジモンが現れる。

エンジェモン

成熟期。天使型。必殺技は＜ヘブンズナックル＞

アンキロモン

成熟期。鎧竜型。必殺技は＜テイル ハンマー＞

「エンジェモン！」

「アンキロモン！」

「「ジョグレス進化！」」

2体は光の中に包まれ、交差した。

「シャッコウモン！」

白い土偶のような、巨体のデジモンが現れる。

拓也はシャッコウモンにデジヴァイスを向けた。

（『シャッコウモン。完全体。突然変異型。必殺技は＜アラミタマ＞。銀色に輝くボディに白い翼を持っており、一説には古代デジタルワールドに降臨した天使型デジモンではないかと言われている。首や胴が３６０度回転し、全方位に対して攻撃が可能』・・・３６０度回転？厄介だな～）

拓也は心の中で読み上げ、そう呟く。

「テントモン、進化です」

「はいでんがな！」

光子郎のデジヴァイスと紋章が輝き、テントモンが進化した。

巨大なカブトムシのようなデジモンが現れる。

「アトラーカブテリモン！」

拓也は再びそちらのデジモンにも、デジヴァイスを向け、データを

読み取った。

（『アトラーカブテリモン。完全体。昆虫型。必殺技は＜ホーンバスター＞。性質的に、生存本能以外に弱い者を守るという行動が認められ、その行動は騎士的にさえ見える事がある。主力武器である角の強度が飛躍的に高められている』・・・なんかエンシェントビートモンに似てるな）

思わずそんな感想を抱く拓也。

「お願いしますよ、シャッコウモン！」

「アトラーカブテリモン、無茶はいけませんよ！」

伊織と光子郎がパートナーへ、声をかける。

「分かっとるだぎゃ！」

シャッコウモンの中の、アンキロモンの意志がそう答えた。

「はいでんがなっ！」

アトラーカブテリモンも頷き、翼を広げて飛び立つ。

「＜ホーンバスター＞！」

頭の角から、光線を放った。

「＜ニギミタマ＞！」

シャッコウモンの腰部から円盤状の物が発射され、光線と相殺する。

「＜アラミタマ＞！」

シャッコウモンは両目から赤い、破壊光線を照射した。

焦点温度は１０万度に達する。

アトラーカブテリモンは、巨体ながらもそれをかわした。

「良いですよ、その調子です！」

光子郎はそう言って、アトラーカブテリモンに声をおくる。

「＜ホーンバスター＞ッ！」

アトラーカブテリモンは先程よりも威力を上げ、光線を発射した。

動きの鈍いシャッコウモンに直撃する。

「大丈夫！？」

岳が声をかけると、少々焦げ目がついているものの、無事なシャッコウモンが爆煙内から現れた。

その事に安堵する岳と伊織。

「反撃です！」

「＜アラミタマ＞ッ！」

伊織の声と共に、シャッコウモンが光線を放つ。
避けるアトラーカブテリモンだが、シャッコウモンは再度照射した。
「んな！？」
2度目の光線は避けきれず、アトラーカブテリモンに直撃する。
「アトラーカブテリモン！？」
光子郎は眼を見開いた。
爆煙の中から、シャッコウモン目がけて光線が放たれる。
「ッ！？」
それはシャッコウモンに直撃した。
爆煙内から、多少ダメージを負ったアトラーカブテリモンが現れる。
「シャッコウモン！」
「大丈夫ですか！？」
岳と伊織は声を張り上げた。
シャッコウモンは白いボディに傷をつけていたが、大きなダメージでは無いようである。

「無事・・・ですね。良かった」

伊織は一安心して、向き直った。

「アトラーカブテリモン、無茶してはいけませんよ！」

「分かってまっせ！」

（本当に分かっているんでしょうか・・？）

いまいち不安げな光子郎。

先程も冷やりとしたものだ。

「行きまっせ！＜ホーンバスター＞ッ！」

「＜アラミタマ＞ッ！」

宙で光線同士がぶつかり、爆発が起こる。

今日何度目かの爆煙が広がり、視界を遮った。

アトラーカブテリモンは爆煙内を突き抜け、一気に接近。

シャッコウモンの正面に現れる。

「ッ！？」

「＜ホーンバスター＞ッ！」

そして角で一突きした。

シャッコウモンはダメージが限界を超え、進化が解ける。

それを見て、アトラーカブテリモンも進化を解いた。

「光子郎はん、勝利でっせ～！」

「怪我はありませんね。良かった」

光子郎はテントモンの体を確認し、安堵する。

「そちらは如何ですか？」

そして伊織達に歩み寄った。

「大丈夫っぽいです」

岳がパタモンを抱き上げて、そう答える。

「それは良かった。怪我しては元も子もありませんからね」

光子郎は、パタモンとアルマジモンが無事という事を知り、安堵の笑みを浮かべた・・・。

17話：撃ち抜け（後書き）

光子郎「にしてもテントモン、最後のあれは少々危険でしたよ？」

テントモン「そうでっか？」

光子郎「はい。もし反撃されていたら危険です」

テントモン「そないな事言うても、何事も挑戦あるのみでっせ！」

光子郎「ま、まぁ・・・そうですが」

伊織「良いじゃないですか。無事だったんですし」

岳「いつまでも根に持ってないで、前向きに行きましょうよ」

光子郎「・・・それもそうですね。お2人の言うとおり、前向きに行きましょうか」

テントモン「そうでっせ。それがええんですわ」

パタモン「寒い～！」

岳「はは、今はまだ我慢我慢」

１８話：挑め、ねばれ（前書き）

えっと、これで最終戦ですね。

大輔、ブイモン、賢、ワームモンＶＳミミ、パルモン、丈、ゴマモン編です。

では１８話、参ります！

18話：挑め、ねばれ

〈大輔、ブイモン、賢、ワームモンＶＳミミ、パルモン、丈、ゴマモン〉

青い巨竜と、妖精のようなデジモン、ハンマーを持ったデジモンが相対していた。

泉がデジヴァイスを向け、データを読み取る。

（『インペリアルドラモン。究極体。古代竜型。必殺技は＜メガデス＞。古代デジタルワールドに君臨した皇帝竜。強大な力を持つが、力のコントロールは難しく、救世主にも破壊神にもなってしまうと言われる』・・・破壊神、ねぇ・・・）

泉はインペリアルドラモンを見上げ、破壊神ではない事を確認した。

そして今度は妖精のデジモンへ向ける。

（『リリモン。完全体。妖精型。必殺技は＜フラウカノン＞。美しく咲いた花弁から生まれた妖精型デジモン。背中に生えた４枚の葉状の羽で、空を自由自在に飛行する』・・・ふ～ん、可愛いわね）

泉は思わずそんな感想を抱いた。

最後に、ハンマーを持ったデジモンへ向ける。

（『スドモン。完全体。海獣型。必殺技は＜ハンマースパーク＞。徹底的に鍛え上げられた筋肉を、対戦相手から奪った皮や甲羅、自

ら作った防具で守っている。手に持つトールハンマーは、太古の氷から掘り起こしたクロンデジソイド製である』・・・奪った皮や甲羅って・・・！）

泉は青白い顔をした。

「ミミ君、究極体に勝てる自信はあるかい？」

丈が隣にいたミミに尋ねてみると、

「あまり無いです・・・」

苦笑いを浮かべてそう返された。

「だろうねぇ・・・」

丈もコクリと頷く。

「でもやるぞ！」

ズドモンはそう言って、トールハンマーを構えた。

「僕だって引き下がる気は、無いんだよなぁ」

丈は眼鏡を掛け直す。

「同じくで～す！」

ミミもそう言って、笑みを浮かべた。

「リリモン、Ｒｅａｄｙ・・・Ｇｏ！」

「えぇ！」

ミミの言葉を合図に、リリモンが翼を広げて飛行する。

両手を合わせ、手の花を銃口へ変化させた。

銃口にエネルギーを集中させ、

「＜フラウ・・・カノン＞！」

一気に発射させる。

それはインペリアルドラモンに直撃した。

が、効果はあまり見えない。

「ズドモン！」

「おう！」

丈の声に頷き、ズドモンはトールハンマーを振り上げる。

「＜ハンマースパーク＞！」

――ズゥンッ！

それを地面に振り下ろし、大地に稲妻が走りインペリアルドラモンに向かった。

――ビチビチ！バチィッ！

インペリアルドラモンの体に電撃が走ったが、大してダメージは無い。

「インペリアルドラモン、こっちからもいくぞ！」

大輔の言葉に、インペリアルドラモンが動き出す。

背中の砲口に、エネルギーを集束していった。

「＜ポジトロンレーザー＞！」

特大砲撃が放たれる。

集束時間があった為、リリモンとズドモンは容易に避けた。

「＜ハンマー・・・スパーク＞ッ！」

ズドモンは再び地面をハンマーで殴りつけ、稲妻をインペリアルドラモンへ走らせる。

――バチバチィッ！

インペリアルドラモンの体に電撃が走った。

「大丈夫？」

賢が不安になり声をかけるが、インペリアルドラモンは問題無いと

頷く。

「＜フラウカノン＞ッ！」

リリモンがエネルギー弾を発射した。

それは命中率良く、インペリアルドラモンの顔面に直撃する。

「ぐぁっ！」

流石に顔は効くようで、インペリアルドラモンは後方へ怯んだ。

「ズドモン、＜ハンマースパーク＞を連続で頼む！」

「じょ、丈？」

スドモンは丈の意図が分からなかったが、それでも信じ、ハンマーを振り上げる。

「＜ハンマースパーク＞ッ！」

3度目の稲妻が、インペリアルドラモンを走った。

効果は無いが、ズドモンは再度攻撃する。

「＜ハンマースパーク＞ッ！」

稲妻が走り、変化は無い。

「インペリアルドラモン、反撃だ！」

大輔が声を上げるが、インペリアルドラモンは動かない。

「如何した!?」

「すまない・・・。体が・・・痺れて」

――ビチビチ・・!

インペリアルドラモンの体を、細かい電撃が走っている。

「よし、成功だ!ミミ君、一斉攻撃いくぞ!」

「はい!」

丈の言葉に、ミミは頷いた。

「ズドモン!」

「リリモン!」

「「一斉攻撃だ(よ)!」」

2人の声を合図に、リリモンはエネルギーを集中させ、ズドモンはインペリアルドラモンに接近。

「<フラウ・・・カノン>ッッ!!」

まずエネルギー弾が発射され、インペリアルドラモンの顔に直撃。

「が・・！」

インペリアルドラモンは成すがまま、ダメージを負う。

「＜ハンマー・・・スパーク＞ッッ！！」

ズドモンはインペリアルドラモンの顔目がけて、ハンマーを振り下ろした。

ハンマーから衝撃波と火花が散り、インペリアルドラモンを襲う。

「ぐぁぁぁっ！」

インペリアルドラモンは態勢を崩し、倒れ落ちる。

「やった！」

「すご～い！」

丈は喜びの声を上げ、ミミは手を合わせた。

「インペリアルドラモンが！？」

大輔は、インペリアルドラモンが完全体に崩れ落ちた事に驚愕する。

「インペリアルドラモン、立てるかい！？」

賢が声をかけ、心配した。

「あ、あぁ」

インペリアルドラモンは痺れる体を無理矢理言い聞かせ、態勢を立て直す。

そして口にエネルギー集束を開始した。

ズドモンとリリモンは距離を取り、対応出来るようにする。

「＜メガデス＞ッッ！！」

極大の砲撃が放たれた。

「「ッ！？」」

それは予想の範囲を超え、２人を軽々と飲み込む。

「ズドモン！？」

「リリモン！？」

丈とミミは思わず声を張り上げた。

この砲撃の際、遠くの山の頂上が削れたのは、些細な事にしておこう・・・。

「ゴマモン、無事か？」

丈は相棒に声をかける。

「パルモン、大丈夫？」

ミミも駆け寄って確認した。

「大丈夫ですか～！」

賢が大輔やパートナーデジモンと共に、歩み寄る。

「大丈夫みたい」

ミミがそう返した。

「そうですか。良かった」

「さ、寒いな・・・」

安堵する賢の隣で、大輔が震えている。

複数の視線が、拓也に集中した。

「だから何で俺を見るんだよ！？」

「太陽呼べ」

「何で俺が！？」

輝二の言葉に、意味不明といった顔をして拓也が言い返す。

「お前、炎の闘士だろ」

「また進化しないといけねぇだろっ！」

「細かいこと言うな」

「細かくねぇ！」

拓也は言い返しながらも、デジヴァイスを握った。

輝二は、流石に近くで叫えられては困る為、皆と共に距離を取る。

「エンシェントスピリット・・・エボリューションッッ！！」

拓也が紅いデジコードに包まれ、それが膨れ上がった。

「エンシェントグレイモン！」

灼熱の炎竜が姿を現す。

「ゴォォォォォォォォォォアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッッッ！！！！！」

紅竜が天へ咆哮した。

「つ・・！」

「く～！」

「耳が！」

今まで以上の音量に、全員耳を押さえる。

直後吹雪が止み、風が収まった。

黒雲の隙間から日光が差し込み、雲は大空に溶けていくように消える。

太陽が照りつけた。

エンシェントグレイモンが拓也に戻る。

「何でこれだけの為に、進化しなきゃいけないんだよ・・・」

まだその事を根に持ち、ブツブツ言っていた・・・。

18話：挑め、ねばれ（後書き）

拓也「なんか無駄な力使った気がする・・・」

輝二「まだ言ってるのか。しつこいぞ」

大輔「そうだぜ！サラッと忘れちまえよ！」

賢「忘れすぎは良くないよ」

大輔「う・・・」

拓也「忘れろって言われてもな・・・」

輝二（・・・殴ったら忘れるか？）

拓也「・・・何か殺気が」

輝二「気の所為だろ」↑拳準備

１９話：攻防力補助（前書き）

今回は、テイマーズでも出て来なかったカードが、何枚か出て来ます。

一応実在するカードですよ。

では１９話、参ります！

19話：攻防力補助

「で、何処から倒すよ？」

大が、拓也のデジヴァイスから浮かび上がったデータを見て、悩む。

会議再びだ・・・。

「オリンポスってさ、やっぱ神殿みたいな所にいるのか？」

拓也がふとそんな事を言い出す。

「まぁ・・・そうなんじゃねぇか？」

大も恐らく、と頷いた。

「神殿って言えば・・・」

「「中央神殿・・・」」

拓也の後に、輝二、輝一が呟く。

「中央神殿？」

トーマが聞き返した。

「えぇっと・・・地図」

「はいよ」

拓也は純平から地図を受け取り、広げた。

「今いる大陸は、ここ」

そして中央の、オーストラリア程の大陸を示した。

「で、ここの草原は、これ」

その大陸内の、東側の草原を指で差す。

「その中央神殿が、これだ」

中央大陸の正にど真ん中に、指を突き立てた。

神殿のような印が刻まれている。

「近い・・・のか？」

「まぁ、近い。同じ大陸内だし」

太一の問いに、拓也はそう言って頷いた。

「それじゃぁ、まぁ・・・ここが最初の目的地で、良いな？」

拓也が皆に確認すると、誰も異論は無いようで頷く。

「お～し、出発！」

「まだなのか？」

ヤマトが純平に問いかけた。

只今草原を横断中。

「そうだなぁ・・・後、２時間」

「「「「「「「「「「２時間！？」」」」」」」」」」

それを聞いた者達の中から、複数の声が上がった。

「あ、いや、このまま進めばの話」

純平が敵の襲撃も考えて、そう言い直す。

「げ・・・」

突如、拓也が嫌そうな顔をし、魂広して龍魂剣を手に握った。

「グルルルル・・！」

日頃温和なギルモンが表情を一変させ、瞳孔を開き、野生の本能を表す。

警戒態勢に入った。

「どした？」

大が周りを見回しながら、拓也に尋ねる。

「何か来るぞ」

「どっから？」

「ちょっと待ってくれ」

拓也は眼を閉じて、意識を集中した。

――ヒュ・・・

五感が鋭くなった拓也の聴覚に、風音が入る。

「８時の方向！」

拓也の声と共に、全員がそちらへ振り返った。

大空に影が複数見える。

「ギズモン！」

視力も上がった拓也が、それを捉えた。

すると啓人達がデジヴァイスを取り出し、腰のポーチからカードのような物を出す。

「「「「カードスラッシュ！＜超進化、プラグインＳ＞ッ！」」」」

そのカードをデジヴァイスに通し、スキャンした。

「「「「ギルモン
レナモン
テリアモン
モノドラモン　進化っ！！」」」」

4体がヒカリに包まれる。

「グラウモン！」

「キュウビモン！」

「ガルゴモン！」

「ストライクドラモン！」

赤竜、黄狐、銃士、竜人が現れた。

――――

グラウモン

成熟期。魔竜型。必殺技は＜エキゾーストフレイム＞

――

キュウビモン

成熟期。妖獣型。必殺技は＜狐炎龍＞

ガルゴモン

成熟期。獣人型。必殺技は＜ガトリングアーム＞

ストライクドラモン

成熟期。竜人型。必殺技は＜ストライクファング＞

「モノドラモンの成熟期、初めて見たかも・・・」

啓人がぼそりと呟く。

「同じく」

テイマーである遼までもが頷いた。

「っていうか今のカードは何？」

淑乃が留姫の持っているカードを、覗き込む。

「ただのカードじゃないわよ。いろいろ効果があって・・・説明よろしく」

留姫は面倒な説明を、啓人に任せた。

「えぇ!?し、仕方ないなぁ・・・。えっとですね、たくさんカードがあるんですけど、それらをデジヴァイスにスラッシュして、パートナーデジモンを強化したり、能力を追加したり出来るんです」

「へぇ、便利ねぇ」

淑乃が羨ましそうに頷いた。

「例えば・・・」

啓人は1枚のカードを取り出す。

「カードスラッシュ!＜竜の誇り＞!」

スラッシュした瞬間、グラウモン、ストライクドラモン、ブイモン、（大の）アグモンの攻撃力・防御力共に上昇した。

更に、拓也の体に炎が纏われる。

「は!?」

本人は何もしていないのだが、勝手に炎が噴き上がった事に驚いていた。

「何故大のアグモンだけ・・？」

トーマが疑問を抱く。

ここには2体のアグモンがいるのだが、片方しか効果が表れていな

い。

光子郎がアグモン2体にパソコンを向け、調べてみる。

「如何やら大さんのアグモンは特殊で、従来のアグモンとは少しデータが違うようです」

そう説明した。

「それで成熟期の進化も違うのか」

太一がそれを聞いて納得する。

「あ、あれ？効果範囲が広い・・・」

カードを使った啓人は、何が何だか分からず混乱している。

本当ならグラウモンだけのはずだった。

が、ここにいる竜族のデジモン全てに、効果が現れる。

「俺はデジモン扱いかよ！」

拓也はそう叫び、龍魂剣を構えた。

「半分、デジモンの血が流れてるようなもんだろ」

輝二がそのそばで、リヒト・シュベーアトを構える。

「確かに！」

拓也は、かなり接近して来たギズモン達に走り出した。

「おぉぉぉっ！」

思い切り横に一閃する。

ギズモンは抵抗無く切断した。

「あ、あり？」

拓也はその違和感に気づく。

「すげぇぞ！紙みたいに斬れる！」

啓人にそう言った。

「ほんとに効果が出てるし・・・」

啓人自信も驚きながら苦笑する。

グラウモンが、拓也に続いて攻撃した。

「＜エキゾースト・・・フレイム＞ッ！」

灼熱の炎を吐き、数体焼き尽くす。

「キュウビモン！」

留姫の声を合図に、キュウビモンが駆け出した。

「カードスラッシュ！＜クリティカル＞！」

留姫がカードをデジヴァイスに通すと、キュウビモンの攻撃力が大幅に上がる。

「＜鬼火玉＞ッ！」

キュウビモンは揺らめく複数の尻尾から、火球を作りだし放っていった。

ただの通常技だというのに、絶大な威力を発揮する。

ギズモン1体が焼け落ちた。

「大輔、やろう！」

攻防力共にアップしたブイモンが、大輔にそう言う。

「おう！いくぞ！」

大輔はポケットから通信機――Dターミナルを取り出し、デジヴァイスを握った。

「デジメンタル、アップ！」

Dターミナルから卵のような物がデジヴァイスに転送され、ブイモンが光に包まれる。

「ブイモン、アーマー進化ぁっ！」

ブイモンとデジメンタルが一体化した。

「燃え上がる勇気、フレイドラモン！」

フレイドラモン

アーマー体。竜人型。必殺技は＜ファイアロケット＞

アーマー体に進化した・・・。

19話：攻防力補助（後書き）

拓也「俺ってデジモン扱いなのか？」

輝二「魂広や同調時だけだろ」

拓也「・・・そうなのか？」

啓人「僕に言われてもなぁ・・・」

拓也「そりゃそうだな・・・」

２０話：化物とは（前書き）

記念すべき２０話です！→勝手に盛り上がってる

では２０話、参ります！

20話：化物とは

「アーマー・・・進化？」

それを見た健良が、怪訝な声を上げる。

「アーマー進化って事は、アーマー体？」

大輔に確認を取ると、大輔はおう！と返した。

「ほんとにアーマー体がいるなんて、思わなかったな・・・」

聞こえない程度の声で、そう呟く。

「何だ？」

「いや、もしかしたら効果あるかなって」

健良はそう言って1枚のカードを、デジヴァイスに通した。

「カードスラッシュ！＜アーマー体の神髄（しんずい）＞！」

その途端、フレイドラモンの攻撃力が大幅に上がる。

「これなら・・・いける！」

フレイドラモンは全身に炎を纏った。

「＜ファイアロケット＞ッ！」

そのままギズモン1体に、頭から突っ込む。

――ドガシャァッ！！

フレイドラモンはあまりの勢いと威力で、ギズモンを貫いた。

「すげぇ！」

大輔も思わぬ威力に、驚愕する。

「援護する。行ってくれ！」

遼の言葉にストライクドラモンは頷き、ギズモン1体に向けて走り出した。

「カードスラッシュ！＜地獄の鎖＞ッ！」

突如空間から鎖が飛び出し、ギズモンの動きを封じる。

「兄貴！俺達もやろうぜ！」

「おうよっ！」

アグモンと共に、大は走り出した。

「おぉらぁぁっ！」

「＜ベビーフレイム＞ッ！」

大は殴りつけ、アグモンは火球を食らわす。

――ヴゥンッ

大の手にデジソウルが宿り、

「デジソウル・・・チャージッ！」

それをアグモンに送る。

「アグモン、進化っ！」

データが上書きされ、ジオグレイモンに進化した。

「＜メガ・・・フレイム＞ッ！」

口から業火球を吐き出し、ギズモン1体を焼き尽くす。

「はっ！」

輝二は得意の素早さを活かし、次々と斬り捨てていった。

「だぁりゃぁぁっ！」

拓也が最後の1体に、大剣を叩き落す。

――ガシャァッ！

ギズモンは見事に曲がり、デジコードを浮かび上がらせた。

それらをスキャンする拓也と輝二。

「終了！」

最後のデジコードを拓也がスキャンし、戦闘の幕が下ろされる。

「何か・・・あっという間」

淑乃が戦闘時間を思い出し、苦笑した。

「敵が多い時は、援護にまわった方が良いみたいだね」

啓人がそう言い、カードポーチを手で触れる。

「強敵の時だけ究極体になれば、問題無し」

遼も頷いて、退化したモノドラモンの頭を軽く叩いた。

「いてぇな」

何事も無かったかのように進む一行。

「ねぇ、もしかしてそろそろ・・・」

泉が純平に話しかける。

「あぁ。そよ風村に到着だ」

純平がそう答えて頷いた。

「最初にデジタルワールド来た時は、如何いう訳か遠回りしてて、神殿には行かなかったんだよね」

友樹が何でだろう?と首を傾げる。

そうこう言っているうちに、森の中へ入った。

そしてそよ風村が見えて来る。

「おぉ、きれいなとこじゃねぇか」

大が見回して景色を眺めた。

花々が咲き乱れ、木々が生い茂る。

そよ風が、頬をなでるように吹き抜けた。

「ここ良いわね♪」

ヒカリが泉にそう言う。

「そうでしょ?私も大好きなの」

泉は風の闘士だからなのか、それとも本能的になのか、そう答えた。

前来た時よりもにぎわっている様子。

駅には多くのデジモン達の姿が見える。

「ついでだから・・・スープでも飲んでくか？美味いぞ」

拓也がそう言うと、大は少し考え頷いた。

他の皆も同じようである。

店へと向かう一同。

「フローラモン、いるか？」

拓也が店の中に入った。

「いらっしゃいませ～！」

店の中にいたフローラモン1体が、拓也に歩みよる。

「えと・・・久しぶり、なのか？」

「はい？・・・あ、もしや先祖がお世話になったのでは？」

「あ、そうだっけか」

拓也は、人間界とデジタルワールドの時間の流れが、違っていた事を思い出す。

「かなり大所帯なんだけど・・・席、ある？」

「はい！どうぞ！」

フローラモンは2階への階段を示した。

「人間のようですが・・・デジタルワールド（こちら）のお金は持っているんですか？」

「あ・・・」

フローラモンの確認に、拓也はしまったと思い直す。

あの時はタダでもらっていた為、お金の事は考えていなかったのだ。

「持ってない、ようですね。では少々化物退治をお願いしても、よろしいですか？」

「化物退治？」

オウム返しで聞き返す拓也。

「えぇ。成功すればお代は要りません。私達も困っていたんですよ」

「おし、分かった。その化物って奴は何処にいるんだ？」

「あ、いえ。何処かを拠点にしている、という情報は無くて・・・ただ、その・・・」

歯切れが悪いフローラモン。

「・・？」

拓也は怪訝な顔をする。

「ここを襲って来るんです！」

別のフローラモンが応えてくれた。

「襲って来る？んじゃ、ここで待ってれば良いのか」

拓也はそう判断し、店を出る。

「如何だった？」

泉に聞かれ、先程の事を話した。

「化物、ねぇ」

泉は胡散臭そうに呟く。

「ま、そいつ倒しゃ良いんだろ？やってやろうじゃねぇか」

大はすでに喧嘩腰だ。

その時だった。

「ガァァァァァアアアッッ！！」

声が木霊し、そよ風村上空を何かが通過する。

それは巨大な紫鳥だった。

「でかっ！」

「いや、でかすぎだろ・・・」

大の言葉に、拓也が続く。

そのデジモンはインペリアルドラモンと同等、否、それ以上の巨大さだった。

光子郎がパソコンを起動させ、データを読み取る。

「『オニスモン。究極体。古代鳥型。必殺技は＜コズミックレイ＞。遥か古代に絶滅したと言われる古鳥。想像を絶する巨大さを誇り、‘天空の覇者’と呼ばれていた。性格は好戦的であり、大型デジモンでもオニスモンに襲われる事が多かったと言われている』・・・古代に絶滅・・？」

光子郎は絶滅したはずのデジモンが、何故生きているのか疑問を抱いた。

それなら、フローラモン達が化物と呼ぶのも理解出来る。

「七大魔王が復活させたとか・・・」

丈が眼鏡を掛け直しながら、そう呟いてみた。

「あり得ますね」

光子郎も、考え込んでそう返す。

「とりあえず空中戦だ！」

拓也がそう言って魂広し、エンシェントグレイモンの翼を出現させた。

「それじゃ、私も」

泉はシューツモンの翼を使い、空へ舞い上がる。

「そんな事もありか!?」

太一が思わず叫んだ。

「ありだ!」

拓也はニヤッと笑い、そう返す。

龍魂剣を手に、上空で待機した・・・。

20話：化物とは（後書き）

太一「あの翼ってありなのか！？」

拓也「ありだ、あり！使えるし」

大「便利だな、おい」

啓人「便利の域、越えてるよ・・・」

大輔「確かに」

拓也「そうか？俺達は普通に使ってきたんだけどな・・・」

太一「・・・ありで良いか」（呆）

21話：紅炎を（前書き）

では21話、参ります！

21話：紅炎を

オニスモンが現れ、対峙する拓也達。

拓也と泉は上空へ舞い上がる。

「最悪なんですけど・・・」

淑乃はそう言いながら、体全体にデジソウルを走らせた。

「ララモン、準備良い？」

「当然よ！」

淑乃はその返答を聞き、デジヴァイスを構える。

「デジソウルチャージ！オーバードライブッ！！」

「ララモン、進化っ！」

膨張したデジソウルが、ララモンを包み渦を巻いた。

「ロゼモン！」

ロゼモンも飛翔する。

「＜コズミック・・・レイ＞」

オニスモンが口から青い炎を放った。

狙いは泉。

拓也が変わりにそれを受ける。

「冷たっ！？何だこの炎！冷たすぎるだろ！」

拓也はそう言って自分の炎で、温度を戻した。

「冷たいって・・・私は熱く感じたんだけど？」

「へ？」

泉と拓也の感覚が、少々食い違っている。

「し、知るか！俺は冷たいって思ったぞ！」

「あ～はいはい！分かったからさっさと攻撃っ！」

泉は、こちらに向かって飛行するオニスモンを指差した。

「どわっ！？」

拓也はすぐに大剣で防ぐ。

――ガキィンッ！

大剣の腹に、オニスモンの嘴（くちばし）が直撃した。

近くで見ると、オニスモンの眼光は曇っている。

「ガァァァァァアアアアッッ！！」

突如、オニスモンが咆哮した。

「吼えんなよ！うるさいからっ！！」

「あんたもうるさいの！」

泉は思わず突っ込む。

「はぁ！？」

拓也は身に覚えが無いらしく、意味不明と言い返した。

「まぁ・・・あいつもうるせぇよな」

大はエンシェントグレイモンを思い出し、頷く。

「ロ、ロゼモン！援護！」

思わずぼ～っとしていた淑乃は、我に返り指示を出した。

「えぇ！」

ロゼモンは鞭でオニスモンに斬りかかる。

「ガァァッ！」

オニスモンは標的を変更した。

「ピヨモン、行ける？」

「勿論！」

空の紋章とデジヴァイスが輝き出す。

「ピヨモン、超進化ぁっ！・・・ガルダモン！」

ガルダモンは翼を広げ、オニスモンへ向かった。

「どないしましょ、光子郎はん」

テントモンが危機感を持たない声で、光子郎に尋ねる。

「如何するもこうするもありません。まずはこのそよ風村を離れなければ」

「賛成～！」

拓也は炎を沸騰させた。

泉は熱気で思わず離れる。

――ジュゥゥウ・・！

溶岩が地面に垂れ、花が溶けた。

「拓也！花が花が！」

「はいはい！分かりましたよ！」

拓也はそう言ってオニスモンの上にくる。

「ガァァァァァアアアッッ！！？」

オニスモンは垂れ落ちる溶岩に、呻き苦しんだ。

そよ風村の上空で飛びまわる。

「そっちじゃねぇ！草原だ！」

拓也は上手く溶岩を操り、オニスモンを草原の上へ誘い込んだ。

「上手いですね」

光子郎は拓也の手際に感心する。

「おい、降りてこい！」

大が殴りたそうに拳を握り、オニスモンに叫んだ。

「降りて来なくても、こっちから行けば良いじゃない」

泉はそう言って風を操り、大を浮かせる。

「おわっ！？」

大は突然の事に驚くが、オニスモンへと接近した。

「おぉおぉらぁぁっ！！」

思い切り拳を振りかぶり、オニスモンの顔面に殴りつける。

「ガァァッ！？」

その威力に、オニスモンは怯んだ。

「デジソウルチャージ！オーバードライブッ！！」

「アグモン進化！・・・シャイングレイモン！」

シャイングレイモンは機械翼で飛び立つ。

「＜シャドーウイング＞ッ！」

ガルダモンが影で攻撃した。

「＜コズミックレイ＞」

オニスモンは青き炎で、影を消し去る。

「＜グロリアス・・・バースト＞ッ！」

シャイングレイモンは業火球を放った。

拓也が乗っている事も忘れて・・・。

「あ・・・」

――ドゴォォォォンッッ！

「ガァァァァァァアアアッッ！！」

灼熱の業火球に、オニスモンは悲痛の叫びを上げる。

「拓也の事は心配しなくて良いから。ジャンジャン攻撃して♪」

泉はそう言って竜巻を発生させた。

爆煙の中から拓也が飛び出してくる。

「ちょっと待てぇぇいっ！」

そのまま泉の竜巻を斬り裂いた。

「俺はな！火は良いけど、竜巻まで良いと言った覚えは無いぞっ！」

「あらそうだっけ？」

泉はわざととぼける。

――ムカッ

拓也の頭に血が昇り始めた。

「喧嘩は向こうでしてくれ」

輝二はため息を吐きながら、そう言う。

その時だった。

「ガァァァァァァァァァァァァァァッッッ！！」

オニスモンが先程の業火球で、怒り始める。

「あり？怒った・・・」

オニスモンが怒り狂い、こちらに襲いかかって来た。

――ガキィンッ！

「ぐ・・！」

再度大剣で防ぐ拓也だが、腕に計り知れない痺れが走る。

「つ～！」

腕にの痺れをこらえ、溶岩を煮えたぎらせた。

「輝二！援護！」

「俺かよ・・・」

輝二はため息を吐き、リヒト・シュベーアトを握る。

オニスモンの頭の上に移動した。

「ガァァッ！」

輝二を振り落とそうと、オニスモンは暴れる。

「大人しく・・・しろ！」

輝二は光剣を煌めかせ、剣線の残像を残した。

「ガァァァッ！？」

オニスモンの額に、数々の切り傷が残る。

「サ、サンキュー・・・」

拓也は腕を回し、痺れを振り払った。

「ったく、骨が折れるかと思った」

「そんなに脆くないだろうが」

輝二が思わず突っ込む。

拓也は耳を塞いでそれを無視し、地上に降りた。

――ザンッ

そして剣を突き刺す。

――ボコボコッ、ボコンッ！

溶岩が再び唸りを上げた。

「＜九頭龍陣＞ッ！」

９つの溶岩龍が、オニスモンに噛みつく。

「ギュエエエエエエエエエエッッ！！」

オニスモンが断末魔の叫びを上げた。

「まだ足んねぇか・・・。火ぃくれっ！」

拓也はシャイングレイモンに、援護を頼む。

「おうよ！＜グロリアス・・・バースト＞ッッ！！」

シャイングレイモンは、先程よりも巨大な業火球を放った。

――ズドォオオオオオオオオンンッッ！！

「ギャァァ・・アア」

オニスモンは力を失い、地面に崩れ堕ちる。

皆は進化を解いた。

拓也は溶岩は収めるが、大剣は肩に担ぐ。

「お～い」

オニスモンの嘴を、カンカンッと剣で叩いた。

「ガァ・・！」

オニスモンはムクッと起き上がる。

一斉に構える皆。

「ククク・・！楽しませてもらったぞ！」

オニスモンの眼光から、曇りが消えている事に気づき、

「「「「「「「「「「は・・？」」」」」」」」」」

一同は頭上に疑問符を浮かべた・・・。

21話：紅炎を（後書き）

拓也「あいつじゃべりやがったぞ！」

輝二「いや、デジモンだろ。しゃべるのが普通だ」

拓也「あ・・・そうだったな。いや、闘ってるうちに化物だと思い込んでた」

泉（この馬鹿は・・・）

拓也「泉、今何か言ったか？」

泉「別に・・・」

22話：神殿を目指せ（前書き）

22話、参ります！

22話：神殿を目指せ

「ククク・・！良い気晴らしになった。礼を言う」

「は、はい？」

訳が分からず、拓也は聞き返す。

「最近の奴等は弱くてな・・・強者を探していたのだ」

「奴等？」

ヤマトが不信に思い、何の事かと尋ねた。

「そいつらは変わった体をしておる。紫の装甲だ」

「・・・レーザーみたいの放ったりする？」

「おぉ、そうだな」

オニスモンの答えに、ギズモンだ・・・と全員の思考が同じになる。

「が、新たに一回り大きな奴も現れよった。・・・大した事は無かったがな」

「一回り大きな奴？」

拓也はふと大達を見た。

何か知っているのでは、と思った為である。

「たぶん・・・ギズモンXT(エックスティー)だろ」

「そんな奴がいるのか」

拓也も新たに記憶へ留めておいた。

「んで、何で暴れてたんだ?フローラモン達が困ってたぞ」

拓也は、オニスモンが化物と呼ばれていた事の、理由を聞く。

「クク・・!これがまた情けない事にな、日頃戦闘へ不満を抱いていた私に、七大魔王の奴等が目をつけおった。ちと操られてしまったが、お主らと闘った故(ゆえ)、気分は良いぞ」

オニスモンはそう言い、翼を広げた。

「助けられて礼をせんとは、私の名が廃(すた)る。何かあれば、力を貸そう」

巨鳥はそう言い残し、何処かへ飛び立っていく。

「な、何だったんだ?」

トーマが怪訝な顔をして、飛び去って行くオニスモンを見つめた。

「とりあえず一件落着!スープ飲もうぜ!」

拓也は魂広を解き、そよ風村へ向かう。

「兄貴～、腹減った～！」

「だから、今からスープ飲みに行くって言ってんだろ！」

大はアグモンと共に、拓也を追い駆けた。

「美味ぇ！何だこのスープ、超美味ぇじゃんか！」

大が一気にスープを飲み干す。

「この味は変わってねぇなぁ」

拓也も満足気に飲み終わった。

「っぷはっ！おかわりっ！」

皿を傾けて飲み干した（大の）アグモンが、フローラモンにおかわりを要求する。

「はいは～い！」

フローラモン達もオニスモンが去ってくれた為、気分が良いようだ。

「ありがとうございました！皆さんのおかげで、これからも無事に営業を続けられます！」

フローラモン1体が、代表してそう言って来る。

「礼なら、そこでがぶ飲みしてる奴等に言ってくれ。実際、オニスモンを倒したのはそいつらだからな」

輝二はそう言って大、アグモン、拓也を指差した。

・・・正論である。

「「「「「ありがとうございました！」」」」」

フローラモン達の店を出る一同。

「味は良かったですね」

「また来たいなぁ」

光子郎の言葉に、空も頷く。

「それじゃ、栄養補給も終わったことだし・・・神殿へ！」

「ＧＯ！」

拓也はそう言って大と共に歩き始めるが、

「残念。こっち」

純平に注意されてしまった・・・。

しばらく歩き、気高き山々が見えてくる。
その頂上に、神殿のような物が見えた。
「人間界のパルテノン神殿に似てますね」
光子郎が思わず呟く。
「光子郎はん、何です？パンテオン神殿って」
「テントモン、パルテノン神殿です。世界遺産の事で・・・って説明しても分かりませんね。あの神殿といたよく似た建物です」
光子郎の説明に耳を傾けるデジモン達だが、疑問符を浮かべる。
「ま、難しいよな」
ヤマトが苦笑しながら、ガブモンの頭を軽く叩いた。
「あれを登るの？」
ミミが険しい山脈を見て、嫌そうな顔をする。
「まさか。あんなの飛べば良いんだよ」
拓也はそう言って、エンシェントグレイモンの翼を出現させた。
「オリンポス十二神は今のところ、５体しかいない。１チーム１体

で良いな？」

「ま、そうなるだろ」

拓也の確認に、大が頷く。

「よぉし、行っくぞぉ！」

拓也は足を曲げ、翼を思い切り広げた。

――バサァッ！

そのまま跳躍力を活かし、飛び上がる。

泉も飛べない友樹と純平、輝二、輝一を風で浮かせ、拓也に続いた。

「んじゃ、僕達も」

啓人達はポーチからカードを取り出す。

「「「「カードスラッシュ！＜白い羽＞！」」」」

パートナーデジモン達に翼が生え、啓人達も乗って飛び立った。

「空！」

ピヨモンが空を呼ぶ時には、空はすでにデジヴァイスを握っている。

「ピヨモン、進化！」

ピヨモンが赤い巨鳥に変わった。

「バードラモン！」

バードラモン

成熟期。巨鳥。必殺技は＜メテオウイング＞

「テントモン、お願いします！」

「はいでんがな！」

光子郎のデジヴァイスが輝いた。

「テントモン、進化っ！」

青い甲殻を持つ、昆虫型のデジモンが現れる。

「カブテリモン！」

カブテリモン

成熟期。昆虫型。必殺技は＜メガブラスター＞

バードラモンに空、太一、ヤマト、アグモン、ガブモンを乗せた。
カブテリモンに光子郎、ミミ、丈、パルモン、ゴマモンが乗る。
2体は山頂を目指して、飛び立った。

「ファルコモン、頼むぞ！」
「おう！」
イクトの手にデジソウルが走り、全身に回る。
「デジソウル・・・フル！チャージッ！」
「ファルコモン、進化っ！」
ファルコモンのデータが上書きされ、紫色の巨鳥になった。
「ヤタガラモン！」

ヤタガラモン
完全体。妖鳥型。必殺技は＜三布都神（みかふつのかみ）＞

ヤタガラモンに大達が乗り、同じく飛び立つ。

「ホークモン！」

「はい！」

京のデジヴァイスが輝いた。

「ホークモン、進化ぁっ！・・・アクィラモン！」

赤い巨鳥に大輔達が乗る。

皆、一気に飛び上がった。

が、そんな一同に矢が降りかかる。

「な！？く！」

拓也は炎を広げ、焼け落とした。

そして飛んできた方向を見る。

地上に1体のデジモンがいた。

光子郎がパソコンを向ける。

「『ディアナモン。究極体。神人型。必殺技は＜アロー・オブ・アルテミス＞。オリンポス十二神の1体で、氷と水の力を司るとされる。その為、絶対零度の環境下でも問題無く活動出来る』・・・早速出ましたね」

光子郎は、オリンポス十二神の1人という事を知り、気を引き締めた。

「ここは俺達がやるっ！」

大輔が相手を買って出る。

「おし、じゃぁ任せたぞ！」

太一はそう言って、皆と共に先を行った。

大輔達はディアナモンと対峙する。

「行くぞ、賢！」

「あぁ！」

大輔と賢は、デジヴァイスを握りしめた・・・。

22話：神殿を目指せ（後書き）

大輔「さっさと勝負して、皆に追いつこうぜ！」

賢「だ、大輔、落ち着いて落ち着いて」

大輔「俺は落ち着いてるぞ！」

伊織「少々気が立っていますが、問題無いと思いますよ。一乗寺さん」

賢「そう、かなぁ」

大輔「ブイモン、やるぞ～！」

ブイモン「お～！」

２３話：立ち去れ（前書き）

大輔達とディアナモンです。

では２３話、参ります！

23話：立ち去れ

「ブイモン！」

「おう！」

「ワームモン！」

「いいよ！」

大輔と賢のデジヴァイスが輝き出す。

「「進化だ！」」

「ブイモン、進化っ！・・・エクスブイモン！」

「ワームモン、進化っ！・・・スティングモン！」

ブイモンは、フレイドラモンではない別のデジモンに進化した。

エクスブイモン

成熟期。幻竜型。必殺技は＜エクスレイザー＞

スティングモン

成熟期。昆虫型。必殺技は＜スパイキングフィニッシュ＞

――――

「エクスブイモン！」

「スティングモン！」

「「ジョグレス進化！」」

2体が光に包まれ、交差する。

「パイルドラモン！」

――――

パイルドラモン

完全体。竜人型。必殺技は＜デスペラードブラスター＞

――――

「パイルドラモン！究極進化！」

その光が更に輝き、巨大化した。

「インペリアルドラモン！」

巨大なる古代竜が、その姿を現す。

「行くわよ、ヒカリちゃん！」

「はい！」

京とヒカリがデジヴァイスを握り、パートナーデジモンにかざした。

「アクィラモン！」

「テイルモン！」

「「ジョグレス進化！」」

光が交差し、合わさる。

「シルフィーモン！」

光の中から獣人が現れた。

「伊織君、僕達も！」

「はい！」

岳と伊織のデジヴァイスが光を放ち、それは宙で交錯する。

「アルマジモン、進化っ！・・・アンキロモン！」

「パタモン、進化っ！・・・エンジェモン！」

「「ジョグレス進化っ！」」

光が巨大化した。

「シャッコウモン！」

白き土偶がそこに現れる。

ディアナモンは彼らを敵と判断し、武器のような弓に矢をつがえた。

「＜アロー・オブ・アルテミス＞」

青白いオーラを纏った矢が、インペリアルドラモンに放たれる。

動きの遅いインペリアルドラモンに、その矢が直撃した。

「ぐぁぁぁっ！」

かなりの威力で、インペリアルドラモンの右肩部分に突き刺さる。

「大丈夫か！？」

大輔が声をかけるが、矢が刺さって大丈夫な訳が無い。

「ぐ・・！」

インペリアルドラモンは、右腕に上手く力が入らないのを感じる。

「立ち去れ・・・お前達が来る所ではない・・・」

ディアナモンは光の宿っていない、無気の眼でそう言った。

「魂が無いみたい・・・」

ヒカリが思わず呟く。

「＜アラミタマ＞！」

シャッコウモンは両目から、光線を照射した。

ディアナモンは、軽やかにそれを避ける。

「＜トップ・ガン＞！」

シルフィーモンが、圧縮したエネルギー弾を発射した。

両端に鎌のような物が付いた武器を握り、ディアナモンはそれを振りおろす。

エネルギー弾は、鎌によって斬り裂かれた。

ディアナモンはタンタンッと地面を跳び、シルフィーモンに急接近。

「去れ・・・」

そのまま武器で斬りかかる。

シルフィーモンは後方に跳んで、回避した。

その間、インペリアルドラモンは力を背中の砲口に集束させている。

「＜ポジトロンレーザー＞ッ！」

白い砲撃がディアナモン向けて、発射された。

「＜クレセントハーケン＞・・・」

ディアナモンは武器にオーラを纏わせ、砲撃を一刀両断する。

「な！？あの砲撃を！」

「流石オリンポス十二神、ってところかな」

賢は歯を噛み締めながら、素直にそれを賞賛した。

「立ち去れ・・・我等はここを任されている・・・。すぐに立ち去れ」

「任されている？誰から？」

賢が聞き返すと、ディアナモンは賢に武器を向ける。

「情報を与えるとでも・・・思ったか・・・。お前達は立ち去れ・・・。先へ向かった者達も、奴等が通すはずがない・・・」

「奴等・・？他のオリンポスか！」

賢はその事を理解する。

「頭は回るようだな・・・。ならば立ち去れ・・・」

「悪いがそれは出来ないな！」

大輔がそう言い返した。

ディアナモンはそれを聞き、武器を構え直す。

「帰れ・・・」

眼光を鋭くし、インペリアルドラモンに斬りかかった。

「＜クレセントハーケン＞」

「く・・！＜ポジトロンレーザー＞！」

ディアナモンは放たれた砲撃を一閃し、インペリアルドラモンの正面にくる。

剣線が煌めいた。

「ぐぁぁぁぁっ！！」

顔をやられ、インペリアルドラモンは悲痛の叫びを上げる。

「インペリアルドラモン！？」

大輔が心配して声を張り上げた。

「シルフィーモン！援護を！」

「はい！」

京の言葉に、シルフィーモンが動き出す。

「シャッコウモン、お願いします！」

伊織も声をかけ、シャッコウモンに援護を頼んだ。

「＜トップ・ガン＞ッ！」

「＜アラミタマ＞ッ！」

攻撃し、油断していたディアナモンに、2体の攻撃が直撃する。

爆煙から出てきたディアナモンは、少々怪我をしており、左腕が力無く垂れ下がっていた。

如何やら今の攻撃が効いたらしい。

これでディアナモンは、左腕が使えない。

「む・・・」

それでも、残った右手で武器を取り、構えるディアナモン。

インペリアルドラモンは口にエネルギーを溜めていく。

「時間稼ぎを！」

賢の言葉に、シルフィーモンとシャッコウモンは頷いた。

「＜デュアルソニック＞ッ！」

「＜アラミタマ＞ッ！」

ディアナモンに牽制の攻撃を放つ。

ディアナモンは鎌を振って、それらを斬り裂いた。

その隙に、インペリアルドラモンの集束が終わる。

「＜メガデス＞ッッ！！」

計り知れない程のエネルギーが、砲撃となって発射された。

ディアナモンは、流石に避けようとしたが、

「＜トップ・ガン＞！」

シルフィーモンがエネルギー弾を放ち、その場から動かさない。

ディアナモンは成すがまま、砲撃に飲み込まれた。

「が・・！」

あの砲撃を食らい、流石に耐え切れず膝をつく。

デジコードが浮かび上がり、ディアナモンはデジタマに戻った。

デジタマは月へ飛んでいく。

残ったのは黒いデジコードだが、それは粉のように消えた・・・。

23話：立ち去れ（後書き）

大輔「やっと倒したな！」

ブイモン「思いっきり斬られた・・・」

大輔「はは、ははは・・・」

賢「ワームモン、大丈夫かい？」

ワームモン「何とか大丈夫だよ」

大輔「ってことで！結果オーライ！」

２４話：己の敵に（前書き）

２４話、参ります！

24話：己の敵に

「大輔君達、大丈夫かな・・・」

羽の生えたギルモンに乗った啓人が、後方の大輔達を心配する。

「大丈夫だって。彼らもテイマーだ。ちゃんとパートナーを指示する」

健良がそう言って、啓人の心配を振り払うように明るい声で励ました。

「そう、だね」

頷いている啓人。

山頂近くまで来た時、険しい山脈がなだらかになり、地面と平行の部分も見られる。

その山肌の場所に、2体のデジモンがいた。

それぞれ一行を挟み、反対側に位置している。

「まさか・・！」

啓人がデジヴァイスを向けた。

「『ミネルヴァモン。究極体。神人型。必殺技は＜ストライクローール＞。オリンポス十二神に属する、少女のような姿をした神人型デ

ジモン。小柄ではあるが、身の丈ほどの大剣を自由自在に振り回す、怪力の持ち主である』・・・やっぱりオリンポス！」

啓人が驚く中、健良が反対側のデジモンにもデジヴァイスを向ける。

「『マルスモン。究極体。神人型。必殺技は＜コロナサンクションズ＞。オリンポス十二神の1人で、豹人の姿をした軍神デジモン。格闘技を主に戦闘を行う』・・・こっちもだ！」

健良はそう言って、オリンポスである事を確認した。

「んじゃぁ！俺達がマルスモンだ！」

「あ、だったら僕達がミネルヴァモンです！」

大と啓人が、進み出る。

「お前らは先に行け！」

大が太一達や、拓也達に先を促した。

「任せたぞ！」

残った者達が山頂へ突き進む。

マルスモンとミネルヴァモンが、その者達を逃がすまいと攻撃を仕掛けた。

「お前の相手は・・・こっちだぁぁぁぁっっ！！」

大はヤタガラモンの背から飛び降り、マルスモンに殴りかかる。

「ぬ！？」

攻撃を仕掛けようとしていたマルスモンは、もろにそれを食らった。

――ザザザァッ！

押されるマルスモンだが、倒れはしない。

「アグモン！」

「おう！」

大の体にデジソウルが走った。

「デジソウルチャージ！オーバードライブッ！！」

「アグモン、進化！・・・シャイングレイモン！」

大に続き、トーマ達もパートナーデジモンを究極体に進化させる。

マルスモンと向かいあった。

「＜ファイアーボール＞！」

ギルモンが、先を目指す者達に剣を向けていたミネルヴァモンへと、火球を放つ。

「・・・！」

ミネルヴァモンはそれに気付き、大剣で斬り裂いた。

「ギルモン！進化だよ！」

「ギルモン、進化！」

啓人とギルモンが光に包まれ、１つになる。

「デュークモン！」

留姫達もそれぞれ進化した。

「・・・去れ」

ミネルヴァモンは静かにそう告げる。

「何？」

デュークモンが聞き返した。

「「去れ・・・」」

すると、ミネルヴァモンとマルスモンの声が重なる。

「我等はここを任されている・・・」

「立ち去れ・・・」

そしてディアナモンと同じ言葉を言った。

「へっ！誰が背を向けるか！」

大は全く聞く様子が無い。

「結局は実力行使だ・・・」

トーマも苦笑しながら、それを認める。

「毎回そうだしねぇ・・・」

淑乃も呆れて、ため息を吐いていた。

「シャイングレイモン、ぶっ飛ばすぞ！」

「おうよ！」

大の言葉に頷き、マルスモンに突き進むシャイングレイモン。

「元気な人達ね・・・」

それを見たサクヤモンが、思わずそう呟いた。

「＜ストライクロール＞・・・」

ミネルヴァモンが大剣を振り上げ、山肌に突き刺す。

――ズズズズッ！

この山が揺れた。

「何!?」

そして岩のような柱が突き出される。

「が・・!」

「きゃっ!」

それぞれダメージを受けてしまった。

それは大達にも影響し、山の至る所で柱が突き出る。

「去れ・・・」

ミネルヴァモンは静かにそう告げた。

マルスモンが1本の柱に手をつけ、炎を走らす。

すると、周りの柱にも炎が纏われた。

「我等はここを任されている・・・」

「立ち去れ・・・」

同じ台詞(セリフ)を繰り返す。

「ロボットかこいつらは!」

大が思わずそう叫んだ。

「＜グロリアス・・・バースト＞ッ！」

シャイングレイモンがマルスモンに業火球を放つ。

マルスモンは柱の上に飛び上がって、それを回避した。

が、その時、

――ドゴォォォンッ！

神殿の方で爆発が起こり、神殿内からエンシェントグレイモンが吹き飛ばされて来る。

――ズザザザァッ！

エンシェントグレイモンは大達の近くに、ズルズルと着地した。

瞳孔は・・・開いている。

「ゴォオオオオオオオオオアアアアアアアアアアアアアアアッッッ！！！」

怒り狂い、咆哮した。

溶岩が流れ出す。

「ガァァアアアッッ！！」

翼を広げ、溶岩と共に飛び立った。

「ゴァァァァアアアッッ！！」

怒りは冷めず、神殿上空で旋回するエンシェントグレイモン。

「あれは・・・ちょっと拙いんじゃねぇか？思いっきり怒ってんぞ！」

大が青い顔をしてそう言った。

「ゴァァァァアアアアアアアッッ！！！」

エンシェントグレイモンは神殿上空で滞空し、溶岩で巨大な竜を作る。

「おいおいおい・・・まさか！」

エンシェントグレイモンが、それを神殿に落とした。

神殿を溶岩が覆い尽くす寸前、神殿から一筋の光が出る。

――ジュォォォ・・！

神殿の上部分が溶岩で溶け、形が変わった。

「と、とりあえず自分の相手に集中！」

トーマの声で、皆が我に返る。

マルスモンとミネルヴァモンがそれに気付き、構え直した・・・。

２４話：己の敵に（後書き）

大「神殿・・・溶けてるぞ」

トーマ「怒ると恐ろしいね・・・」

淑乃「如何すんの、あの神殿」

イクト「それに、拓也、正気に戻す。如何やって？」

大「ぐ・・・。お、俺は知らねぇ！」

２５話：誘導作戦（前書き）

タイトル、ちょっと大げさです・・・。

そんな大事（おおごと）じゃないので・・・。

では２５話、参ります！

25話：誘導作戦

「＜グロリアス・・・バースト＞ッ！！」

「＜ダブルクレセント・・・ミラージュ＞ッ！！」

シャイングレイモンとミラージュガオガモンが、マルスモンに攻撃を放つ。

「＜コロナサンクションズ＞・・・」

が、マルスモンは拳で打ち消す、回避してかわすなど滅多に攻撃を食らわない。

「あ～っ！何で当たらないんだよ！」

大もその事にいらつき、頭に血が昇っている。

「大、落ち着け。相手のペースに呑まれるな」

トーマが念の為注意するが、

「わ～ってる！」

大本人も、一応自分で分かっているようだ。

「＜ローゼス・・・レイピア＞ッ！」

ロゼモンが鞭で斬りかかるが、これまた上手く避けられる。

「レイヴモン！」

「おう！」

レイヴモンはイクトの意図を読み取り、行動に移した。

レイヴモンはマルスモンの周囲を、高速で移動する。

「あいつ、避けるの上手い。けど、早くない。だから・・・」

「なるほど」

イクトは人生のほとんどを、デジタルワールドという過酷な状況で過ごしてきた。

戦闘に関しては、大やトーマ、淑乃よりも経験している。

目の付けどころが違った。

「＜ブラストウィング＞ッ！」

レイヴモンはスピードでマルスモンを惑わせ、白銀の左翼で斬りつける。

マルスモンは避けきれず、切り傷を負った。

レイヴモンは何度も斬りかかって、マルスモンに少しずつだが、確実にダメージを与えていく。

「淑乃！」

イクトが援護を頼むと、淑乃はコクリと頷いた。

「ロゼモン、マルスモンの動きを止めて！」

「分かったわ！」

ロゼモンは淑乃の指示に頷き、鞭でマルスモンの動きを封じる。

レイヴモンばかり注意が向いていたマルスモンは、容易に捕まえることが出来た。

「今だ、大！トーマ！」

イクトの声で、大とトーマは顔を見合わせ、パートナーに指示を出す。

「シャイングレイモン！」

「ミラージュガオガモン！」

「「攻撃だ！」」

2人そろって声を張り上げた。

「おう！」

「イエス、マスター！」

シャイングレイモンとミラージュガオガモンは、それぞれ力を集中させる。

「＜グロリアス・・・バースト＞ッッ！！」

「＜フルムーン・・・ブラスター＞ッッ！！」

シャイングレイモンは灼熱の炎を集め、業火球を作り放った。

ミラージュガオガモンは胸の口部から、超弩級の砲撃を発射する。

――ズドォォォォォォォンンッッ！！

ロゼモンは爆発の寸前、その場から逃れ、マルスモンに直撃した。

爆煙内から、デジコードを浮かび上がらせたマルスモンが現れる。

「っしゃぁ！」

大が拳を突き上げると同時に、デジタマが空へ飛翔した。

デジコードは塵となって消えていく。

「イクト、よくやったな！」

大が勝算をくれたイクトに、礼を言った。

向こうを見ると、ミネルヴァモンも終わっているようだった・・・。

時は遡り・・・。

「＜ロイヤルセーバー＞ッ！」

デュークモンがグラムを突き出す。

――ガキィンッ！

ミネルヴァモンは大剣の腹で、それを受け流した。

「く！」

デュークモンはグラムをそのまま薙ぎ払い、後方へ跳び退る。

「＜飯綱＞ッ！」

サクヤモンが、４匹の霊狐を飛ばした。

「＜マッドネス・・・メリーゴーランド＞」

ミネルヴァモンは大剣を振り回し、その場で回転する。

――ゴォォォッ！

竜巻が巻き起こり、霊狐を吹き飛ばした。

「＜バーストショット＞ッ！」

セントガルゴモンがミサイルを一斉発射する。

――ズドドドドドドドォォォンンッ！！

着弾した爆発音が響くが、ミネルヴァモンは無傷。

かわしたか、剣でミサイルを斬り裂いたのだろう。

「＜トリニティーアーム＞！」

ジャスティモンの腕が、アクセルアームへ変化した。

「はぁっ！」

ミネルヴァモンに、その腕を振り下ろす。

「・・・！」

ミネルヴァモンは直前でそれに気付き、後方へ跳び退った。

――ドゴァッ！

宙を切った腕が、山肌にひびを入れる。

「相変わらずすごい威力ね」

サクヤモンがそれを見て、冷や汗を流した。

「褒め言葉として受け取っておこうか」

ジャスティモンは、わざとそう返す。

そしてその場から大きく跳び退った。

「＜ファイナル・・・エリシオン＞ッ！」

空いたその空間を通して、デュークモンが砲撃を放つ。

「・・・！？」

ミネルヴァモンは避けたかっただろうが、無理と判断し、大剣の腹で砲撃を受けた。

重い衝撃が伝わり、ミネルヴァモンの両腕が痺れる。

「＜ジャイアントミサイル＞ッ！

その隙に、セントガルゴモンが巨大ミサイルを2発、発射した。

――ズドォォォォォオオンンッッ！！

爆煙内からは、少々ダメージを負ったミネルヴァモンが姿を見せる。

まだ倒せていない。

が、肩で息をしているミネルヴァモンに、サクヤモンが錫杖を向けた。

「＜金剛界曼荼羅（こんごうかいまんだら）＞ッ！」

浄化の光が、疲れているミネルヴァモンを包み込む。

「ッ！？」

ミネルヴァモンはデジタマに戻り、空へ飛翔した。

黒いデジコードは散り、空気の中へ解けていく。

それを見た４人は進化を解いた。

そして大達の戦闘も、終わっている事を確認する。

「ナイスタイミング」

遼が一言、留姫にそう言った。

「あ、あんたに言われると、何かムカつくわ」

留姫は照れ隠しに、そう返す。

「へいへい」

遼はそうだろうと思った為、普通に返事した。

「お～い！」

すると、向こうからインペリアルドラモンに乗った大輔達が、こちらへ飛んでくる。

「あ、終わったのか～？」

大がそれを視界に収め、大声で確認した。

「お～！」

大輔が満面の笑みで、そう返す。

「こっちもだ～！」

大は啓人達の方を一度見て、大輔達に戦闘が終わった事を伝えた・・・。

25話：誘導作戦（後書き）

大「で、如何するよ。あの神殿。拓也、何か怒り狂ってたけど・・・」

大輔「・・・マジか？」

大「マジだ。俺の見た限り・・・」

大輔「♪～♪♪」

大「何誤魔化そうとしてんだよ！」

26話：如何する（前書き）

26話、参ります！

26話：如何する

拓也達、太一達は神殿を目指し、飛翔する。

が、やはり敵は現れるというもの。

神殿入口、1体のデジモンがいた。

光子郎がそちらにパソコンを向ける。

「『ネプチューンモン。究極体。神人型。必殺技は＜ボルテックスペネトレート＞。オリンポス十二神の1体。体を覆う鱗鎧（スケイルメイル）は機動力・スピードに優れるブルーデジソイド化された、クロンデジソイドでできている』・・・ここにも、ですか」

光子郎がオリンポスだと知り、警戒した。

「どっちが闘う？」

拓也が相手に悩んでいると、

「拓也さん達が先に行って下さい。残っているのはアポロモンです。ならば、拓也さんが有利でしょう」

光子郎がそう言って、拓也達を先へ促す。

「・・？」

拓也は分かっていないようだ。

「アポロモンは火属性です」

「あ・・・了解！」

拓也達はコクリと頷き、神殿へ飛んだ。

「いくぞ、アグモン！」

「ガブモン、準備良いな！」

「「勿論！」」

太一とヤマトは陸に降り、デジヴァイスを構える。

デジヴァイスが輝くと同時に、アグモンとガブモンがバードラモンから飛び降りた。

「アグモン、ワープ進化ぁっ！」

「ガブモン、ワープ進化ぁっ！」

2体が光に包まれる。

「ウォーグレイモン！」

「メタルガルルモン！」

2体はネプチューンモンに構えた。

「＜ウェーブオブ・・・デプス＞」

ネプチューンモンは手にしていた槍を、ウォーグレイモンに投じる。

――ガキィンッ！

ウォーグレイモンは背中の外殻を前に持ってきて、ブレイブシールドで防いだ。

が、

「ぐ・・！」

槍は力が収まるどころか、更に威力が入る。

「何だこの槍！」

苦戦するウォーグレイモンに、メタルガルルモンが援護した。

「＜コキュートスブレス＞！」

槍を凍らせようと氷結の息吹を吐く。

だが、槍は急に威力を止め、ネプチューンモンに戻った。

「あの槍、如何なってんだよ！」

太一が思わず愚痴る。

「立ち去れ・・・」

ネプチューンモンは槍を手に、そう告げた。

「去るか！」

ヤマトの声と同時に、メタルガルルモンがネプチューンモンに息吹を吹きかける。

「＜ボルテックス・・・ペネトレート＞」

ネプチューンモンは、槍を地面に突き刺した。

直後山肌から水柱が立ち上り、息吹を防ぐ。

凍結の息吹により、水柱は凍りついた。

――ドゴォォォンッ！

その時、神殿の方で爆発が起こる。

「何だ？」

そちらを見ると、エンシェントグレイモンが大達の方へ吹き飛ばされ、着地していた。

「おいおいおい、あいつが吹き飛ばされるって・・・どんな相手だよ！」

太一が思わず神殿を見る。

が、その時、

「ゴォォォォォォォォォアアアアアアアアアアアアアアアッッッ！！！」

エンシェントグレイモンが怒り狂り、瞳孔が開く。

溶岩が流れ出し、岩肌の形が変わった。

エンシェントグレイモンは飛び立ち、神殿上空で旋回する。

「ゴァァァァァァアアアアアアアアッッ！！！」

そして溶岩竜を作り上げた。

「あいつ・・・正気か！？」

ヤマトが思わず声を張り上げる。

――ジュォォォ・・！

溶岩竜が神殿に襲いかかり、溶かしていった。

「拙いぞあれ！如何やって正気に戻すんだ！？」

丈が困ったように眼鏡をかけ直す。

「流石にそれは・・・」

光子郎も分からず、考え込んだ。

「さっさと倒して、向こうに行くぞ！」

「おう！」

太一の声にウォーグレイモンが頷き、力を集中する。

「＜ガイア・・・フォース＞ッッ！！」

ウォーグレイモンは、ネプチューンモンの周りの氷柱もろとも、業火球で燃やし尽くした。

「・・・！」

流石にダメージはあったようで、ネプチューンモンの装甲に焦げ目が付いている。

メタルガルルモンがミサイルを一斉発射した。

ネプチューンモンは、槍でそれらを斬り裂く。

「＜ガイア・・・フォース＞ッ！！」

その隙に、ウォーグレイモンが背後に回り込み、業火球を放った。

「・・・！」

ネプチューンモンは直前でそれに気づくが、もう遅い。

――ズドォォォォォォォンンッッ！！

「やった、か？」

太一達は爆煙内を見つめた。

――ブォンッ！

突如槍が飛び出し、ウォーグレイモンに襲いかかる。

「ッ！？」

――ザシュッ！

「が・・！」

槍はウォーグレイモンの右腕をかすった。

「ウォーグレイモン！大丈夫か！？」

「あぁ！まだいける！」

太一の確認に、ウォーグレイモンは頷く。

槍はネプチューンモンのもとへ戻るが、ネプチューンモンも相当なダメージを負っていた。

メタルガルルモンが、再度ミサイルを放つ。

――ズドドドドドドドドォォォォォンンッッ！！

疲れきっているネプチューンモンは、避ける事が出来ず、成すがまま食らった。

ネプチューンモンの体から、デジコードが浮かび上がる。

デジタマは天へ、デジコードは空気へ。

「終わった・・・のか」

いまいち実感が沸かなかったが、2体は進化を解いた。

すると、後方にいた者達は飛んで来る。

「そっちも終わったか～？」

大の声に、太一が頷き返した。

「で、如何するよ・・・。あれ」

ヤマトは神殿の変わり果てた姿を指差す。

「えっと・・・」

空も苦笑し、答えられる者はいなかった・・・。

26話：如何する（後書き）

大「・・・如何する？」↑神殿指差す

太一「俺はパス」

大輔「俺も」

啓人「僕も遠慮しとくよ」

大「おいおい・・・」

27話：怒り狂うその後は（前書き）

27話、参ります！

27話：怒り狂うその後は

拓也達は神殿内に入る。

「おいおい・・・」

拓也は中にいた者を視界に捉え、思わず苦笑いを浮かべた。

ギズモンＡＴの群れ。

その向こう、奥に1体のデジモンがいる。

友樹がデジヴァイスを向けた。

「『アポロモン。究極体。神人型。必殺技は＜ソルブラスター＞。オリンポス十二神の1人であり、光明神の名を冠すデジモン。太陽の業火で、全てを焼き尽くす』・・・だって」

「お～し・・・んじゃ、俺が行くっかね」

拓也はデジヴァイスを取り出し、構える。

「となると私達は・・・ギズモンね」

「おう。頼むぞ！」

「背中は任せろ」

拓也の背を、輝二が受け持った。

「まぁ、俺が暴走でもした時は、よろしく♪」

「は！？」

輝二はそこまでは責任持てないと返すが、拓也は聞かない。

「エンシェントスピリット・・・エボリューションッッ！！」

一気に進化。

「エンシェントグレイモン！」

「く・・・知らんぞ！」

輝二は魂広し、ギズモンに斬りかかる。

泉達も動いた。

エンシェントグレイモンはアポロモンと対峙する。

「早々に立ち去ってもらおう・・・」

「悪いが出来ない相談だ」

エンシェントグレイモンは、体に炎を纏った。

「＜ガイア・・・トルネード＞ッ！」

エンシェントグレイモンは灼熱の竜巻を発生させる。

「＜アロー・オブ・アポロ＞」

アポロモンは両手から炎の矢を、連続して放った。

竜巻は矢に突き消される。

アポロモンの背中にある火炎球から、紅蓮の太陽球が発生した。

「＜ソルブラスター＞」

それがエンシェントグレイモンに放たれる。

が、炎の闘士には効かず、エンシェントグレイモンの体に纏われた。

アポロモンは火が効かないと悟ると、エンシェントグレイモンに急接近。

「＜フォイボス・ブロウ＞」

右手に力を集中させ、一撃必殺の拳を繰り出す。

「が・・はっ！？」

エンシェントグレイモンはその威力に驚愕し、耐え切れずに吹き飛ばされた。

――ドゴァッ！

神殿の壁をぶち破り、外へ。

――ズザザザァッ！

丁度大達の戦闘最中の所へ、着地する。

その時、エンシェントスピリットが怒った。

アポロモンに吹き飛ばされ、怒り狂う。

拓也はそこで制御権を失った。

（言う事を聞かない・・！？）

拓也は制御し直すが、エンシェントスピリットは怒りで聞く耳を持たない。

（暴走するか・・！？）

拓也は成すがまま、エンシェントスピリットに動かされる。

「ゴォォォォォォォアアアアアアアアアアアアアッッッ！！！」

天へ咆哮した。

体内中の血液、闘志が沸騰するのを感じる。

――ボコンッ！

炎が溶岩に変化し、煮えたぎった。

拓也は視界が変わっていくのを確認する。

周りの者が敵に見えてきた。

（拙い・・！）

このままここにいては、大達まで攻撃してしまいそうだった為、無理矢理飛翔させる。

エンシェントグレイモンは神殿へ向かったが、拓也はそこから意識が無い。

「ガァァァァアアアッッ！！」

エンシェントグレイモンは溶岩竜を作り上げ、神殿を襲わせた。

「拙い！」

輝二も拓也が制御権を失ったのは、咆哮で確認する。

「全員外へっ！」

輝二は友樹の腕を掴み、輝一は泉、純平と共に、神殿の外へ脱出した。

直後、溶岩が神殿を包み込む。

「あ、危な！」

泉が神殿から距離を取った。

「あんの馬鹿！終わったら1発殴ってやるわ！」

そして何故か喧嘩腰。

「ゴォォォォォォォォォォォォァァァァァァァァァァアアアアアアアアッッッ！！！」

エンシェントグレイモンは、天へ咆哮する。

「呑気な事を言ってる場合じゃない！」

輝一が槍を構えた。

――ドゴォォォンッ！

崩れた神殿内から、アポロモンが飛び出す。

装甲が所々、溶けている部分があった。

「＜フォイボス・・・ブロウ＞」

エンシェントグレイモンに殴りかかる。

先程は吹き飛ばされたが、怒り狂った今では拳を受け止め、逃がす事を許さない。

エンシェントグレイモンの周囲に、炎が集中する。

「泉、全員を遠くへ！」

輝二が瞬時に危険を悟り、泉に指示した。

「わ、分かった！」

泉は風を操り、輝二達を浮かばせ、距離を取る。

すると戦闘を終えた者達が、飛翔してきた。

「来るな！離れろっ！」

輝二が大声で危険を知らせる。

「は？」

皆分かっていなかったが、エンシェントグレイモンを見てすぐに悟った。

「ガァァァァァァァァァアアアアアアアアッッッ！！」

――ドゴォォォォォォォォォォォォォオオオオンンンッッ！！

直後、数キロに渡って大爆発が起こる。

「ぐ・・！」

「きゃぁ！」

「な・・！？」

皆も爆風で吹き飛ばされた。

少しした所で、やっと止まる。

山頂を見上げると、デジタマが１つ、上昇していった。

が、

「ゴォォォォォォォォアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッッッ！！！」

エンシェントグレイモンは物足りないと、天へ咆哮する。

「如何するよあいつ！」

大が拳を握りながら、声を張り上げた。

輝二はデジヴァイスを握る。

「俺が行く」

「輝二！？」

輝二の発言に、輝一が驚いた。

「あの馬鹿を斬る！」

輝二の額には、怒りのマークが浮かんでいる。

（怒ってるし・・・）

輝一はそれを知り、思わず苦笑した。

輝二はデジヴァイスを握り、山頂へ向かう。

「輝二～、1発ぶん殴って来て～！」

「殴るか斬るかして来る！」

泉の言葉に、輝二は頷いた・・・。

27話：怒り狂うその後は（後書き）

輝二「ほんとにあの馬鹿は・・！」

泉「これで輝二が斬っても、文句は言えないわよね♪」↑悪魔的オーラ出現

友樹「えっと・・・」

（拓也兄ちゃん、ドンマイだなぁ・・・）

輝一「（拓也が）生きて返ってくるかな？」

純平「・・・無理に近いんじゃないか？」

28話：結局は同じ（前書き）

28話、参ります！

28話：結局は同じ

輝二は山頂まで辿り着く。

エンシェントグレイモンは、輝二を捉えた。

「ガァァァアアアッ！」

威嚇し、体に炎を纏った。

「おい、拓也！少しでも意識があるなら、返事しろっ！」

輝二は拓也の意識を確認するが、返事は無い。

「完全に制御奪われてるな・・・」

輝二はそれを知り、思わず苦笑いを浮かべた。

「エンシェントスピリット・・・エボリューションッッ！！」

輝二は白いデジコードをスキャンし、十闘士へ進化する。

「エンシェントガルルモン！」

そして、崩れた瓦礫の上に立った。

シャープネスクレイモアを構える。

『まぁ、俺が暴走でもした時は、よろしく♪』

拓也の言葉を思い出し、笑みを浮かべた。

「あぁ、いいぞ。少し切り傷が入るかもしれんがな・・！」

エンシェントガルルモンは、そのまま斬りかかる。

本気の決戦が始まった。

「あ、始まったわね」

山の麓（ふもと）にいた皆の中で、泉がそれに気づく。

「おいおい、山が凍ってるぞ」

大の言うとおり、山頂付近が凍り始めた。

「輝二本気だなぁ・・・」

頬をかきながら、輝一は苦笑する。

「呑気だね・・・」

啓人がそれを見て、同じく苦笑した。

「ガァァアアアッ！」

エンシェントグレイモンは炎の竜巻を発生させる。

エンシェントガルルモンは、大剣で斬り裂いた。

今エンシェントグレイモンは、野生の勘が非常に鋭い状況。

下手に突っ込んだりすれば、その勘を頼りに捕まってしまう。

ならば、遠距離からの攻撃が適切であった。

「＜アブソリュート・・・ゼロ＞！」

大剣に光を集中し、冷気と化す。

山頂が凍りついていった。

「ゴァァアアアアアッ！」

エンシェントグレイモンは紅蓮の炎で、それを溶かす。

エンシェントガルルモンは、冷気を炎の闘士に向けた。

「ガァ・・！」

エンシェントグレイモンの脚が凍りついていく。

「ゴァァアアアアアアアアッッ！！」

エンシェントグレイモンは炎を纏い、氷を溶かして砕いた。

「相性が悪いか・・・」

冷気では太刀打ち出来ないと悟り、仕方なく剣を構える。

「近づきたくは、ないんだが・・・」

エンシェントガルルモンは溶岩に対する処置が、準備出来ていない。

あまり怒らせると、溶岩を出される為、

「怒る前に、斬る・・！」

速さを活かし、エンシェントグレイモンの背後に回り込んだ。

そのまま、シャープネスクレイモアで斬りかかる。

「ガァァッ！」

見事エンシェントグレイモンの装甲に、傷をつけた。

すぐに引き、また斬りかかる。

一撃離脱を繰り返した。

「そろそろ決めないと拙いか・・・」

これ以上続けると、エンシェントグレイモンが怒る可能性があった。

エンシェントガルルモンは、剣を構え態勢を低くする。

足を踏み切り、一気に接近した。

「はっ！」

十字に一閃する。

「ガァァ・・・」

エンシェントグレイモンが崩れかけた。

が、

「ゴォォォォォォォォォォォァァァァァァァァァァァァァァアアア

アアアアアッッ！！！」

倒しきれず、怒らせてしまう。

「しまった・・・」

エンシェントガルルモンは、後悔しながら後方へ跳び退った。

こうなるとかなり不利な状況である。

予想通り、溶岩が煮えたぎり始めた。

「ガァァァァッッ！！」

エンシェントグレイモンが溶岩を操り、襲わせる。

「く！」

溶岩を食らっては洒落（しゃれ）にならない為、エンシェントガルルモンは大きく後退した。

避けながら、策を練る。

「仕方ない！」

エンシェントガルルモンは、剣に光を集中させた。

が、先程の量とは比べ物にならない。

冷気も凄まじい。

「＜アブソリュート・・・ゼロ＞ッ！」

冷気で一時的に溶岩を凍結させる。

融解するのも時間の問題だ。

この冷気で、かなり力を削いでしまった。

エンシェントガルルモンは、これが最後の一撃だと覚悟し、斬りかかる。

一閃し、剣を突き出した。

――ザシュッ！

肉を貫く音。

見ると、剣はエンシェントグレイモンの腹を貫いていた。

（しまった！）

集中しすぎて、やりすぎた事に気づく。

エンシェントグレイモンは進化が解け、拓也に戻った。

「か・・は！」

拓也は吐血する。

エンシェントガルルモンは進化を解き、輝二に戻った。

拓也を背負い、その場から離れる。

氷が解け、溶岩が流れ出したからだ。

被害の来ない所まで離れ、拓也の様子を見る。

気絶しているようだが、出血の量は半端無い。

「くそ、俺としたことが・・！」

【泉！】

すぐに魂話を繋ぎ、麓にいる泉に連絡を取る。

【あ、もう終わった？】

【それどころじゃない！風をくれ！】

輝二は泉の風で、麓へ向かった。

下にいた者達は、輝二が視界に入るのを確認する。

「お疲れ～！」

泉がそう言うが、輝二は少し青い顔をしていた。

「すまん、やりすぎた！」

「は？」

輝二は背負っていた拓也を地面におろす。

「って、血ぃ！？」

京がそれを見て驚愕した。

「な、何したの！？」

泉が思わず輝二に聞き返す。

「あ、いや、少々気合いが入りすぎて・・・剣、突き刺した」

「「「「「「「「「「えぇぇっ！？」」」」」」」」」」

何名かが声を張り上げた。

「と、とにかくこいつに火を！」

輝二は拓也を指差す。

「火ぃ！？何で！」

「いいから！」

意味不明な太一に、泉が強引にそう促した。

「ア、アグモン！」

太一はアグモンを呼ぶ。

「＜ベビーフレイム＞ッ！」

アグモンは拓也に火球を放った。

――ゴォォッ！

拓也の体に炎が纏われ、大きくなる。

「足りない。まだだ」

それを見て、輝二が促した。

「「＜ベビーフレイム＞ッ！」」

「＜ファイアーボール＞ッ！」

アグモン2体とギルモンが、続いて火球を放つ。

炎が更に燃え上がり、拓也の傷口が塞がっていった。

「おいおい・・・化物（ばけもん）かこいつは」

大が思わず呆れて、そう言う。

「ぐ・・！」

拓也が目を覚まし、起き上がった。

「ふぁ～ぁ・・・。あ、おはよ」

「「「「「「「「「「おはよじゃないっ！」」」」」」」」」」

場違いな発言をする拓也に、複数の者が一斉に突っ込む。

輝二は輝二で、何処まで馬鹿な奴なんだ、と呆れていた。

「あ～・・・そういやアポロモンは如何なった？」

拓也は確認を取る。

「お前が倒した・・・。神殿も倒したが」

「へ？」

拓也は輝二の言葉に、山を見上げた。

「あらら～・・・」

山頂の神殿を見て、理解する。

「・・・暴走してた？」

拓也が、もしやと皆に聞いた。

全員が頷く。

「あ、やっぱか。途中から記憶無いんだよな。・・・で、何で俺の服が血だらけなんだ？」

拓也が自分の服を見て、ふと輝二を見た。

「言うとおりに、暴走は止めたぞ」

「あ～なるほど。・・・って、納得すると思ってんのかぁぁぁっっ！！」

拓也は龍魂剣を装備し、輝二に斬りかかる。

輝二もリヒト・シュベーアトを握り、迎え撃った。

「お前の言うとおりにしたんだがな」

「んで何で血だらけになる!?」

「少しやりすぎただけだ」

「それが悪いんだよっ!!」

喧嘩が始まる。

「「「「はぁ・・・」」」」

いつもと大して変わらない光景に、泉達はため息を吐いた・・・。

28話：結局は同じ（後書き）

大「あいつら、仲良いのか悪いのか分かんねぇな」

啓人「喧嘩する程、仲が良いって言うから・・・良い、のかな？」

大輔「あいつらに限っては、そのことわざ使えねぇだろ」

太一「そうかもしれないな・・・。まだ喧嘩してるし」

拓也「突き刺す事ぁねぇだろ！突き刺す事ぁっ！！」

輝二「お前がそもそも制御権を失うからだな・・！」

２９話：喧嘩の最後は（前書き）

はい、まだ拓也と輝二の喧嘩は続いております・・・。

２９話、参ります！

29話：喧嘩の最後は

「だぁかぁらぁっ！何で腹ぶち抜くかって聞いてんだよっ！」

「お前そう言うが、溶岩相手に如何しろと・・！」

拓也と輝二は歩きながら言い合っている。

因みに拓也の上の服は、そこら辺の川で洗った。

後は火を使って乾かした為、ある程度血は落ちている。

「次は何処です？」

「オリンポスは倒したから・・・」

その後方では、光子郎と純平、トーマ、丈、賢といった頭脳系メンバーが集合して、この先の目的地を考えている。

「大体お前が制御権を失うからだな・・！」

「仕方ねぇだろ！スピリットが怒るんだからっ！お前あの怒り経験無いだろ！？こっちが意識保つのでも精一杯だこの野郎がっ！」

「お前の精神力が弱いだけだ・・！」

「んだとっ！？」

切りが無く、果てしないこの2人の喧嘩を、大が面白そうに見てい

る。

「よくもまぁ、そんだけの文句が次々と出て来るもんだな」

「兄貴ももっと強くなれば、かなり出てくるぜ！」

「そうか？」

大とアグモンが、笑いあいながらそんな事を言った。

「大、その理屈合わないから・・・っていうか、最悪なんですけど」

淑乃が呆れて額に手を当てる。

「あの2人、いつになったら喧嘩止めるのよ」

後方で歩いていた留姫が、思わず愚痴を漏らした。

「終わらない気がする・・・」

健良がテリアモンを頭に乗せ、そう答える。

「モ～マンタ～イ！」

「何がモーマンタイよ。全然無問題じゃないわ・・！」

留姫が半ばキレかけで、テリアモンに言い返した。

「次に分かっているのは・・・四聖獣だけど」

丈がそう言って眼鏡をかけ直す。

「その前に襲撃がありそうですね・・・」

賢が苦笑して、ギズモン達を思い出した。

突如、あの2人が喧嘩を中断する。

「グルルル・・！」

ギルモンも野生の勘丸出しだ。

「まさか・・！」

賢がもしやと、大空を振り仰ぐ。

「こんな時にぃ！」

拓也は怒りで正常な判断が出来ず、すでに龍魂剣装備だ。

ギズモンＡＴの群れが視界に入るなり否や、エンシェントグレイモンの翼で飛び上がる。

「悪いが今は喧嘩中なんだよっ！襲撃は後にしやがれ！」

敵にそんな事を言いながら、馬鹿力で斬り裂いていった。

「あいつはまた勝手な事を・・！」

輝二がその手に、リヒト・シュベーアトを握る。

地上付近まで降りてきたギズモンを斬り、それを足場に上へ駆け上がった。

「えっと、ギズモンはあの2人に任せて・・・」

純平は呑気にもそう言い、また地図と向かい合い考え込む。

「任せて良いのかい？かなり怒ってるようだが・・・」

トーマが流石に心配し、戦闘を見ながら純平に問いかけた。

「あいつら、喧嘩しても根性は変わらない奴等です」

純平がちょっとした笑みを浮かべ、輝一が頷く。

「さっきみたいに言い合ってても、ちゃんとお互いに背中を預けてたりするんだよなぁ」

輝一の言うとおり、拓也と輝二は背中合わせに剣を振り回していた。

「おぉぉぉっ！」

拓也が龍魂剣で、ギズモン1体を縦に切断する。

「はっ！」

輝二も十字に斬り裂き、残りは1体だけとなるが、思わず2人は足

を止めた。

――――

ギズモンXT

世代不明。種族不明。技不明。

――――

「な、何だこいつ・・・。大！こいつがXTって奴か！？」

拓也が、一回り巨大なギズモンを見ながら、大に確認を取る。

「あぁそうだ！固くなってるし動きも早いから、気ぃつけろ！」

大がコクリと頷き、注意を促した。

「お～し、輝二に対して溜まってたストレス、全部吹き飛ばしてやるっ！」

「それはこっちの台詞（セリフ）だ！」

2人は言い合いながらも、同じ速度で斬りつける。

――ガキィンッ！

「な！？」

「ぐ・・！」

ギズモンの装甲は固く、鈍い衝撃が両腕を駆け抜けた。

一瞬腕が痺れ、言う事を聞かなくなる。

それが分かっているのか、ギズモンは2人に光線を発射した。

「おわっ！」

狙われたのは、好戦的であった拓也。

ギリギリで回避し、直撃は避ける。

「危ねぇなおい！」

思わず、ギズモンに愚痴を言い返す拓也。

「＜炎龍撃＞！」

燃える紅蓮の刀身を発射し、ギズモンに直撃させた。

が、ダメージは見られない。

「これで無傷だと・・・流石にへこむぞ」

拓也は苦笑いを浮かべ、新たな刀身を出現させる。

「おい輝二！策あるか！？」

「・・・あるにはある」

「教えやがれ！協力してやるから！」

それを聞いた輝二は、思わず笑みを浮かべた。

「本当、いちいちムカつく言い方をする馬鹿（やつ）だな・・・。良いだろう。ただし、背中は互いに預けるぞ」

「へっ、了解！」

輝二の返答に拓也はニヤリと笑い、２人は散開する。

策の内容は魂話で伝えた。

「珍しく大雑把な作戦だな、輝二にしちゃ」

「悪かったな」

２人はギズモンの光線を避けながら、呑気に会話する。

「ほんじゃまぁ、作戦実行！」

拓也はギズモンの正面で、龍魂剣に炎を集中させた。

これでは、当てて下さいと言ってるようなもの。

ギズモンはすぐさま光線を発射する。

根拠も無しに、わざわざ正面で力を溜める程、拓也は馬鹿じゃない。

背中を守る相棒がいるから、出来る芸当だ。
拓也が信じた通り、拓也とギズモンの間へ輝二が入り、光剣でレーザーを弾く。
「だぁりゃぁぁぁっ！」
拓也は輝二を抜け、ギズモンに斬りかかる。
勿論、龍魂剣には溶岩を纏わせて、だ。
――ジュォォッ！
斬れなくとも、溶岩で溶かす。
輝二も、垂れる溶岩を食らう可能性は十分あった。
が、そこは拓也を信じ、完全に任せる。
何処を通ってギズモンに接近するか、なんて細かい作戦はしてない。
拓也も輝二の期待に応え、通過して見せた。
「フ・・・」
輝二はそれを見て、軽く笑みを浮かべる。
「何だよ？」
拓也が機嫌悪そうに返してきたので、

「別に」

誤魔化す輝二。

納得のいかない拓也だが、ギズモンのデジコードを回収した。

「何だかんだ言っても、結局は仲直りするんだからなぁ」

輝一がそれを見て、苦笑いを浮かべる。

因みに、拓也と輝二の喧嘩は終わっていたとか、終わっていなかったとか・・・。

29話：喧嘩の最後は（後書き）

泉「素直じゃないのよねぇ・・・」

淑乃「素直じゃないから喧嘩するの？」

泉「素直だったら、率直に謝るじゃない？」

淑乃「それもそうね」

留姫「最初からそうして欲しいわ・・・」

空「でも・・・2人ともあの性格だしね・・・」

ヒカリ「素直になるのは、ちょっと・・・」

京（ちょっとじゃないと思うんだけど・・・）

ミミ「男の子は元気が一番♪」

泉「すごいポジティブ思考ですね・・・」

３０話：締めて終われ（前書き）

この章は３０話で終わりですね。

タイトルの意味、最後で分かりますよ・・・。

では３０話、参ります！

30話：締めて終われ

「で、何処になったんだ？」

拓也が、目的地が決まったであろう頭脳系メンバーに、声をかける。

只今、目的地は特に無いのだが、とりあえず南へ移動中だ。

「んにゃ、まだ決まってない」

純平は拓也の言葉に首を振る。

「一応四聖獣のもとへ向かう方針で、話し合ってるんだが・・・」

「その四聖獣も、推測の場所でしかない」

「ですから何処から向かうのが適策か、それが問題なんです」

トーマ、丈、光子郎が順を追ってそれを説明してくれた。

「な、なるほど・・・」

（かなり考えてるな・・・）

拓也はそこまで考える事ないだろ、と思いながらも頷いておく。

「別にどっからでも良いけどな」

「スーツェーモンの攻撃なら・・・あらかた分かるけど」

啓人が、如何でも良さそうな拓也の隣でそう言った。

「あ、そうでしたね。ではスーツェーモンをまずの目的地で、よろしいですか？」

光子郎が啓人に言われて思い出し、他の者に確認する。

トーマ達も異論は無いようで、コクリと頷いた。

「皆さん、目的地が決定しました！」

光子郎は周りの皆に伝える為、声を張り上げる。

「マジか？何処なんだ？」

大が興味を示し、聞き返した。

「四聖獣のスーツェーモンがいるであろう場所、‘火山’です」

「火山か！」

大は燃えてきたぜ！と拳を握る。

「か、火山・・！？」

対して友樹は青い顔をしていた。

「はは、安心して。友樹は見てるだけでも良いから。こんだけ人数がそろってるんだし」

泉が、友樹の帽子を軽く叩いて励ます。

それを聞いて、心底安心する友樹であった。

「ん～・・・」

何やら、拓也が珍しく考え込んでいる。

「なぁ、確か火山って大陸が・・・」

拓也はそう言いながら、純平に向き直った。

「お、よく覚えてたな。・・・明日は雨か」

「何故そうなる!?」

純平のしらけた反応に、思わず突っ込む拓也。

「冗談。拓也の言うとおり、火山は別の大陸だ。如何する?」

「ひとっ飛び!」

純平の問いに拓也がそう叫ぶ。

「・・・・・。誰か大人数運べるデジモンいる?」

純平はそれを聞いて少し考え、皆に確認した。

「は～い!」

元気良く、ブイモンが手を上げる。

「インペリアルドラモンに進化したら、デジタルワールドの果てまで連れてってやるぞ！」

インペリアルドラモンの大きさを思い出し、全員がなるほど、と納得した。

「でも2チームだぞ」

大輔がそこで突っ込む。

大輔達と太一達は、インペリアルドラモンに決定する。

「俺達は・・・」

大が少し考え、イクトを見た。

「ヤタガラモンだ！」

イクトもコクンと頷いて、ファルコモンを見る。

「それは止めてくれ。せめて究極体で頼む」

トーマが青い顔をして拒否した。

「・・？ヤタガラモン、大きい。全員乗れる。何故だ？」

イクトが納得いかないような顔で、トーマに聞き返す。

「はぁ・・・。次の大陸までどれくらいなんだい？」

トーマが確認するように、純平に問いかけると、

「大体・・・４千キロ」

「やはりそんなところか・・・。ヤタガラモンでは体力が持たない。だから究極体でないとダメだ」

トーマが予想通りの答えに頷き、イクトにそう言う。

「むぅ・・・」

イクトは役に立てず腹が立ったのか、頬を膨らませた。

デジタルワールドに住んでいても、ある程度の感情はある。

最初は頑固で言う事を聞かなかったのだが、仲間になり、大の影響が出た。

突撃思考の影響だ・・・。

「よぉし、だったらシャイングレイモンでどうだ！」

「・・・大、デジソウルは出せるのか？」

「う・・・」

拳を握る大だったが、トーマの一言で撃沈。

大はデジモン、もしくはデータ状の物を殴らなければデジソウルが出現しない。

かと言って仲間を殴る訳にもいかなかった。

「残るは・・・」

淑乃がガオモンを見る。

ロゼモンは人を運ぶほど、体が大きい訳じゃない。

せめて1人が限界だろう。

それはレイヴモンにも当てはまる。

無理な者を削除して、残った者はガオモンだ。

「まぁ、何とか・・・。4千キロ、頑張りましょう」

ガオモンはコクンと頷き、決定する。

「えっと、じゃぁ僕たちは・・・って自分で進化すれば良い話か」

考え込もうとしていた啓人がそれに気付き、思わず苦笑した。

「李君、お願い出来るかな？」

啓人が巨体のセントガルゴモンを思い、健良に頼む。

「OK。任せてよ」

健良は快く受け入れた。

これで啓人達も決定した訳だが・・・。

「誰が行くよ?」

拓也達は悩んでいた。

「究極体になっても・・・特に大きい奴はいないからな」

輝二も、そこで悩み続けている。

超越形態でも、体力が持つか微妙なところだ。

もし持たなくなり、海に落ちては困る。

「もういっその事、スサノオモンになれば話が早いんじゃない?」

泉が拓也達に提案した。

「・・・それしか無いな」

拓也も頭をかきむしり、決定する。

あれだと6人が1人になる訳で、特に問題も無い。

「目的地は、火山がある南の大陸!・・・方角、どっちだ?」

拓也が締まり良く言うのかと思ったが、生憎そうではないらしい。

気の抜けた終わり方に、数名がずっこけた・・・。

30話：締めて終われ（後書き）

大「ほんっと締まり悪いよなぁ。そこは漢らしく決めろよ！」

拓也「難しいんだよ！締まりが悪くてすみませんね！」

大「漢はビシッと決めるもんだぜ！？」

拓也「だ・か・ら！難しいって言ってるだろ！？」

淑乃「珍しいわね。あの2人で喧嘩なんて」

トーマ「やかましいのは変わらないが・・！（怒）」

イクト「大、喧嘩したがる。あれ、良い事なのか？」

淑乃・トーマ「「良くない事だ（よ）」」

３１話：知らぬ孤島（前書き）

知っている方は知っている、あの話です。

タイトルで閃く人は多いと思いますが、内容は少し違いますのであしからず・・・。

では３１話、参ります！

３１話：知らぬ孤島

一行はそれぞれ進化して、広大な海の上空を飛行していた。

約２５００キロ程進んだ辺りで、異変が起こる。

急に霧が出始め、お互いの姿が危うくなった。

「全員ストップッ！」

トーマが声を張り上げる。

「皆いるか！？」

この状況はかなり拙い。

隣にいる者の姿も、ぼやける程の霧だ。

「俺達は全員いるぞ～！」

「同じくで～す！」

大輔と啓人の声が響く。

「スサノオモンは？」

大が辺りを見回すと、

「問題無い。ここにいる」

スサノオモンは、ミラージュガオガモンの近くにいた。

その事に安堵するトーマ。

（しかし如何する？このままでは、いつ迷ってもおかしくない）

ふと考え込んでいた時だった。

霧が大気に溶けるよう、消えていく。

眼下に１つの島が見えた。

「島？さっきは無かったのに・・・」

啓人が首を傾げ、不思議に思う。

「変だな・・・。地図にこんな島は・・・」

トーマも純平が持っていた地図を思い浮かべ、疑問を抱いた。

「こんな島、見た事無いぞ・・！」

「何！？」

スサノオモンの一言で、一気に考え事から引きずり出されるトーマ。

スサノオモンは進化を解き、拓也達に戻る。

拓也は翼を出現させ、飛行した。

泉は風を操り、輝二達を浮かせる。

拓也は迷わず島へ向かった。

「あ、ちょ・・！」

泉が止めようとするが、拓也は無視して降りていく。

「あ～もう！あの馬鹿は！」

泉がそう言った途端、

「誰が馬鹿だってっ！？」

拓也が振り向いて拳を握った。

「そこは反応するのね・・・」

拓也の反応に、思わず苦笑いを浮かべた泉である・・・。

一行は島に着陸した。

着陸地点は森の端だったが、島の中央に巨大な活火山が見える。

「お、火山か」

それを見た拓也が、笑みを浮かべた。

「どうせなら噴火して欲しいなぁ・・・。なんて」

「すごい事言ってるわよ」

拓也の呟きを聞いた淑乃が、泉に声をかける。

「もう・・・ほっといて下さい」

泉は返す気にもなれず、額に手を当て呆れ果てた。

「ん～・・・」

純平は地図を見ながら、首を傾げる。

その間、デジモン達は進化を解いて成長期に戻った。

「あるかい？」

トーマが地図を覗き込みながら、純平に島を確認する。

「おっかしいなぁ・・・。島なんて無いんだけど・・・」

地図には海しか描かれていない。

思わず頭をかく純平。

「別に良いじゃねぇか！新しい島って事でよ！」

大は完全にプラス思考だ。

「とりあえず・・・住人を探そう」

「事情も聞きたいし・・・」

トーマと純平が相談し合い、皆にそう促す。

「へ～い」

大は探すという作業を好まないのか、適当に返した。

その後、約1時間の探索の末、やっとの思いで住人を発見する。

それは森を横断したその先に点在する、村の住人だった。

トーマと純平、光子郎、丈、賢が話を聞いてまわり、大まかな情報を得る。

「はぁ・・・つまり、島の名は‘古の孤島’で・・・」

「島の周りは濃い霧が覆い、この島に辿り着いた者は少なく・・・」

「島の住人は外の大陸に出た事が無い為、島の歴史しか知らない、と・・・」

「しかも昔からの争いが、まだ続いてるって訳か・・・」

トーマ達の収拾情報をまとめ、拓也、太一、大輔、大が納得した。

「昔からの争いって何？」

啓人が拓也に尋ねる。

「あ、そういやまだ話してなかったっけ・・・。このデジタルワールドは、かなり昔に戦争があったんだよ。人型のデジモンと、獣型のデジモンとがな」

「へ～・・・そうなんだ」

拓也の大まかな説明に、啓人は頷いた。

（よくあの説明で理解出来るな・・・）

その後ろでは、輝二が啓人の理解力に感心している。

否、逆に言えば、拓也の説明力に呆れているのだ。

「如何する？ここにいても得は無いぞ」

輝二が思考を切り替え、純平に問いかける。

「そうだなぁ・・・」

純平が考えている時だった。

――ズズズズ・・！

地響きが大地を襲う。

「お、噴火か!?」

何故か嬉しそうな拓也。

「違う・・!これは!」

トーマが拓也の言葉を否定し、火山の手前にある荒れた大地を指差した。

「な、何だありゃ・・・」

それは誰が呟いた言葉だろうか。

大地の上では、多くのデジモン達が技をぶつけ合い、争っていた。

「ここでする事ないだろっ!」

大が流れ弾を拳で弾きながら、愚痴を叫ぶ。

「同感!」

拓也も龍魂剣で、飛んで来るエネルギー弾を斬り裂いた。

「これ、止めた方が良かったりするの?」

留姫がカードを取り出し、啓人に確認する。

「えっと・・・僕に聞かれても・・・」

啓人は分からず、苦笑した。

「まぁ、そうよね」

留姫は当然だとばかりに、頷く。

が、その反応に啓人はひどいなぁ、と呟いた。

「出来れば止めて欲しいの」

すると、背後から声が聞こえる。

振り返ると、杖を持った老人のようなデジモンがいた。

ジジモン

究極体。エンシェント型。必殺技は＜ハング・オブ・デス＞

情報もこのジジモンから聞いたのだ。

「流石に村のそばで争われると、こっちも困ってのぉ」

「そういう規模の問題じゃないと、思うんだけどなぁ・・・」

ジジモンの軽い理由に、岳が苦笑いを浮かべる。

「まぁ、よろしく頼むぞぉ」

ジジモンはそう言い残し、腰が痛いとか呻きながら、自分の家へ帰って行った。

「何故こうなるんだ・・・」

トーマが額に手を当て、原因は何かと記憶を探る。

が、答えは出て来なかった。

後悔するが、拓也と大はやる気満々である。

「よぉし、一網打尽に行くぞ！」

「売られた喧嘩は、買うのが漢だ！」

それを聞いた泉と淑乃は、顔を見合わせため息を吐いた。

「倒せぇっ！獣型は必要無いっ！」

「そういう人型もいらない！デジタルワールドは獣型の世界だっ！」

「「倒せぇっ！！」」

人型と獣型の司令と思われるデジモンが、同じ仲間に叫ぶ。

「「「「「「「「「おぉぉぉ～～っ！！」」」」」」」」」

」」

「「「「「「「「「「「「「ガァァァァッ！！」」」」」」」」」」」」」

」」

人型のデジモンは掛け声を上げ、獣型のデジモンは野生の本能を露わにした。

――ズドォォォンッ！ドガァッ！ドゴォォォンッ！！

至る所から爆発音が木霊する。

大地が戦場へと一変した・・・。

31話：知らぬ孤島（後書き）

拓也「戦争中に噴火したら如何するよ？」

大「そりゃ・・・仕方ねぇから、撤退だろ」

拓也「え～っ！？撤退すんのか！？俺は平気だぞ！」

大「お前だけだろっ！」

３２話：言い合いは後日（前書き）

あまり場面が進んでません・・・。

タイトルでお分かりになるかと・・・。

では３２話、参ります！

32話：言い合いは後日

「ごちゃごちゃするのは気に食わねぇ！拳で語りゃぁ良いんだよっ！」

大が出鱈目な理屈を言い放ち、拳を握る。

「微妙だけど、賛成だ！」

拓也も龍魂剣を肩に担いだ。

「如何やって争い止めるんですか、太一先輩」

大輔が確認の為、太一に問いかける。

「あの2人に任せれば良いだろ」

笑いながら太一がそう答えた。

「ま、任せるって・・・」

それには流石の大輔も唖然とする。

「冗談」

「目が冗談じゃないですよ・・・」

「・・・そうか」

珍しく鋭いな、と心で呟く太一。

「噴火したら・・・手っ取り早いよな」

「まさか噴火させるとか・・・言わねぇよな？」

拓也の呟きに不安を抱く大は、思わず問いかける。

「ん～・・・頑張ったら噴火出来ると思う。あれ活火山だし・・・」

「おま、正気か！？」

「正気だ！」

「んじゃ噴火させるとか、寝ぼけても言うなよっ！」

「じゃぁ何か！？俺が寝ぼけてるとでも言いたいのか！？」

「そうとしか思えねぇだろうがっ！」

勝手に言い合いを始める拓也と大。

「やかましいっ！」

そんな2人に、泉がかかと落としが炸裂する。

「「へぶっ！」」

頭を抱えてうずくまる2人。

「何すんだよ！」

「蹴る事ぁねぇだろ！」

反論する拓也と大だが、

「あら、じゃぁ殴られたい訳？」

泉はそう言いながら、２人の頭を手で押さえつける。

グリグリと手首をひねって、髪をグシャグシャにした。

「ちょ、やめっ！」

「痛ぇっ！」

身長が縮む思いをしながら、抵抗しようとする。

「おぉ～、泉ちゃん強い！」

大が無抵抗なのを見て、淑乃が拍手した。

「あの大が押されてるなんて・・・。何者なんだい？」

トーマが呆然として、純平に尋ねる。

「格闘技が得意なただの外国人・・・と思いたいです・・・」

純平は頭（こうべ）を垂れて、そう願った。

「はい、シャキッとする！」

泉は2人を無理矢理、起立させる。

「ったくよ～・・・」

「背が縮むかと思った・・・」

大は腰を叩き、拓也は頭をさすった。

「それで、如何やって止めるの？」

啓人が話を切り替え、方針を確認する。

「だから火山を――」

「「「「「「「「「「もういいっ！」」」」」」」」」」

拓也が言いかけたのを、複数の声が遮断した。

「あ、そ・・・」

拓也も流石に諦め、龍魂剣を地面に突き刺して支えにする。

「って言ってるうちにも争いが続いている、という事はお忘れなく」

輝一が戦場から飛来してくる流れ弾を、槍で斬り裂いた。

「・・・つ～か何であいつらは争ってるんだよ」

大が面倒くさそうに、そう呟く。

――ズズズズ・・！

再び地響きが大地を襲った。

「また！？」

「いや、これさっきと違うぞ！」

皆が驚いている中、拓也は火口を見つめる。

――ドクンッ

拓也の心臓が高鳴った。

人間としてではなく、炎の闘士として・・・。

「噴火だ・・・」

拓也は知らぬ間に呟いていた。

「はぁ！？お前何かやったのか！？」

大がその呟きを聞いて、思わず聞き返す。

「してねぇよっ！」

拓也は怒りのマークを浮かべ、叫び返した。

――ドドドドッ！

地響きが更に激しくなり、争っていたデジモン達も動きを止める。

ついに火山が噴火した。

溶岩となったマグマが流れ出し、燃える岩が飛来する。

「――――ッ！！」

聞こえるような、聞こえないような、とても小さな咆哮が木霊した。

何かに遮られて、その声が小さくなっている。

「・・？」

丁度魂広していた拓也の耳が、その咆哮を捉えた。

（気の所為か・・？）

あまりに小さな声だった為、幻聴かと疑う。

が、溶岩が流れて来るのを見て、すぐに龍魂剣を構えた。

「溶岩と対峙すんのは、これで2回目だな！」

拓也は地面に突き刺した龍魂剣を引き抜き、もう1度正しく刺し直す。

「＜九頭龍陣＞ッ！」

９匹の炎龍が、溶岩へ向かった。

だが、前と同じく溶岩に吸収される。

「あ～・・・やっぱ究極体に進化しないといけないのか・・・」

拓也はそう言いながら、腹をさすった。

「・・・如何した？」

輝二が拓也に尋ねる。

「いっや～・・・何かトラウマが・・・」

腹を剣で突き刺された事は、正直言ってよく覚えていないが、それでも何かと痛みが走った。

「まぁ戒めにもなって良いんじゃないか？」

「お前が刺したんだろ！」

輝二の言葉に言い返す拓也。

「文句は受け付けないな」

輝二はサラリと受け流す。

「友樹、絶対零度で如何にか・・・って」

泉が友樹に視線を向けると、友樹は熱さで疲れ果てていた。

「はぁ・・はぁ・・。ご、ごめん。無理・・・」

友樹は眼を回して倒れ込む。

「あら～・・・」

泉は苦笑しながら、友樹の体を起こした。

友樹の頭上に星が見える。

気の所為だとは思うが・・・。

そんな事をしているうちに、溶岩は流れて来る。

デジモン達は流石に争いをやめ、散っていった。

「ガブモン、出来るか？」

ヤマトはガブモンに尋ねる。

ガブモンの究極体であるメタルガルルモンは、冷気を放つ事が出来る為だ。

「な、何とか・・・」

ガブモンは毛皮を着ている為か、少し汗をかいている。

「よし、ならいくぞ！」

ヤマトのデジヴァイスが異常の輝きを放った。

「ガブモン、ワープ進化っ！・・・メタルガルルモン！」

メタルガルルモンは近くの岩に跳び乗り、息を吸い込む。

「<コキュートス・・・ブレス>ッッ！！」

広範囲に冷気を放ち、一部の溶岩を凍らせた。

が、新たな溶岩に溶かされる。

「友樹が倒れたっていうのは痛いわね・・・。吹雪を呼んで欲しかったのに」

ピヨピヨと眼を回す友樹を支えながら、泉が歯を噛み締めた。

「あり？だったら、友樹に冷気をかければ良いじゃんか」

拓也が今更気づいたように、そう言う。

「「「「「「「「「あ・・・」」」」」」」」」

皆もその言葉に一瞬、呆然とした。

「メタルガルルモン！」

「あぁ！」

ヤマトの声で、メタルガルルモンが戻って来る。

「友樹起きなさい！冷やしてあげるから！」

泉が友樹をガックンガックン揺らして、無理矢理起こさせた。

「泉も優しくねぇじゃんかよっ！」

前に言われた事と、している事とが矛盾している泉に、拓也が思わず突っ込む。

「非常事態なんだから仕方ないでしょ！」

「言い訳かっ！？」

「やかましい！」

「ぅ・・・」

何故か言い返せない拓也。

（女って怖ぇ・・・）

それを見ていた大が、心に奥底で呟いた・・・。

32話：言い合いは後日（後書き）

拓也（何で女ってあんなに怖ぇんだ・・？）

大（淑乃もたまに怖ぇしなぁ・・・）

泉・淑乃「「・・・」」

泉「何かすごいムカつくわ・・・」

淑乃「同じくよ。何でかしら・・・」

拓也・大「「き、気の所為だろ・・・」」

33話：無理ではない（前書き）

33話、参ります！

33話：無理ではない

友樹は泉の出鱈目な起こし方で、余計に頭が混乱する。

星だけでなく、ヒヨコまで見え始めた。

「あちゃ～・・・ちょっとやりすぎた」

泉もそれに気付き、苦笑いを浮かべる。

すると意識を取り戻した友樹は、首を振って視界を安定させた。

「うぅ・・・何か気持ち悪い・・・」

「吐かないでよっ！？」

青白い顔をする友樹に、泉が慌てる。

「急げ！すぐそこまで来てるぞ！」

輝二が溶岩を見ながら、注意を促した。

泉は友樹から離れる。

「＜コキュートス・・・ブレス＞ッ！！」

メタルガルルモンが友樹に冷気を吹きかけた。

友樹は瞬時に同調し、冷気を纏う。

みるみる元気を取り戻し、顔色も良くなる。

「うん、いける！」

そう言って、右手に水色のデジコードを出現させた。

「エンシェントスピリット・・・エボリューションッッ！！」

水色のデジコードは渦を巻き、巨大化する。

思わず皆も距離を取った。

「エンシェントメガテリウモン！」

巨大な角を持つ冷獣が姿を現す。

エンシェントメガテリウモンは天を見上げた。

大空はそれを待っていたかのように、雲に覆われる。

「ヴォォォォォォォォォォオオオオオッッ！！！」

エンシェントメガテリウモンが吼え、吹雪が呼ばれた。

「呼んで欲しかったけど・・・いざとなれば寒いわね・・・」

泉は手で腕をさすり、温める。

溶岩は凍りついていき、火口まで凍てつく冷気が昇り詰めていった。

「――――ッッ！！」

「ッ！？」

再びあの雄たけびが聞こえ、拓也は火口を見上げる。

（気の所為じゃ・・ない・・！？）

耳を疑ったが、咆哮は聞こえた。

確かにこの耳へ入ったはず。

「いや、でもなぁ・・・」

拓也は考え込み、額に手を当てた。

（気の所為じゃないとしたら・・・誰が吼えてるのかって事になるけど・・・）

もともと考えるという事が苦手な拓也は、眉間にしわを寄せる。

その間に、火口が完全に凍りついた。

「――――ッ・・・」

咆哮の声はそれと同時に小さくなっていき、最終的には聞こえなくなる。

その事に拓也は閃いた。

「・・・いや、まさかな」

が、いまいち自信が持てず、その考えは切り捨てる。

エンシェントメガテリウモンが進化を解くと同時に、吹雪が止んだ。

それでも氷は溶けない。

「相変わらず・・・すごい冷気だな」

輝二は長袖を着ていた為、それ程寒くはなかったが、それでも冷気は感じた。

「えへへ～」

友樹は照れて帽子を深くかぶる。

デジモン達の姿は無い。

如何やら争いは中止のようだ。

『噴火したら・・・手っ取り早いよな・・・』

「マジで拓也の言った通りに、なっちまった・・・」

大は拓也の呟きを思い出し、呆然とする。

「おぉ～、やってくれたかの！」

するとジジモンがこちらへ歩み寄って来た。

「あ、いや・・・」

トーマが微妙な心を抱く。

別に誰が噴火させたという訳でもなく、勝手に火山が噴火した訳であり、一同は溶岩を止めたというだけだった。

「と言っても、また争い事はやるじゃろうがな。フォッフォッフォ！」

軽快に笑うジジモンだが、何故そこまで余裕なのかが分からない。

今までの人生から生まれる余裕なのか、それとも危機感を持っていないだけなのか・・・。

（微妙だなぁ、このじいさん・・・）

大も、如何反応して良いのか分からず、ただ呆れた。

「何処のどなたかね？」

すると、今度は箒のような杖を持った、老婆のデジモンが現れる。

ババモン

究極体。エンシェント型。必殺技は＜エンプレスヘイズ＞

（ジジイの次はババアかよ・・・）

思わず心の中で突っ込む大。

「む・・・」

ババモンはちらっと大を見たが、すぐに視線を戻した。

「何やってんだい？あんた」

「いやのぉ、この者達に頼み事をしておってなぁ」

「あんた人に頼む前に、自分でやってみれば良かろうに」

「何言っとるんじゃ。こんな年寄りに何が出来ると言うんじゃ婆さん」

夫婦でしゃべり始める2人。

「・・・他行くか」

それを見ていた者達の心を代表して、拓也がそう呟いた。

一行は、先程いた村とは、火山を挟んで反対側の村に来ている。

向こうの村も人気（ひとけ）が少なかったが、こちらも同じく人の気配が無い。
完全に無いという訳ではないが、ほとんど感じない。
「旅人とは・・・珍しい」
1体のデジモンが現れる。

クロスモン
究極体。巨鳥型。必殺技は＜ミスティックブレイク＞

黄金の装甲に身を包む、翼を持った鳥のようなデジモン。
「先程あの火山が噴火しよったが・・・止めてくれたのはお主らか・・？」
クロスモンがそう問いかけて来る。
「えと・・・まぁ」
拓也はとりあえず頷いておいた。
「そうか、礼を言う。火山が噴火したおかげで、あやつらの争いも収まりよった」

クロスモンはそう言いながら、遠くで闘志を燃やす獣型デジモン達を見る。

「向こうの村もこちらと同じく、老人や子供は争い事に興味は無い。我もその1人だ。争いなどくだらん事をしおって・・・」

クロスモンは哀れな者を見るように、悲しい声でそう言った。

一同も、島の者全員が争いを好んでいる訳ではない事を知り、少し安堵する。

「あのさ――――――って事ある？」

拓也はふと思い出し、皆に聞こえない程度の小さな声で、クロスモンに耳打ちした。

「そのような事は、聞いた事が無いな。噂程度の物も含めてだが・・・」

「あ、やっぱそうか・・・」
（気の所為だよなぁ・・・）

拓也はクロスモンの返答を聞いて、苦笑いを浮かべて頷く。

「だが、我は普段外に出ん方でな。最近の話には疎い。完全に否定は出来んぞ」

「ん～・・・分かった。ありがとう」

とりあえず可能性がゼロではない、という事を聞いて一応記憶に留

めておく拓也。

「何の話だ?」

輝二が不信に思い、拓也に尋ねると、

「あ、いや、こっちの話」

拓也は苦笑してそう誤魔化す。

(あり得なくは・・ない、か)

クロスモンの話を聞いて、思わず闘志が煮えたぎる拓也であった・・・。

33話：無理ではない（後書き）

拓也「ん～！燃えてくるねぇ！」

輝二「だから何の話だ・・・」

拓也「お前にゃ関係ない！」

輝二（いちいち感に触る奴だな・・！）

拓也「あり？怒ってらっしゃる・・・」

輝二「あぁ、正解だ！」↑リヒト・シュベーアト装備

泉「やかましいっ！」↑拓也にかかと落とし＆輝二に裏拳

３４話：格闘技を知れ（前書き）

今回は・・・泉？

では３４話、参ります！

３４話：格闘技を知れ

一同は、争いが収まり特にする事も無くなった為、クロスモンがいる村に留まっていた。

「奴等を今度こそ倒し、我等が勝利を掴むぞっ！」

今だ諦めていない獣型デジモンが集まり、闘志を燃やしている。

「あいつら・・・まだやんのかよ」

太一がそれを頬杖突きながら、呆れてため息を吐いた。

「全くだな・・・」

それにヤマトも同意する。

「懲りないよなぁ・・・」

（お前が言うか？）

拓也の呟きに、輝二は心の中で反応した。

「・・・何か言ったか？」

そういう事には勘の鋭い拓也。

「別に・・・」

輝二はそっぽを向いて受け流す。

「この後は如何するんだろ・・・」

啓人が空を見上げながら呟いた。

「モ～マンタ～イ！」

いつもの如く、テリアモンが明るい声でそう返す。

「誰よりもポジティブよね・・・」

留姫は半ば呆れながら、テリアモンの思考回路を疑った。

そんな事は知らず、テリアモンは健良の頭上で笑っている。

――ズズズズ・・！

突如、小規模の地震が大地を襲った。

「奴等かっ！」

獣型のデジモン達が、一斉に殺気立つ。

「これ、噴火にしちゃぁ小さいよな・・・」

拓也は火口を見ながら、頬杖を突いていた腕を伸ばした。

――ズズズズ・・・

地震はすぐに収まる。

「何だったんだよ・・・」

ムスッとした拓也が、火山に向けて愚痴を呟く。

「いかにも噴火して欲しかったです、的な顔してんじゃねぇよ！」

大が思わず突っ込むが、

「はぁ・・・」

拓也は大を無視して、別の方向を見ながらため息を吐いた。

「こんの馬鹿野郎がぁ・・！」

大は怒りのマークを浮かべながら、拳を握る。

――ブチィッ！

が、拓也は今の言葉で完全にキレた。

幻聴は気の所為という事にしておこう・・・。

「誰が馬鹿だぁっ！！」

いきなり龍魂剣を装備する拓也。

「アグモン！喧嘩だ喧嘩っ！」

大もやる気らしい。

「おう！」

アグモンは反論無しに、立ち上がって大の前に来る。

双方睨み合い、火花を散らすのだが・・・。

――ゴゴゴ・・！

2人＋1匹以外に、もう1人怒っている事を忘れてはいけない。

昔デジタルワールドを冒険中、拓也と輝二がよく喧嘩していた。

その際、誰が仲裁に入ったかというと・・・勿論、泉だ。

とは言っても、泉の場合、喧嘩の止め方が強引なのだが・・・。

「あんたら・・・やかましいわっ！！」

泉は、大に回し蹴り、アグモンにかかと落とし。

そして拓也には・・・。

「うおぃ！？」

何故か手刀を作り、目に突きを繰り出す。

拓也は避けようと腰を落とすが、少し遅く額に直撃。

その際、拓也の魂広も解けた。

「「「いってぇ〜っ！！」」」

３人の悲鳴が響く。

「さっきから何度言わせれば気が済む訳！？そもそも何で喧嘩になるの！喧嘩するんだったら向こうでやってくれる！？こっちに被害が出ないように！Ｃａｐｉｓｔｉ（分かった）！？」

「「「「「「「「「「「・・・・・？」」」」」」」」」」」

泉が３人に説教し、最後の言葉で周りの者達が首を傾げた。

が、数人だけ理解出来た者達もいる。

「「イ、イタリア語・・・」」

トーマと賢が呟いた。

「って事は・・・泉ってイタリア人か？」

輝二が泉に確認を取ると、

「Ｃｏｒｒｅｔｔａ！」

ニコリと笑ってそう返される。

輝二は訳を求め、トーマに視線をおくった。

「あ、‘正解’という意味さ」

その視線に気づいたトーマは、意味を答える。

「なるほど・・・」

「って、今まで彼女がイタリア人だと知らなかったのかい？」

「聞いた時は、考えてみろと返された」

輝二はムスッとした顔で、泉に言われた事を思い出す。

『秘密～♪考えてみて～』

「だからって目突きはないだろっ！」

向こうでは、まだ言い合っている。

「あれで気絶された方が、静かなのよ」

「ひどい扱いようだなおいっ！」

泉がサラリと受け流すが、拓也にとっては聞き逃せない。

大は、眼を回しているアグモンの様子を見ている。

「お～い、大丈夫か～？」

大が軽く声をかけた。

「卵焼き～・・・」

「・・・大丈夫じゃねぇな」

アグモンの呟きを聞いた大が、コクンと頷く。

因みに、卵焼きはアグモンの大好物だ。

他のメンバーは、事態が収まってきたのを確認し、それぞれの会話を始めているのだが・・・。

「だぁかぁら！何で目突きなのかを聞いてるんだっ！他にあるだろ！かかと落としとか回し蹴りとかっ！」

「って事は何？して欲しい訳？」

「んな訳あるかぁ！」

今回、拓也の喧嘩相手は泉のようだ。

喧嘩といっても口喧嘩。

そのうち実力行使に入りそうだが・・・。

「ん～・・・」

言い合う泉を見ながら、光子郎がパソコンを起動させる。

パソコンで調べ、もしやと思い泉に声をかけた。

「泉さん、ちょっといいですか？」

「あ、はい？」

喧嘩腰の拓也を無視して、泉は光子郎のもとへ歩み寄る。

「泉さん、もしかして・・・截拳道（ジークンドー）を習ってますか？」

光子郎はジークンドーが表示された、パソコンの画面を向けた。

「あ、よく分かりましたね。そうですよ」

泉は拳を握ってみせ、コクリと頷く。

「やはりですか。目突きをしていたので、そうではないかと思ったんですよ。目突きや喉への攻撃がある格闘技は、ジークンドーが代表的ですからね」

「すごいですね～。それだけで分かっちゃうなんて」

泉は光子郎が座っている岩に、腰を下ろした。

「如何見ても、素人の動きではありませんでしたから・・・」

「あは、ははは・・・」

光子郎の言葉に、泉は苦笑する。

「え～何々？泉ちゃん格闘技出来るの～？」

すると話を聞いた京が、泉に声をかけてきた。

「え、えぇ、まぁ」

いきなりの事と、テンションが高いという事で驚く泉。

「良いなぁ。格闘技出来たら、ダダッと倒せるじゃん」

京は拳を繰り出すふりをして、それを表現する。

・・・素人の素振りだったが。

「ははは・・・ダダッて・・・」

それを見た泉は苦笑して返す。

実際そんなに軽くありません、と思わず心の中で突っ込む泉。

ジークンドーとは格闘技の一種だ。

詠春拳、節拳などのカンフーに、空手、合気道、柔道などのさまざまな格闘技のエッセンスが取り入れられている武道を示す。

機械的な暗記法にとらわれない戦術を重視する。

目突きや喉への攻撃など、効率的に相手を倒す技も多い。

泉は中国の方や、ヨーロッパの方の武術や格闘技も、まとめて使用している。

「それであんなに・・・」

大が押されていたのを思い出したトーマは、泉がジークンドーを身につけている事を知って納得した。

大は普段の喧嘩で、いわば勘で殴りかかっている事に近い。

きちんとした武術を習っている者に勝てるとは、トーマも思えなかった。

（少々無茶はするが・・・）

無茶が無ければ、問題無い――。

という訳でもなさそうである・・・。

３４話：格闘技を知れ（後書き）

やっと出せました、ジークンドー！

デジモンフロンティア～改～から考えてまして、いつ出そうかと悩んでたんです。

いっや～、今回でその思いが・・！

拓也「こいつは何1人で、感動に浸ってんだよ」

大「ほっとけよ、碌な事無いぜ」

拓也「そだな」

竜気「え、ちょっと!?ねぇ、それひどいんじゃないの!?ねぇ!」

拓也「俺達はな!泉の奴に何度も痛い目にあって、ムカついてるんだよっ!」

大「わ～ったか!」

竜気「え、えっと・・・はぃ」↑縮こまる

泉「え?何?呼んだ?」

拓也・大「「呼んでねぇっ!」」

35話：不機嫌（前書き）

35話、参ります！

35話：不機嫌

泉から一撃を食らった2人と1匹は、同じ岩に座って愚痴を呟き合っている。

「んだよ～、相変わらず加減ってものを知らないな。あの怪力馬鹿女」

「怪力馬鹿女、ねぇ。お前さ、他人に馬鹿とか言うのはありなんだな」

「おうよ」

「んじゃさ、自分じゃなくて他人に向けられた馬鹿とかにも・・・キレるのか？」

「あ～・・・分かんねぇな～。もしかしたら反応する時も、あるかも・・・」

「お前ば――っと危ねぇ・・・」

大は思わず馬鹿と言いかける。

「今言いかけただろ」

「んな事・・・・・・・・ねぇよ」

「何だ今の間は！？」

大の遅い返答に、拓也がすぐさま突っ込んだ。

「兄貴は勘で動いてるからな！何でも言っちゃうんだぜ！」

アグモンが笑いながらそう言う。

「アグモンてめっ！」

大がアグモンに跳びかかった。

「何やってんだよ」

（俺まだ何もしてないのに・・・）

流石の拓也もこれには呆れ、心の中で密かに呟いた。

――ズズズズ・・！

突如、地震が襲う。

「お、またか？」

拓也は龍魂剣を手にするが、地震は５・６秒でおさまった。

「あり？」

拍子抜けしてしまう。

すると、村の奥からクロスモンが現れた。

「おかしい・・・。これほど地震が頻繁に起きた事など・・・今ま

で一度も無かったのだが」

「何かの前触れ、とか」

拓也は例えを上げながら、火口を見上げる。

――ズズズズッ！

今度は先程よりも大きい。

「ッ！？」

火口を見上げていた拓也は、目を見開く。

火口から、黒い煙が上がっているのだ。

（噴火・・！？）

拓也は龍魂剣を消し、魂広から同調へ位を落とす。

身体能力を上げた。

「俺、ちょっと見て来る！」

そう言って火山へと走っていく。

「え、ちょ、おい拓也！？」

アグモンといがみ合っていた大が、慌てて追いかけた。

「兄貴！」

アグモンもその後に続く。

それを1人の少女が見ていた。

「大変！」

ヒカリが兄のもとへ走り寄る。

「どした？」

太一が慌てて走って来たヒカリを見て、聞き返した。

「拓也君と大さん、それにアグモンが火山に走っていったの！」

「何ぃ！？」

「「「「「「「「「「えぇ！？」」」」」」」」」」

太一と、周囲にいた者達が驚愕の声を上げる。

「あの馬鹿！」

「また勝手に・・！」

輝二とトーマがそれぞれの馬鹿を思い浮かべ、拳に力を込めた。

「ほっとこ」

泉は特に怒る様子も無く、手をヒラヒラを振る。

「え！？ほっとくの！？」

友樹も意外だったようで、泉に問い返すと、

「もうあの馬鹿の為に騒ぐの、面倒くさくなって」

「え、あ・・・そう」

泉の如何でも良さそうな返答に、友樹も目を丸くした。

「そう・・・だな。そのうち返ってくるだろうし」

輝一もコクンと頷く。

「ん～・・・帰りが遅かったら、迎えに行くかもしれないな」

トーマが頭に手を当て、悩みながらそう言った。

「あ～くそ！邪魔だ！」

拓也達は熱帯雨林に入っていた。

草木が進路を塞ぎ、邪魔をする。

火で燃やして薙ぎ払うという選択肢もあるが、火事になっても面倒なだけだ。

仕方なく歩いて進む。

大1人なら拓也も飛んで運べただろうが、アグモンもいるとなると流石に無理があった。

「兄貴～！焼き払っちゃダメなのか～？」

「ダメに決まってるだろっ！」

アグモンの問いに、大声で返す大。

少し進むと熱帯雨林が終わった。

荒れた大地が坂を作り、火山へと登っていく。

「流石にここまで来ると熱いな・・・」

大が額の汗を拭うが、

「ん？そうか？」

その隣では、同調して平気な拓也がいた。

「お前は良いよな、平気なんだから」

「へっへっへ～」

ムフフと笑う拓也に、やめろと突っ込む大。

「俺一番～！」

アグモンが我先にと、坂を走っていく。

「あ、こら！待ちやがれぇぇっ！」

負けじと大がダッシュして、一気にアグモンまで追いついた。

「・・・」

拓也は少し考え、魂広する。

そしてエンシェントグレイモンの翼を出現させた。

飛び立ち、坂を飛翔していく。

「てめっ、ずりぃぞ！」

「まぁ頑張れ～！」

拓也は走る大とアグモンに、声をおくった。

「「おぉぉぉぉぉっっ！！」」

1人と1匹は気合で登り詰めていく。

飛んでいる拓也と、ほぼ同じ速度だ。

「な、なんつ～速さ・・・」

飛んでいる拓也も驚くが、大とアグモンは立ち止まって息を整える。

「しゃ～ねぇなぁ」

拓也は大に手を伸ばした。

「悪ぃ」

「あ、俺も～！」

「あ、こら！アグモン掴むな！」

大の足にアグモンが掴まり、拓也は2人を持ち上げる。

「重いなお前ら！」

「アグモンだろ！」

「何で俺なんだよ！」

などと言いながら、2人＋1匹は火山の中腹に到着した。

「あ、熱ぃ～！」

大は喉を渇かせて、息が荒い。

アグモンも似たようなものだ。

「如何する？こっからは俺だけで行こうか？」

拓也が思わず苦笑いを浮かべながら、大に確認を取ると無言で頷かれた。

「おぉし！」

拓也は翼を広げ、飛翔する。

「火口は・・・」

上空まで一気に飛行し、火口を直接目指した。

――ボコ、ボコンッ！ボコボコ・・！

火口内ではマグマが煮えたぎっている。

今にも噴火しそうな状況だ。

「オォォォ・・！」

「ッ！？」

あの時は聞こえにくかったが、今ははっきりと聞こえた。

マグマの中で眼光が光る。

「グォォォォォァァァァァアアアアッッ！！」

そして溶岩を身に纏う、竜のようなデジモンが現れた。

――――

ヴォルクドラモン

完全体。竜型。必殺技は＜サークルオブデス＞

――――――

「まさか・・・本当にいるなんて！」

拓也が以前から思っていたのは、この事だ。

火山の中にデジモンがいるのではと疑っていたのだが、クロスモンは知らないという。

違うのかと思っていたが、本当にいたとは思わなかった。

「余（よ）は火山の制御者、ヴォルクドラモン。貴様は何用でここを訪れた」

腹の底に響く、低い声でヴォルクドラモンが問いかけてくる。

「地震が頻繁に起きるから、様子を見に来たんだよ」

「・・・人間か。翼があるとは珍しい。この熱さに耐えられるというのも・・・」

ヴォルクドラモンがそう言った為、拓也は思わず頬をかいて苦笑した。

「火山の制御者って言ったな。何で地震が起きるんだよ」

「単純な理由だ。余が不機嫌なだけだな・・・」

「・・・は？」

予想外な理由に、拓也は素っ頓狂な声を上げる。

「ふ、不機嫌？何処が・・・」

見た所、ヴォルクドラモンに怒っている様子は無い。

表面上に見せないようにしているのか、ただ分からないだけなのか。

「つい先程、深い眠りから目覚めたばかりなのだ。・・・貴様、余と一戦しないか。長い眠りでなまっておって、少々劣るかもしれんが・・・」

「お、戦闘か！？いいぜ！」

拓也は喜んで龍魂剣を構える。

「ククク・・・闘いを望むとは、変わった人間よ・・・」

ヴォルクドラモンは笑みを浮かべながら、その身に溶岩を纏わせた・・・。

35話：不機嫌（後書き）

トーマ「大の奴、また勝手に行動して・・！」

輝二「あの馬鹿も同じだ」

淑乃「私は知らないわよ、好きにして」

泉「私も。輝二、よろしく」

輝二・トーマ「「・・・」」

トーマ「お互い世話の焼ける馬鹿を持つと、大変だな」

輝二「確かに」

３６話：溶岩を身に（前書き）

３６話、参ります！

３６話：溶岩を身に

村にいた一同は、火口に出現した紅き竜をその視界に収めた。

「な、何だあの竜！」

岩に座っていた太一は、驚いて立ち上がる。

突如その竜は、口から溶岩のような炎を吐き出した。

宙にいる何かを狙うように、動きを変える。

輝二は同調し、視力を上げた。

（まさか・・！）

「拓也（あいつ）・・！」

視界に、龍魂剣を構える拓也の姿が映った。

少し視線を落とすと、火山の中腹辺りで大とアグモンの姿も捉える。

「如何するの？行くの？」

啓人が心配したように問いかけると、

「・・・行かなくて良いだろ。あそこは火山だ。拓也が負けるとは思えない」

輝二は頬杖を突き、大丈夫だろうと考える。

留姫がデジヴァイスをあの竜に向けた。

「『ヴォルクドラモン。完全体。竜型。必殺技は＜サークルオブデス＞。ヴォルクドラモンの活動により、火山の噴火が起きると言われている。普段は穏やかだが、機嫌が悪くなると正しく烈火の如く、灼熱の炎を吐き出す』・・・炎吐いてるわよ」

「って事は、怒らせたのか・・？」

留姫の説明を聞き、レナモンが首を傾げる。

「怒らせた～！」

テリアモンが健良の頭上で、笑いながら回っていた。

「＜ヴォルカニックフォーン＞！」

ヴォルクドラモンが溶岩を吐き出す。

拓也は飛翔してそれを避けた。

まだ魂広の状態で、溶岩を纏った事が無い。

その為、少し不安を抱いている。

「闘いずらいな、こんちくしょう」

拓也は龍魂剣を構え直し、進化するかを考えた。

（相手は完全体。魂広ならギリギリいける。けどなぁ・・・）

拓也が考えに困っているのは、溶岩だ。

進化すれば、溶岩など空気と変わらない。

が、人間の状態では如何なるか分からないのだ。

「＜ヴォルカニックフォーン＞！」

「く・・！」

再度吐かれたマグマを、翼を広げて回避する。

「しゃーねぇ！来い、スピリット！」

拓也は天へデジヴァイスを掲げた。

「何！？」

突如、泉と友樹のデジヴァイスから、スピリットが飛び出す。

「私と友樹のスピリットって事は・・！」

「拓也兄ちゃん、超越形態になろうとしてるんだ」

泉と友樹は顔を見合わせ、コクンと頷く。
スピリットは火口へ向かった。

デジヴァイスに泉と友樹のスピリットが入り、拓也の右手に多重のデジコードが浮かび上がる。

「久しぶりだなこの進化！ハイパースピリット・・・エボリューションッッ！！」

一輪だけ浮かび上がってるデジコードが、尾を引き拓也を包み込んだ。

「カイゼルグレイモン！」

龍魂剣は主の大きさへ変化する。

「クク・・！貴様、デジモンであったか！」

ヴォルクドラモンは、何処か嬉しそうであった。

「良いぞ。そうでなくては面白くない！」

ヴォルクドラモンは声を荒げ、溶岩を巻き上げる。

「＜サークルオブ・・・デス＞ッ！」

溶岩が渦を巻き、カイゼルグレイモンに襲いかかった。

「効かないぞ！」

カイゼルグレイモンは溶岩をそのまま身に纏い、ヴォルクドラモンの正面へ接近。

そのまま大剣を一閃する。

「ぐ・・！？」

ヴォルクドラモンは、溶岩を突き抜けて来た事に驚愕し、もろに食らった。

カイゼルグレイモンは火口の地面に、龍魂剣を突き刺す。

「＜九頭龍陣＞ッ！」

――ドゴォッ！

地面から８匹の溶岩龍が姿を現した。

８匹はヴォルクドラモンへ襲いかかる。

「む・・・」

ヴォルクドラモンは溶岩内に潜って、それを回避。

が、最後の１匹がいる事も忘れてはならない。

カイゼルグレイモンの足元から、巨大な溶岩龍が現れる。

「おぉぉぉっ！」

そのまま溶岩の中へ突っ込んだ。

「何！？」

ヴォルクドラモンは驚きながらも、身を固くする。

「はぁぁぁっ！」

カイゼルグレイモンは溶岩龍の勢いを、そのまま剣先に乗せて斬りつけた。

「ククク・・！楽しませてもらったぞ、人間」

「おう！俺もだ！」

火口の淵に腰を下ろしている拓也に、ヴォルクドラモンが笑いかける。

「貴様、デジモンの気配がするが・・・人間か？」

「え、あ、いや・・・半分、かな？」

「半分・・？まぁいい。貴様程楽しめたのは久しぶりだ」

ヴォルクドラモンは満足したように、溶岩へ戻っていった。

「頼むから、あんまし地震を起こさないでくれよ～！」

拓也がそう叫ぶと、ヴォルクドラモンは小さく頷き、溶岩の奥へ姿を消す。

「さぁて・・・帰るか」

（あ、そういや大・・・）

拓也は翼を出現させ、大とアグモンのもとへ向かった。

「へばってるんじゃ・・・お、見っけ・・ぇぇえええっ!?」

拓也は、大の頭にかぶりついているアグモンを発見する。

しかも大は、アグモンを引き離そうとアグモンをボコボコと殴っていた。

「なぁにやってんだ・・・あいつらは」

拓也は一瞬放って帰ろうかと考えたが、流石にこの火山の中腹でそれは如何かと考え直し、仕方なく近くに降り立った。

「お前ら・・・何やってんだ?」

「「あ・・・」」

大とアグモンが動きを止める。

「このカエルが俺を食おうとしてんだよ!分かるか!?俺食おうと

してんだぞっ！？」

「カエルはねぇだろカエルはっ！」

「デジモン知らねぇ奴がお前見たら、絶対カエルって思うんだよっ！俺だって最初はそう思ったっ！」

「ひでぇ兄貴！見損なったぜっ！」

「勝手に見損なってろ！ただし卵焼きは2度と食わせねぇっ！」

「んな！？ひ、卑怯だぞっ！」

言い合う2人のそばで、拓也は呆れて言葉も言えない。

卵焼きで心が揺れるアグモンも、少しおかしいんじゃないかと疑う程だ。

「・・・・・帰る」

拓也はクルリと向きを変え、翼を出現させる。

「「えぇぇっ！？ちょっと待てっ！」」

大とアグモンが同時に突っ込んだ。

３６話：溶岩を身に（後書き）

トーマ「あいつら・・・遅いな」

輝二「どうせ何か言い合ってるんだろ・・・」

トーマ（想像出来る・・・）

37話：己に勝て（前書き）

37話、参ります！

37話：己に勝て

拓也、大、アグモンは皆のいる村へと戻った。

「よ～、帰ったぞ～！」

軽い雰囲気で手を振る拓也の背後で、大とアグモンが疲れ切っていた。

それを見た皆は、一体何が・・・と心が1つになる。

「っしょ」

拓也は出ていく前に座っていた岩に、再び腰を下ろした。

大は座る前に倒れる。

「ありゃ～・・・結構疲れてんねぇ」

ニヤニヤとそれを見る拓也だったが、

「＜ベビーバーナー＞ッ！」

アグモンが怒り、火球を放った直後倒れた。

その火球は如何なったのかというと、同調している拓也に直撃する。

「効くかぁ！」

拓也は火球を身に纏い、高笑いした。
大達はしばらく起きそうにない。
「・・・魂広でもすっか」

拓也は暗い空間にいた。
目の前に炎が集中し、アグニモンとなる。
「久しぶりに来たぞ～」
「あぁ、待ってた」
拓也は出現した龍魂剣を手に握った。
「何処まで・・・したっけ」
久しぶりだった為、全く思い出せない拓也。
「おいおい・・・」
思わずアグニモンも苦笑する。
アグニモンが炎に包まれ、形を変えた。
そこにはカイゼルグレイモンが立っている。

「俺まで相手しただろう？」

「おぉ、そうだったそうだった」

拓也はピコンと思い出し、龍魂剣を構え直した。

アグニモン、ヴリトラモン、アルダモンと相手の強さを少しずつ上げていき、今ではカイゼルグレイモンまで勝負した。

今のところ、カイゼルグレイモンには勝っていない。

というより満足されていない。

因みに、カイゼルグレイモンも龍魂剣を持っていたりする。

「ん？」

トーマは視界の端にいた拓也に、視線を移した。

拓也は岩の上で足を組んで目を閉じ、身に炎を纏っている。

「何をして・・・」

「あぁ、魂広だな」

呟くトーマに、輝二が応えた。

「スピリットが相手になって、戦闘している。普段は魂広で鍛えて

いる」

「なるほど。便利だね、相手がいるというのは」

トーマが考えている中、輝二も腰を下ろし魂広を始めていた。

「だぁりゃせぇぇいっ！」

拓也が大きく剣を振るう。

「下半身が締まってないぞ！」

カイゼルグレイモンが剣を受け流しながら、注意を飛ばした。

「っつ～けどなぁ！」

拓也はそう言いながらも、背後へ回り込む。

「む・・・」

カイゼルグレイモンはすぐ振り返り、剣を盾にした。

――ガキィン！

予想通り拓也は龍魂剣を振り、斬りつけて来る。

「あ～もう！何で動きが分かるんだよっ！」

「当然だ。お前の動きは俺が良く知っている」

「ぐ・・・」

正論を突きつけられる拓也。

進化している間は拓也が制御権を握っている訳で、スピリットは拓也の動き方を知り尽くしている。

「だったらぁっ！」

拓也はそのまま、力任せに剣を押していった。

「む！？」

「俺が力で動く事も知ってるだろ！でぇりゃぁぁあっ！！」

拓也は力の進むままに、剣を押し切る。

カイゼルグレイモンは後方へ跳び退った。

「おらいっけぇっ！」

――ドォンッ！

拓也は龍魂剣から、炎の刀身を発射する。

「はっ！」

カイゼルグレイモンは剣で弾き返した。

――ジャキンッ！

拓也の龍魂剣の柄から、新たな刀身が生まれる。

（難しいな・・・）

流石に超越形態相手は厳しいと、改めて実感した。

――ガキィンッ！キィン！

「く・・！」

輝二はマグナガルルモン相手に苦戦する。

「っはぁ・・はぁ・・」

輝二は腰を下ろして息を整えた。

マグナガルルモンはヴォルフモンに戻る。

「疲れるのが早すぎるんじゃないか？」

ヴォルフモンがそんな事を言うが、

「こっちが人間だという事を、はぁ・・はぁ・・忘れるなよ・・・」

輝二は息を整えながら、そう返した。

「あぁ、そうだったな。悪い」

ヴォルフモンは輝二の正面に腰を下ろす。

「いなす事は出来るようになってきた。まぁそこは良いんじゃないか？」

腕を組むヴォルフモンだが、輝二は相手の動きについていく事が必死なのを忘れないで欲しい。

「簡単に言う」

「フ、出来るようになったんなら、素直に喜べ」

「む」

ヴォルフモンの一言で、輝二が顔をしかめる。

「あぁ、そういうのは苦手だったな」

「分かっているなら言うな」

「ククク、分かった分かった」

ヴォルフモンは適当に頷き返しておく。

そして、リヒト・シュベーアトを握る輝二の手首を掴んだ。

「構えてみろ」

「・・・」

輝二は言われた通り、2対の光剣を構えてみる。

「肘に力を。脇を開けすぎるな。隙が出来るぞ」

「分かっている」

ヴォルフモンの指示を、着々とこなしていく輝二であった。

泉はふと輝二を見ると、光を纏っていない事に気づく。

「勉強タイムってとこかしらね・・・」

そう考え、軽く笑みを浮かべた。

――ボワァッ！

対して拓也は、身に纏う炎を大きくさせている。

「向こうは向こうで燃えてるわねぇ・・・」

拓也の岩のそばで、大とアグモンが倒れているのを見、危ないと感じた。

立ち上がり、大のもとへ向かう。

先に軽い方のアグモンを、拓也の岩から遠ざけた。

大も運ぼうとしたが、流石に小学生が中学生を運ぶのは少々無理がある。

仕方なく風で浮かせ、アグモンの近くに下ろした。

――ボコボコッ、ボコンッ！

振り返ると、拓也の炎が溶岩に変わっている。

（あ、危な・・・）

あと少し遅かったら、大とアグモンは流れる溶岩の中だ。

拓也が座っている岩も、蒸気を上げている。

「魂広終わったら1発ね・・・」

泉は拳を握って、笑みを浮かべた・・・。

37話：己に勝て（後書き）

トーマ「危険だな、あの溶岩・・・」

泉「終わったら殴るから良いんです」

トーマ「き、君は拳で分からせる方なのかい？」

泉「そうですねぇ・・・。確かにそうかもしれません。如何足？いても私には敵わぬと理解するまで拳で分からせる。拓也みたいな馬鹿相手には、そんな対応です」

トーマ（さ、最近の女の子はこういう子なのか・・？）

３８話：怒りの断末魔（前書き）

今回は拓也が暴走！？

では３８話、参ります！

38話：怒りの断末魔

「合格」

「っしゃぁ！」

カイゼルグレイモンが一言呟き、拓也が拳を握った。

やっとの思いで、カイゼルグレイモンから合格を貰う。

地獄のような勝負だったが・・・。

カイゼルグレイモンがアグニモンに退化する。

「やっとだぜ～」

拓也は肩を回して、こりをほぐした。

「御苦労さん」

一言発するアグニモン。

「な、なぁ・・・次の相手ってさぁ、もしかして・・・」

拓也がおずおずと問いかける。

「ん？あぁ、こいつだ」

アグニモンは再度炎に包まれ、巨大化した。

そこには古の紅竜が立っている。

「俺だ・・・」

「やっぱか」

勝てる気がしない、とため息を吐く拓也だが、それでも龍魂剣を構えた。

（溶岩出されたら・・・如何すっかねぇ・・・）

思わず苦笑いを浮かべる拓也。

「おぉし！いっくぞぉぉぉ！」

拓也は一気に跳躍し、剣を振りかぶった。

――ガッ！

エンシェントグレイモンは右腕だけで、それを防ぐ。

装甲は硬く、全く斬れない。

「硬い・・・」

拓也は力を込めるが、怯みもしないエンシェントグレイモン。

流石に究極体は違う、と拓也は思い直す。

エンシェントグレイモンは腕を振るい、拓也を突き飛ばした。

「おわっ！」

――ズザザザァッ！

宙で態勢を立て直し、着地する。

「だったらっ！」

拓也はカイゼルグレイモンから教わった事を、実行に移した。

再度斬りかかる。

――ザンッ！

「何！？」

今度は装甲に傷をつけた。

エンシェントグレイモンは、その事に驚愕する。

「お、流石にこれは通用するか！」

拓也も手応えを感じ、後退しながら笑みを浮かべた。

剣には、斬れる角度と斬れない角度がある。

物を斬る時の剣の角度が悪ければ、物は斬りにくくなってしまう。

逆に良ければ斬りやすい、という訳だ。

その角度は大まかに決まっている。

相手の装甲を1度斬り、硬さが分かれば角度も分かってくるものだ。

これはカイゼルグレイモンから教わったものである。

恐らく剣士である輝二も、それを理解して剣を振るっているのだろう。

「なるほど、そういう事か・・・」

エンシェントグレイモンは、斬られた訳を理解した。

「ん?分かったのか」

「当然だ。お前の思考は俺にも流れてくる」

「い・・・作戦、考えられねぇじゃん」

拓也は拙そうな顔をする。

「己の思考くらい、自分で制御しろ」

エンシェントグレイモンはそう言って、自らの体に炎を纏った。

「って言うけどなぁ・・・」

拓也も身に炎を纏い、龍魂剣を構える。

「難しいんだぞ！」

拓也は剣を振りかぶり、斬りかかった。

エンシェントグレイモンはわざとそれを受け、拓也を捕まえる。

「がっ！」

そのまま暗い地面に、叩きつけられた。

流石古の闘士だけあって、容赦が無い。

エンシェントグレイモンは炎を吐き、拓也を覆う。

が、お互い炎は栄養だ。

拓也も炎に包まれ、力が上がる。

「っつぁ～～！！」

腕に力を込め、剣先をエンシェントグレイモンに向けた。

「＜炎龍撃＞ッッ！！」

突如放たれた刀身は、エンシェントグレイモンの腹に直撃する。

「ぐ・・！」

エンシェントグレイモンは怯み、拓也を放した。

すぐさま起き上がり、跳び退る拓也。

エンシェントグレイモンは腹を押さえ、動かない。

「・・・どした？」

「いや、何でもない・・・」

エンシェントグレイモンはそう返すが、拓也は腹を剣で刺された事を思い出す。

制御権を失っていたが、スピリットが見た映像が頭に流れ込んできた。

――ドクン・・・

腹にシャープネスクレイモアが刺さり、血が噴き出す。

――ドクンッ

炎が唸りを上げた。

――ドクンッ！

拓也の鼓動が高鳴り、視界が変化する。

突如魂広が解け、拓也の瞳孔が開き出した。

「が・・ぁ・・・」

視界が歪み、遠くにいる皆が化物に見え始める。

「ぐ・・！」

拓也は頭を振って、それを振り払おうとした。

が、解ける事は無い。

あの時の事を思い出し、エンシェントスピリットが怒りに燃え始めた。

それが拓也にも表れ始めている。

「や、やべぇ！」

頭を押さえ、スピリットを静めようとした。

「くそ、皆が怪物に見えて来る・・！」

いくら頭を振っても叩いても揺すっても、それは変わらない。

更には、瞳孔が開いたり閉じたりと不安定だ。

――ザザッ

頭にあの映像が、フラッシュバックする。

――ドクンッ！！

「ッ！？」

スピリットの怒りが膨れ上がり、拓也を襲った。

（ダメ・・だ！）

抑えきれず、拓也の瞳孔が完全に開き、炎を纏う。

更には翼が出現し、龍魂剣を握った。

拓也に意識は無い。

完全に乗っ取られた。

拓也が炎を纏い、剣を握ったまま立ち上がったのを、友樹が見ていた。

「あ、魂広終わったのかな」

そう呟くと、泉もそちらを見る。

「なんか・・・おかしくない？」

泉の言う通り、拓也の眼は炎のように紅く、何かを探していた。

それには周りの者も気づき始め、何やってるんだろうと疑問を抱く。

拓也の視界に、輝二が入った。

直後、拓也が消える。

「ッ！？」

殺気が輝二を襲い、強制的に魂広から引きずり出される輝二。

すぐさま立ち上がって、リヒト・シュベーアトを構える。

――ガキィンッ！

拓也は輝二に斬りかかっていた。

「拓也！？」

泉が訳が分からない、と叫ぶ。

拓也の瞳孔が開いている事には、輝二も気づいた。

が、それ以外は特に無く、無表情だ。

身に纏う炎は激しく、輝二も光で体を包み、炎を防ぐ。

「ど、如何なってるんだい！？」

トーマが泉に確認を取るが、

「わ、分かりません！こっちが聞きたいくらいですっ！」

と返されてしまう。

「グルルル・・！」

ギルモンは野生の本能を露わにし、拓也に威嚇した。

「ギ、ギルモン！？」

その行動に驚く啓人。

「ガァァッ！」

軽く一吼えするギルモンに、拓也が目を向ける。

「ガァッ！」

ギルモンは少しずつ接近していった。

拓也はギルモンへと向き直り、

――ザッ！

一瞬で背後へ回り込む。

躊躇なく剣を振るった。

「グルルル・・！」

ギルモンはジャンプして避け、威嚇する。

「ったく、何かと思えば暴走かよ・・・」

輝二はそれを知ってため息を吐いた。

右手に握るリヒト・シュベーアトで、周りの者に離れるよう示す。

「まぁた腹刺されるわよ」

泉は手をヒラヒラ振って呆れた。

「え～！刺しちゃダメだよ～！」

友樹が嫌そうな顔をする為、

「するか」

輝二がため息を吐きながら、そう答える。

周りの者は距離を取り、岩や地面に腰を下ろした。

立って見る者もいたが、大方応援だろう。

「っつ～！」

大が目を覚ました。

続いてアグモンも起きる。

「あ、大、起きた！」

イクトが2人に駆け寄った。

「な、何だ?如何いう状況?」

混乱する大をイクトが押さえる。

「拓也、暴走したらしい。輝二、それを止める。あ、面倒くさそうだけどな」

イクトが途中で付け加えた。

確かに、輝二の顔には面倒という文字が浮かんでいた・・・。

38話：怒りの断末魔（後書き）

輝二「何故毎回毎回、俺が止めなきゃいけないんだ？」

泉「あんた何回もやってて、一番分かってるじゃない」

輝二「いや、だがな」

泉「はいはい、頑張ってね～」

友樹「刺しちゃダメだよ！」

輝二「はぁ・・・了解だ」↑諦めモード全開

39話：怒りを止めろ（前書き）

39話、参ります！

39話：怒りを止めろ

「く・・！」

輝二は、拓也が振るう剣をいなす。

龍魂剣は軌道をそらされ、地面に突き刺さった。

輝二はそこへ斬りかかるが、拓也は龍魂剣の柄を足場に、後方へ跳んだ。

（剣を手放した・・！？）

それが信じられず、驚く輝二。

だがそれはすぐに理解した。

龍魂剣は1度消え、拓也の手に再び出現する。

拓也は何事も無かったかのように、再度斬りかかった。

「ぐ！」

拓也の一撃は速くないが、力強い。

「しまっ・・！」

輝二の剣が弾かれ、左手に持っていたリヒト・シュベーアトが宙を舞う。

――ガッ！

地面に突き刺さる光剣。

「ちぃっ！」

輝二は舌打ちし、光剣の場所まで大きく跳び退る。

――グッ！

光剣の柄を握り、引き抜いた。

拓也は剣で突きを繰り出す。

「ちっ！」

――ガキッ！キィン！ガキィンッ！

輝二は剣筋をいなしたり、そらしたりと全て受け流す。

が、拓也は確実に輝二の心臓目がけて、剣を突き出していた。

「拙いな・・・」

戦況を見て、輝一は悪い方向にいっている事を判断する。

「如何しました？」

近くにいた光子郎が、その呟きを聞いて問いかけた。

トーマも興味深げに耳を澄ましている。

「あ、俺も槍使うんで、武器の戦闘とか分かるんですけど・・・輝二が一方的に押されてます」

「そうですか？それほど差は無いように見えるのですが・・・」

「いえ、輝二は拓也を出来るだけ傷つけないように闘ってるんですが・・・拓也はどうもスピリットの影響で、輝二の心臓目がけて剣を振ってます」

「完全に不利だね、それは」

ボクシングをするトーマは、輝一の言う事を理解する。

「スピリットの影響、というのは？」

光子郎が疑問を投げかけて来た。

「拓也の‘火’のスピリットは、一番性格が荒くて制御がかなり難しいんです。究極体の制御に成功したのも、拓也が最後でした。ほら、神殿の時も暴走しましたよね」

「あ、そうでしたね」

光子郎は戦闘中に、エンシェントグレイモンが神殿を突き破って、吹き飛ばされて来た事を思い出す。

「あの時は、ただアポロモンに拳で突き飛ばされただけでした。それだけで怒り狂ったように、少しでも怒らせると暴走するんですよ。つまり拓也が魂広中に、エンシェントグレイモン、もしくはスピリットを怒らせる何かがあったんじゃないか、と思うんですけどね・・・」

輝一は自分の予想を言ってみた。

「なるほど・・・」

「このままでは輝二の方がやられます。進化した方が早いですね」

輝一はそう言いながら、デジヴァイスを握る。

「ちょぉっと待ち！」

そこへ大が入り込んだ。

「喧嘩なら俺が受ける」

「・・・え？」

大の予想外の言い様に、輝一は唖然とする。

トーマはため息を吐き、大の方をポンッと叩いた。

「大、君って奴は・・・」

「何だよ」

「全く持って、面倒な奴だな」

「はぁ！？」

トーマの一言に、大が意味不明といった顔をする。

「勝手にしてくれ、という意味だ」

「ムカッ！あぁいいぜ！勝手にやってやらぁっ！！」

大は逆切れし、デジヴァイスを握った。

「おい！交代だ！休んでやがれっ！」

大が輝二に向かってそう叫ぶ。

「こ、交代？」

輝二も訳が分からず、とりあえず大のいる場所まで跳んだ。

「如何いう訳だ」

肩で息をしながら、輝二が問いかける。

「そのまんまの意味だ。拓也の相手は俺達がする。お前は休んでなっ！」

大が輝二の方に手を置き、前へ進み出た。

拓也は新たに来た大に、視線を向ける。

「けっ、真っ赤な目ぇしやがって！目ぇ覚ませやこの野郎がっ！」

大は文句を吐き捨てながら、拓也に殴りかかった。

拓也は大剣の腹で、それを受ける。

――ヴゥン

大の手にデジソウルが出現した。

「アグモン！」

「おうよっ！」

大の声に乗じて、アグモンが跳び出す。

「デジソウル・・・フル！チャージッッ！！」

「アグモン、進化っ！」

アグモンが膨張したデジソウルに包まれ、データが上書きされた。

「ライズグレイモン！」

上半身を機械に包んだ、オレンジ色の竜が現れる。

光子郎がパソコンを向けた。

「『ライズグレイモン。完全体。サイボーグ型。必殺技は＜ライジングデストロイヤー＞。左腕の巨大なリボルバーから発射される攻撃力は、核弾頭一発分に匹敵すると言われ、その凄まじい威力と反動により、通常は連射不可能である』・・・完全体ですか？人間相手にそれは・・・」

大がアグモンを完全体に進化させたのを見、光子郎が苦笑する。

他の者も、成熟期で十分だろうと思っているが、

「完全体か。それくらいじゃないと、止められんかもな」

輝二はコクリと頷き、後方の岩に座った。

一息つき、休憩する。

暴走中の拓也は、まるで疲れを知らぬロボットのように、次々と攻撃を繰り出すのだ。

あれではこちらのスタミナが持たない。

ライズグレイモンも、それに悩まされる事だろうと、密かに考えている輝二であった・・・。

39話：怒りを止めろ（後書き）

輝二「疲れるな・・・」

泉「んまぁ、お疲れ～」

輝二「人の事だと思って・・・」

泉「実際そうだし♪」

輝二（腹が黒いな・・・）（苦笑）

４０話：剣をその手に（前書き）

４０話、参ります！

40話：剣をその手に

「＜トライデントリボルバー＞！」

クロンデジソイドの限界耐久で、高速連射するライズグレイモン。

拓也は普段の速さとは思えぬスピードで、3発全てかわした。

スピリットによって、限界まで身体能力が底上げされている。

そんな事をすれば、魂広を解除した後が恐ろしい。

それに、先程から輝二の相手をしていながら、ライズグレイモンの相手が出来る訳が無かった。

拓也は相変わらずの無表情で、ライズグレイモンの正面に飛び上がる。

龍魂剣を向け、燃える刀身を発射した。

「ぐぁぁっ！」

クロンデジソイドで覆われていたが、衝撃が伝わりダメージを負う。

拓也はすぐに後方へ跳び、ライズグレイモンの反撃をかわした。

「兄貴、全然当たんねぇぞ！」

「根性で当てろっ！」

素早い拓也に苦戦するライズグレイモンに、大は出鱈目な理屈で声を張り上げる。

その時、

――ガクッ

地面に着地した拓也が、膝をついた。

が、龍魂剣を支えに立ち上がる。

「向こうは限界だぞ！」

大がそれを見て、ライズグレイモンに声をおくった。

拓也の体力はすでに底を突いている。

が、スピリットが無理矢理動かしていた。

怒りに身を任せるというのは、想像以上に恐ろしい事だ。

ライズグレイモンは背中の機械翼に、エネルギーを集中させる。

「＜ライジング・・・デストロイヤー＞ッ！！」

3連のビームを発射し、胸部の発射口からビーム弾幕を放った。

拓也は体が言う事を聞かず、それをもろに食らう。

近くの岩に叩きつけられた。

が、何事も無かったように、剣を支えに立ち上がる。

「如何すりゃいいんだよ!?」

大が対処に困った。

攻撃しても立ち上がって来る。

ならば向こうが完全に動かなくなるまで、攻撃すればいいのだが、それイコール拓也の死を意味した。

「拓也が魂広を解くのを、待つしかないな・・・。恐らく意識は無いだろうし」

輝二がリヒト・シュベーアトを支えにしながら、そう答える。

すると、拓也の方で異変が起こった。

まず背中の翼が燃え上がる。

次に龍魂剣が消え、両腕にアルダモンのルードリー・タルパナが出現。

拓也が両手を胸の前で合わせ、集中すると業火球がつくられる。

アルダモンの＜ブラフマシル＞だ。

融合形態と完全体、どちらが強いかと言うと、恐らく怒り狂ってい

る拓也の方が強力だろう。
業火球は躊躇無しで放たれた。
「ぐぁぁぁっっ！！」
ライズグレイモンはかわしきれずに直撃する。
その反動で進化が解けてしまった。
「アグモン、大丈夫か！？」
大が駆け寄ると、アグモンは少々の火傷を負っている。
友樹がすぐに氷で冷やした。
拓也の方は体力が底をついているものの、まだピンピンしている。
「んじゃ次は、俺がいく」
輝一が進み出た。
瞬時に魂広し、断罪の槍を握る。
ある程度の距離まで接近すると、槍を構えた。
拓也はルードリー・タルパナから、龍魂剣へ切り替える。
【いっその事、突きさせよ】

輝二が面倒くさそうに、輝一に魂話をおくった。

【それ本気？】

【・・・冗談】

【嘘だね・・・】

短い会話を終え、輝一は体を闇で包む。

天候は悪く、黒雲が天を覆っていた。

光が差し込まないこの状況では、闇の闘士も本領発揮が可能である。

拓也が先に動いた。

輝一の背後へ回り込み、剣で斬りつける。

――ガッ

輝一は槍を地面に突き刺し、槍を支えに逆立ちした。

それも一瞬。

宙で槍を引き抜き、落ちる反動と共に槍を薙ぎ払う。

――ガキィン！

拓也は龍魂剣でそれを防ぐが、何より体力不足で足がふらついた。

態勢が崩れた所へ、着地した輝一が槍を突き出す。
それは素早く、剣線が煌めいた。
槍は舞うように扱う。
刀身の部分で突き出しては、柄の部分で相手の剣を弾いた。
拓也の方も、普段輝二の双剣で闘っていた為、槍は滅多に相手しない。
完全に輝一が押していた。
「いっけ～！」
大輔も思わず応援している。
「ふっ！」
輝一は最後に槍を突き出した。
それは拓也の頬をかすめ、切り傷を残す。
血が出たかと思ったが、それは違った。
「ッ！？」
輝一は見た物に驚き、大きく後方へ跳び退る。
拓也の切り傷から噴き出したのは血ではなく、火だ。

拓也が全身を炎で包み、切り傷を指でなぞると、無かったかのように傷が塞がる。

「何かもう・・・化物じみてきたな」

苦笑い浮かべ、冷や汗を流す輝一。

その間も決して構えを解かない。

拓也は何も無かったかのように輝一に接近し、剣を突き出す。

――ガキィンッ、ガキィッ、キィンッ！

輝一は槍の柄の部分で受け流した。

ただ受け流すだけではない。

弾く際に槍を捻って、相手の刀身を少しずつ削っていく。

――ガキィンッ！・・・ガッ！

拓也の剣が弾かれ、地面に突き刺さった。

拓也は後方へ跳び退り、剣を抜き取る。

が、刃はボロボロだ。

輝一が全て捻って弾いた為、大剣は剣の切れ味さえ持っていない。

如何するかと一同が拓也に集中している中、それが如何したとでも言いたげに、拓也は輝一に剣先を向けた。

「まさか・・！」

輝一はすぐさまその場を移動する。

直後、燃える刀身が発射された。

――ジャキィンッ！

そして新たな刀身が出現する。

「削ってもダメ、斬ってもダメ・・・。こりゃ厳しいね」

輝一は苦笑しながら、槍を構え直した・・・。

４０話：剣をその手に（後書き）

次回は拓也の方面ですかね・・・。

では頑張りま～す！

４１話：俺に従え（前書き）

４１話、参ります！

41話：俺に従え

拓也は空間にいた。

前のような何も無い暗い空間ではなく、周りを炎が囲んでいる。

それは怒りを表すかのように、時には強く揺らめいていた。

拓也は意識を取り戻し、体を起こして立ち上がるが、少し動きが不自由だ。

何かで束縛されているように感じる。

大きな感情だ。

それがスピリットの怒りだというのは、すぐに分かった。

拓也の正面に、古のスピリットが浮かび上がる。

「おい！何でそんなに怒ってんだよ！」

拓也が理由を問いかけると、周りの炎が燃え上がった。

『光の闘士が、俺を刺した為だ・・・』

スピリットから低い声が響く。

「そ、それだけで俺の体奪って、輝二を攻撃したっていうのか！？」

『貴様は何も思わんのか？同じ闘士に刺され、己の火が汚されたというのに』

「あれはお前が暴走するから！輝二はそれを止めようとしただけだろっ！」

普段はああ言って喧嘩している拓也だが、今はそんな事を言っている場合ではない。

懸命にスピリットを説得する。

こちらから強制的に魂広を解いてやろうかと考えたが、完全に表側の器（からだ）は乗っ取られていた。

内側だけ解いても、意味は無いだろう。

『違うな。奴は俺を刺す気だった。貴様もそれは分かるだろう？』

「そ、それは・・・」

拓也も時折感じていた。

輝二に背中を預けたのだから、自分が暴走した時の対応は輝二に任せてある。

が、その時の対応が強烈だという事も。

それは自分が暴走したのだから、文句は言えない。

「それは暴走したこっちが悪いんだから、仕方ないだろ！？輝二は

仲間だ！傷つけんなっ！」

拓也は体内中の血液が沸騰するのを感じた。

これは怒りだ。

スピリットに対するものであり、輝二に対するものではない。

『貴様には怒りが足らんな。貴様の体、俺が貰う』

「何！？」

突如、拓也の体が火の海に沈み始めた。

『永遠に己の体の中で眠るがいい。貴様の体は、俺が貰い受ける』

「何だとっ！？」

流石のこれには、拓也も怒りの爆発寸前だ。

「っざけるな！俺の体だっ！」

拓也は腰まで沈んだ体に力を込め、龍魂剣を握る。

ヒューマンスピリットとビーストスピリットは、こちらの味方についているようだ。

『何度も言うが・・・貴様の体は俺が貰う』

拓也は燃える刀身を発射するが、エンシェントスピリットには効か

ない。

拓也の体は、完全に沈んだ。

周りは燃える炎ばかりで、地面など見えやしない。

「俺の体を貫うだと・・!?ふざけるなよ・・!」

拓也の瞳孔が、怒りに身を任せて開き始めた・・・。

輝一は戦闘中に、拓也の異変に気づく。

炎が威力を増し、先程までの疲れが吹き飛んだかのように素早さが上がった。

「輝一!交代だ!」

体力が回復した輝二が、再び立ち上がる。

輝一も疲れ切っていたので、輝二達のもとまで大きく跳び退って休憩した。

「輝二、拓也の様子が変だ。気をつけろ」

輝一は真剣な顔でそう言うと、輝二もそれを理解したのか小さく頷く。

輝二が出て来たのを知り、拓也の体の炎が更に燃えたぎる。

「如何やら嫌われてるらしいな・・・」

輝二はその様子に苦笑いを浮かべ、２対の光剣を構えた。

【怒りに身を任せるな】

突如、アグニモンから魂話がおくられ、拓也は開きかけた瞳孔を閉じる。

「あ、危ない・・・」

目を閉じて息を数え、気を落ち着かせた。

するとエンシェントスピリットが現れる。

『光の闘士が再戦する。貴様には止められんぞ』

拓也はそう言うスピリットに向き直った。

自分の体に炎を纏い、翼を出現させる。

「俺に従えっ！！スピリットッ！！！」

この空間内に、拓也の声が木霊した。

「俺が主だ！仲間を巻き込むなっ！！」

拓也の瞳は炎のように燃え上がり、紅く染まる。

エンシェントスピリットは少しの間黙っていたが、声を発した。

『ククク・・！合格だ』

「何だと・・！？」

拓也は予想外の反応に、思わず声を荒げる。

『合格だと言っている。これは俺からの試練だ。今頃気づいたか、愚か者め』

少しの沈黙後、

「んだとぉぉぉぉぉっっ！！！？」

拓也の驚愕の声が響き渡る。

「どっからどこまでがっ！？」

『何を言う。全てだ』

「はぁぁっ！？」

『主が力不足では納得がいかん。少々鍛えさせてもらったぞ』

エンシェントスピリットは何事も無かったかのように、姿を消した。

周りの炎も消えていく。

「あ〜もう！如何なってんだよこんちしょ〜〜〜っっ！！！！」

拓也は訳が分からず、叫んだ。

「はっ！」

輝二はリヒト・シュベーアトで斬りつけるが、拓也は全てかわしていく。

輝二の体力も限界に近く、足元がふらつき拓也の剣が振り上げられた。

「しまっ――――！？」

振り下ろされた剣は、輝二の首筋ギリギリで止まる。

――シュゥゥゥ・・！

「何！？」

拓也の翼が消え、炎も収まっていった。

が、紅い瞳はそのままで、剣も構えたままだったが拓也は倒れる。

「は？」

輝二は訳が分からなかったが、とりあえず魂広を解き、拓也を起こ

した。

「終わったのか！？」

大が駆け寄って来る。

輝二は無言で拓也を見せた。

拓也の眼は完全に回っている。

「えっと？お、終わったのか・・？」

大が混乱するものの、拓也を背負い上げ皆のもとへ運んだ。

「っつ～か剣重いっ！」

拓也が剣を握っている為、背負ってる大もその重さを体感する。

拓也はその後、２日間、目を覚まさなかったとか・・・。

41話：俺に従え（後書き）

輝二「まぁ、目を覚ませって言われても無理があるだろうな」

大「だよなぁ。あんだけ動いとって疲れないって言う方が無理だろ」

輝二「起きたら起きたで、事情説明という説教が待っている訳だが・・！」（怒）

大（拓也、起きない方が良いんじゃねぇか？）

４２話：視界の安定（前書き）

４２話、参ります！

42話：視界の安定

「・・・起きないねぇ」

泉は爆睡している拓也を見て、ため息を吐く。

「Ｚｚｚ・・・」

完全に夢の中だ。

岩に寄りかかって寝ているのだが、よくもそんなに集中して寝れるものだと、全員が感心する。

まぁ、その横で双子も寝息を立てている訳だが・・・。

輝一に至っては槍を支えに、輝二はリヒト・シュベーアトを支えに眠っている。

勿論拓也も龍魂剣を握ったままだ。

「こいつらは安心して眠れないのか！？何で寝たまま武器持ってんだよっ！」

大が思わず声を荒げてそう言う。

「ははは・・・」

泉はただ苦笑した。

「ぅ・・・」

一番最初に、体力が残っていた輝一が目を覚ます。

「ふぁ～・・・あぁ、おはよう」

輝一は槍を支えにして立ち上がり、大きく背伸びをした。

「うん、おはよう」

泉が手を挙げてそう返す。

輝一は魂広を解いて、槍を消した。

そしてまだ眠っている輝二を見る。

「ん、何？まだ魂広解いてないの？」

自分が言うのも何だが、輝二と拓也を見て輝一が軽く驚いた。

「みたいね」

泉も如何しようこの阿呆、と言って拓也を指差す。

「ねぇ、腕大丈夫？」

友樹は火傷をしたアグモンに声をかけた。

「おう！氷が聞いたみたいで、もう治ってるぞ！サンキュ～な！」

アグモンは治った腕を見せる。

「うん、なら良かった」

友樹が安心して笑顔を浮かべた。

「ありがとうな、アグモンを手当てしてくれてよ」

大もアグモンの頭を押さえながら、友樹に礼を言う。

「えへへ」

友樹は照れて帽子を深くかぶった。

「ぐ・・ぅ・・」

次に輝二が目を覚ます。

リヒト・シュベーアトを地面に突き刺して、それを支えに立ち上がった。

隣で拓也が爆睡しているのを見届けると、岩の上に座る。

「はぁ・・・疲れた・・・」

リヒト・シュベーアトを引き抜き、膝の上に置いた。

「お疲れ～」

純平が軽く声をかける。

「ま、一番の原因が爆睡中なんだけどな・・・」

純平も拓也を見て、苦笑いを浮かべた。

その時、

「っつ～・・・」

問題の拓也が目を覚ます。

「あ～！起きたっ！」

友樹がそれに気づいて声を上げると、皆が集まった。

「ったた～」

拓也は右手で頭を押さえ、頭を振る。

「さぁて？説明してもらいましょうか？」

泉が黒いオーラを出しながら拓也に声をかけた。

「ん？」

拓也がその声で顔を上げると、

「ッ！？」

――ザザッ！

急に拓也が後方へ跳び退り、龍魂剣を構えた。

「え、何？まだ戻って無い訳！？」

泉が思わず声をかけるが、

「その声は・・・泉、か？」

拓也は警戒しながらもそう返す。

「当たり前じゃない！あんた目があるんだから、見えるでしょ！」

泉にそう言われる拓也だが、拓也の瞳は燃えるように紅い。

拓也も自分の視界がおかしいのは分かっていた。

周りの物が歪んで見え、人や生き物は化物に見える。

「微妙にまだ残ってやがるな・・・」

輝二が座ったまま警戒心を抱いた。

「・・・輝二か？」

拓也には声で判断するしかない。

「・・・これで分かるだろ？」

輝二は身に光を纏う。

拓也には怪物が1体、輝いて見えた。

「お、輝二だ」

それを理解し、やっと構えを解く。

拓也も泉に歩みより、目を細めて確認した。

「な、何よ。って、あんた目が見えない訳?」

「いや、見えるには見えるけど・・・化物だな」

「はぁ?」

意味が分からず聞き返す泉。

「何か視界がおかしいんだよ。皆が化物に見える・・・」

拓也はしゃがんでアグモンを見ると、

「・・・黄色のカエルにしか見えない」

「何ぃ!?」

その一言に怒るアグモンと、爆笑する大。

「た~っはっはっはっ!!言える言える!」

大は腹を押さえ、アグモンの頭を叩いた。

「お、その声は大か」

拓也は大を見上げる。

「俺は何に見える？」

大が冗談半分で拓也に聞いてみると、

「角生えて尻尾あるように見えるぞ」

「な、何じゃそりゃ！？」

意外な返答に驚く大だが、その隣ではトーマが笑いをこらえていたりする。

「魂広解いてみたら？」

友樹が声をかけると、

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・如何やって解くんだっけ？」

「えぇぇっ！？」

拓也の返答に困る友樹。

「ふぅ・・・」

輝二は一息吐き、光剣を消したかと思うと同調する。

身体能力を上げた。

「向こう向け」

拓也のそばに来て、拓也に背を向けさせる。

「・・？」

拓也はとりあえず言う通りに動き、輝二に背を向けた。

輝二は拳を握り、手に力を集中させる。

「はぁっ！」

――ドガッ！

「あいだっ！？」

そして思い切り拓也の後頭部を殴った。

「ふ～・・・」

拳に息を吹きかけ、パンパンッと手をはたく。

「何すんだ！」

文句を言う拓也だが、先程の衝撃で魂広が解け、視界が戻っている事に気付いた。

「あ、普通に見える・・・」

「魂広したら、殴られると思えよ」

輝二の言う通り、拓也が本当に魂広の解き方を忘れたと言うなら、解く際に誰かが殴って解かせるという事になる。

「い～！？」

拓也もそれはごめんだと言い返す。

「だったら魂広は控えろ」

「それもなぁ・・・」

魂広が使えないとなると、同調と進化のみになってしまった。

「魂広が使えないのが、こんなに痛いとは・・・」

拓也も初めてそれを実感し、ため息を吐く。

「ところで、何で暴走したんだい？」

トーマが話を戻して拓也に尋ねると・・・。

「はぁ・・・聞かないでくれ、頼むから・・・」

拓也は青い顔をして、先程怒った事を悔やむのだった。

（エンシェントスピリットの所為で、迷惑な事に・・！）

「時と場所を考えろってんだよっ！」

――ドゴッ！

拓也は額に怒りのマークを浮かべ、思わず地面を殴りつける。

因みに怒りの矛先は、スピリットに向けたいらしい。

「魂広したらぶん殴ってやるっ！！」

拓也が訳の分からない事を言うので、大丈夫だろうと皆は安心する。

アグモンが拓也の頭にかぶりついた。

「ぎゃ～～っ！！？」

拓也はいきなりの事で驚愕の叫びを上げる。

因みに噛みついたアグモンは、大の方だ。

「何やってんだアグモン」

大は特に助けようともせず、アグモンに声をかける。

「拓也、頭がおかしいみたいだから、俺が直してやる！」

「だからって噛みつく事ないだろぉっ！」

拓也は立ち上がりながらアグモンを振り下ろした・・・。

42話：視界の安定（後書き）

拓也「見ろよここ！噛みつかれた跡がついてんじゃねぇか！」

アグモン「あはははは！ほんとだついてやがるっ！」（笑）

拓也「てめぇ何笑ってやがんだぁ！」↑同調して回し蹴り

アグモン「おわっ！」↑ヒラリと避ける

大「お、喧嘩か！？俺も混ぜろ！」↑喧嘩に突入

４３話：人型と獣型（前書き）

４３話、参ります！

43話：人型と獣型

「で、何故にこうなった？」

拓也が目の前の状況を見て、後悔の念を抱く。

――ドゴォッ！バゴン！ズドォォォォンッッ！！

大地の上でデジモン達が争いを始めていた。

「これ、如何やって止めるの？」

岳が苦笑いと冷や汗を浮かべて、策を考える。

「嵐呼んでもいいけど」

「ついでに吹雪も」

「雷も出来るぞ～」

泉、友樹、純平が笑顔を浮かべてそう言った。

「・・・・・それが手っ取り早いんじゃねぇか？」

大がトーマに問いかけると、

「手っ取り早いのは良いが、それであのデジモン達が争いを止めるとも思えないな」

「あ～面倒くせぇ！」

大はトーマに言い返された事を考え、頭をかきむしる。

「だ～そもそも！こいつらは何で闘ってんだ！？」

大が話をそらして原因を聞く。

「俺知らね」

拓也は一抜け、とでも言いたげにそう返した。

だが、その時、

――ズキュゥン！バキュゥンッ！

銃声のようなレーザー音が響いたかと思うと、大空からギズモンの大群が現れる。

しかも全てＸＴだ。

「うわぉ・・・こりゃまた大群で・・・」

拓也はそれを見て感心する。

敵もまぁ、よくあれほどの数をそろえたものだ。

（魂広出来ないかもしんねぇのに・・・）

よりによってこんな時にと、拓也は額に手を当てる。

ギズモンXTは地上にいるデジモン達をも巻き込み、レーザーを連射した。

「何だあいつらは！」

「構わん！焼き払えっ！」

それぞれの司令デジモンが、デジモン達に指示をおくる。

デジモン達は、この争い事を邪魔するギズモンへと、標的を変えた。

炎やらレーザーやら砲撃やらが、全て一斉に発射される。

が、ギズモン達はほとんどをかわし、直撃したとしても紫色のボディが傷つくだけだ。

素早い動きで攻撃をかわし、デジモン達を狙い撃つ。

「うわぁぁっ！」

「ぐぁぁぁ！？」

「何だ！？如何なっている！？」

レーザーに直撃したデジモンは、光となって消滅し、デジタマは残らない。

「ん？デジタマが残ってないぞ・・・」

拓也もそれに気付き、大に確認を取る。

「ギズモンのレーザーに当たったら、分子が分解されて消滅するんだ。デジタマなんて残らねぇさ。デジモンの死だ」

大の言葉に、多くの者達が驚愕の表情を浮かべた。

「だったら放っておけないぞ！」

「そうね。デジモン達を助けなきゃ！」

太一と空が頷く。

他の者もやる気のようで、全員が完全体、もしくは究極体に進化した。

啓人達はカードで援護する為、ギルモン達を完全体に進化させる。

――――

メガログラウモン

完全体。サイボーグ型。必殺技は＜アトミックブラスター＞

――

ラピッドモン

完全体。サイボーグ型。必殺技は＜ゴールデントライアングル＞

タオモン

完全体。魔神型。必殺技は＜梵筆閃（ぼんひつせん）＞

サイバードラモン

完全体。サイボーグ型。必殺技は＜イレイズクロー＞

拓也と輝二は超越形態に進化した。

泉達は同調は出来るものの、魂広は出来ず武器が無い為、後方へ下がる。

光子郎はカイゼルグレイモンにパソコンを向けた。

「『カイゼルグレイモン。超越形態。竜戦士型。必殺技は＜九頭龍陣＞。九つの龍脈を宿した灼熱の焔鎧を装備し、龍の魂を封印した龍魂剣を持つ』・・・これが、あの大剣の持ち主ですか」

光子郎は納得したように頷く。

啓人はマグナガルルモンにデジヴァイスを向けた。

「『マグナガルルモン。超越形態。サイボーグ型。必殺技は＜マシ

ンガンデストロイ＞。通常の状態でかなりの機動力を誇っているが、武装を解除する事で接近戦にも対応が可能である』・・・速いんだ」

輝二のあの速さなら、納得出来る啓人。

「カードスラッシュ！＜最速のブライガ＞ッ！」

留姫が1枚のカードをスキャンすると同時に、デジモン達全員の素早さが跳ね上がる。

「お前これ以上速くなって・・・意味あるのか？」

カイゼルグレイモンが龍魂剣を握り、隣にいる者に問いかけた。

「変わらんだろ」

マグナガルルモンは笑みを浮かべて、リヒト・シュベーアトを取り出す。

――ドンッ

全員が一斉に動き出し、多くの者たちが足を蹴って飛び立った。

地上のデジモン達も、新たにギズモンを倒す者達が現れたのに気づき、それに協力する。

今や全てのデジモン達が、ギズモンを倒すべく心が1つになりつつあった。

体力が減り、全体の士気が落ちてくれば啓人達の出番だ。

啓人達４人は顔を見合わせ、頷き合う。

それぞれカードを取り出した。

「カードスラッシュ！＜少数精鋭＞ッ！」

啓人のカードで、ダメージが全て完全回復する。

「カードスラッシュ！＜防御プラグインC＞ッ！」

健良が防御を底上げし、

「カードスラッシュ！＜クリティカル＞ッ！」

留姫が攻撃力を大幅に上げた。

極めつけは、

「カードスラッシュ！＜地獄の鎖＞！」

遼が鎖でギズモンの動きを封じる。

「「「「「「「「「「いっけぇぇぇぇえええっっっ！！！」」」」」」」」」」

複数の声が重なった。

「「「「「「「「「「「「おぉぉぉぉぉぉおおおおっっ！！！」」」」」」」」」」」」

「「「「「「「「「「「「ゴアァァァァァァァアアアアッッ！！」」
」」」」」」」」」」」

人型のデジモンと、獣型のデジモン達が力を合わせ、必殺技を一斉発射する。

ギズモン達は逃げる事も避ける事も叶わず、それらの攻撃に呑み込まれた。

ギズモン達から浮かび上がったデジコードは、カイゼルグレイモンとマグナガルルモンはお疲れのようなので、泉達がスキャンした。

全員が進化を解き、成長期や幼年期に退化する。

「っだ〜！疲れんなぁ！」

拓也が地面に腰を下ろし、大きく背伸びした。

すると、2体のデジモンが一同に近づいてくる。

人型と獣型の司令デジモンだった・・・。

43話：人型と獣型（後書き）

次回でこの章は・・・最後？

あぁ、でも・・・まだ微妙ですね・・・。

次回に収まれば良いのですが。

では、頑張りま～す！

４４話：ここは何処？（前書き）

はい、タイトルに続く言葉は、私は誰？、ですね。

では４４話、参ります！

４４話：ここは何処？

1体は翼を持った人型のデジモン。

もう1体は翼を持つ獣。

光子郎は人型の方にデジヴァイスを向けた。

「『ダルクモン。成熟期。天使型。必殺技は＜バテーム・デ・アムール＞。常に先陣を切って闘う姿は、戦場の女神（てんし）、と言われる』・・・」

続いて獣型のデジモンにもパソコンを向ける。

「『ヒポグリフォモン。完全体。獣型。必殺技は＜ヒートウェーブ＞。知性はそれ程高い訳ではなく、非常に荒々しい性格の幻獣のデジモン。進化すればグリフォモンになると言われる』・・・か」

それだけを確認すると、話を聞く為にパソコンを閉じた。

「先程の加勢、礼を申し上げる」

ダルクモンが一同に頭を下げた。

「別に。こちらはただ、前からギズモンが敵だっただけですので」

トーマはとりあえずそう返しておく。

「しかし、そなた達のおかげで我等が無事なのは変わらない。あり

がとう」

ヒポグリフォモンもそう言って頭を下げた。

そこまで言われると、どうも恥ずかしくなってしまう一同。

「今戦で我等は争いをやめ、同盟を結ぶ事にした」

「本当ですか！？」

ダルクモンの言葉に驚愕する皆を代表して、トーマが聞き返す。

それにダルクモンとヒポグリフォモンは頷き、顔を見合わせた。

「お互いにかばい合える力がある事を知った」

「ならば、これからもこの島を守り続けていく事を誓ったのだ」

2人の言葉を聞き、安堵の息を漏らす一同。

――ズズズズ・・！

突如、地震が起きる。

全員が火山を見上げた。

（ヴォルクドラモンの奴、今の争いで機嫌損ねたって言うのか！？）

拓也は少し考え、泉に耳打ちする。

「悪い。今、俺魂広出来ないかもしんねぇから、風で火口まで運んでくれ」

「は？・・・まぁいいけど」

拓也は泉の風で浮かび上がる。

「何処行くんだよ？」

大に声をかけられ、拓也は笑顔を浮かべて返した。

「あいつの機嫌を戻しにいく！」

「ゴォォォォォォアアアアアアアアアアアアアアアアッッッッ！！！」

ヴォルクドラモンが火口から現れ、咆哮を上げる。

「おい！こら！地震起こすなって言ったろっ！」

「地上の奴等が騒ぐからだ。これでは眠る事も出来ん・・！」

ヴォルクドラモンが不満げに唸り、溶岩を纏った。

「それなら問題無い！丁度仲直りしたとこだっ！」

「フ・・・そんな事、信用出来んな」

「何でだよ！」

「奴等が上辺だけで同盟を結んだ事など、今までに何度もある。が、結局は同じ事の繰り返しだ」

ヴォルクドラモンは同盟の事を、鼻で笑った。

拓也はダルクモン、ヒポグリフォモンが言っていた事を思い出す。

『お互いにかばい合える力がある事を知った』

『ならば、これからもこの島を守り続ける事を誓ったのだ』

そして、彼らの意志が本当である事を確認した。

「違う！あいつらは今度こそ仲直りしようとしてんだよっ！」

「ククク・・！貴様には分からんさ」

ヴォルクドラモンの口調で、エンシェントスピリットを思い出す拓也。

するつもりは無かったのだが、拓也は魂広してしまう。

翼が出現し、瞳が紅蓮に燃え上がり、紅い目に変化した。

「信じろっっ！！！」

拓也は声を荒げ、張り上げる。

その声の大きさに、ヴォルクドラモンは思わず動きを止めた。

「俺を信じろっ！！！あいつらがまた争いを始めたら、俺を殴り飛ばせっ！！！」

拓也の発言に、目を丸くするヴォルクドラモン。

しばらく沈黙が続いたかと思うと、急に笑い出した。

「ククク・・・ハハハハハッ！！」

ヴォルクドラモンは怒りを静め、溶岩を落ち着かせる。

「人間、面白い事を言うな！クク・・！・・・気に入った、良いだろう。ただし、奴等がまた動き出せば、お主の言うとおり焼き払わせてもらうぞ」

「あぁ！好きにしろっ！！」

拓也はニカッと笑い、腰に手を当てた。

「何か困った事があれば、お主の炎で余を呼ぶといい。近くに大地か火山があれば、助けに行こう・・・」

「え、良いのか？」

「先程も言った通りだ。余はお主を気に入った」

ヴォルクドラモンはそう言い残し、再び火山の中へ姿を消す。

拓也はここでふと気付いた。

ヴォルクドラモンが拓也を呼ぶ時、‘貴様’から‘お主’に変わっていた事を・・・。

「おい拓也！魂広するなって言っただろ！」

帰って早々、輝二に一喝される拓也。

「輝二か・・？悪い悪い、何か勝手になっちまった」

相変わらず化物に見える中、声で相手を判断し、拓也は輝二に謝る。

「また殴らないといけないのか・・・」

そう輝二が呟き、ため息を吐いた。

「それなら問題無いぞ！」

拓也はそんな輝二にサムズアップして見せ、魂広を解く。

「ん、何だ？戻せるようになったのか」

「殴られんの嫌だから、帰って来る間に練習した」

拓也も毎回毎回殴られていては、もともと馬鹿だというのに、更に馬鹿になってしまう。

・・・前言撤回。

馬鹿ではなく、阿呆と書いておこう。

（・・・何か非常にムカつく空気が）

拓也は心の中でそれを感じ、微妙に怒っていた。

「あ、そういやあの2体は・・？」

ダルクモンとヒポグリフォモンの姿が見えない事に気づき、拓也は輝二に尋ねる。

「ん？あぁ、もう帰ったぞ。する事がかなりあるそうだ」

輝二は笑みを浮かべてそう言った。

「そっか」

拓也もそれを聞いて笑みを浮かべる。

「何いぃいぃ！？」

クロスモンの話を聞いていた純平が、驚愕の声を上げた。

「何々！？」

会話していたヒカリや京が驚いて、そちらを見る。

純平はクロスモンと2・3言交わし、こちらに戻って来た。

「如何したんだい？」

トーマがいち早く声をかける。

純平はすぐさま地図を取り出した。

「この島、動いてるらしい。しかも1時間に1キロ！」

「な、動いてる！？」

「ちょ、この島入って2・3日経ちますよ！？」

トーマが驚き、賢が純平に駆け寄る。

「どの方向に動いているか知らないが・・・今いる場所が分かんなくなった」

1時間に1キロという事は、3日いたとして72キロは動いている事になる。

この島は、急に反転、もしくは方向を変える事がままあるらしい。

火山を目指しているのだが、どの方向に火山があるのか、完全に分からなくなってしまった。

いわゆる、迷子だ・・・。

４４話：ここは何処？（後書き）

大「はっはっは！聞いたかおい！迷子だってよっ！」（笑）

拓也「これ、笑う問題じゃないだろ」

大「はは、でもよ！笑えるじゃねぇか。こんだけ人数いて迷子ってよぉ！」

大輔「いつまで笑ってんだよ・・・」

太一「腹壊すぞ」

啓人「大丈夫だよ、この人は・・・」（苦笑）

４５話：喧嘩をすれば（前書き）

４５話、参ります！

45話：喧嘩をすれば

「飛んで霧を突き抜けたら良いんじゃねぇか・・？」

それはいつも唐突に言われる。

ずっと悩んでいても、解決策は突如として顔を出した。

拓也の案に頷き、こちらに来た時と同じように進化する。

インペリアルドラモン、ミラージュガオガモン、セントガルゴモン、スサノオモンは飛び立った。

とにかく霧を抜ける。

合流はそれからだ。

各自ノンストップっで勢いを上げ、霧の上へと上昇する。

太陽の光を浴びる為、外の状況を見る為、ただ上へ飛び上がった。

――バシュッ！

一番手はインペリアルドラモン。

霧を突き抜け、大空の中に現れた。

二番手にミラージュガオガモン。

三番手にセントガルゴモン。

「・・・スサノオモンは！？」

なかなか現れない残り1名に、トーマは辺りを見回す。

――バシュッ

スサノオモンは少し離れた所から現れた。

全員が外に出る事に成功する。

スサノオモンは進化を解き、拓也は魂広で飛行した。

泉は輝二達を風で浮かせる。

「拓也が左って言うから！」

「泉も8時の方向って言ったじゃねぇか！」

進化を解いて早々、泉と拓也が言い合いを始めた。

スサノオモンが遅かった理由を、何となく理解する皆であった。

純平は1人、地図を出して眺めている。

「中央大陸があれだから・・・ここは・・・」

周りの大陸と地図を見比べ、現在位置を推測していった。

「僕にも見せてくれないか」

ミラージュガオガモンの上に乗っているトーマが、考え込んでいる純平に声をかける。

「あ、あぁ」

純平もその声に気づき、ミラージュガオガモンに近づいた。

「中央大陸があれだろ？だから今は・・・」

「ここ、じゃないかい？」

純平とトーマが意見を出し合い、大まかな位置が特定する。

「拓也が左って言わなかったら、もっと早く出れたじゃない！」

「知るかよ！俺は左だと思ったからそう言っただけだ！」

「根拠は何よ！」

「か、勘だよ！悪いか！」

まだ言い合っているあの2人。

拓也が勘で方向を決めた事を知り、輝二達はため息を吐く。

「あ～えぇっとぉ？今がここだから・・・」

純平はいつもの事だと受け流し、火山の方向を見定めた。

「あっち、だな」

そして4時の方向を示す。

島は西へ移動していたのだ。

が、西と言っても南西に移動していた為、少しは近づいた事になる。

「あっちだな。よぉし、インペリアルドラモン、向こうだ！」

大輔はインペリアルドラモンに方向を示した。

インペリアルドラモンは大輔の指差す方へ体を向け、翼を広げる。

ミラージュガオガモンも向きを変えた。

純平はいつの間にか、ミラージュガオガモンで移動する事になっている。

これでは究極進化は出来ない。

「俺は飛ぶぞ！」

「私も行けるわ」

拓也は翼を広げ、泉も自分の周りに風の渦を巻かせる。

「こっち来なよ！」

啓人が輝二達にそう言い、結局セントガルゴモンに乗る事になった。

「純平、こっちで良いんだろ？」

拓也は最後の確認をする。

それに純平は頷き返した。

「おぉし・・！」

拓也は態勢を低くし、翼を広げる。

「はいレディ・・・ゴ～！」

――ドォンッ！

泉の声と同時に、拓也が一気に飛行を開始した。

「は、速・・・」

そのスピードに、淑乃が呆れる。

インペリアルドラモンらも、次々と出発した。

「うぉ、何だこれ！すげぇ速い！」

拓也も前とは違う素早さに驚き、喜ぶ。

エンシェントスピリットが体を乗っ取っているうちに、いろいろと鍛えられていたようだ。

その事に、微妙な喜びを抱く拓也。

「喜んで良いのか、悪いのか」

腕を組んで考えながら飛行する。

すると、

「お～い！」

後方からインペリアルドラモンが追いついてきた。

大輔が手を振っている。

「おぉ～！」

拓也もそれに振り返した。

眼下では蒼い海面が、後ろへと流れていく。

目を凝らすと、セントガルゴモンやミラージュガオガモン、泉らしき人影も見え始めた。

まぁ相変わらず、全員が化物に見えて来る訳だが・・・。

少しすると泉が拓也と並ぶ。

「速くはなったけど、飛ぶのはまだまだだね」

「何ぃ？」

泉は軽く笑った直後、風の流れを巻き起こし天に風の川を生み出した。

それに乗り、更にスピードを上げる泉。

「待てぇい！」

拓也も流れを掴み、泉を追いかける。

「あの２人、元気だね～」

啓人がそれを見て笑みを浮かべた。

「「やかましいだけ」」

輝二と留姫の息が合う。

思わずお互い顔を見合わせ、性格が似ている事を知った。

すぐに視線を反らし、顔を合わせないようにする。

「はは、そこもそっくり」

「「うるさい」」

遼の一言に、２人そろって反論した。

その後ろでは、健良が苦笑していたりする。

「お、見えた」

純平が大陸が見えたのを確認し、地図を広げた。

「ん、間違い無い」

1人コクンと頷き、拓也に魂話を繋ぐ。

【拓也、あの大陸がそうだ】

【了解！】

拓也は高度を下げ始め、大陸に向かった。

それに泉も気づき、高度を下げ始める。

ここからでも、うっすらと火山は確認出来た。

古の孤島にあった火山よりも大きく、何より2つある。

「おぉ！見えた見えた！」

太一もそれを確認し、思わず立ち上がった。

「危ないぞ」

「平気平気」

ヤマトが注意するも、簡単に受け流す太一。

突如インペリアルドラモンが高度を下げ始め、その反動で太一の足元がふらつく。

「おわっ！？」

それに強風が重なり、太一は吹き飛ばされた。

「太一！？」

「太一先輩！？」

ヤマトと大輔もそれに驚愕し、インペリアルドラモンに向かうよう言うが、インペリアルドラモンは必要無い、と首を横に振る。

「何で！」

大輔が分からずにそう言うと、

「大輔君、大輔君」

岳が大輔の服を引っ張った。

「何だ？」

そちらを見ると、太一は丁度高度を下げていた拓也に掴まれている。

「セーフ・・・」

拓也も冷や汗を流し、苦笑いを浮かべた。

「悪い。助かった」

太一が苦笑して謝ると、

「その声は・・・あ、太一さんか」

拓也は声で人物を判断する。

大は雰囲気で呼び捨てだったが、流石に拓也も太一に対しては呼び捨てではない。

「はは、別に太一で良いんだけどな」

太一は苦笑して、大陸に降り立つ。

拓也も地面に足をつき、魂広を解いた。

翼は消え、眼も戻る。

「1回でも喧嘩したら、そう呼びますよ」

拓也は首の後ろで腕を組み、笑顔を浮かべた・・・。

45話：喧嘩をすれば（後書き）

太一「んじゃ、いまから喧嘩するか？」

拓也「えぇっ！？いや、でも喧嘩の内容が」

太一「何か作るか・・・」

（馬鹿って言えば早いよな・・・）↑拓也をちら見

拓也「何かムカつきます・・！」↑太一の考え事を感知

太一「おま、センサーでも付いてんのか！？」

４６話：火山の紅鳥（前書き）

４６話、参ります！

46話：火山の紅鳥

「熱い！」

「そうか？」

大の愚痴を、拓也がニヤリと笑ってそう返す。

拓也以外の者達は、火山の温度で大量の汗をかいていた。

同調している拓也は、温度なんて関係無い。

友樹などとっくに眼を回し、輝一に背負われている。

「あ～つ～い～！」

太一のアグモンがだら～んと腕を垂らし、ノタノタと歩いていた。

それは、パートナーも似たようなものである。

「良いよなぁ拓也は。熱くなくて・・・」

大輔が羨ましそうに拓也を見るが、

「いやでも、これが雪山になると、友樹と立場変わるからな？」

拓也は、輝一におぶされている友樹と自分を指差す。

「あ、そ・・・」

大輔はやっぱそうなのか、と頷いた。

一同は汗を流しながら（1名を除く）、火山へと歩を進める。

「はは・・・見っけ」

拓也は火山を見つけた途端、歩みを止めて唖然とした。

「・・・・・・あれがスーツェーモン？」

そして、2つの火口の上空に滞空している、紅い巨鳥を指差す。

「うん、間違い無い」

啓人は汗を拭いながら、コクリと頷いた。

8枚の翼を持ち、首を尾の周りには黒ずんだ球体――デジコアが合計12個浮遊している。

深紅の眼が4つ、眼下を見下ろしていた。

「『スーツェーモン。究極体。聖鳥型。必殺技は＜紅焔（こうえん）＞。南方を守護し、灼熱の火焔を操る四聖獣の1体。その強さはデジモンの中でも最高峰に位置し、並みの究極体では倒す事が不可能。四聖獣の中でも気性が荒く、意味無く近づく者は全て焼き払う』・・・なるほど、強敵です」

光子郎がデータを読み上げ、気を引き締め直す。

啓人達が、倒せなかったという意味も理解出来た。

「おぉし！やる気出てくんなぁ！」

大は相手が強いと聞いて、逆に闘う気が満々である。

「僕達も究極体になった方が良いね」

啓人が健良に進化を確認した。

「そうだね。それに、もし倒れてもカードで援護出来るし」

健良はカードポーチを叩いて、軽く笑う。

「如何するヤマト。今回ばっかしは融合した方が、良いんじゃないか？」

太一が思わずヤマトに確認すると、ヤマトも頷き返した。

「だったら俺達も」

大輔は賢と顔を見合わせ、頷き合う。

「俺達は如何する？スサノオモンで行くか？」

拓也が輝二達に確認すると、輝二は首を横に振った。

「やめとけ。友樹が無理だ」

そして、グデングデンになっている友樹を指差す。

「あ～・・・そうだった」

拓也も苦虫を噛み潰したような顔をし、納得した。

「よぉしアグモン！バーストモード全開で行くぞ！」

「おうよ！」

大とアグモンが拳を握る。

啓人達がデジヴァイスを取り出し、パートナーデジモンにかざした。

『『『『Ｍｏｔｒｉｘ　Ｅｖｏｌｕｓｉｏｎ』』』』

デジヴァイスの声が響いたかと思うと、究極体のデジモン４体がそこにいた。

太一は左手で、ヤマトが右手でデジヴァイスを握り、それをかかげる。

「アグモン、ワープ進化っ！」

「ガブモン、ワープ進化っ！」

アグモンとガブモンが光に包まれた。

２体は互いに螺旋を描くように上昇し、１つとなる。

白き鎧を纏い、紅と白のマントをはためかせた戦士が舞い降りた。

‘最後’の名を冠せし正義の聖騎士。

「オメガモン！」

――――――

オメガモン

究極体。聖騎士型。必殺技は＜グレイソード＞、＜ガルルキャノン＞

――――――

ロイヤルナイツの1人とも言われたデジモンが、そこに現れた。

大輔と賢がデジヴァイスを握り、天へかかげる。

「ブイモン進化！・・・エクスブイモン！」

「ワームモン進化！・・・スティングモン！」

まず2体のパートナーデジモンが、成熟期へ進化。

2体が光に包まれ、交差する。

「「ジョグレス進化っ！」」

光が大きくなり、

「パイルドラモン、究極進化！！」

巨大化した。

「インペリアルドラモン、モードチェンジ！ファイターモードッ！！」

――――――

インペリアルドラモン　ファイターモード

究極体。古代竜人型。必殺技は＜ギガデス＞

――――――

竜が姿を変え、人型のデジモンへ移行する。

「殴らなければ、デジソウルが出ないと思うなよっ！！」

大は拳を握り、左手の平に打ち付けた。

直後、大の体に闘志と共にデジソウルが駆け巡る。

トーマ、淑乃、イクトの体にもデジソウルが走った。

「「「「デジソウル・・・チャージ！オーバードライブッ！！」」」」

デジソウルが膨張し、パートナーデジモンが進化する。

「シャイングレイモン！」

「ミラージュガオガモン！」

「ロゼモン！」

「レイヴモン！」

４体が究極体に進化し、大達がデジヴァイスを構えた。

「「「デジソウル・・・バーストォッ！！」」」

４色の光がデジモン達を包み、装甲色を変える。

輝一は友樹を近くの岩に寄りかけ、拓也達と共にデジヴァイスを構えた。

拓也の手に紅、輝二に白、輝一に黒、泉に黄緑、純平に黄のデジコードが宿る。

「「「「「エンシェントスピリット・・・エボリューションッッ！！」」」」」

それぞれをデジコードが渦を巻いて巨大化し、膨れ上がった。

「エンシェントグレイモン！」

「エンシェントガルルモン！」

「エンシェントスフィンクモン！」

「エンシェントイリスモン！」

「エンシェントビートモン！」

5体の闘士が蘇る。

究極体となった者達が、スーツェーモンのもとへ飛翔、もしくは駆けていった。

が、突如火山の麓に、3体のデジモンが姿を現す。

スーツェーモンの配下、サンティラモン・インダラモン・パジラモンだ。

デーヴァの3体も、その姿を見せる。

スーツェーモン同様、眼は黒ずんでいた。

サンティラモン

完全体。聖獣型。必殺技は＜クリシュナ＞

インダラモン

完全体。聖獣型。必殺技は＜アドームクハ＞

パジラモン

完全体。聖獣型。必殺技は＜ヴァフニジュヴァーラ＞

――――――

「僕が行く！」

「私もよ！」

セントガルゴモンとサクヤモンが進み出た。

残りの者達はスーツェーモンへ向かう。

その間、スーツェーモンは微動だにせず、ずっと彼方を見ていた・・・。

４６話：火山の紅鳥（後書き）

流石に戦闘デジモンの数、しぼりました。

スーツェーモンが相手なら、完全体・・・無理だな、って思いましたので。

大のデジソウルは・・・突っ込まないで下さると、嬉しいです。

次回も頑張ってみます！

47話：その手に武器を（前書き）

47話、参ります！

47話：その手に武器を

「ぅ・・・」

岩に寄りかかっていた友樹が、眼を覚ます。

「あ、起きた」

淑乃がそれに気づいて、友樹の体を支えた。

「う～・・・まだ熱い」

「そりゃそうよ。まだ火山の近くなんだから」

淑乃の言葉に、友樹が驚いて顔を上げる。

「えぇ!?皆闘ってる!僕も行かなきゃ!」

友樹が走っていこうとするが、淑乃が腕をガシッと掴んだ。

「はいはい、君はダメね」

「何で?」

分かっていない友樹を、淑乃が引き寄せる。

「君、火山苦手みたいだし・・・倒れられても困るから」

「いやでも・・・」

友樹は、淑乃と火山の方向を交互に見た。

「如何しても行かなきゃ勝てそうにない、って時だけしかダメだから」

淑乃は無理矢理、友樹を納得させる。

友樹は当然、不満げな顔をしていた・・・。

「＜紅焔（こうえん）＞」

スーツェーモンが炎の渦を吐き出す。

狙いはオメガモンだったが、間へエンシェントグレイモンが入り、炎を身に纏った。

「ゴォオオオオオオオアアアアアアアアアアアアアアアアッッッ！！！！」

エンシェントグレイモンが、スーツェーモンへ咆哮する。

咆哮によって衝撃波が放たれ、スーツェーモンへ向かった。

「＜残火（ざんか）＞」

スーツェーモンが両翼から火の粉を飛ばす。

衝撃波は火の粉によってかき消され、エンシェントグレイモンに突き進んだ。

が、勿論炎の闘士に火は効かず、再び身の纏う。

一同は先程の咆哮に不安を抱いた。

まさかまた暴走するのでは、と疑うがエンシェントガルルモンは面倒くさそうにしている。

（制御していても吼える。・・・やかましい奴だ）

シャープネスクレイモアを握りながら、思わずため息を吐いた。

――ズズズ・・！

突如山肌が揺れ、溶岩の柱が立ち上る。

それらはエンシェントグレイモンに集中していった。

「ガァァァ・・・」

エンシェントグレイモンは小さく呻き、力を蓄える。

それを確認した上で、デュークモンが盾を構えた。

「＜ファイナル・・・エリシオン＞ッッ！！」

盾――イージスから光の砲撃が発射される。

スーツェーモンは避ける素振りも見せず、直撃した。

爆煙が晴れるが、スーツェーモンは無傷のままである。

オメガモンが、右腕のガルルキャノンの砲口をスーツェーモンに向け、標準を決めた。

「＜ガルル・・・キャノン＞ッッ！！」

圧縮された冷気の砲弾が発射される。

「＜紅焔＞」

スーツェーモンも炎の渦を放って、砲弾を相殺させた。

インペリアルドラモンが胸部の砲塔に、エネルギーを集中する。

「＜ギガデス＞ッッ！！」

極大のエネルギー砲撃が放たれ、宙を突き抜けた。

「＜テラブラスター＞ッッ！！」

エンシェントビートモンも、同じく電撃の砲撃を発射する。

2つの閃光がスーツェーモンに直撃したが、少々焦げ目が付いただけだ。

（出鱈目な防御力だな・・・）

エンシェントガルルモンがそれに驚き、呆然とする。

「＜トリッドヴァイス＞ッ！！」

シャイングレイモンが火炎球を連続して放ったが、これも効かずダメージは無い。

エンシェントガルルモンが大剣を向けた。

「＜アブソリュート・・・ゼロ＞ッッ！！」

冷気の光線を放つ。

「＜ガルル・・・キャノン＞ッ！！」

それにオメガモンの冷気砲弾が上乗せされた。

「＜紅焔＞」

スーツェーモンは灼熱の炎を放つが、まず冷気の光線で相殺。

その後、砲弾が突き抜ける。

――ビキビキ・・！

スーツェーモンの体の一部が凍りついた。

が、喜んでもいられない。

周りの熱気と、スーツェーモンの炎で溶かされる。

とはいえ、やっとダメージを与えられた訳だ。

因みに、エンシェントグレイモンはとっくに力を溜め終えている。

「＜ガイア・・・トルネード＞ォッッ！！」

紅蓮の渦が唸りを上げて突き進んだ。

スーツェーモンが溶岩の渦に包まれる。

「ゴァァァッ！」

流石に溶岩は応えたらしい。

呻き声を上げる。

だが、やはり火の鳥に火は効果が薄いようで、大したダメージも見られない。

エンシェントイリスモンがレイピアを天に向けると、火山上空に黒雲が立ち込め、強風が吹き荒れる。

スーツェーモンの背後に、竜巻が複数発生した。

「＜ストーム・・・ゲイザー＞ッ！！」

竜巻がスーツェーモンに襲いかかる。

「ゴァァッ！？」

背後からの攻撃に驚き、上手くかわせないまま直撃した。

それを見たエンシェントスフィンクモンが、更に追撃を仕掛ける。

「ガァァァァァァァァァァァァァァァッッッ！！！」

咆哮し、衝撃波をまき散らす。

＜ダークブラスト＞だ。

衝撃波はスーツェーモンの翼をかすり、紅い羽を散らす。

「ガァァ・・！」

小さく呻くスーツェーモンだが、ついに火山上空から動き出した。

両翼を大きく広げ、大空へ舞い上がる。

脚の爪に、紅蓮の炎を纏わせ一同に襲いかかった。

「＜煉獄爪（れんごくづめ）＞」

狙いはデュークモン。

――ガキィンッ！

デュークモンは盾でそれを防ぎ、爪が弾かれ態勢が崩れたスーツェーモンに、ジャスティモンが攻撃を仕掛ける。

「＜トリニティアーム＞！」

ジャスティモンの腕が変化し、攻撃力が大幅に上がった。

その腕を振り上げ、スーツェーモンに叩きつける。

「ガァァッ！」

スーツェーモンは痛みに耐え、体を無理矢理動かし、再び天へ。

「＜ファイナルエリシオン＞ッ！！」

すかさず、盾を構えていたデュークモンが砲撃を発射する。

スーツェーモンは翼で風を受け、砲撃を上手く避けた。

が、空は空で、風の闘士の領域。

エンシェントイリスモンは笑みを浮かべ、すぐさま竜巻を発生させる。

複数ではなく、巨大なものを1つ。

スーツェーモンに逃げ道を与えず、そのまま包み込むように呑み込んだ。

「＜ストーム・・・ゲイザー＞ッ！！」

竜巻の嵐の中、風の刃が荒れ狂い、スーツェーモンに襲いかかる。

「ゴォォォァァアアアッ！！」

スーツェーモンはダメージを負いながらも、炎を纏わせた翼を大きく広げ、竜巻をかき消した。

「＜紅焔＞」

再度、紅蓮の渦が作られる。

エンシェントグレイモンが飛び立ち、その炎を受けた。

オメガモンの左腕に剣が出現する。

シャイングレイモン、ミラージュガオガモンも同じく武器を構え、3体は一気に接近。

同時に武器を振り上げ、振り下ろした・・・。

47話：その手に武器を（後書き）

な、何故か1話で決着がつきませんでした・・・。

やはり難しいですね。

流石四聖獣という訳ですか・・・。

次で決着をつけたいんですけど、はい、難しい・・・。

あ、でもその前にデーヴァ達がいましたね。↑今思い出した

４８話：残る敵（前書き）

４８話、参ります！

48話：残る敵

「＜バーストショット＞ッ！」

セントガルゴモンはデーヴァ3体に向けて、ミサイルを発射する。

ミサイルは全弾、サンティラモン達に着弾した。

「＜飯綱＞ッ！」

続いてサクヤモンが霊狐を放つ。

サンティラモンに2匹、インダラモン、パジラモンにそれぞれ1匹ずつだ。

霊狐も全て直撃し、サンティラモンが大きなダメージを受ける。

が、デーヴァだ。

数回攻撃が直撃した程度で、倒れたりはしない。

「＜クリシュナ＞」

サンティラモンは、蛇の長い体を大きく動かして唸らせ、口から宝鉾（パオグー）を吐き出す。

それを尻尾で掴み、自由に操った。

「ッ！」

――キィンッ！

ものすごい勢いでサクヤモンに放たれ、金剛錫杖に弾かれた。

鉾（ほこ）は見えなかったが、視界の端から影が接近するのが見え、サクヤモンはほぼ勘で錫杖を構えていたのだ。

そのおかげで、何とか防ぐ事が出来たのである。

（速い・・！）

鉾の速度は眼でやっと追える程。

見えたとしても、次の瞬間には正面に迫っている。

思わず気を引き締めるサクヤモン。

すると、インダラモンが背に背負っていた宝貝（パオペイ）を構え、それを吹いた。

――キュィィィィィィィィンンッッ！！

「っ・・！」

「ぐ・・！」

2人は宝貝より放たれる超音波に、顔をしかめる。

インダラモンの＜アドームクハ＞だ。

パジラモンが大きく息を吸い込む。

「オォォォォォォォォォォォオオオオオオオッッ！！」

＜ヴァフニジュヴァーラ＞という、眠りを誘う咆哮だ。

これを知っていた2人は、聞かないよう耳を塞ぐ。

だが、塞いでも少しは聞こえてしまうのが普通だ。

「ぅ・・・」

『眠るな・・・眠っては・・！』

意識が朦朧とする2人。

テイマーも同じく、眠気をこらえていた。

「＜バースト・・・ショット＞！」

セントガルゴモンがミサイルを発射する。

次々と着弾するが、デーヴァ達は今だ倒れない。

ふと、強風が吹き荒れてきた。

「何？嵐？」

サクヤモンが天を振り仰ぐが、これはエンシェントイリスモンが呼

んだもの。

心配は無かった。

「＜飯綱＞！」

サクヤモンは、一番ダメージを食らっているサンティラモンに霊狐を放つ。

「＜クリシュナ＞」

サンティラモンは宝鉾を投げるが、４匹の霊狐は素早くかわし、サンティラモンに噛みついた。

宝鉾は宙へ突き進み、姿を消す。

霊狐の攻撃を食らい、サンティラモンの体から一輪のデジコードが浮かび上がった。

「悪いけどスキャンしてくれないかしら」

サクヤモンは皆のもとへ戻り、友樹に声をかける。

「あ、そっか・・・」

デジコードをスキャンできるのは、拓也達のデジヴァイスのみだ。

友樹は頷き、デジコードをスキャンする。

これで残るデーヴァは2体だ。

サクヤモンが場を離れている間、セントガルゴモンが牽制の攻撃を仕掛けている。

「＜ジャイアントミサイル＞ッ！」

「＜パオゴン＞」

パジラモンは左腕に装備していた宝弓（パオゴン）を構え、矢を射た。

2発のミサイルを、見事に撃ち抜く。

「＜飯綱＞！」

「＜バーストショット＞！」

霊狐とミサイルが雨のように、パジラモンに襲いかかった。

これでは手の打ちようが無く、パジラモンは攻撃を食らってデジコードを浮かび上がらせる。

これも友樹がスキャンした。

「残るは・・！」

サクヤモンはインダラモンに向き直る。

「＜飯綱＞！」

霊狐を4匹向かわせた。

が、インダラモンは宝貝の口を向け、霊狐を全て跳ね返してしまう。

「＜バーストショット＞！」

セントガルゴモンがミサイルを一斉発射し、返って来る霊狐を打ち消し、残ったミサイルでインダラモンを攻撃した。

ミサイルが多すぎたようで、宝貝では跳ね返せずに着弾する。

が、インダラモンは最初からそれほどダメージを負っていなかった為、倒れはしない。

「後少しだ！」

大輔が思わず声援をおくる。

「僕も・・！」

友樹は同調し、冷気を纏った。

その冷気を頭上に集束させ、巨大な氷河を作り上げる。

大きさは5メートル程だ。

「いっけぇっ！」

それをインダラモンに放つ。

「＜飯綱＞！」

「＜バーストショット＞！」

それに霊狐やミサイルも続き、インダラモンが爆煙に包まれた。

煙が晴れ、デジコードが浮かび上がったインダラモンの姿を確認する。

「デーヴァ倒した！」

京がやった！と手を叩く。

友樹がスキャンしたのを見届けると、サクヤモンとセントガルゴモンはスーツェーモンのもとへ向かった。

シャイングレイモンとミラージュガオガモン、オメガモンが共に剣を振り下ろす。

が、スーツェーモンは大きく羽ばたき、上昇した。

「待て！」

シャイングレイモンが更に接近するが、

「突っ込むな！」

ミラージュガオガモンの注意で、思い留まる。

「＜煉獄爪＞」

直後、スーツェーモンの鋭利な爪が通過した。

ギリギリでかわせる事が出来、留まって良かったと思う。

スーツェーモンは更に天へ飛翔し、雲の上まで舞い上がった。

飛べる者達は、その後に続く。

飛べぬ者達は地上で待機した・・・。

48話：残る敵（後書き）

淑乃「氷河投げるって・・・如何よ？」

友樹「え・・・何か拙かったかな・・？」

淑乃「拙くはないけど・・・」

大「すんげぇ寒かった」←キッパリ

友樹「あは、ははは・・・」

４９話：紅鳥堕ちる（前書き）

４９話、参ります！

49話：紅鳥堕ちる

スーツェーモンは雲を突き抜けて、太陽の日差しの下へ舞い上がる。
飛行能力がある者はそれに続いき、不可能な者は地上で待機した。

「如何いう状況？」

合流したサクヤモンが、そばにいたエンシェントイリスモンに問いかける。

「今のところ・・・押しているのかしらね」

エンシェントイリスモンも、半信半疑で答えた。

正直、勝っているのか負けているのかは微妙なところである。

スーツェーモンは大きく翼を広げ、周囲を旋回しながらこちらの様子を伺っていた。

「＜トリッドヴァイス＞！」

シャイングレイモンが火球を連射する。

スーツェーモンは自由自在に飛び回り、飛来する火球をかわした。

「当たらねぇ！」

それを見たエンシェントイリスモンは、レイピアをスーツェーモン

に向ける。
直後、スーツェーモンを風が包み、動きを不自由にした。
「＜ガルルキャノン＞！」
「＜ティファレト＞！」
オメガモンとロゼモンが攻撃を仕掛ける。
双方共に直撃し、スーツェーモンは地上へ落下した。
が、空中で態勢を整え再度飛翔する。
何事も無かったかのように、旋回を開始した。
飛び回り、なかなか狙いを付けられない。
「＜バーストショット＞！」
ならばと、セントガルゴモンがミサイルを大量に発射する。
「＜紅焔＞」
これは避けられないと判断したのか、スーツェーモンは炎を吐いて焼き払った。
その隙に、ミラージュガオガモンが背後へ回り込む。
「＜ルナハーケン・・・スラッシャー＞ッ！」

三日月型の刃を振るい、スーツェーモンの翼に傷を付けた。

「ガァァッ！」

スーツェーモンは呻きながらも、ミラージュガオガモンから離れ、旋回する。

すると、レイヴモンがスーツェーモンの旋回先に回り込んだ。

「＜怒涛闇供之舞（どとうやみくものまい）＞！」

黒紫のオーラを纏い、両翼の刃で乱舞撃を繰り出す。

「ガァァァァッ！？」

突然の攻撃に驚き、スーツェーモンが怯んだ。

「＜煉獄爪＞」

怯みはしたものの、すぐに反撃を繰り出すスーツェーモン。

レイヴモンは素早く避け、態勢を整える。

「＜紅焔＞」

スーツェーモンは、辺り一面に紅蓮の炎をまき散らした。

各自避け、防ぎ、その身に纏う者もいる。

スーツェーモンは飛翔しながら旋回を続けた。

だが、

――シャキィンッ！

空間から鎖が出現し、スーツェーモンを高速する。

「何だ？」

一同訳が分からず思い留まっていたが、シャイングレイモンは好機だと斬りかかった。

「＜コロナブレイズソード＞ッ！」

シャイングレイモンは灼熱の剣で斬りかかり、スーツェーモンの翼に大きな切り傷を走らせる。

かと思った直後、雲を突き抜けて2つの砲撃がスーツェーモンに直撃した。

「ガァァッ！！」

スーツェーモンは痛みに耐え飛翔するが、飛び方がおぼつかない。

先程の鎖や砲撃が気になり、下を見るが雲が邪魔してよく見えなかった。

が、再び砲撃が2つ、スーツェーモンに向かう。

狙いがずれ、直撃はしなかったがかすれた。

「当たったか？」

地上にいたデュークモンが盾を構えたまま、エンシェントガルルモンに確認する。

「今のははずれだ。旋回を始めた」

エンシェントガルルモンは限界まで視力を上げ、上の状況を伝えた。

先程の鎖は、進化を解いた遼のもの。

砲撃２つは、エンシェントビートモンとデュークモンのものだ。

地上にいた者は、出来る限りの事をし上空の者達を援護していた。

【おい】

エンシェントガルルモンが、エンシェントイリスモンに魂話を繋ぐ。

【雲が邪魔でよく見えない。どかしてくれ】

【分かったわ】

エンシェントイリスモンの返答を聞いた直後、雲が晴れていった。

上の様子がよく見える。

「これならいけるな」

エンシェントガルルモンは大剣を構え、光を集中させた。

「＜アブソリュート・・・ゼロ＞ッ！！」

冷気の光線が、スーツェーモンの翼をかすり、凍らせる。

スーツェーモンはバランスを崩し、落下した。

今度は地上付近まで落ちた所で、氷を溶かし態勢を整える。

「カードスラッシュ！＜地獄の鎖＞！」

それを確認した遼が、再び鎖で動きを封じた。

その間に、各自エネルギーを溜める。

「＜ファイナル・・・エリシオン＞ッ！！」

「＜テラブラスター＞ッ！！」

「＜ギガデス＞ッッ！！」

砲撃系統のものが、スーツェーモンを呑み込んだ。

「ガァァァ・・・」

今まで積み重なったダメージが限界を超え、スーツェーモンの体か

らデジコードが浮かび上がる。

それを、エンシェントグレイモンが飲み込んだ。

全員は火山の熱気が出来るだけ届かぬ所――太一達のいる場所へと戻り、進化を解く。

「今回は長期戦だったな」

「お疲れ～」

それぞれが声を掛け合った。

「兄貴～、腹減った～！」

「進化解いての一言がそれかよ！」

アグモンの言葉に、思わず大が突っ込む。

「まぁ良いんじゃない？今回は」

淑乃がララモンを抱きながら、大に笑みを向けた。

「漢は固い事言わないんじゃなかったのか？」

トーマが片目をつぶり、大を茶化す。

「し、仕方ねぇなぁ・・・」

これには反論しようも無く、大も渋々頷いた。

「次は・・・シェンウーモンが近いけど、一度休んだ方が良さそうだな」

純平が、地図とパートナーデジモン達を見比べる。

「「「「「「「「「賛成～！」」」」」」」」」

デジモン達から、複数の声が上がった・・・。

49話：紅鳥堕ちる（後書き）

拓也「やっと休憩か」

アグモン（大の）「飯～！卵焼き～！」

大「卵焼きは無ぇだろ」

トーマ「休憩がてら、食料を探せば良いだろう」

竜気「あはは、次の事、何も考えてないや～」↑かなり棒読み

皆「・・・」

５０話：小さき者達よ（前書き）

今回は５０話を記念に、ちょっとしたサプライズ！→サプライズと言えるのか微妙

では５０話、参ります！

50話：小さき者達よ

一同は休憩を含めて、火山より西にある森の中へ来ていた。

休憩とは言ったが、ほぼ腹を膨らませる為に来たようなものである。

幸運な事に、肉リンゴはデジタルワールドの至る所で実っていた。

当然この森にも。

「っぷは～、食った食った～！」

大のアグモンが、腹を膨らませて地面に座っている。

「食いすぎだ」

ガオモンがそんなアグモンに、思わず突っ込んだ。

確かにそうかもしれない。

アグモンの腹は、山のように盛り上がっている。

「これさ、いつもはリンゴなんだけど」

拓也が肉リンゴを1つ、手に取った。

「焼くと肉みたいになるんだ」

手に炎を纏わせ、肉リンゴを軽く焼く。

肉リンゴは焦げ目が付き、皮の割れ目から肉汁が溢れ出ていた。

「それで肉リンゴって言うのか」

太一がそれを見ながら、名の由来に納得する。

「じゃぁ・・・これは？」

岳が別の木に実っている、青い木の実を指差した。

「それ？」

拓也もその木の実を見るが、記憶に無く首を傾げる。

「見た事無いな・・・。知ってるか？」

拓也は食料係だった泉に確認すると、泉も同じく首を横に振った。

「食べる～」

テリアモンがジャンプして木の実を取る。

――パクッ

「おいしいよ～」

テリアモンは一口かじり、クルクルと回ってそれを表現した。

それに続いて他の者達も、１つずつ取って食べてみる。

「確かに美味いな」

「結構いけるんじゃない？」

ヤマトと空がそれぞれ感想を抱き、口にした。

「俺はいいや。腹いっぱいだし」

拓也は先程の肉リンゴで腹が膨れてしまい、食べる気になれなかった。

すると、青い木の実を食べた者達の体が輝き出す。

「ん？何だ？」

大輔も自分の体が光っている事に気づき、如何なっているのかと両手を見つめた。

直後、眩い光が放たれる。

全員が眼をつぶり、開いた時にはほとんどの者達の姿は無かった。

「は？」

拓也は思わず素っ頓狂な声を上げる。

消えたのは先程木の実を食べた者達。

食べた者は、大、淑乃、健良、遼、太一、ヤマト、空、ミミ、大輔、

京、伊織、友樹のメンバーだ。

それぞれのパートナーデジモンも同じくである。

「・・・えぇっと？」

純平が訳分からんとでも言いたげな顔で、状況を把握しようとした。

「い、今までにこんな事は？」

トーマが拓也達に確認を取るが、そんな事は無かった為、首を振る。

「こういう時は、如何すりゃいいんだ・・？」

拓也が輝二に問いかけるが、

「知らん」

輝二はバッサリと斬り捨てた。

「デジヴァイスの反応とか・・・」

賢がデジヴァイスを取り出し、画面を見つめていると、眉間にしわを寄せる。

「反応は僕達の周り、つまり・・・ここ、なんだけど」

賢は周りを見回し姿を探すが、何処にも見当たらない。

拓也は周囲の物音を聞き取る為、同調して聴覚を上げる。

「お――い――」

小さな声が聞こえた。

「・・？」

拓也は視覚や味覚、触覚、嗅覚の感覚の力を、聴覚に集中させる。

「おい！！気づけよ馬鹿っ！！」

今度ははっきりと聞こえた。

――ムカッ

拓也は額に怒りのマークを浮かべ、発信源を探す。

が、視覚の力を聴覚に持っていってしまった為、周りがよく見えない。

（くそ、面倒だな・・・）

自分でしておきながら、五感を調整する。

味覚と触覚、嗅覚の分を視覚と聴覚に分けた。

視覚が急に良くなって、一瞬めまいがする。

「ぅ・・・」

頭を振って、視界に慣れさせた。

「さっきから何やってるんだ」

輝二が呆れて声をかける。

「あ、いや、声が聞こえてさ・・・。ちょっとムカついた・・！」

「は？声？」

輝二は同調していなかったようで、拓也を馬鹿にしたような表情で言い返した。

一方、木の実を食べた者達はというと・・・。

「如何なってんだこれ！」

大は周りの景色と、自分達の体を見て驚愕する。

周りの木々達がとても巨大な大木に見えるのだ。

木の実を食べなかった者達の体も、同じく巨大に見える。

「これ・・・俺達が小さくなったんじゃ・・・」

太一が呆然としながら、仮説を立てた。

正解だ。

決して拓也達が巨大化した訳ではない。

大達が小さくなっただけだ。

「最悪なんですけど・・・」

淑乃がいつものセリフを小さく呟き、額に手を当てる。

「流石にこれは・・・」

対処のしようが無い、と健良が苦笑いを浮かべた。

賢がデジヴァイスで反応を見ているようだが、当然その反応はここ。

拓也達は周りを見回しているが、下を見ようとしないので見つけられる訳も無い。

「お～い！こっちだっ！下だ下！！」

大が大声を張り上げるが、拓也達は気づかない。

「この・・！」

大は思わず拳を握り、息を大きく吸い込んだ。

「おい！！気づけよ馬鹿っ！！」

思い切り声を張り上げ、そう怒鳴り散らす。

「無駄だろ」

ヤマトがため息を吐いて止めようとするが、

「無駄じゃないよ」

友樹がニコリと笑い、拓也を指差した。

拓也の額には怒りのマークが浮かんでおり、周りに視線を走らせている。

その後、少し考え眉間を押さえた。

「さっきから何やってるんだ」

そんな拓也に輝二が声をかける。

「あ、いや、声が聞こえてさ・・・。ちょっとムカついた・・！」

「は？声？」

拓也の言葉に輝二は顔をしかめるが、友樹はやっぱりと喜んだ。

「拓也兄ちゃん、同調して聴覚上げてたから聞こえてるよ！」

「マジか！おぉし、これで何とか伝えられるぜ！」

友樹と大が会話している間も、

「ほら、また！」

「聞こえないな」

「同調しろよ！」

「同調？」

拓也と輝二が言い合っている。

輝二も言われたとおり、視覚と聴覚を跳ね上げさせた。

「お～いっ！！」

大がそれを見て、再び声を張り上げる。

「・・・確かに」

輝二も声が聞こえたようで、拓也の言葉を認めた。

「っしゃぁ！」

大が輝二の言葉に気を高鳴らせ、拳を握る。

「早く見つけてもらうには・・・」

その後ろで、友樹が顎に手を付け考えていた・・・。

50話：小さき者達よ（後書き）

太一「小さくなるって・・・ありか？」

空「良いじゃない。不思議の国のアリスみたいで」

ミミ「そうそう♪」

京「視界が変わって面白いじゃないですか～♪」

大「こういう時の女子ってなぁ・・・」
（ボソリ）

空・ミミ・京「「何か言った？」」

大「い、いや、何でもねぇ・・・」

淑乃「大を負かすなんてやるわねぇ」↑※女子ではなく女性

淑乃（何この馬鹿にされたような空気・・・）

５１話：研究者との再会（前書き）

今回の最後にあいつが出て来ます！

では５１話、参ります！

51話：研究者との再会

友樹は数秒考え、頭上に電球を灯らせた。

（魂話使えば早いかな・・？）

ふとそれを思いつき、小さくなっていない拓也達を見上げる。

拓也、輝二、泉、輝一、純平が魂話を使える事は知っていた。

拓也と輝二は2人で言い合いをしている為、除外したとして・・・。

（一番理解してくれそうなのは・・・）

友樹は、言い合っている2人を仲裁している泉から、視線をそらす。

純平はトーマと話し合っている為、消去法として残ったのが、輝一だ。

友樹は1つ頷き、輝一に魂話を繋ぐ。

【輝一さん、聞こえる？】

【ん？友樹？】

喧嘩を眺めていた輝一が、ピクリと小さく動いた。

【うん、僕】

【今、何処にいるんだ?】

【輝一さん達の足元】

輝一の問いに友樹は率直に答えたが、輝一は分かっていない。

【あ、足元って如何いう・・・】

【小さくなっちゃったんだ】

【は?小さく?】

流石のこれには、輝一も素っ頓狂な声を上げた。

【同調して視力を上げて、地面見たら分かると思うよ】

友樹の言うとおりに、輝一は視力をグンと上げ、立ったままだが地面を見てみる。

(いた・・・)

輝一の視界には、手を振る友樹の姿が映った。

それを確認した途端、輝一は額に手を当てる。

(如何したら良いも、こうしたら良いも無いな・・・)

はぁ・・・と小さくため息を吐き、相談している純平の方を叩いた。

「え、何?」

純平が話を止め、輝一に振り返る。

「あのさぁ・・・」

輝一は気が進まない中、消えた者達の状況を説明した。

「お、輝一が何か言ってるぞ」

それには大達も気づく。

「大達の居場所が分かったのかい？」

トーマが輝一に聞くと、輝一は無言で足元を指差した。

「ナイス！」

やっと分かってくれたか！と太一が拳を握る。

「・・・すまない。分かりやすく頼む」

トーマには当然分かる訳も無く、細かい説明を求めた。

「だからぁ――」

輝一は小さくなってる、と一言。

「「「「「「「「「「「はぁ！？」」」」」」」」」」」

人間、パートナーデジモンも含めて、複数の声が上がった。

輝一はやっぱりその反応か、と額に手を当てる。

「んじゃさっきの声は・・・大か！」

拓也がムカッと拳を握った。

「・・・怒ってるわよ」

淑乃が大を肘で突つく。

「みてぇだな。俺は悪くねぇだろ」

あの時は大声を出さなければいけなかった訳であり、馬鹿と言った方が手っ取り早いと言えばそうである為、大が悪いとは言い切れない。

淑乃も、まぁそうだけど・・・と腑に落ちないようであった。

「姿は見えないが・・・」

トーマが地面を見ても、それらしき姿は分からない。

「視力を上げれば何とか」

「・・・僕は君達と違ってノーマルだぞ」

トーマが如何しようも無い、と手をヒラヒラさせる。

「小さくなる木の実、あった。大きくなる木の実、無いのか？」

イクトが、何とも言えぬ子供的発想を告げた。

「・・・無い、とは言い切れないな」

トーマもその言葉に再び考え込む。

「青の木の実だから・・・赤の木の実とか」

拓也が冗談半分でそう言ってみた。

「阿呆か」

「冗談だ！」

すかさず輝二が一言。

「・・・あったぞ」

イクトがキョトンとした表情で、拓也に言う。

「マジ？」

「ここ来る少し前、森入った辺り、実ってたの、俺見た」

イクトが途切れ途切れの言葉で、そう言ってくれる。

「森入った辺り・・・。あぁ！そういやそんなのがっ！」

拓也も今思い出し、ポンッと手を叩いた。

「いや、でも、それが効くとは限らないよ」

岳が困ったように肩をすくめる。

「何でも試せば良いんだよ、試せば！」

拓也は同調して木の枝に跳び乗った。

「それ、試されるのは俺達だよな？」

遼が隣にいた健良に問いかける。

「あは、ははは・・・」

「モ～マンタ～イ」

健良はただ苦笑するが、テリアモンはいつもと同じく気にしてない。

イクトが拓也に続いて、木の枝に跳び乗る。

「俺も行くぞ！」

「おっしゃ！」

2人はすぐに動き出し、枝を跳び移って森の端へと消えていった。

「イクトったら！」

ファルコモンが翼を広げて、それを追う。

「うわっ！」

その風圧で、小さい者達が吹き飛ばされそうになった事は・・・恐らく些細な事だ。

「あ、ファルコモンは待っててくれ！」

イクトが枝の上で立ち止まり、待機を促す。

ファルコモンは言われたとおり、皆のもとで2人の帰りを待つ事にした。

「お、あったあった！」

イクトの記憶は正しく、森のはずれにその赤い木の実は実っている。

「皆小さい。2個で十分か？」

イクトが小さくなった者達の大きさを考え、それほど数はいらないだろうと推測した。

「そうだな。潰して、果汁だけでも良いだろうし・・・」

拓也とイクトはそれぞれ1個取り、帰ろうとする。

――ゾクッ

殺気が2人の背中を走った。

「「ッ!?」」

――ザザッ

2人は左右に散り、木の陰に隠れる。

直後、2人のいた所にレーザーが着弾した。

「ギ、ギズモン!?こんな時にか!?」

「あれ、XT違う!見た事無い!」

イクトが現れたキズモンを見て、驚愕に眼を見開く。

確かに今までとは違った。

一回り大きく、レーザー発射源と思われる装置が2つ付いている。

拓也とイクトは、取った木の実をポケットや懐にしまった。

「ククク・・!如何だい?私の最新作は」

ギズモンの肩に、人が乗っていた。

白衣に身を包む、男性。

それを視界に入れた直後、イクトが怒りに燃える。

「倉田(くらた)ぁっっ！！」

思い切り、そいつの名を叫んだ。

「おやおや、君は確か・・・」

倉田と呼ばれた男も、イクトを見てニヤリと笑う。

「敵か！？」

「あぁ！」

拓也は短く言葉を交わし、敵味方をはっきりさせた。

魂広し、眼の瞳孔を開き龍魂剣を握る。

「倉田！何だそいつは！」

イクトがデジモンの正体を問いかけた。

「これかい？こいつは私の最新作、ギズモンＳＴ(エスティー)さ！」

ギズモンＳＴ

正体不明。種族不明。技不明。

「ＳＴ・・！？」

拓也もそれを聞き、眼を見開く。

「私の研究に、手を貸してくれる方がいましてねぇ。こうやって新たなデジモンを作り上げる事が出来たという訳ですよ。と言っても、これはまだ試作品ですがね」

倉田は静かにそう告げ、背後に現れたもう1体のＳＴに移った。

「では、これにて失敬させてもらいましょうか。私の試作品相手に、どれだけ立ち回れますかな？」

倉田は不敵な笑みを浮かべ、ＳＴと共に消える。

残った1体が、2人に向き直った。

「何だあいつ！ムカつく野郎だな」

拓也は龍魂剣を構え直し、ギズモンを睨む。

「相手、頼む！俺、皆呼ぶ！」

「了解！」

イクトは木の上へ上へ跳び移り、拓也はギズモンの注意を引きつけた。

木の一番上まで辿り着いたイクトは、懐から拳大の物を取り出し、紐のような安全ピンを歯で噛み引き抜く。

それを天へ投じた・・・。

51話：研究者との再会（後書き）

トーマ「遅いな」

輝二「迷ってるんじゃ、ないだろうな・・・」

泉「拓也はそうかもしれないけど、イクト君が付いてるから大丈夫よ」

トーマ「えらく信用してないんだな」

輝二・泉「「あいつ勘で動く奴だから・・・」」

トーマ「な、なるほど・・・」

52話：閃光を散らせ（前書き）

今回はイクトが活躍、ですね。

52話、参ります！

52話：閃光を散らせ

イクトが拳大の弾を、天へ投げ上げる。

――パァンッ

それは弾け、光を放った。

これは信号弾（しんごうだん）と言って、仲間に合図を送ったりする時に使用する。

その光は、皆のもとからも見えていた。

「何だ？今の光」

輝二が不信に思い、怪訝な顔をする。

が、ファルコモンが素早く反応し、飛び立った。

「イクトが呼んでる！」

そう言い、光が放たれた方向へ飛行していった。

「如何する？」

輝一は自分の片われに問いかける。

「・・・念の為に行く。待ってろ」

輝二も同調して木の枝に移り、駆けていった。

――キュインッ！バキュン！

「どわっ！」

レーザー2本に、思いのほか苦しむ拓也。

弾いたり避けたりと、食らわないようにする事で精一杯だ。

イクトのブーメランで、ギズモンのレーザーが危険だという事は知っている。

レーザーを弾けば大剣の刀身が消えていく為、何度も＜炎龍撃＞を放って新たな刀身を出現させた。

「やりにくいな！」

そう愚痴をこぼしていると、気配でファルコモンと合流したイクトが戻って来たのを知る。

木の枝を駆けて、輝二もやって来た。

「ナイスタイミングだ！」

拓也は輝二を入れ替わるように後退する。

「何だこいつ」

輝二もリヒト・シュベーアトを構えながら、ギズモンを見上げた。

「ＳＴだと！」

「ＳＴ？」

拓也の言葉に、再び怪訝な表情を浮かべる輝二。

その場に留まる訳にもいかず、レーザーを避ける為に木へ跳び移った。

「２発か・・・」

輝二もレーザーの本数に気づく。

「ファルコモン、行くぞ！」

「おう！」

イクトはファルコモンに大量のデジソウルをおくった。

「デジソウルチャージ！オーバードライブッ！！」

「ファルコモン、進化！・・・レイヴモン！」

レイヴモンは、すぐさまギズモンの背後に回り込む。

「＜スパイラル・・・レイヴンクロウ＞ッ！」

刃のような左腕を、回転しながらギズモンに突き刺した。

――ガキィン！

が、簡単に弾かれてしまう。

「く・・！」

レイヴモンは反撃を食らわぬよう、すぐに態勢を整え距離を取った。

「これ、進化した方が良くないか？」

「同意見！」

輝二の言葉に、拓也はコクリと頷く。

2人は魂広を解き、デジヴァイスを取り出した。

「「ダブルスピリット・・・エボリューションッ！」」

多重に浮き上がったデジコードをスキャンし、

「アルダモン！」

「ベオウルフモン！」

融合形態に進化する。

超越形態になるには泉達のスピリットを借りる訳であり、本人達が

近くにいた方が良い。

こちらの状況を向こうは理解していない為、いきなりスピリットを借りるのは如何かと考えたのだ。

まぁ火山の時の拓也は、勢いで動いていた為、借りていたが・・・。

「＜リヒトアングリフ＞！」

ベオウルフモンが追尾式ミサイルを2発、発射した。

ギズモンに直撃するが、少し焦げ目が付いた程度。

「＜ブラフマストラ＞ッ！」

アルダモンが高密度の火球を、連続して放つ。

ギズモンは避けたりせず火球を食らったが、同じく焦げ目が少々だ。

――ヴン

突如ギズモンが姿を消し、

――ヴン

アルダモンの背後に現れる。

（速い・・！）

かすかに影が見えただけだ。

それほどの速さである。
眼は追いつくが、体は続かない。
――バキュンッ！
よってレーザーも避けきれず、翼をかすめた。
「ぐ・・！」
アルダモンの翼はデジタルのようなものに変化し、チリチリと消えていく。
「こいつは・・！」
瞬時に拙いと悟った。
「進化、解けっ！」
イクトが声を張り上げる。
「何？」
「いいから！すぐっ！」
イクトの必死さに動かされ、アルダモンは進化を解いた。
デジタルに変わったのは翼までで、体に変化は無い。

翼が消えて体に影響が出ていれば、人間に戻ってもその影響が出ていたかもしれなかった。

拓也は心の中でイクトに感謝するが、そんな状況ではない。

すぐに魂広し、木の枝に跳び移る。

――キュィン！

直後、拓也がいた所をレーザーが通過した。

「あ、危なっ！」

背中に冷や汗は伝うのを感じ、拓也は身震いする。

「＜ツヴァイ・・・ハンダー＞ッ！！」

力を溜めていたベオウルフモンが、幻狼を放った。

ギズモンはそれに呑み込まれるが、少しのダメージで姿を現す。

「おいおい、これはちょっと拙いんじゃないか・・？」

拓也は苦笑いを浮かべ、龍魂剣の柄を握りしめた。

すると、イクトが足に巻いていた布の中から、筒のような物を取り出す。

「眼、潰れ！」

安全ピンを引き抜きながら、声を張り上げるイクト。

拓也、ベオウルフモン、レイヴモンは眼や顔をかばう。

それと同時に、イクトが筒状の物をギズモンの正面に投じた。

――パカッ

筒の先端が突き出し、眩い閃光がまき散らされる。

ギズモンにとって、眼の役割を果たしているカメラのような物は、その閃光で一瞬視界が潰れた。

閃光弾(せんこうだん)だ。

イクトは懐から拳大の物を取り出し、ギズモンに投げつける。

――ビチャッ

液体のような音を立てるそれは、玉の中から粘着液が飛び出し、ギズモンにへばり付いた。

ギズモンは背後にあった木に、縛り付けられる。

粘着弾(ねんちゃくだん)だ。

イクトは人生のほとんどをデジタルワールドで過ごし、このような弾を作って懐に忍ばせている。

因みにファルコモンも数個、所持していた。

意外とこういう物が、戦闘で役に立ったりする。

「効き目、短い！攻撃、早く！」

イクトがそう告げ、動く一同。

ベオウルフモンは究極体のエンシェントガルルモンに進化し、大剣を構える。

「＜アブソリュート・・・ゼロ＞ッ！！」

ギズモンを冷気で完全に凍らせた。

レイヴモンが刀剣――鳥王丸を構える。

鳥王丸に漆黒のオーラが集中した。

「＜天之尾羽張（あまのおはばり）＞ッ！！」

黒い稲妻が宙を駆け、凍りついたギズモンに命中する。

拓也は両腕にルードリー・タルパナ、背中に翼を出現させ、業火球を作り上げた。

「これで終いだ！＜ブラフ・・・マシル＞ッ！！」

巨大な火の玉が唸りを上げて突き進み、ギズモンを焼き尽くす。

一輪のデジコードが浮かび上がり、拓也がそれをスキャンした。

「やっと終わった」

拓也は安堵の息を吐き、デジモン2人は進化を解く。

「細かい事は向こうに帰ってから、聞かせてもらうからな」

輝二はそんな事を言いながら、皆のもとへ帰っていく為、拓也達もそれに続いた・・・。

52話：閃光を散らせ（後書き）

拓也「お前、いろんな弾持ってんだな」

イクト「ファルコモン、教えてくれた」

拓也「へぇ・・・。他にどんなのがあるんだ？」

イクト「他か？手榴弾（しゅりゅうだん）、照明弾（しょうめいだん）、発煙弾（はつえんだん）、催涙弾（さいるいだん）、焼夷弾（しょういだん）」

拓也「あ～、もういいぞ」

イクト「そうか・・？」

53話：北の地へ（前書き）

53話、参ります！

53話：北の地へ

「帰ったぞ～・・・」

拓也は疲れたように腰を下ろす。

「ずいぶんとお疲れのようだけど・・・木の実は？」

トーマは理由を聞きたいところだが、とりあえず目的の木の実を確認した。

「えぇっと・・・」

拓也はポケットを探る。

イクトも懐から赤い木の実を取り出した。

「2個だけかい？」

「果汁だけでいいかなぁ、って思ってさ」

「あぁ、なるほど・・・」

拓也とイクトは、トーマに木の実を渡した。

「本当に戻れるんだろうなぁ？」

「知らないわよ・・・」

大が疑いの眼を木の実に向けるが、淑乃は諦め始めている。

トーマが木の実を潰して果汁を散らした。

「・・・これ飲めってか？」

太一は飛び散った果汁を指差し、怪訝な顔をする。

「俺飲むぞ～！」

大のアグモンは果汁を手ですくい、舐めてみた。

「んじゃ、俺も」

大も指に付けて舐める。

「意外と美味いぞ」

「あ、そう・・・」

緊張感の無い感想に、淑乃が呆れた表情を向けた。

皆も1滴ずつ飲むと、体が輝き出す。

眩い閃光が走り、全員が戻っていた。

「お、成功か！」

それを見た拓也が、試して良かったと笑みを浮かべる。

「子供的発想で戻るなんてな」

ガオモンが思わずイクトを見るが、その言葉にイクトがムッとした。

「文句、あるのか？」

「いや」

ガオモンを軽く睨むイクトを、ファルコモンが押さえる。

「それで、何で帰って来るのがあんなに遅かったの？」

啓人が話を変えて、拓也に聞いた。

「あぁ、その事なんだけど・・・」

拓也はイクトに視線を送る。

「大！倉田、生きてたぞ！」

イクトは大に詰め寄った。

それを聞いて、大達は眼を見開く。

「何ぃぃぃ！？」

大も予想外の言葉に、イクトの片を掴んだ。

「新しくＳＴって奴が出てきたな」

輝二もボソリと付け加える。

「あの倉田がか！？」

大が念の為に確認するが、イクトは大きく頷いた。

「生きていたのか・・・」

その横では、トーマが深刻な顔をして悩んでいる。

「最悪なんですけど・・・」

淑乃も面倒くさそうに、ため息を吐いた。

「さっきから気になってんだけど、倉田ってあのおっさんだろ？悪い奴っぽいけど・・・何かしたのか？」

拓也がギズモンの肩に乗っていた、眼鏡を掛けた男を思い出す。

「簡単に言うと、ギズモンの製作者だ」

トーマが困ったように額を押さえながら、そう説明した。

「あぁ、そういや試作品とか何とか・・・」

「ギズモンの製作者って・・・如何やってギズモン作るんだよ」

太一がふと疑問を抱く。

「・・・」

何故か無言になるトーマ。

一息ついてから、口を開いた。

「初期のギズモンは、倉田が捕獲したデジモンを・・・改造して造った人工デジモンだ」

「デジモンを・・・改造・・！？」

事情を知らなかった者達は、驚愕に眼を見開く。

「ギズモンが進化してＡＴ、ＸＴとなっていく。段階的に言えば、初期が成長期。ＡＴが成熟期、ＸＴが完全体。そして、新たに現れたって言うＳＴが究極体になる」

「究極体、か・・・。道理で強い訳だ」

トーマの説明を聞き、拓也は頭を悩ませる。

倉田は試作品と言っていたが、それでも手を焼いた。

これが完成品となれば、かなりの脅威になる。

複数で襲撃されたら、撃墜するのは難しいかもしれない。

「面倒なもん、造りやがって・・・」

如何すっか、と考え込む拓也。

「‘試作品’ってのが気に食わないな・・・」

太一は、デジモンを道具と同じように表現している倉田に、歯ぎしりした。

「とにかく！シェンウーモンを目指す、という目的は変わらない。十分休んだ事だし、出発すっか？」

拓也が暗い雰囲気を吹き飛ばすように、ニヤッと笑って皆に確認する。

「そうだな。いっちょ暴れっか」

「いや、暴れるのはやめてくれ」

立ち上がって体に気合を入れる大に、トーマがすかさず突っ込んだ。

「ん～・・・でも、こっからが厳しいんだよなぁ」

純平が地図を見ながら、苦笑いを浮かべる。

「如何して厳しいの？」

ヒカリが疑問を抱いて聞き返した。

「南から北に行くには、凍った海の上を通過する事になる。ま、友樹にしちゃ天国だろうけど」

「やった！」

純平が言うとおり、友樹は喜ぶ。

「最悪だ」

対して拓也は落ち込んでいた。

「さ、寒いのか・・・」

大輔はそれを聞いて、小さく身震いする。

「寒いのも熱いのも、おんなじようなもんだろ」

大がニカッと笑って、アグモンの頭を叩いた。

「寒っ！！」

ミラージュガオガモンに乗った大は、思わず叫ぶ。

「さっきの威勢は何処いった？」

トーマがそんな大に声をかけた。

「熱いのより寒いのが酷じゃねぇか！？」

「気の所為じゃな～い？」

満面の笑みを浮かべる友樹が、大にそう返す。

何故友樹が、ミラージュガオガモンに乗っているのかと言うと・・・。

「お前らずるくねぇか？」

太一がエンシェントグレイモンに乗って飛行する、輝二達にそう言った。

エンシェントグレイモンは若干体が温かい為、寒さが和らいでいる。

友樹は寒さを感じたい為、エンシェントグレイモンには乗らなかったのだ。

「こういう時、便利だな」

「やかましい・・・燃やすぞ」

輝二の一言に、エンシェントグレイモンはムッとして言い返す。

その返答に、輝二は苦笑いを浮かべ肩をすくめた。

「あれか・・・」

視界の遠く向こうに、雪山の影が見える。

今は晴天で晴れているが、そのうち曇ってくるだろう。

突如、何処からともなく霧が出現する。

「何だ？」

だが、すぐに消えていった。

一瞬の事で、あまり気にしない一同。

雪山の麓には深い森が広がり、濃い霧がかかっていた。

純平は天を見上げ、念の為に太陽の位置を確認しようとしたが、

「無い・・！？」

太陽が見えない。

が、反対を見てみると、太陽の姿はあった。

ここで方向が狂っていたのでは、と疑問を抱く。

デジタルワールドは人間界と違って、太陽の周りを回っている訳ではない。

ただ、太陽のそばで回転しているだけだ。

デジタルワールドの回りには3つの月が回っているが、デジタルワールドの軸は垂直の為、四季も無い。

それは純平もオファニモンから聞いて、知っていた。

「あれ？じゃぁ太陽の位置が・・・」

おかしい。

本当なら反対側だ。

純平はすぐにそれを知り、眼下の海を眼を凝らして見つめる。

それも進行方向とは逆だ。

遠くなっていく雪山の影が見える。

はっと視線を前に直すが、雪山はちゃんとあった。

前と後ろに、全く同じ雪山がある。

「ストップッ！！」

純平はすぐに判断し、声を張り上げた。

「何だ？」

「如何した？」

皆が不思議そうな顔をして、純平を見る。

純平はエンシェントグレイモンに２・３言話しかけた。

それを聞いたエンシェントグレイモンは驚いていたが、純平が頼むと頷くのを見て、口に炎を集中させる。

「何するんだ？」

輝二が純平に声をかけると、見てたら分かると返された。

「＜ガイア・・・トルネード＞ッ！！」

エンシェントグレイモンは、灼熱の炎を雪山に放つ。

その行動に驚く一同だが、炎は雪山をすり抜けた。

「何！？」

「通り抜けたぁ！？」

皆が驚愕の声を上げる。

純平はやっぱりか、とため息を吐いていた・・・。

53話：北の地へ（後書き）

太陽とかデジタルワールドとか・・・分かってくれたでしょうか。

説明力が低いので、難しいです。

分からない人は感想でどうぞ。

５４話：仲間を疑え（前書き）

５４話、参ります！

５４話：仲間を疑え

エンシェントグレイモンの炎が、雪山を通り抜けた事に皆が驚愕する。

「如何なってんだ？」

大輔は理解出来ず、腕を組んで首を傾げた。

「分かっていそうな人に聞くのが、早いですよ」

伊織が、ミラージュガオガモンに乗り移ってトーマと相談していた、純平に視線を移す。

トーマが純平の言葉に驚き、コクンと納得していた。

「つまり向こうか・・・」

そして、やって来た方角を見る。

「あの～」

啓人が、話をしていた純平とトーマに声をかけた。

「何が如何なのか説明して欲しいっ、て顔だね」

トーマが表情を読み取り、思わず苦笑する。

「一言で言うと・・・あれは幻だ」

トーマが先程、炎がすり抜けた雪山の方を指差した。

「幻・・・あぁ！さっきの霧！」

‘幻’という単語を聞いて、何かを思い出す啓人。

「シェンウーモンに一敗食わされた、ってか」

遼も頭をポリポリとかきむしる。

「ん？何か知ってるのかい？」

「あ、そういえばまだ言ってなかった・・・。シェンウーモンは霧で幻をつくるんだ」

怪訝な顔をするトーマに、啓人が思い出したように説明する。

「って事は・・・本物あっち！？」

今更理解したような口を叩く大。

「大、遅いわよ・・・」

「兄貴、頭悪～い！」

呆れる淑乃と、大を笑うアグモン。

「うっさい！お前も分かってねぇだろうが！」

「あいだっ！」

大は顔を赤くしながら、アグモンにポカリと1発。

「なぁにをやってんだ、あいつら・・・」

それを見ながら、太一が呆れたような声を漏らす。

一同は向きを変え、来た道を戻る事にした。

再び雪山付近まで飛行してきたが、今度は濃い霧が覆われる。

簡単には晴れてくれない。

「こいつは拙いな・・・。また幻を見せられるぞ」

ヤマトが冷や汗を流す。

霧が濃度を増し、飛んでいるお互いの姿が認識出来なくなった。

かと思えば、無かったかのように霧が晴れる。

だが、各グループごとにお互いを疑った。

これも霧がつくりだした幻、という線がある。

同じグループの者は、ずっとそばにいて姿も見えていたから信用してもいい。

「・・・お前ら、幻じゃねぇだろうな？」

大が疑ってかかる。

「それ、こっちのセリフ」

留姫が大に言い返した。

純平と友樹はミラージュガオガモンに乗っている為、エンシェントグレイモンに乗っているのは輝二、輝一、泉である。

これは霧が出る前と変わらない。

とはいえ、警戒は解けなかった。

＜Ｓｉｄｅ　大達＞

雪山はすぐ目の前だ。

ミラージュガオガモンは、雪山の麓に広がる森のはずれに降り立ち、進化を解く。

「ご苦労さん」

「いえ」

トーマと短く言葉を交わし、ガオモンは後から降りてくる者達に視

線を移した。

幻かもしれない。

本物かもしれない。

どちらが正しいのかは、誰にも分からなかった。

だから警戒する。

グループ内の会話に留め、他の者達と会話する事は少なかった。

（拙いな・・・）

トーマはこの状況に舌を巻く。

お互いを疑い、信じ切れていない今に襲撃でもされたら、とてもではないが助け合って闘う事など出来やしない。

だが、心配は現実に現れる。

一同の心に傷が入るのを待っていたのか、ギズモン達が飛んで来た。

中にはＳＴも数体、混ざっている。

大半はＸＴが占めていた。

「最悪なんですけど・・・」

それを確認した淑乃が、他のグループの者達とギズモンを見比べな

がら、ため息を吐く。

「別に、俺は良いぞ」

拓也は魂広して龍魂剣を構えた。

「最初っから、俺の背中は相棒（こうじ）に任せてあるんでね」

「簡単に言う」

ニヤリと笑い、輝二が拓也の横でリヒト・シュベーアトを握った。

「そんじゃまぁ、いっくぞぉぉっ！」

拓也は翼を出現させ、ギズモンの軍団に向かう。

「まぁた突っ込む！」

泉が風で輝二を浮かせながら、拓也に文句を言った。

「良いんだよ！ＳＴ以外は大した事ないんだからな！」

拓也は刀身に炎を纏わせ、ＸＴを脳天から突き刺す。

その１体は見事に串刺しにされ、デジコードを浮かび上がらせた。

すかさずスキャンし、ＳＴに注意しながら次へ向かう。

輝二もそれに続き、ギズモンＸＴに斬りかかった。

――ザシュンッ！

一刀両断されるギズモン。

その時、拓也が輝二に斬りかかった。

「何！？」

――ガキィンッ！

輝二もそれは予想外で、リヒト・シュベーアトを1本吹き飛ばされる。

対して拓也は、キョトンとしていた。

「あり？あ、輝二か！悪い、全部化物に見えるから区別つかねぇんだ。光でも纏っといてくれ」

ギズモンと間違えて斬りかかってしまったらしい。

魂広中の拓也ならあり得るが、他のグループにもそんな風に斬りかかられては困る。

「ったく・・・」

輝二は地上に降りて、地面に吹き飛ばされた光剣を掴んだ。

そして、また間違われないように光を纏う。

「そんじゃぁ、俺も行くかぁ！」

大が策も無しに、ギズモンに殴りかかった。

――ヴゥン

デジソウルが宿り、大はそれをデジヴァイスに叩き込む。

「アグモン、進化！・・・シャイングレイモン！」

一気に究極体まで進化させた。

どうやら完全に味方を信じ切っている。

（その自信は何処からくるんだ・・・）

トーマが思わず呆れてため息を吐くが、全身にデジソウルを走らせた。

「ガオモン、いけるか？」

「ノープロブレムです。疲れはありません！」

「よし」

ガオモンは飛行してきた疲れを見せず、トーマの問いに答える。

「ガオモン、進化！・・・ミラージュガオガモン！」

送り込まれたデジソウルに包まれ、究極体に進化した。

ミラージュガオガモンは、ある程度他グループに警戒心を抱いたまま、ギズモンへと飛び立つ。

シャイングレイモン、ミラージュガオガモンの2体はＳＴのもとへ向かった・・・。

５４話：仲間を疑え（後書き）

大「とにかくぶっ倒す！」

拓也「それには賛成～」

輝二（こいつら・・・幻かもしれないって事を分かってるのか？）

５５話：幻ゲーム（前書き）

遅れてすいません。

最近忙しいのです・・・。

では５５話、参ります！

55話：幻ゲーム

＜Ｓｉｄｅ　拓也達＞

「だぁぁりゃぁぁあっ！」

拓也が龍魂剣を横に一閃し、ギズモンＸＴ1体を斬り裂く。

拓也と輝二がＸＴを、シャイングレイモンとミラージュガオガモンがＳＴを攻撃していた。

途中から、魂広して断罪の槍を手に輝一が参戦する。

「＜エーヴィッヒ――」

1体のＸＴに、輝一が急接近。

「――シュラーフ＞ッ！」

槍に黒紫の闇を纏わせ、ギズモンを突き刺した。

槍の穂先が紫色のボディを貫き、反対側から顔を出す。

輝一は槍を引き抜き、浮き上がったデジコードをスキャン。

背後から輝一に接近するＸＴを、輝二が斬り裂いた。

「どうも」

「いいから次」

「はいはい」

短く言葉を交わし合い、再び散開する。

＜Ｓｉｄｅ　大達＞

「よっしゃいけぇっ！」

シャイングレイモンがＳＴの背後を取ると同時に、大が拳を握って声を張り上げた。

「＜グロリアス・・・バースト＞ッ！！」

紅蓮の業火がＳＴを包み込み、焼き尽くす。

浮かび上がったデジコードは、純平がスキャンした。

丁度ミラージュガオガモンが相手をしていた、もう１体のＳＴも倒され、友樹がスキャンする。

が、それで終わりでは無かった。

「こりゃぁ、俺達も闘った方が良いな」

太一が大空から飛んで来る、ギズモン達の増援を見てデジヴァイスを握った。

デジヴァイスが異常な程に輝き出し、アグモンが光に包まれる。

「アグモン、ワープ進化っ！・・・ウォーグレイモン！」

ウォーグレイモンは背中の機械翼――ブレイブシールドを広げ、新たに飛んできたギズモン達の軍へと向かった。

大がそれを横目で確認し、シャイングレイモンにウォーグレイモンを手伝うよう、指示する。

シャイングレイモンも異論が無いようで、大地（ガイア）からジオグレイソードを引き抜き、ギズモンへと飛行した。

トーマは1つ息を吐き、大の肩に手を置く。

「大、あまり信じすぎるのも良くないぞ」

「何言ってんだよ。俺は信じるぜ。父さんも言ってたしな。‘仲間は信じるもんだ’ってよ！」

大の言い分に、トーマは言った自分が馬鹿だったと呆れ果てる。

「だからって、リスクが高い事は変わらない」

視界の端に周りの者達を収め、トーマがそう言った。

「良いじゃねぇか！」

拓也がギズモンのレーザーをかわして、丁度、大達のそばに着地す

る。

「リスクが高い程、やる価値があるってもんだろ！」

「おぉ！言うじゃねぇか拓也！」

拓也の言葉に、大が拳を握った。

それを見て、トーマは完全に諦める。

「好きに暴れてくれ・・・」

ヒラヒラと手を振って、それを表現した。

「「っしゃ！」」

拓也と大の2人は拳をぶつけ合い、お互いを鼓舞す。

「全力全開！」

「手加減無しだ！」

拓也は翼を広げ、炎を身に纏いながら飛び立った。

大の言葉にシャイングレイモンも頷き、大はデジヴァイスを構える。

「デジソウル・・・バーストォォッ！！」

膨張したデジソウルが光竜を包んだ。

バーストモードとなったシャイングレイモンは、灼熱の剣を握りギズモン達を斬り裂いていく。

一気に数は減っていき、ついにはこちら側の勝利となった。

「おっしゃぁ！」

「勝利ぃ！」

拓也は魂広を解いて、大と拳を打ち合う。

「ったくこいつらは・・・」

「お互い馬鹿を持つと苦労するな・・・」

額を押さえるトーマの横で、魂広を解いた輝二が一言呟いた。

――ブチィッ！

「今何つった!?」

拓也が鋭く反応し、同調する。

「気の所為だろ」

こういう事に慣れている輝二は、欠伸をしながら適当に返した。

「んな訳・・・あるかぁぁっ！！」

同調した拓也はその身に炎を纏わせ、輝二に回し蹴りを繰り出す。

輝二は瞬時に同調し、回し蹴りをジャンプする事によってかわした。
地面に着地してすぐに、手刀で拓也の首筋に一撃する。

「が・・・」

それで拓也は気絶し、倒れる直前で輝二が受け止め、背中に背負う。

「よし、出発だ」

何事も無かったかのように振る舞う輝二を見て、周りの者達は呆然とするだけだった。

＜Ｓｉｄｅ　ｅｎｄ＞

「あ～・・・」

森の中をしばらく歩き雪山に近づいた頃、友樹が気の抜けた声を漏らす。

「ん？」

それを聞きとった輝一が、何があったのかと顔を向けた。

一応輝一から見れば、友樹は幻かもしれないのだが、そんな事は一切関係無い。

「これ・・・吹雪、来るね」

友樹は天を見上げたまま、小さく呟いた。

友樹の言う通り、大空はどんよりとした暗い雲に覆われ、隠されている。

先程輝二の一言で拓也が反応したように、今友樹がこうやって吹雪が来ると言ったように、性格や氷の闘士らしき発言が、本物のように正確だ。

幻でここまで再現出来るのか、と半信半疑である。

その為、皆もお互いに疑念が薄らいでいくのを感じていた。

‘幻じゃない。本物みたいだ。’

そんな思いが、皆の心を揺すっている。

が、まだ踏み切れない。

そんな時、雪山の麓に到着する。

「えっと・・・ここまで来たけど、シェンウーモンいたか?」

太一が唖然としながら、皆に確認を取るが誰も首を縦に振らない。

「予想が外れたのか・・?」

輝二は純平にこの先の方針を求めるが、純平も判断しかねている。

「戻るか・・・探すか、この2択なんだけど・・・」

純平は地図を取り出し、頭を悩ませた。

が、その時、

「ねぇねぇ、あのデジモン、さっきからこっち見てるんだけど・・・」

友樹が森の中を指差して、青い顔をする。

皆もそちらに視線を向けるが、深い森が続いているだけでデジモンの姿は無い。

「何処にいるんだ?」

「誰もいねぇぞ」

皆首を傾げる。

「えぇ!?いるよ、そこに!」

友樹は眼をこすって、森の中を指差した。

「いますね」

「いる」

伊織とイクトも、コクリと頷く。

「見えるのか？」

大輔が森の中を見続けながら、３人に問いかけるが返事は無い。

「なぁ・・・って」

大輔が振り向いて今一度答えを求めたが、３人は一気に森の中へ走っていく。

「待って！」

「逃げなくても・・・」

「お前、止まれ！」

友樹、伊織、イクトの順で声をかけるが、３人が見える者は聞かない。

イクトは木の枝に素早く上がり、駆けていく。

「ちょ、おい！待てよ！」

太一が３人を追い駆けて走り出すのを始めとし、皆も後に続いた。

「んぁ？」

丁度その時、輝二に背負われていた拓也が眼を覚ます。

「よし、良いところで起きた。走れ！」

輝二は拓也を下ろし、腕を引っ張った。

「は？何？如何いう状況？」

「走りながら説明する！とにかく走れ！」

輝二は拓也を引っ張りながら、声を荒げる。

拓也は頭の整理が全く出来ないまま、とりあえず走り出した。

輝二は前方の皆を追い駆けながら、拓也にある程度大まかに話す。

拓也はそれを聞いて、口元に面白いゲームを見つけた子供のような笑みを浮かべた。

「へっ、なるほど。こっからが幻ゲーム本番って事か！」

55話：幻ゲーム（後書き）

拓也「って・・・輝二！てめぇ、よくも首筋に！」

輝二「あれが一番手っ取り早かったんでな」

拓也「こんの野郎がぁぁっ！！」

大「てめぇら！いいから走れっ！！」

５６話：誰が良い？（前書き）

５６話、参ります！

56話：誰が良い？

「待ってってば！」

友樹は声をかけるが、追い駆けているデジモンは足を止めない。

思わずデジヴァイスを向けて、何のデジモンか調べる。

が、

「デ、データ無し・・！？」

デジヴァイスの画面に浮かび上がった文字を見て、友樹は嘘！？と眼を見開いた。

ギズモンの場合でも‘不明’と表示されるが、今回はデータすら無い。

「幻でしょうか」

それを横目で見ていた伊織が、友樹に質問を投げかける。

「う～、分からない・・・」

友樹は苦虫を噛んだような顔をし、とにかく走り続けた。

「あいつ、気配が薄い。幻の可能性、ある」

木の枝を駆けるイクトが、その2人に感じた気配を言う。

「んじゃ、ちょっと試しに・・・」

友樹は同調して、手に氷の玉を握った。

「い・・っけぇっ！」

思い切り振りかぶって、その玉をデジモンに投げつける。

だが、玉はデジモンをすり抜け、デジモンは空気の中に溶けるよう、消えていった。

「あ、消えちゃった・・・」

友樹達は足を止め、周りを見渡す。

如何やら皆を離れすぎたようで、深い森の中に3人だけだ。

「ど、如何しましょうか・・・」

伊織は周りを見ながら、不安げな声を漏らす。

「問題無い。任せろ」

イクトは懐から拳大の弾を取り出し、安全ピンを噛んで引き抜いた。

それを天へ、空高く投げ上げる。

――パァンッ

軽く弾け、光をまき散らした。

しばらくすると、ファルコモンを先頭に皆が走って来る。

「イクト～！」

「3人共、無事か～！？」

こちらへ駆けて来る皆に、友樹が大きく腕を振って居場所を伝えた。

「で、そのデジモンは？」

息を整えている皆を代表して、拓也が友樹に問いかける。

「あ、えと、それが・・・」

友樹は苦笑しながら、先程の事を簡単に説明した。

「何ぃ！？消えたぁ！？」

「お化けか・・？」

「え、幽霊！？」

一同は、あり得んだろと驚愕に眼を見開き、遼が冗談半分で言った一言に、京が顔を青くする。

「幽霊は勘弁だな」

輝二も冗談で、笑みを浮かべながらそう返した。

「何処で消えたんだい？」

トーマが3人に、デジモンの消えた場所を尋ね、そこに案内してもらう。

そこは森の少し開けた場所だった。

トーマは入念に調べてみるが、特に何も無い。

「ったく、一体何だってんだよ・・・」

拓也は木にもたれかかろうとしたが、その木にすり抜けてしまい、木は消える。

「んな・・！」

これも幻か！？と拓也が驚いている中、皆も回りの異変に気付いた。

周囲の木々達が薄くなり、消え始める。

一同がいたのは、海に面した崖の端であった。

「あ、危な！」

大輔は後1歩のところで、崖の下へ真っ逆さまになる場所から退く。

ガラッと小さい石が、海に落ちていった。

「ここ、何処？」

拓也は居場所を確認する為、雪山を見上げる。

「それよりもシェンウーモンだろ。さっきから遊ばれてるように感じるんだが・・・」

輝二は眉間にしわを寄せ、怒りを抱いた。

「遊ばれてる・・？・・・いや、まさかねぇ・・・」

岳は輝二の一言に考え込むが、すぐに消して切り替える。

（ピノッキモンとか・・・。それは無いよね・・・）

同じくヒカリもそう思っていたが、ある訳無いと思考を振り払った。

だが油断は出来ない。

このデジタルワールドには、太一達と闘いを繰り広げたダークマスターズもいるのだ。

同じく大輔達と戦闘したベリアルヴァンデモンも。

七大魔王も何体か、こちらの世界に来たのだろう。

それイコール、2体いる魔王も存在するという訳だ。

――ズシィン、ズシィン・・・

腹の奥底に響く、低い足音が木霊する。

敵か、と全員が身構えた。

直後遠くの森の中から、巨大なデジモンが姿を現す。

亀のようなデジモンで、甲羅には巨木が生えていた。

巨木の周りを黒く濁ったデジコアが浮遊し、紅くよどんだ瞳がこちらを見下ろしている。

首は2本あり、４つの眼は感情を宿らせていない。

光子郎はパソコンを向け、データを読み取る。

「『シェンウーモン。究極体。聖獣型。必殺技は＜霧幻（むげん）＞。四聖獣の1体で、北方を守護し変幻自在な水技を使用する。四聖獣の中でも最長老であり、温厚な性格の持ち主である』・・・この際、温厚でも凶暴でも、結局は同じですね」

光子郎はパソコンを閉じ、苦笑いを浮かべる。

七大魔王に操られた状態では、性格など関係無い。

「＜霧幻＞」

シェンウーモンは霧に包まれ、突如濃い霧が一同を包み込んだ。

「今度こそやべぇか！？」

大が幻を出されるのではと、思わず1歩後ろに下がる。

霧が消える事は無く、それぞれに幻像を見せた・・・。

＜Ｓｉｄｅ　太一達＞

「全員いるか！？」

太一が深い霧の中、声を張り上げる。

「何とかな・・・」

ヤマトを始めとし、空やミミ、光子郎と丈も太一のそばに集まった。

デジモン達もいる。

が、他のグループの者達は見えない。

「俺達だけ、か」

「下手に動かない方が、賢明ですね」

光子郎が仕方ありません、と息を吐き、背中にパソコンがあるのを確認した。

「早く晴れてくれないかしら・・・」

空は不安げな顔で、周囲の霧を見つめる。

「こんな濃い霧初めて～！」

ミミは興味深げに、霧の向こうを眺め込んでいた。

「ミ、ミミちゃん・・・」

あまりにも楽天家なミミに、思わず苦笑いを向ける空。

その時、

――バシュッ

「おわっ！？」

霧の中から突然剣が飛来し、太一は寸前でそれを避けた。

地面に突き刺さった剣は、拓也が使用している龍魂剣。

「まさか・・・」

ヤマトは剣が飛んできた方向に、視線を向けて眼を凝らす。

予想通り、魂広して炎を身に纏う拓也が現れた。

龍魂剣は一度消え、拓也のそばに出現する。

「ほ、本物？」

「いや、幻だ！」

空の呟きを、瞬時にヤマトが否定した。
拓也の瞳は明らかにいつもと違う。
紅いのは紅いが、すごくよどんでいた。
「・・・正解」
幻の拓也は無表情で一言呟き、龍魂剣を構える。
「しゃべるのか！」
丈が眼鏡をかけ直して、驚いた声を上げた。
「その方が・・話せないより・・良い。違うか・・？」
不安定な言葉を話す拓也の幻に、太一は敵と判断しデジヴァイスを握る。
ヤマトもすでに握っていた。
アグモンとガブモンが光り輝き、1体になる。
オメガモンが姿を現した。
「1つ聞きたい」
太一が幻の拓也に声をかける。
「他の皆にも、攻撃してるのか？」

「・・そうだ」

「なら拓也達のところには、誰が攻撃してるんだよ？」

太一の問いに幻は一度口を閉じ、少し考えてから答えた。

「まだ、未決定。・・・なんなら、お前達に、するか・・？」

予想外の答えが返って来た・・・。

５６話：誰が良い？（後書き）

これまた何編にもなりそうな設定になってしまいした・・・。

ほんっと私って先の事考えないタイプですよねぇ・・・。

・・・如何しよっかな・・・あはは・・・。（苦笑）

57話：相手は仲間（前書き）

57話、参ります！

57話：相手は仲間

＜Ｓｉｄｅ　大達＞

「俺達だけかよ・・・」

大は集まったメンバーを見て、頭をかきむしる。

メンバーは、大、トーマ、淑乃、イクトだ。

さっきまで一緒にいた、純平と友樹の姿は見えない。

――ヒュンッ

「危ない！」

突然、霧中からレイピアが飛んできた為、トーマが大の腕を引っ張って難を逃れる。

「あ、危ねぇ～・・・」

大は額を伝う冷や汗を、寒気が走るのを感じながら拭った。

レイピアは姿を消し、入れ替わるように魂広した泉が現れる。

「も、もしかして・・・」

「もしかしてじゃなくて、本当に幻だ」

淑乃の言葉を、トーマが正した。

泉の眼も濁っている。

泉の手には、風のレイピアが握られた。

「相手は・・・誰？」

拓也の幻と同じく、無表情のまま声を発する。

「言葉を話すのか・・・」

トーマがそれを聞いて、高等な幻術だと感心した。

「相手ぇ？んなもん、俺達に決まってんだろうが！」

大は親指を突き立て、自分の胸を示す。

アグモンもやる気だ。

「女の子相手に本気でやる、とか言う訳？」

淑乃が横目でジ～ッと大を睨む。

「わ、悪いかよ！」

「幻だから良いかもしれないけど・・・ちょっとねぇ～・・・」

淑乃は疑いの眼を向け、大を茶化した。

「なら、如何しろってんだよ！」

「僕が行く」

大と淑乃の会話を遮って、トーマがデジヴァイスを握る。

全身にデジソウルが走り、駆け巡った。

「デジソウル・・・フル！チャージッ！！」

膨張した青いデジソウルが、ガオモンを包んで光を放つ。

「マッハガオガモン！」

ガオモンが進化したのを見ると、泉は風を纏いレイピアを構えた・・・。

＜Ｓｉｄｅ　大輔達＞

大輔、賢、京、岳、伊織、ヒカリのメンバーはパートナーデジモンと共に、目の前の敵と対峙していた。

このメンバーに襲撃したのは、幻の友樹と純平である。

デジモン達はジョグレス進化し、完全体になっていた。

友樹と純平は、魂広してそれぞれ冷気と稲妻を纏う。

友樹は斧であるエジを右手に、純平は右腕に主砲を装備していた。

「倒して、皆と合流するぞ！」

大輔の声に、おう！と皆が応える。

3体のデジモン達は一気に攻撃を放った。

＜Ｓｉｄｅ　啓人達＞

「如何しよう・・・」

啓人は留姫、健良、遼と共に回りの霧を見て考え込む。

「いかにも幻が出て来ます、っ的な雰囲気ね」

留姫が胡散臭そうに、深い霧を眺めた。

「悪いか・・？」

その時、霧の向こうから輝二と輝一が現れる。

「あ、良かった。他にもい・・て・・？」

啓人は歩み寄ろうとした歩を、思わず止めた。

眼が濁っている事に気付いたのである。

「グルルル・・！」

ギルモンも幻という事を感じ、威嚇した。

啓人達は危険を感じてデジヴァイスを握る。

双子2人も魂広し、光と闇を纏って武器を手にした。

リヒト・シュベーアトと断罪の槍が、妙に黒光りする。

「敵っぽいね」

啓人はデジヴァイスを構え、近づいた分、後ずさりした。

＜Ｓｉｄｅ　拓也達＞

その頃、自分達の幻が皆を攻撃している事も知らず、拓也達6人は霧の中で立ち往生していた。

「如何すっかね～・・・」

拓也も頭をかき、天を見上げる。

霧が大空を覆い隠し、太陽の光が届かない。

闇の闘士にはありがたいかもしれないが、光の闘士は困りものだ。

「そうだ、泉。風で吹き飛ばせないか？」

拓也が思いついたように振り向くが、泉は難しい顔をしている。

「出来たら良いけど・・・」

泉は同調して強風を巻き起こし、霧を吹き飛ばそうとするが、なかなか晴れない。

「はい残念」

泉はやっぱりねと腕を広げ、同調を中断する。

「あ～ダメか」

拓也は肩を落とし次の案を考えているが、その途中で足音、否、気配を感じた。

６人は同調して身体能力だけでも上げておき、周囲を警戒する。

現れたのはオメガモンだ。

眼がよどんでいる為、幻だと分かる。

「１体・・・。なら」

拓也は仲間の顔を見て、考えている事が同じというのを確認した。

６人は手に宿ったデジコードをスキャンし、スサノオモンに進化する。

手にゼロアームズ：オロチが握られ、戦闘が始まった。

＜Ｓｉｄｅ　太一達＞

――ガキィン！キィンッ！

オメガモンは拓也と剣を交えるが、これがまた、人間とは思えない力で斬りかかって来る。

それに、全く疲れないのだ。

切り傷を付けても、無かったかのように回復される。

「長期戦だと、向こうが有利だぞ」

「拙いな・・・」

太一とヤマトもそれに気付き始め、如何したら良いのかと舌を巻く。

オメガモンは拓也の背後に回り込み、グレイソードを一閃した。

――ザシュンッ！

幻の拓也の左腕が斬られた――。

左腕は空気に溶けるよう消滅し、拓也の左肩に霧が集中する。

晴れると、新しい腕がそこにあった。

拓也は腕を曲げたり伸ばしたりして、問題が無い事を確認する。

「化物か・・！」

丈が幻である拓也に、あり得ない物を見たような視線をおくった。

「俺達は・・・」

拓也が左腕を見ながら、口を開く。

「疲れを、知らない・・・傷、回復する、高位の、幻だ。・・・最高位ではない事、ありがたく、思え」

そして、何事も無かったかのように剣を構えた。

「俺達・・？高位に、最高位？幻にランクがあるのですか・・・」

光子郎が軽く驚いたように、眼を見開く。

「最高位、攻撃は、通用しない。死にも、しない・・・。お前達、勝つ事、不可能だ」

拓也は相変わらずの無表情で、オメガモンに斬りかかった。

「＜グレイソード＞！」

オメガモンは剣に力を込め、思い切り振りきる。

拓也は龍魂剣でそれを受け、力点をずらしていなされた。

「な・・!?」

オメガモンが前へ態勢を崩し、その隙に龍魂剣の刃が迫る。

「ぐ・・!」

背中に一閃されたが、痛みをねじ伏せ態勢を整えた。

戦闘が行われる中、光子郎は1人深く考え込んでいる。

そして先程幻が言った言葉を、何度も思い返した。

『最高位、攻撃は、通用しない。死にも、しない・・・』

(最高位には、攻撃は効かないし死なない・・・。という事は、高位の幻は・・・確かに攻撃は効かないけど、死にはするという事に・・・)

光子郎は戦闘を眺めながらそこまで考え、訳が分からず額に手を当てた。

(如何やって倒せと・・!)

死にはする。

だが、方法は何だ?

如何やって幻を殺せと・・?

「ッ・・・もしや・・！」

光子郎の脳裏に一筋の光が走った。

何故こんな簡単な事に気付かなかったのだと、後悔する光子郎だが、すぐに太一に声をかける。

「太一さん」

「何だ光子郎」

「倒し方、分かりましたよ」

光子郎の一言に、太一達は驚いて視線を向ける。

「・・・」

オメガモンと対峙する幻の拓也にも、その声は届いており、幻は光子郎を横目に剣を構えた・・・。

57話：相手は仲間（後書き）

太一「倒し方が分かったって、本当か！？」

光子郎「はい。間違っていなければ良いのですが・・・」

太一「ダメだったら、根性で倒すしかないもんなぁ」

光子郎「それは厳しいですね」

ヤマト「もう少しポジティブ的な会話しろよ・・・」（呆）

５８話：最高位現る（前書き）

最高位の幻として、奴を出したいと思います！

では５８話、参ります！

58話：最高位現る

＜Ｓｉｄｅ　太一達＞

光子郎はふと浮かんだ策を、太一に伝える。

「た、確かにそれなら・・・いや、でもだなぁ・・・」

太一は納得する半面、躊躇う様子だ。

光子郎の策なら確かに倒せるだろうが、少し躊躇してしまいそうになるのも分かる。

「僕だって嫌ですけど・・・これしか浮かばなかったものですから」

仕方なしに頷く太一。

だが、この策を実行するには下準備というものが必要だ。

太一は隣で戦闘の様子を眺めていたヤマトに、視線を向けて合図する。

ヤマトにも光子郎の言葉は耳にきちんと入っている為、合図の意味を悟った。

「オメガモン、ガルルキャノンだ！」

オメガモンは、その指示の意図が分からなかったものの、信じて実行する。

「＜ガルル・・・キャノン＞ッ！」

冷気が圧縮された砲弾が、拓也に向けて発射された。

それは拓也の足元に着弾し、地面に縛り付ける。

「進化を解いて、それぞれ究極体に！」

太一が声を張り上げ、急いで次の指示を出した。

オメガモンは退化し、ウォーグレイモンとメタルガルルモンに別れ、その間に拓也が炎で氷を溶かしていく。

「＜コキュートス・・・ブレス＞ッ！！」

逃がすまいと、メタルガルルモンが吹雪を吹きかけて、再度凍らせた。

その間、ウォーグレイモンはエネルギーを集束し、巨大な超高密度の高熱エネルギー弾を創生する。

「＜ガイア・・・フォース＞ッッ！！」

足の氷を溶かしていた拓也に、唸りを上げて放たれた。

「・・・」

幻の拓也はそれを視界に収めると、諦めたように力を抜き、龍魂剣を地面に突き刺す。

「見事・・・」

一言呟いた直後エネルギー弾が着弾し、幻は再生する事も叶わず消え去った。

幻は、一部でも残っていれば再生可能だが、何も残らなければ不可能。

とはいえ、仲間の影を消滅し尽くすというのは、喜ばしい光景ではない。

2体は進化を解き、成長期に退化する。

戦闘に勝利したものの、やはり表情は明るくなかった。

「お疲れさん」

太一は沈んだ雰囲気を明るくしようと、笑顔でアグモンの頭に手を置く。

「長期戦、よく頑張った」

ヤマトも素直にガブモンを褒め、2体は顔を見合わせて笑った。

＜Ｓｉｄｅ　啓人達＞

――ドォォォォンッ！

「メガログラウモン！」

吹き飛ばされるパートナーの名を、叫ぶ啓人。

「容赦無いわね・・・」

留姫が双子2人と、メガログラウモンを交互に見て苦い笑みをこぼす。

――ザシュッ

輝一は槍の穂先を地面に突き刺し、こちらの様子を伺っていた。

「完全に嘗められてるって感じだな」

遼はその事に少し腹を立て、カードを手にデジヴァイスでスラッシュする。

「＜バーサーカーアタック＞ッ！」

カードの効果でサイバードラモンの攻撃力が上昇し、両腕の刃が輝き出した。

「＜イレイズクロー＞ッ！」

サイバードラモンは槍を構え直した輝一へと、地面すれすれを飛行し滑空する。

――ガギギィンッ！

輝一は槍を上手く操り、刃を穂先の部分だけで受け流した。

サイバードラモンは踏み止まって態勢を保ち、更に右腕で一閃するが、輝一は槍を支えに逆立ちしてそれを避ける。

サイバードラモンの肩を利用して、輝一は背後へ回り込み、輝一のいた空いた空間に輝二が入れ替わるようにして滑り込んだ。

一瞬で入れ替わられた事により判断が遅れ、サイバードラモンは光剣によって切り傷を負う。

「サイバードラモン！」

遼がパートナーの身を案じて名を叫ぶが、サイバードラモンは本能のままに動き始めていた。

「ゴァァッ！」

両腕の刃を振り回し、輝二に斬撃を繰り出す。

輝二はリヒト・シュベーアトでその斬撃を、受け流したりいなしたりして、攻撃を食らわない。

すると、究極体に進化したデュークモンが、盾に力を集束させる。

それを見たラピッドモンとタオモンが、輝一を足止めして時間を稼いだ。

「＜ファイナル・・・エリシオン＞ッ！！」

デュークモンの砲撃は放たれると同時に、ラピッドモンとタオモンが後方へ跳ぶ。

輝一は槍を構えていたが、砲撃に呑まれた。

「む・・・」

それを幻の輝二が見、動きを止める。

「見事なり・・・」

一言、賞賛の言葉を呟き、サイバードラモンに斬りかかった。

かと思えば、サイバードラモンの脇を通り抜け、タオモンに接近。

タオモンは反射的にその場を離れるが、陰陽師の服の端が斬られる。

「＜ロイヤルセーバー＞！」

デュークモンが、輝二の背後からグラムを突き出した。

が、まるで見えていたかのようにかわし、グラムを足場に跳び上がる。

「＜リヒト・・・ズィーガー＞・・・」

高速でラピッドモンに接近し、光剣を振りかぶった。

「うわぁぁっ！」

「ラピッドモン！？」

ラピッドモンは進化が解け、健良が駆け寄る。

輝二はテリアモンに興味を無くし、デュークモン達に向き直った。

その時、

――ドォォォォンッ！ズザザァッ！

「が・・はっ！？」

突如、森の奥から傷だらけの拓也が吹き飛ばされて来る。

魂広中のようで、炎を身に纏い龍魂剣を握っていた。

「ちょ、何！？」

留姫は状況が分からず、拓也に近寄って声をかける。

「あ、その声は・・・」

「留姫だけど、如何いう状況か説明して欲しいのよ！」

「説明後！いいから離れろ！巻き添え食らうぞっ！」

拓也が顔色を変えて怒鳴り散らした。

直後、拓也のすぐ隣を大砲撃が通り過ぎ、木々達を消滅させる。

「砲撃・・！？」

遼が発射源に視線を移し、眼を凝らした。

それを見た幻の輝二は、役目を終え姿を消す。

「何が如何なっている！」

デュークモンがグラムを構えたまま、拓也に説明を求めた。

「知らねぇ！こっちが聞きたいくらいだっ！」

拓也は龍魂剣を支えに立ちあがった時、森の中から泉が走って来る。

「さっすが！まだ生きてるわね」

「当然だ！」

拓也の姿を見て、泉が笑みを浮かべた。

「ちょっと、状況説明しなさいよ！」

留姫が泉の腕を掴み、強制的に説明させる。

拓也達が幻を倒して進化を解いた直後、新たな幻が現れたそうだ。

最高位の幻らしく、全く歯が立たないという。

「何てデジモンよ？」

「えっと・・・ベリアルヴァンデモンって言ってたかな・・？」

「・・・誰よそれ」

「さ、さぁ・・？」

呑気な会話をしている2人は放置し、拓也は再び森へと入っていった。

「そうそう、他の皆知らない？この森広すぎて、何処にいるのか分からないんだけど・・・」

「知らないわよ！」

留姫は突然の出来事に腹を立て、怒ったように返す。

デュークモンとサイバードラモン、タオモンは森の中へ入っていった。

「とりあえず、あいつの相手よろしく！私、皆を探してくるから！」

「え、ちょ！」

留姫の手を振り払って、泉は風を纏い飛び上がる。

「もう！」

留姫は仕方なく森へと入っていき、その後を健良と遼も続いた・・・。

58話：最高位現る（後書き）

留姫「いきなり吹き飛ばされてきて、今度は相手頼むとか・・！こっちの事情も考えなさいよね・・！」

健良「まぁまぁ」

遼「ってか、ベリアルヴァンデモンってデジモン、知ってるか？」

健良「知らないなぁ・・・。他の皆に聞けば分かりそうだけど」

留姫「さっさと走る！」（怒）

健良・遼「「はい・・・」」

59話：捜索、発見（前書き）

59話、参ります！

59話：捜索、発見

＜Ｓｉｄｅ　大達＞

マッハガオガモンと泉が戦闘中に異変が起こった。

「あらら、私が闘ってる・・・」

空からもう1人の泉が現れる。

あっちが本物らしい・・・。

本物の泉がレイピアを構え、大竜巻を作り出し、幻を跡形も無く斬り裂いた。

「えっと、本物よね・・？」

淑乃が地上に降り立った泉に声をかけ、確認する。

「当然！って、そんな事より・・・ちょぉっと今面倒な事になってて、向こうの手伝いに行って欲しいんだけど・・・」

泉は森の中を指差し、淑乃に手を合わせた。

「向こうのって？」

「ベリアルヴァンデモンって、知ってる・・かな？」

「あぁ、ごめん。知らないわ」

「あ～そっかぁ。とにかくすんごく強くて歯が立たないから、手伝って欲しいんだけど・・・」

「すんごく強いのか!?」

泉と淑乃の会話に、その一言で大が興味を示す。

「行くぞ、アグモン!」

「お～う!」

2人は後先考えず、森の中へと走っていった。

「如何します?マスター」

マッハガオガモンは、大に呆れているトーマに声をかける。

「とりあえず、向かった方が良いだろうな」

「2グループ程集まってるはずです」

泉が先程合流した啓人達の事を思い出し、トーマにそう伝えると風で浮かび上がり、他のグループを探しに行った。

「それじゃ、僕達も向かおうか」

トーマの言葉に淑乃達も頷き、決戦へと向かう・・・。

＜Ｓｉｄｅ　太一達＞

「この後、如何する？」

太一が困ったようにヤマトに問いかけてみるが、ヤマトも悩むだけだ。

「１グループ見っけ！」

丁度その時、泉が飛んで来る。

「えと・・・本物？」

「毎回毎回聞かれますが、ほ・ん・も・の、です！」

「みたいね・・・」

空の確認に泉が飽きたように答え、空は思わず苦笑した。

「ベリアルヴァンデモンって知ってます？」

泉の問いかけに、太一達は顔を見合わせる。

「大輔達が闘ったって言う奴だな」

「それが如何かしましたか？」

光子郎が不思議そうに尋ねると、泉が訳を説明した。

「最高位か・・・。よし、早く行って合流しよう！」

太一に頷き、皆はそちらへ向かう。

「後1グループ！」

泉も最後のグループを探す為、再度飛び上がった・・・。

＜Ｓｉｄｅ　大輔達＞

パイルドラモンが究極体に進化し、砲撃を発射して戦闘を終えた。

「やっと終わった～」

大輔が、長期戦の後にドッと腰を下ろす。

「いった～～っ！！」

猛スピードで泉が飛んで来る為、思わず驚く一同。

「ど、如何したの？」

ヒカリが慌てていた泉に、おどおどしながらも声をかける。

「最高位でベリアルヴァンデモンが現れた、って言えば分かってくれる？」

「何いぃぃ！？」

疲れ切っていた大輔だが、今の言葉で無意識に立ち上がってしまった。

「急ぐぞ！」

大輔は疲労感も忘れ、全員はインペリアルドラモンに乗る。

インペリアルドラモンは大きく翼を広げ、目的地目指して飛び上がった。

＜Ｓｉｄｅ　ｅｎｄ＞

拓也達は魂広では敵わないと悟り、それぞれ究極体に進化する。

丁度そこに、全員が集合した。

泉も究極体に進化して、目の前の強敵に向かい合う。

「ベリアル・・・ヴァンデモン・・！」

大輔は幻という事も忘れ、面と向き直った。

黒紫の機械翼に口を持つ両肩、怪物のように見える魔王型デジモンだ。

「久しぶりと言うべきか？選ばれし子供達諸君」

流石最高位の幻と言うべきか、言葉を問題無く話す為、本物と見分けが付かない程である。

両肩のソドムとゴモラからは、唾液が滴り落ちていた。

「ぅ・・・」

淑乃が思わず引いたが、他の女子メンバーも似たような状態。

顔をしかめる者が多い。

ベリアルヴァンデモンのソドムとゴモラが口を開き、エネルギーを充填する。

「来る！」

大輔は気を引き締め、インペリアルドラモンも同じく砲塔に力を集束させた。

「＜パンデモニウム・・・フレイム＞ッ！！」

「＜メガデス＞ッ！！」

両者の砲撃がぶつかり合い、周囲に衝撃波をまき散らす。

「＜ガイア・・・トルネード＞ッ！！」

ベリアルヴァンデモンが砲撃発射中に、エンシェントグレイモンが紅蓮の竜巻を放った。

「ぐ・・！」

流石の熱さに顔を歪めるベリアルヴァンデモンだが、溶岩で溶けた所に霧が集まり、再生する。

これらを見て、なるほどとトーマが最高位の強さを認めた。

「マッハガオガモン、進化を解いてくれ」

「マスター？」

トーマの意図が分からなかったものの、マッハガオガモンは指示に従い、ガオモンに戻る。

「疲れはあるかい？」

「いいえ」

ガオモンの答えを聞き、トーマは笑みを浮かべた。

「よし、ならついて来てくれ」

トーマは皆に声をかけないまま、ガオモンと共にその場を離れる。

トーマが消えた事には、誰も気づかなかった・・・。

「マスター、一体何処へ・・？」

ガオモンが行き先を尋ねる。

「最高位は死なない、と幻が言っていただろう?なら、幻を作る本体を探すべきだ」

「なるほど・・・。流石です」

トーマの頭脳に、ガオモンはいつも感心していた。

それと同時に、トーマが主君である事を誇りにも思っている。

「ですが、マスター。シェンウーモンを私1人で倒せるのでしょうか」

「見つけたら、爆発でも起こして皆に知らせよう。いちいち戻るのも、面倒だ」

トーマはそう言って辺りを見回す。

目的地はあの崖だ。

そこでシェンウーモンと初めて相対したのだから、あそこが一番確立の高い場所と言える。

2人はシェンウーモンと出会わないまま、崖に辿り着いてしまった。

「いませんね」

「そうだな・・・。幻で姿を隠しているのか・・?」

辺りを注意深く見回すと、森の端に若干の歪みが見える。

それを視界に収めたトーマは、なるほどと笑みを浮かべた。

最高位の幻を作っていながら、自分を隠す程の幻まで制御出来はしない。

「ガオモン！」

「イエス！マスター！」

トーマの全身に青いデジソウルが駆け巡り、膨張してガオモンを包み込む。

「＜フルムーン・・・ブラスター＞ッッ！！」

ミラージュガオガモンの胸部の口から、輝く砲撃を発射した。

――ズドォォォォォォォォォォォォォォオオオオンンンッッッ！！！

「何だ！？今の爆発！」

大が驚いて振り返る。

かと思えば、ベリアルヴァンデモンの体が一瞬消え、また浮かび上がった。

「まさか、シャンウーモンに誰かが攻撃したのでは・・！？」

光子郎が少し考えメンバーを見渡し、トーマがいない事に気づく。

「トーマさんがいませんよ！」

「トーマの奴！抜け駆けしやがったなぁぁっ！！」

「いや、それは違うだろ」

大が違う所で怒る為、太一が思わず突っ込んだ。

「行くぞ、ウォーグレイモン！」

「あぁ！」

太一は応援に行かなければならないと考え、崖の方へ向かうがベリアルヴァンデモンはそれを許さない。

「＜パンデモニウムフレイム＞ッッ！」

「＜メガデス＞ッッ！！」

相殺する互いの砲撃。

太一、大がトーマのもとへ向かう。

ウォーグレイモンとシャイングレイモンは森の上空を飛行し、崖へと飛んだ・・・。

59話：捜索、発見（後書き）

大「トーマの奴！勝手に行動して勝手に攻撃して・・！絶対ぇ許さねぇぇっ！！」

太一「何故怒る！？」

６０話：玄武堕ちる（前書き）

６０話、参ります！

60話：玄武堕ちる

「トーマァァァアアアッッッ！！！」

突如、森の中から猛ダッシュで大が駆け抜け、トーマのすぐ横で急停止した。

「遅かったじゃないか」

「何がだっ！」

余裕の笑みを浮かべるトーマに、大が思い切り言い返す。

続いて太一も、木々の間を通り抜けて顔を出した。

「は、早すぎ・・・」

大はただトーマに一言文句を言いたいが為、全力疾走していたのだが時に感情とは恐ろしく、サッカー部の太一が離される程のスピードで、大は走って来たのだ。

走っていて早々、トーマと言い合っている。

「ガンガン攻撃しりゃ倒せるだろうが！」

「あのねぇ、仮にも四聖獣の1体だぞ。そんな簡単に倒せると思っているのか、君は。大体、相手の出方を見るのが普通で・・・」

「あぁ！？なんて面倒くさい事言ってんだお前！」

「君ね、‘将を射んと欲すれば、まずは馬を射よ’という言葉を知らないのか？」

「将を射んと欲するなら、将を射っちまえば良いじゃねぇか！ドドンとっ！そもそも俺が頭回して考えるようなタイプだと思ってんのか！？」

「・・・・・・・・・・・・・・・いや」

「認めるのか！？あえてそこは思ってます、って言うところだろぉっ！」

トーマの素直な言葉に、思わず頭を抱えて嘆く大。

「やかましいのが増えただけだな・・・」

トーマは大が来た事に後悔し、他に誰かいなかったのかと深く悩んだが、

「何やってんだよ、あんたら・・・」

太一が付いてきてくれたのは、せめてもの救いである。

「兄貴、男なら嘆いたりしねぇぜ！」

「おうよっ！」

シャイングレイモンの言葉に、大は一瞬で復活した。

「トーマ、てめぇ覚えとけよ！」

「いや、覚える気は無いね」

「か～っ！」

トーマは大の事など視界には入れず、シェンウーモンと向き合う。

その事に腹を立てる大だが、何とか自分で抑え込み拳を握った。

「サクッと倒して、サクッと帰るぞこんちくしょうがっ！！」

大は半ば自棄でデジヴァイスを握り、側面に手をかざしてジオグレイソードを出現させる。

シャイングレイモンはそれを手に、シェンウーモン目がけて一閃した。

シェンウーモンの甲羅にそびえ立っていた巨木が斬られ、倒される。

シャイングレイモンが場を開けると、力を溜めていた2体が入れ替わる。

「＜フルムーン・・・ブラスター＞ッッ！！」

「＜ガイア・・・フォース＞ッッ！！」

砲撃と業火球が一体化し、高密度のエネルギー砲となってシェンウーモンを包み込んだ。

一輪のデジコードが浮かび上がる。

「っしゃぁ！」

大は拳を天に突き上げた。

丁度その時、こちらの様子を見に来たエンシェントグレイモンは、デジコードを飲み込む。

デジモン達は進化を解き、その後ベリアルヴァンデモンと戦闘していたチームとも合流した。

「ベリアルヴァンデモンは？」

太一が、合流したヤマトに幻は如何なったか問いかけると、

「あぁ、少し前に消えたぞ。丁度そっちが終わった事だろ」

つまり、シェンウーモンが倒された直後に消えたらしい。

「でもさ、デーヴァいなかったよね」

友樹が思い出したように呟くと、

「次にまとめて出てくんじゃねぇだろうな・・・」

拓也が面倒くさそうな顔をして、右手で顔を覆う。

「えぇっと次は・・・」

皆が話し合っている中、純平は地図を広げてトーマと目的地を相談した。

「ここが湖、で、ここが鋼の地」

「鋼の地、か・・・。湖は少し遠いな・・・」

トーマの言う通り鋼のターミナルは同じ大陸内――と言っても西から東へ横断する事になるが。

「これ、歩いていくのは骨だぞ」

純平が苦い顔をして、額に手を当てる。

「また飛行か」

トーマはそばのガオモンを見て、すまないなと苦笑した。

「いえ」

ガオモンは平然とそれに応え、頼もしい笑みを浮かべる。

一同は究極体のデジモンに乗り、東から西へと飛行した。

「無い！いないっ！何処だよバイフーモンッ！」

拓也は鋼のターミナルを探しまわった直後、大声で叫び散らす。

「いないねぇ」

啓人も何処だろうと視線をさまよわせた。

「影も形も無ぇぞ。本当にここなのかぁ？」

大も、鋼で造られた建物の入り口から中を覗き込み、誰もいない事を確認する。

「おっかしいなぁ～。西で鋼って言ったら、ここしか・・・」

拓也は帽子を取って、頭をかきむしった。

西、鋼。

この単語が頭の中を右往左往し、定まってくれない。

「鋼かぁ・・・。鋼って、こういう金属の事でしょ？」

友樹が地面を蹴って、コンコンッと鳴らす。

「そうだけど・・・」

輝一は、それが如何かしたのか？と問い返すと、友樹は顎に手を当てて考え直した。

「ほら、あそこは？この大陸の更に西の所にあった、あの谷」

「あれは・・・確かに金属ぽかったけど、石に近かったぞ？」

「そうなの？」

話し合う2人に、純平が歩み寄る。

「何の話だ？」

「ほら、西にあった深い谷」

「ん～・・・可能性はあるけど、あそこ石だったはずだけど・・？」

「一応、ね」

友樹は苦笑して案を述べるが、純平は考え込んだ。

「行って・・・みるか」

「深っ！」

「いや、深すぎ・・・」

海を渡って更に西へと飛び、デジタルワールド一深い谷にやってきた。

その深さに大が絶句し、淑乃も顔を青くする。

谷の底が見えない。

が、見える範囲では壁が石のように石化していた。

太陽は沈み始め、３つの月が顔を出し始めている。

「毎回思うけど、月が３つって如何よ？しかも紅い月って・・・不吉だなぁおい」

太一が思わず冷や汗を流し、苦笑いを浮かべた。

「夜、か」

輝一が笑みを浮かべ、太陽が沈む様を眺める。

「嬉しそうだな・・・」

輝二が良い御身分で、と付け加え愚痴をこぼした。

「はは、まぁね。輝二だって月光がある分、まだましだろ？」

「・・・確かに」

輝二もそれを認め、３つの月を見上げる。

太陽が完全に沈み、一番近い青の月が輝き始めた頃だった。

壁の石が、金属に変化する。

「んな・・！？」

一同はその光景に呆然とし、全て変わるまで唖然としていた。

「か、変わった！」

「すっご～い！」

「喜ぶところなの！？」

それぞれ違う感想を抱く面々だが、拓也達はそれ以上の驚きを隠せない。

「嘘だろ・・・」

「そういや、あの時は昼間だったな」

「自然現象か・・？」

「そんな現象、聞いた事無いわよ」

「でもすごいねぇ」

「感動する事か・・？」

上から順に、拓也、輝二、純平、泉、友樹、輝一だ。

「こりゃぁ何かあるな！」

大はすでに興味津津であり、拳を握って谷の底へ降りる気満々。

「おいおい・・・俺達も下に降りたけど、碌な事無かったぞ」

拓也が青い顔をして谷の底を眺める。

あの時の出来事が脳裏に蘇り、思わず身震いする拓也であった・・・。

60話：玄武堕ちる（後書き）

大「何があったんだ？」

拓也「はは・・・思い出したくない・・・」（苦笑）

大「は・・？」

61話：屍の峡谷（前書き）

61話、参ります！

61話：屍の峡谷

「とりあえず・・・飛び降りるか！」

「「「「「「自殺行為だ（ね）」」」」」」

谷を覗き込みながら呟いた大に、拓也達6人が頭を抱えながら言い返す。

「何だよ、この底に何かあんのか？」

「はは・・・何があるかだなんて、なぁ・・・」

拓也は青い顔をして、しゃがみ込んで頭を抱えた。

「もう、一種のトラウマね・・・」

泉も額に手を当て、左手で右腕をさすり温める。

「あっはっは～、ほんと、俺達よく生きてたよな～・・・」

拓也は完全に放心状態のありさまだ。

「な、何があったんだい？」

トーマは聞くのも如何かと悩んだが、理由が知りたくて純平に尋ねる。

が、純平も大きなため息を吐いて首を横に振った。

言いたくないのか、言えないのか・・・。

「お前、一度死線越えたんじゃないか?」

輝二が谷を見下ろしながら、拓也の頭を叩く。

「いっや~、あの時は驚いたな。川の向こうで知らない人が手を振っててさぁ」

「それやべぇだろ」

拓也が思い出すように呟くが、大が突っ込みを入れる。

「だってな、足にザシュッてあれが・・・あれ、が・・・・・・・・・・!」

その時の事を思い出したのか、拓也を足の裏をさすって小さく呻いた。

「何やってんだか・・・」

太一が呆れたようにそれを見守るなか、拓也を除く輝二達5人が話し合っている。

「誰が行く?」

「僕嫌なんだけど・・・」

「友樹は行くの決定だ」

「えぇ！？」

「俺と輝一、純平は行っても出来る事が無いから、却下だな」

「・・・私は飛行担当で行かなきゃ、ダメよね？」

「そうだろ」

「後拓也も行かないとな」

「何ぃ！？」

「ん？復活したか・・・」

「何故俺が！？」

「お前が溶かしたら早いだろ」

「いやそうだがな・・！」

「よし、なら拓也が溶かして友樹が凍らす。泉は2人の風だ」

「人の話を聞きやがれ！」

「でもなぁ、僕嫌なんだけど・・・」

「こいつが溶かすから問題無いな」

「てめぇ、人の事だと思いやがってぇ・・！」

輝二は相談を半ば強引に進め、拓也と泉、友樹が降りる事に決定したようだ。

「ほれ、さっさと行く」

「お前、人の事だと思って勝手に――」

「ごちゃごちゃ言わない！」

反論する拓也を、輝二は押して谷に突き飛ばす。

「あ～ぁ、行っちゃった。じゃ、私も。友樹も来る！」

「えぇ～！」

友樹は嫌々だったが、泉が腕を引っ張って飛び降りた。

「何しに行ったんだ、あいつら」

大輔が不思議そうに、落ちていく者達を見届ける。

「歩道造り」

輝二が短く答え、は？という表情を浮かべる面々。

「それより、輝二。お前、降りたら拓也の怒り食らうんじゃないか？」

輝一が谷の淵にしゃがみ込んで下を見下ろし、拓也の怒りゲージを

心配する。

「・・・・・・かもな」

輝二は少し考え、苦虫を噛み潰したような表情を浮かべて、額に手を当てた。

「あんの野郎ぉぉぉっっ！！」

拓也は落下しながら魂広し、翼を出現させる。

勿論、怒りゲージはマックスを超えて爆発していた。

「降りてきたら斬り刻んでやらぁぁっ！！」

拳を握りしめ、龍魂剣を手に叫び散らす。

「こ、怖っ・・・」

泉の風を纏って降下する友樹は、思わず冷気を纏って遠ざかった。

「流石にこれはねぇ・・・」

泉も今回の喧嘩は止められる自信が無い為、力無く苦笑する。

しばらく降下を続けると、月光が届かなくなり真っ暗になってしまうが、こういう時に拓也が炎を纏ってくれると光源が確保出来た。

といっても、ある程度の範囲しか見えないが・・・。

「そろそろだよね・・・」

友樹がゴクリと唾を飲み込んで、気を引き締めた。

友樹の言った通り、そこが見えてくる。

地面は平らでは無かった。

幾千、幾万という棘の刃が、天に向けてそそり立っている。

尖端の棘を黒光りさせ、新たな獲物を待っていた。

「こんな形でまた来るなんてなぁ・・・」

これを見ると寒気が走り、流石の拓也でも怒りが吹き飛ぶ。

あの時はこんな棘が待ち受けているとも知らず、意気揚々と降下し太陽の光が届かなくなったと思った直後、足裏に激痛が走ったのだ。

その後は、谷の近くにいたデジモンに火を吐いてもらい何とかなったが、今ではトラウマである。

「っ・・・」

拓也も思わず息を呑み込んで、漆黒に光る棘等を見つめた。

「拓也、頑張って溶かしなさいよね」

「お、おう」

泉と友樹は少し上昇して、拓也から距離を置く。

拓也はデジヴァイスを構え、エンシェントグレイモンに進化した。

翼を広げ、落ちないように滞空する。

――ボコ、ボコボコッ！

エンシェントグレイモンはその身に溶岩を纏い、周囲を明るく照らした。

溶岩は滴り落ち、地面の棘をみるみる溶かしていく。

「ガァァァ・・・」

エンシェントグレイモンは体内の闘志を炎に変え、それを溶岩へと変化させ、次々と溢れさせていった。

「っ・・！」

熱気が伝わり、泉は友樹を引っ張って更に飛翔する。

谷の底は、溶岩の川へと変貌した。

所狭しと並んでいた棘は、全て溶かされ溶岩に溶け込む。

「友樹、出番よ」

「お、お願いだから落とさないでね・・！」

「分かってるから」

友樹は心の底から泉に願い、風を弱めないように頼んだ。

泉は同調から魂広にランクを上げ、風の量を倍にする。

それで友樹もやっと安心し、泉から離れてデジヴァイスを握った。

エンシェントメガテリウモンに進化し、すぐに泉が風で浮かせる。

（流石に・・・きつい・・！）

究極体デジモンを浮かせるのは厳しく、泉も風を吹き荒れさせた。

「＜フリージング・・・ブリザード＞ッッ！！」

エンシェントグレイモンが離れたのを確認し、溶岩に絶対零度の吹雪を吹きかける。

溶岩は冷えて固まり、少々でこぼこしているものの、平らに近い地面となった。

「ふぅ・・・」

泉もやっと終わったとばかりに、エンシェントメガテリウモンを地面に下ろす。

降りたエンシェントメガテリウモンはすぐに進化を解いた。

泉も下に降りたが、エンシェントグレイモンは上の者達知らせる為、一気に上昇した。

「この谷に、何があるんですか？」

光子郎が理由を知りたくて、純平に問いかけると、

「・・・谷が何て言われてるか、教えましょうか？」

苦笑いを浮かべてそう返されたので、光子郎は頷いた。

「‘屍（しかばね）の峡谷’ですよ」

「しか・・！？」

その一言に絶句する光子郎だが、

「な、何か紅くねぇか・・？」

大が谷底が紅く光っている事に気づき、覗き込む。

その輝きも消え、かと思えばエンシェントグレイモンが飛翔して来た。

「終わったぞ」

エンシェントグレイモンの一言を聞き、輝二は了解と頷く。

「もう降りても大丈夫だ」

「は、はぁ・・・」

輝二はそう言うが、いまいち状況が分からない一同であった・・・。

61話：屍の峡谷（後書き）

光子郎「何ですか?屍の峡谷って・・・」

純平「そんまんまです。死人がゴロゴロ出るんで、そう言われたとか・・・」

光子郎「死人・・・」

純平（あ、顔が青くなった・・・）

６２話：谷底の襲撃（前書き）

ふぅ・・・。←謎のため息

では６２話、参ります！

62話：谷底の襲撃

「何があったんだ、これ・・・」

谷底に降りた太一が、冷え固められた地面を足で蹴りながら、周りを見回す。

エンシェントグレイモンは進化を解き、拓也に戻った。

「トラウマ克服か・・？」

輝二が笑みを浮かべながら、拓也に問いかける。

「はっはっは～・・・誰かさんのおかげでなぁ・・！」

拓也は拳を握って怒りを堪えながら、殴るか殴らないか非常に悩んだ。

（殴っても良いよなぁ・・・これ・・！）

「おい、行くぞ」

悩む拓也に輝二が声をかけ、先を促す。

「・・・しゃぁねぇな！」

結局殴らない事にして、拓也は皆の後を追った。

谷底の端から端まで溶岩が流れたらしく、棘は全て溶かされている。

たまに残っている数本の棘は、輝二や輝一が武器で切断した。

「これ、何処に向かって伸びてるんだい？」

「西、だと思う」

トーマに方角を問われ、純平は手に静電気を散らして光源を作り、地図を見る。

拓也は先程と変わらず、光源を確保する為に炎を身に纏っていた。

ふと先頭を歩いていた拓也が、歩みを止めて龍魂剣を握る。

「何かいるぞ！」

注意を飛ばし、全員が戦闘態勢に入った。

――ズゥン・・・ズゥン・・・

何かの低い足音が、谷底に響き渡る。

壁に反響して何処から来るのか、見当がつかない。

前か、後ろか。

はたまた遥か先なのか。

拓也は翼を出現させ、炎の量を倍にし見える範囲を広げた。

輝二もリヒト・シュベーアトを取り出し、光らせる。

――ズゥン・・！ズゥン・・！

「近い・・？」

拓也は反響する音は無視して、気配を探り龍魂剣を構えた。

気配を探って、ふと気付く。

（囲まれてる・・！？）

気配が1つや2つではない。

最低でも7つ。

そのうち1つが巨大な塊でる事から、バイフーモンだろうと推測する。

「完全に囲まれたな」

輝二が背後を振りかえって、デーヴァ達を視界に収めた。

シェンウーモンの時に闘うはずだったデーヴァもここに集まり、一同の周りを囲う。

――ゾワァ・・！

全員の背筋に、冷たい殺気が走った。

かと思った直後、拓也は右肩が一瞬急激に冷えるのを感じる。

が、それは激痛の予兆であり、右肩がカッと燃え上がるように熱くなった。

「ぐぁっ！？」

思わず左手で押さえたが、熱い液体がドクドクと流れ出し、左手を見ると紅く染まっていた。

「如何した！？」

輝二がリヒト・シュベーアトを構えながら、拓也に起きた異変を尋ねる。

「何でもない！ってか今の誰だぁ！？」

ブチッと何かが切れるような音が聞こえたかと思うと、拓也が怒りに燃えていた。

何処が何もないんだ、と心の中で突っ込む輝二だが、あえて口は挟まない。

見える範囲で、拓也の血が点々と続いているのが確認出来る。

その先にいたのは、虎――シーサーのようなデジモン。

「てめぇか！」

ジュォォ・・！と拓也の頭から水蒸気が立ち上り、完全に怒ってい

るのが分かる。

光子郎がパソコンを開き、そのデジモンに向けた。

「『チャツラモン。完全体。聖獣型。必殺技は＜シュヴァボージャナ＞。デーヴァの1体で、戌(いぬ)に似た姿をしている。正義感が強く、何事も白黒はっきりさせないと気が済まない』」

「おぉし、んじゃ白黒つけてやらぁ！」

拓也は正当防衛だ！とばかりに剣を左手で剣を構え、右腕はダランと垂らす。

「お前、怪我してんのに大丈夫かよ」

大が拓也の右肩を見て、心配をするが・・・。

「怪我してない！」

「ふ～ん・・・」

拓也の返事にニヤリと笑みを浮かべる大は、パシッと拓也の右肩を叩いた。

「いだだだっ！？何すんだ！」

「何処が怪我してないんだよ！アグモン、火ぃ火ぃ！」

大が呼ぶと、アグモンは火球を拓也に放つ。

「おわっ」

いきなりの事に驚く拓也だが、魂広中である為、火は炎の闘士の栄養だ。

右肩の深い切り傷は、無かったかのように回復した。

「おぉ！サンキューな！」

拓也も治った右腕を振りまわして確認し、龍魂剣を握る。

――バサッ

ふと、羽ばたくような音がした。

視線と向けると、黄色の鳥のようなデジモンがいる。

友樹がデジヴァイスを向けて、浮き上がったデータを読み取った。

「『シンドゥーラモン。完全体。聖獣型。必殺技は＜プーヤヴァーハ＞。デーヴァの1体で、酉（とり）に似た姿をしている。纏う鎧はデーヴァの中でも最も硬く、一旦その中に入ると絶対防御の態勢になる』」

「鳥、なのか？」

輝一がニワトリにも見えるシンドゥーラモンを見て、小さな疑問を抱く。

「鳥って事で・・・」

友樹も苦笑いを浮かべ、仕方なしに頷いた。

「あれ、申（さる）だよな」

太一が、壁を少し登った所にいるデジモンを指差して、半信半疑の様子。

「猿でしょう」

光子郎が恐らく、と言った具合に頷きパソコンを向ける。

「『マクラモン。完全体。聖獣型。必殺技は＜ラウラヴァ＞。デーヴァの1体で、申に似た姿をしている。知能が非常に高いがその反面、真っ向からの戦闘は不得意である。チャツラモンとは犬猿の仲』」

――ザッ、ザッ

半人半獣のデジモンが二振りの大剣を握り、歩み寄って来た。

友樹がデジヴァイスを向ける。

「『ヴァジラモン。完全体。聖獣型。必殺技は＜ローダ＞。デーヴァの1体で、丑（うし）に似た姿をしている。侍的で義を重んじ、卑怯な事を嫌う性格。デーヴァ一の力を持つ』」

「じゃぁ、あれは・・・」

輝一はヴァジラモンの隣にいるデジモンに首を傾げ、デジヴァイスを向けた。

「『ヴィカラーラモン。完全体。聖獣型。必殺技は＜スーカラ＞。デーヴァの1体で、亥(いのしし)に似た姿をしている。常に笑みを絶やさず、物事を外から眺めている傍観者。眼を開けたまま眠る事が可能』・・・」

「それ良いな！」

輝一の最後の一言に、大が反応して眼を輝かせた。

「えっと、残ってるのは寅(とら)、卯(うさぎ)、辰(りゅう)、子(ねずみ)だから・・・あのデジモンは鼠なの？」

友樹が残った十二支を上げていき、鼠のようなデーヴァにデジヴァイスを向ける。

「『クンビラモン。完全体。聖獣型。必殺技は＜クリミシャ＞。デーヴァの1体で、子に似た姿をしている。博識を誇る、シェンウーモンの禅問答の相手を務める知恵者。相手の心理を先読みする事が出来、相手を撹乱させるのが常套手段』・・・頭良いんだ」

へぇ～、と面白そうにクンビラモンを見つめる友樹。

デーヴァ達はそれぞれ宝物を持っていた。

ヴァジラモンは2対の大剣――宝剣(パオチェン)。

マクラモンは玉――宝珠(パオユー)。

シンドゥーラモンとクンビラモンは、同じ杵(きね)――宝杵(パオツウ)。

チャツラモンは巨鎚（パオツェイ）――宝鎚に変化する事が出来、ヴィカラーラモンは光輪（パオラン）――宝輪を放つ事が出来る。

――ズゥン・・・ズゥン・・・

先程と同じ、低い足音が響いた。

暗闇の中から、白銀の毛皮が姿を現す。

前脚に籠手を装備し、胴体の周りを12個のデジコアが囲っていた。

それは、巨大な白虎。

「『バイフーモン。究極体。聖獣型。必殺技は＜金剛（こんごう）＞。四聖獣の1体であり、西方を守護し鋼の属性を持つ。4体の中で一番若い存在ではあるが、その力は四聖獣一』」

光子郎が表示されたデータを読み上げ、全員が気を引き締めた・・・。

62話：谷底の襲撃（後書き）

拓也「あの・・・チャツラモンだっけ？後ろからザシュッってひどくねぇか！？」

大「よく見えなかったけどよ、どれくらい深く噛まれたんだ？」

拓也「・・・・・・5センチ？」

大「・・・それ、深いよな。しかも何で疑問形？」

拓也「俺も覚えてないんだよ！」

大「・・・ともかく治って良かったんじゃねぇの？」

拓也「誤魔化すなぁ！」

６３話：巨虎堕ちる（前書き）

え～、知っている方もおられるとは思いますが、数日前から新しい小説を書き始めました。

「魔物と術師」という物語です。

よろしくお願いしますね。

では６３話、参ります！

63話：巨虎堕ちる

誰が誰を相手する？という疑問が一番手。

この数を相手に当然だろう。

まず最初に決まったのが、

「俺はあいつだ。さっきの恨みがあるからな！」

拓也はチャツラモンに怒りを向けた。

残りデーヴァ5体だが、最低でも究極体になれる者が2人は欲しいところ。

「じゃぁ、俺も」

「同じく」

輝一が槍を手にすると輝二も頷き、後は完全体になれる者が援護すれば倒せるだろう。

残りの究極体デジモンは、バイフーモンだ。

「開戦と行きますか」

太一はデジヴァイスを構え、笑みを浮かべる。

――ダッ

その一言を待っていたかのように、拓也が動き出した。
背後へ回り込み、一閃する。
――ガキィン！
「うぉ、かって！」
チャツラモンの装甲は硬く、容易に剣が弾かれてしまった。
太一のアグモンと、ヤマトのガブモンが究極体へ進化し、更に融合する。
ブイモンとワームモンも進化し、巨竜が現れた。
啓人達や泉達、大達も進化して、究極体がそろう。
「＜金剛＞」
バイフーモンの口から衝撃波のような物が放たれ、一同は散開してかわした。
――ビキビキッ
衝撃波がかすれた地面が、金属に変わる。
「石化！？」
太一が驚いてその光景を見ていたが、トーマが首を振った。

「石化は通り過ぎて、金属になってるね・・・」

トーマが変わった金属を手でコンコンッとノックし、それを伝える。

一同は気を引き締め、自分の相手に向き直った。

「＜金剛＞」

再び散開して衝撃波をかわし、金属化から逃れる。

これは人間チームも例外無しだ。

当たれば金属になってしまう為、用心深く戦況を見ていなければならない。

「ぶっ飛ばせぇ！」

「おうよ！」

大の相変わらず危険に臆する事無く、突き進むやり方は変わっていない。

シャイングレイモンはバイフーモンの上を通過し、背後に回り込んだ。

「＜グロリアスバースト＞ッ！」

シャイングレイモンが灼熱の炎を放つが、バイフーモンはあの巨体で高く飛び上がり、一同を挟んで反対側に移動する。

「何！？」

シャイングレイモンは放ってしまった炎の矛先が、人間に向いている事に気付いた。

「やべ・・・」

大が思わず体を硬直させてしまう。

が、

「ラッキ～！」

そこへ拓也が乱入し、デーヴァ達から受けた傷口を回復させた。

「あ、危な・・・」

淑乃が冷や汗をかいているものの、拓也にとっては栄養源。

ありがたいのである。

だが回復しきった拓也の顔面に、クンビラモンがアタック。

「がふっ！？」

「あ～ぁ・・・無事、じゃないね」

近くにいた輝一が、思わず苦笑すると何かが切れる音がした。

――ブチィッ！

拓也は龍魂剣で薙ぎ払い、クンビラモンを突き飛ばす。

「さっきからちょこまかとぉ・・！何か!?溶かされたいのかお前っ！」

完全にキレており、進化してないのに溶岩を纏っていた。

「何だ、溶岩使えるんじゃないか・・・」

「怒ってる時だけだろうけどね・・・」

それを見た双子が、お互いに背を預けた状態のまま言葉をかわす。

「ね・ず・みぃぃぃぃぃいいっ!!」

拓也は龍魂剣に溶岩を纏わせ、クンビラモンに一閃した。

――ヴン

「おっしゃ1体目ぇ！」

拓也は浮かび上がったデジコードをスキャンし、チャツラモンに向き直る。

「なんか無茶苦茶だなぁ、おい」

太一が思わず糸目になり、頬をかいた。

「何て言ってる場合でもなさそうだね・・・」

トーマは後ろへ向き直り、衝撃波を放とうとしているバイフーモンに視線を移す。

「＜金剛＞」

「＜ダブルクレセントミラージュ＞！」

互いの衝撃波が打ち合い、相殺した。

輝二と輝一の方も、シンドゥーラモンとマクラモンを倒し終える。

デーヴァは残り3体となった。

「＜ガルルキャノン＞！」

オメガモンが冷気弾を発射するが、バイフーモンは谷の壁を蹴って再び反対側に移動する。

冷気弾は地面に着弾し、凍らせた。

また反対側へ視線を移す一同。

「前、後ろと忙しい奴だな！」

大がじっとしてろよ！と声を張り上げるが、そんな言葉が通じる訳も無い。

輝二が、ヴァジラモンの攻撃をよける為に後方へ跳んだところ、丁

度拓也と輝一が背中合わせに闘っていた。

「残ってるのは？」

「牛と犬と猪！」

「・・・変な組み合わせだね」

輝二の問いに拓也が答え、輝一が苦笑する。

「どんくらいで終わる？」

輝一が背中越しに2人に確認すると、

「「一瞬！」」

「はは、同じく」

拓也は龍魂剣に溶岩を纏わせ、輝二は2対の光剣を交差させて構え、輝一は槍を両手で握り態勢を低くした。

「はぁぁっ！」

「おぉぉっ！」

「はっ！」

それぞれの得物を振るい、相手を一閃、もしくは突き刺す。

浮かび上がったデジコードをスキャンし、デーヴァを倒し終えた。

「おぉし、次はあいつだけ――」

「避けろ拓也っ！」

拓也がバイフーモンに向き直る直前、大の怒鳴り声が木霊する。

「は？」

そちらを向くと、バイフーモンから放たれた衝撃波が襲いかかって来た。

「いぃ！？」

拓也は急いで避けるが、左手がかする。

「おわっ！？」

その反動でバランスを崩し、壁の所まで行ってやっと足が止まった。

「あ、危ね・・・」

「危なくねぇ！アウトだっ！」

拓也は大の声にへ？と訳が分からないとばかりに、左手を見る。

左手はすでに金属化し始め、龍魂剣までそれが浸食していた。

「あぁ！龍魂剣がぁ！」

「そっちじゃねぇだろっ！手ぇ見ろよ手ぇ！」

大が突っ込み所満載な拓也に声を張り上げ、怒るところを正す。

拓也は魂広を解き、ポケットからデジヴァイスを取り出した。

デジヴァイスを右手に握り、左手にデジコードを浮かび上がらせようとするのだが、なかなか安定しない。

「落ち着け落ち着け落ち着けぇい！」

「そういうお前が落ち着けっ！」

拓也の金属化は肘を過ぎ、肩へと伸びる。

やっとデジコードが安定し、究極体に進化する拓也。

エンシェントグレイモンになっても金属化は治っていない。

仕方なく溶岩を身に纏い、金属を溶かしてもとに戻していく。

「にしてもお前、石や金属になるのが好きだな・・・」

輝二が昔を思い出し、笑みを浮かべた。

「やかましい・・・」

エンシェントグレイモンは横目で輝二を睨んだ後、バイフーモンの頭上へ飛び上がる。

「お礼はきっちりさせてもらう・・！」

溶岩を溢れさせ、バイフーモンに攻撃した。

「＜ガイア・・・トルネード＞ッッ！！」

溶岩の海に沈むバイフーモン。

白虎が堕ちた・・・。

「熱っ・・・」

熱気が伝わり、太一達は後方へ下がる。

浮かび上がったデジコードを、エンシェントグレイモンが呑みこんだ・・・。

63話：巨虎堕ちる（後書き）

拓也「あの鼠、何って言ったっけ？」

啓人「ク、クンビラモンだけど・・・」

大「名前覚えろよ」

太一「‘ねずみ’って叫びながら闘ってたな・・・」

大輔「何故か一撃で倒してたし・・・」

啓人（怒りって恐ろしい・・！）

拓也「だって本当、ちょこまかちょこまか動きやがって、全然剣が当たらなかったからな。つい・・・」

大「つい・・？」

（何で‘つい’で動くんだよ・・・）←人の事言えない

６４話：東の地へ（前書き）

今思えば６４話ですか・・・。

いつの間にかデジモンフロンティア～改～を超えてますね。

今回は途中から会話・・・というより漫才的になってしまいました・・・。

楽しんで頂けると良いのですが・・・。

では６４話、参ります！

６４話：東の地へ

「次は湖、と・・・」

泉の風を使って谷を上がっている時、純平が地図を広げて方角を確認する。

「あっちが北で、向こうが南・・・って事は東に行くには・・・。あぁ、このまま西に行けば東側に出るのか」

純平は、デジタルワールドも地球と同じく丸いという事を思い出し、地図をしまった。

が、ふと何かを思い出して再び広げる。

「げ・・・」

再度確認するように地図を眺めた後、苦虫を噛み潰したような顔をした。

「如何したんだい？」

ミラージュガオガモンに乗ったトーマが、問題でも？と問いかける。

「問題がでかいなぁ・・・。難問」

「純平さん、さっきこのまま西に行くとか言った！？」

「何ぃ！？」

友樹の問いかけが聞こえたのか、拓也がクワッと振り向く。

「え、何々？西に行くの？行くって言ったわね？やったぁ！」

泉は1人喜んでいた。

双子2人は顔を見合わせ、嫌そうな表情を浮かべる。

「えっと、説明を・・・」

訳が分からない啓人は、1人喜んでいる泉に説明を求めた。

だが、泉は一言、

「見たら分かるわよ～♪」

とだけ言って、スピードを上げた。

「な、何じゃこりゃぁっ！」

目の前の光景を目前にした大が、思わずというように叫んだ。

地図で言う、デジタルワールドの一番東にある大陸を目指していたのだが、谷があった大陸の海岸は物凄い事になっている事を忘れてはならない。

――ザザァッ、ビュオォォッ！

波が荒れ狂い、海面から複数の竜巻が天へ首を伸ばしている。
青い空は見えず、どんよりとした黒雲が覆っていた。
雨が降っていない事が幸運に思えて来る。
「ここ嫌だぁ、全然飛べねぇもんな・・・」
拓也が崖の淵に腰を下ろし、面倒くさそうな顔を浮かべた。
「何言ってるの！こんな素晴らしい場所、そうそう無いわよ！」
風の闘士である泉は、満面の笑みを浮かべて拓也の頭をはたく。
「如何やって渡るんだい？これは・・・」
流石のトーマも考えようがない。
「いつもは６人だから、泉の風だけで何とかなったんだけど・・・
流石にこの人数は」
輝一が苦笑いを浮かべてメンバーの数を確認した。
デジモンを含めれば５０近い。
「泉、運べるか？・・って、如何考えても無理＿＿」
「大丈夫行けるわよっ！」

「は・・？」

途中で挟んできた泉の発言に、思わず拓也は顔を固めた。

「何よ、無理だとでも言いたい訳ぇ？」

ズンッと顔を接近させ、怒りのマークを浮かべる泉。

「いやいやいや、５０いるぞ！？」

「何言ってんの！こんだけ風が吹いてんだから、１００でも行けるんじゃない？」

泉はニコォッと不気味な笑みを浮かべて、文句ある？と拓也を問い詰めた。

「・・・お、落とすなよ」

「了解了解♪」

聞いているのか聞いていないのか、泉は同調して全員を風で浮かせる。

「うわっ」

「浮いて・・！」

滅多に風で飛行しない者達は、足が浮いた事に驚きを示した。

「Ｐａｒｔｅｎｚａ！」

イタリア語で‘出発’と叫び、泉は竜巻に突っ込む。
竜巻の風は泉の物となり、身に纏う風の量が増えた。
周りの竜巻を手当たり次第に突っ込んで、風の量をどんどん増やしていく。
「やたらめったら突っ込むなよ！」
拓也が思わず叫び、泉からドガッとかかと落としを食らった。
「あいだっ！？」
「こういう時しか栄養補給出来ないんだから、良いじゃないの。あんたと違うのよ♪」
何処でも燃えてる炎と違ってね、と言い残し泉は再び竜巻へ向かう。
「生きてるか～」
輝一が拓也の背中を叩き、生存を確認するが当然生きている。
「勝手に殺すな！」
「はいはい」
拓也はガバッと顔を上げて言い返すが、輝一はサラリと受け流した。
「あ～ぁ・・・」

友樹が大空を見上げて、気の抜けた声を漏らす。

「如何したんですか？」

伊織が声をかけ、同じく天を見上げた。

空を雲が覆い始め、空気が少し湿っている。

「空気が湿ってて、雲が出てきてるって事は・・・雨来るね。吹雪なら大歓迎だけど」

「何歓迎してるんですか・・・」

友樹はニカッと笑って雨が来る事を告げるが、伊織は笑みを浮かべる友樹に苦笑した。

「はは、こんな嵐の中に雨まで加わったら・・・たまったもんじゃねぇな」

大輔が途中までは苦笑いを浮かべるが、無表情に変わって頬をかく。

「ここにギズモン来たら、更にピンチ♪」

京がノリノリで言うが、全くその危険さを分かっていない。

これで来れば、予感的中なのだが・・・。

「あっら～・・・・・お見事」

拓也は同調して視力を上げ、遥か向こうを見ながら苦虫を噛み潰したような顔をする。

「まさか・・・ビンゴ！？」

「何で喜ぶの？」

顔を輝かせる京に、ヒカリが苦笑いを浮かべた。

「数は・・？」

「えぇっとぉ？・・・３０・・・あ、いや、５０？違うな・・・如何見ても１００越えてねぇか？」

「おいおい・・・」

３０と全然違うぞ、と輝二が心の中で呟く。

「１００！？」

大がそんなにうじゃうじゃいるのか！？と、聞き返すが拓也はうじゃうじゃって・・・と大の表現に苦笑した。

「あんたどんだけ適当なの。１００じゃなくて８０よ」

竜巻をほとんど吸収し終わった泉が、腰に手を当てて数を訂正する。

「悪かったな、適当で・・・」

ボソリと小さく言い返した拓也だが、泉はそれを無視する。

――ポツ、ポツポツ・・・

「あ、降って来た」

運が悪いのか、雨まで降り出す始末だ。

「俺やだぞぉ、こんな雨降った中で闘うの」

大半の炎を雨で消されてしまう拓也は、面倒くさそうに腕を組む。

我慢するんだな、と輝二がリヒト・シュベーアトを握った。

「火ぃ出せないじゃんかぁ！」

「知らん」

拓也の文句を斬って捨てる輝二。

などと言っているうちに、ギズモン達が接近してくる。

「この雨如何にかならねぇのか？」

大も手を広げて空を見上げた。

「如何にかなるだろ」

「へ？」

輝二の言葉に大が振り返って、何で？と聞き返す。

輝二は拓也の頭をガシッと掴み、光剣でこいつこいつ、と示した。

「は？は？」

当の本人である拓也は全く理解していないが、皆はあぁ！と納得する。

「え、何？何で俺？」

「そうそう。拓也がいりゃ、雨とか一瞬だよな！」

「え、何で？」

「うん、そうだよな・・・。という訳で頼んだ」

「何を？」

「この雨、止めてくれよ」

「いや、だから・・・何が如何なのか説明しろよっ！」

拓也と大の会話が全く噛み合わず、余計に拓也を混乱させている。

「お前、頭悪ぃよな」

「やかましいわっ！」

「それは今に始まった事じゃない」

「あ、そうだっけか」

「何を納得しとるんだお前はっ！」

2人の会話に輝二も入り、何かとやかましく感じる周りの者達。

「如何でも良いから、早くしてくれる？」

怒り寸前の泉が、拓也を急かした。

如何でも良いのか！？と叫ぶ拓也を、誰も気づかいしなかったとか・・・。

６４話：東の地へ（後書き）

拓也「なぁ、俺の扱い酷くねぇか？」

竜気「・・・・・・・・・・・・気の所為じゃない？」

拓也「何だ今の間」

竜気「・・・・・・・♪～♪」

拓也（斬って・・・良いよな？）↑龍魂剣装備完了

竜気「はっ！」↑危険察知

拓也「で、さっきの間は？」

竜気「えとね・・・・・・・・・別に」

拓也「ふぅ・・・」↑龍魂剣構える

竜気「あ・・・」↑逃げの態勢に入る

拓也「覚悟ぉぉぉおおっ！！」

竜気「皆さん、覚悟は三途の川でしましょうね！ではっ！」↑逃走開始

３０分後、救急車が道路の上を走って行ったとか・・・。

65話：癒しの湯（前書き）

65話、参ります！

65話：癒しの湯

「何？何で俺なんだよ」

大から説明を受けていない拓也は、今だ混乱の極みだ。

「・・・・・お前、分かってねぇのか？」

「何かムカつくな・・・」

「お前が、進化して、吼えりゃぁ、良いだろうがっ！」

文節ごとに区切って分かりやすく説明する大だが、最後にパシッと拓也を叩いた。

「って～！・・・は？あぁ、何だっけ。あ、進化だっけか。・・・・・・・・その手があったかっ」

「今更遅い！」

大がもう一度叩こうとしたが、拓也は二度も食らうかと避けてみせる。

「雨止めるんなら早くね～」

泉は接近してくるギズモンの群れを見ながら、注意を飛ばした。

「へいへい・・・」

拓也は急上昇して、雲の上まで一気に抜ける。

「おおぅ、太陽発見♪」

手で顔をかばい、太陽光に笑顔を向けた。

「ん～・・・如何しよっかね、吼えるか爆発か・・・」

しばらく考えた後、ストレス発散も兼ねて爆発にしようという事になる。

デジヴァイスで紅いデジコードをスキャンし、究極体に進化した。

「ゴァァ・・・」

小さく唸り、自分の周りに炎を集中させるエンシェントグレイモン。

炎を渦のように広げ、エネルギーを中心に圧縮する。

耐え切れなくなれば、

「＜オメガ・・・バースト＞ッッ！！」

――ズドォォォォォォォォォォォォォォォォオオオオオオオオオオオンンンッッッ！！！！

超巨大な大爆発が巻き起こる。

爆風や衝撃波が眼下の雲を遥か彼方まで吹き飛ばし、そのついでに飛行していたギズモンにも被害が及んだ。

皆の所には少し距離があった為、届かない。

「あら、ギズモンまで一掃してくれるなんて便利ね～」

泉が空を覆っていた黒雲が晴れていくのを見上げながら、ギズモン達のデジコードを回収する。

「‘便利’の使い方、間違ってない？」

友樹もスキャンしながら、泉に問いかけた。

「・・・・・気の所為よ」

「今の間が気になるところだけど、突っ込まないでおくよ」

「ん、良い子良い子♪」

友樹があえて突っ込んで来ない事に、笑みを浮かべる泉。

（なんかカチンと来た気が・・・）

自分に心を確認するように考え込む友樹だが、泉は濡れた服を風で乾かす。

「良いわね～泉ちゃん、服乾かせるんだから」

空が羨ましそうにそれを見ていると、泉の頭上で電球が光った。

「だったらいっその事、温泉にでも入りません？」

「「「「「温泉！？」」」」」

泉の一言に空、ミミ、ヒカリ、京、淑乃が反応する。

留姫は如何でもよさそうに装っているが、内心気になっていた。

「ん、お疲れ」

輝二は進化を解いて戻って来た拓也に一声かけ、現在の話題を説明する。

トーマは純平に温泉の場所を確認した。

近ければ良いのだが、デジタルワールドの反対側となると、少し考えなければならない。

「場所は・・・ここ」

「意外と近いな」

「距離は・・・こっから、って言うか湖を少し登った所だしこのまま進めば・・・」

純平の言葉を聞くや否や、泉の腕を引っ張って空達が飛行を開始する。

「・・・早っ」

それは誰が呟いた言葉であろうか・・・。

「うわ、すっごい！」

京が、目の前に広がる湯気を見て、思わず叫んでしまった。

白き湯気を湛える温泉が、広い範囲に渡って広がっている。

誰かが作ったかのように2つに別れており、大きい所と小さい所の2つだ。

真ん中には岩が積み上げられ、仕切りが出来ている。

強制的に女子が狭い方なのだが・・・。

「この人数だし、仕方ないわね」

泉は納得するが、狭いと言ってもかなり広い方だ。

拓也が湯に手を入れ、温度を確認する。

「熱っ！」

同調すらしていなかった為、思わず手を引っ込めた。

「え～、熱いの～？」

空が入れないの？と問いかける。

「友樹がいるから問題無し」

拓也がそう言う中、友樹は氷を作って温度を冷やしていた。

「これくらい、かな？」

同調を解いて手をつけ、うんと頷く。

一同は温泉に入り、疲れを流す事が出来た。

「あ～良い湯だった！」

着換えた大が、背伸びしながら声を張り上げる。

「満足満足～♪」

淑乃もパタパタと手で仰ぎ、満面の笑みを浮かべた。

「よぉし、気を取り直して湖に出発！」

「近いから歩きでも良いな！」

「方角はあっち」

「何処に行く気だ？」

勝手に進む拓也と大を、純平とトーマが正す。

一行は湖、四聖獣最後の1体が居座る場所を目指し、歩を進めた・・・。

場所は変わって森の奥。

漆黒の鎧を纏う、究極体と思われるデジモンが歩いていた。

――ズゥン、ズゥン・・・

何かを探し求めているようだが、それは見つからず。

（何処だ・・・何処にいる・・・。いや、俺は・・・何処へ行けばいい・・！）

その者は深く心に問いかけ、自問する。

強き者を探し、灯を宿した眼を持つ少年達と出会い、自ら身を投じた。

が、その先で待っていたのは別の世界。

死ぬ事を許されないのか、と何度も悔やんだ自分を捨て、今はただひたすら歩き続ける。

強き者を探す。

探して、倒す。

その後もそれを繰り返す。

（俺は・・・何を求めていた・・？）

いつの間にかその目的すら忘れ、本能が求める先へ――。

その者はウォーグレイモンと似た容姿をしていた・・・。

65話：癒しの湯（後書き）

はい、もう突っ込み所満載ですね。

最後に出てきたデジモン、皆さんお分かりでしょう。

最後の1文でバッレバレ。（苦笑）

感想の方で文句なり質問なり、なんでもどうぞ・・・。

出来る限りお答えします。

答える事が出来ない質問も、あるかもしれませんが・・・。

６６話：夜の闇（前書き）

今回は・・・輝一ですかね。

あやつも出て来ますぞ～。←ドラマで覚えた日本語

では６６話、参ります！

66話：夜の闇

「ここらで野宿するか」

木の枝を跳び移って周囲を見張っていた拓也が、夕陽を確認して皆に促す。

「もうこんな時間・・？」

空も今気づいたように天を見上げ、一行は野宿を迎えた。

それぞれ数人のグループに分かれて焚き火を作り、にぎやかに話し合う。

純平、トーマ、光子郎の3人は会話を抜けて、湖まで後どれくらいかを話し合っていた。

そんな楽しい時が過ぎ、皆が就寝し始めて2時間が経つ頃・・・。

――ヒュン・・・ヒュィン・・・

刃物が宙を斬るような音を聞き、ヒカリが眼を覚ます。

（何の音・・？）

隣で眠っていたテイルモンを起こさないように立ち上がり、森の中へ入って行った。

――ヒュン・・ヒュッ・・！

その音が少しずつ聞こえるようになり、距離も縮まって来ている事を悟る。

敵じゃないと良いな、と願いながら歩を森の奥へ進めた。

少し進むと少し開けた所に出て、月光が差し込んでいる。

人影を視界に捉えた為、すぐに木の陰に隠れるヒカリ。

（あの人は・・・）

月光により映し出された人影が誰か分かり、安心する。

月の光を反射して、槍の剣筋が煌めいた。

森の中で素振りをしていたのは、輝一である。

――ガサッ

ヒカリが木の陰から姿を現すと、

――ヒュカッ、ビィィン・・！

「ッ！？」

その音に反応した輝一が、思わず反射的に槍を投じた。

槍はヒカリの顔の横を通り過ぎ、木に突き刺さる。

「あ・・・君か。ごめん」

輝一は苦笑いを浮かべてヒカリに謝った。

「いいの。こっそり近づいた私も悪いから」

「えっと・・・ヒカリちゃん、だったよね・・？」

輝一は木に突き刺さった槍を引き抜きながら、ヒカリに名を確認する。

ヒカリはコクンと頷いた。

（あ、俺の闇を怖くないって言ってくれたの、この子だったな・・・）

輝一は更に悪いな、と思いながら槍の穂先が乱れていないか確認する。

「すごいね。こんな時間にも練習してるんだ」

「俺はどちらかと言うと、夜の方が動きやすいから」

輝一は素振りを再開し、ヒカリにそう返した。

――ヒュンッ・・・ヒュィンッ

槍の穂先が月光に反射して、弧を描く。

（槍って・・・舞っているみたい・・・）

ヒカリも思わずそんな感想を抱き、その舞いを眺めていたがふいに輝一が森の中を見つめた。

「如何し――」

「静かに」

如何したのかと問いかけようとしたが、輝一はヒカリを背に木の陰へ隠れさせる。

輝一は何かが森の中にいるのを悟り、闇を纏った。

（あ、やっぱり怖くない・・・）

そばでこんなにも闇が蠢いているというのに、ヒカリは恐怖を感じず、むしろ頼もしいくらいである。

輝一は無言で槍を構え、木々達のその向こうを気配で探った。

（何だこいつは・・！）

浮かび上がったその者は力に溢れ、だが何処か歪んでいる。

「ッ・・・」

その時、ヒカリがそいつの正体を悟り、まさかと小さく震え始めた。

輝一もヒカリが震えている事を背後で知り、更に警戒する。

「ッ・・！？」

輝一も森の中から現れたデジモンに、眼を見開いた。

その者はウォーグレイモンと瓜二つの容姿をしていたが、何より装甲色が違う。

「ブラック・・・ウォーグレイモン・・・」

「何・・！？」

ヒカリが小さく呟いたのを聞き、輝一は知り合いかと思ったが向こうは違うらしい。

ブラックウォーグレイモン

究極体。竜人型。必殺技は＜ガイアフォース＞

「如何して・・！死んだんじゃ・・・」

「・・？」

ヒカリが何の事を言っているのか分からず、輝一はとりあえず構えを解いた。

「死ななかった、という事だ・・・」

ブラックウォーグレイモンは静かに答え、輝一を横目で見る。
ある程度闘える者と判断したのか、両手のドラモンキラーを構えた。
輝一もやはり敵か、と構え直す。
ヒカリも2人が闘おうとしている事に気づき、駆け出した。
それと同時にブラックウォーグレイモンが動き、右手のドラモンキラーを振り上げる。
「だめぇっ！」
「「ッ！？」」
輝一の前にヒカリが両腕を広げて立ち、思わずブラックウォーグレイモンは手を止めた。
輝一も訳が分からず、驚いた表情である。
「邪魔をするな・・！」
ブラックウォーグレイモンは左腕で、ヒカリを薙ぎ払おうとしたが輝一がヒカリを抱えて跳び退る。
――ザザァッ
「危ないな君は！」

輝一はヒカリに一言叱り、木の陰へ隠れさせた。
ヒカリはそれでもダメ、と輝一の腕を放さない。
輝一は無理矢理振りほどいて、槍を右手に駆け出す。

「ダメッ！」

「何が・・・」

輝一はヒカリの声を無視し、ブラックウォーグレイモンの攻撃をかわした。

ドラモンキラーを足場に素早く駆け上がり、ブラックウォーグレイモンの背後で槍を一閃する。

――ガキィンッ

「な・・！」

が、背中のブレイブシールドは硬く、簡単に弾かれてしまった。

ならばと、輝一は槍にも闇を纏わせ強化する。

「効かんぞ・・！」

ブラックウォーグレイモンはその隙を突いて、ドラモンキラーで輝一を地面に押し付けた。

が、ギリギリのところで槍がドラモンキラーを防ぎ、輝一は無傷だ。

とはいえ今の状況は拙い。

輝一の力が切れれば、向こうに押し潰されるだろう。

「く・・！」

今は何とか闇の力と、夜だったというおかげで究極体相手に保っているが、時間の問題もある。

が、絶体絶命の状況だというのに、輝一は笑みを浮かべた。

「後ろ・・・。ガイアフォース・・・」

ブラックウォーグレイモンに聞こえるか聞こえないか程度の、小さな声で呟く。

「何・・！？」

突如背後に気配を感じたブラックウォーグレイモンは、素早く輝一から離れた。

だが、ブラックウォーグレイモンに‘正’のガイアフォースが着弾する。

輝一はそれを横目で見ながら、一息ついて起き上がった・・・。

66話：夜の闇（後書き）

輝二「・・・輝一は？」↑眼が覚めた

太一「ヒカリもいないぞ」↑眼が覚めた

男子1人と女子1人が消えたという事に気づく。

輝二・太一「「・・・」」↑顔を見合わせる

輝二「いやそれは・・・」

太一「流石に無いよなぁ・・・」

何かを想像したらしい・・・。

６７話：黒き竜戦士（前書き）

今思えば、私ってブラックウォーグレイモンの事、あまり覚えてないですね・・・。

変な所があるかもです・・・。

６７話、参ります！

67話：黒き竜戦士

「ヒカリ！」

太一が森の中から飛び出し、ヒカリに駆け寄った。

「何があった？」

気づけば輝一の背後に輝二が立っており、光剣を握っている。

「分からない。一番事情が知ってそうなのは・・・そちらさんだけど」

輝一は太一に抱えられているヒカリを見て、輝二は頭をかいた。

少し考えた後、ウォーグレイモンが牽制してくれている相手に向き直った。

「とりあえず・・・敵なんだろ？」

「ダメ！攻撃しないで・・！」

「何・・？」

ヒカリが太一の腕を振りほどき、輝二に詰め寄る。

「いや、だが・・・」

輝二はウォーグレイモンを攻撃している、ブラックウォーグレイモ

ンを示した。

攻撃されているという事は、敵と考えるのが妥当だ。

「それでもダメ！」

「なら如何しろと・・・」

「ヒカリちゃんの言う通りだぜ！」

突然、森の中から大輔とブイモンが飛び出す。

テイルモンも一緒だ。

「ヒカリ！何故一声かけてくれなかった！」

テイルモンはヒカリが危険な目に会っていると知り、少々怒り気味である。

「あ、ごめん・・・。起こすのも悪いと思ったから・・・」

テイルモンの言葉に、ヒカリは俯いた。

テイルモンは仕方なく頷き、ヒカリの前に立つ。

「大輔！あいつ！」

「分かってる！」

ブイモンがブラックウォーグレイモンを示し、大輔は頷くものの何

故生きていたのかが分からない。

「＜ガイア・・・フォース＞ッッ！！」

負のエネルギーが集束し、ウォーグレイモンに背後から直撃する。

「が・・！？」

蓄積したダメージが限界を迎え、ウォーグレイモンは退化した。

「アグモン！」

太一が駆け寄り、アグモンを攻撃させまいと前に立つ。

輝二は輝一と軽く言葉を交わし、駆け出した。

対してブラックウォーグレイモンは、太一に向けてドラモンキラーを振り切る。

――ザザァッ！ダンッ！

「おわっ！？」

「え！？」

ドラモンキラーが直撃寸前に、輝二が太一を、輝一がアグモンを抱えて跳び退った。

「た、助かった。すまない」

太一は驚きながらも礼を言い、アグモンの怪我を見る。

「何だ？如何いう状況！？」

幸か不幸か、拓也が眼を覚まし参戦した。

「良いところに来た。手伝え！」

「はぁ！？」

輝二は拓也に魂広を促し、ブラックウォーグレイモンに向き直る。

「頼むから状況説明！」

輝二に説明を求める拓也だが、

「知らん！」

「何だよそれ！」

拓也は説明もされないまま、魂広して龍魂剣を纏う。

「攻撃しちゃダメ！」

「い！？」

拓也はヒカリに腕を掴まれ、意味が分からんという顔をした。

「えっと・・・誰？」

魂広中な為、誰が誰か分からない。
輝二は光を纏ってくれているから、何とか分かる。
「あ、分からないんだったね・・・。私ヒカリ。お願いだから攻撃しないで！」
「えぇ！？だったら如何しろと！？」
「そ、それは・・・」
「っていうか知り合い！？」
拓也はブラックウォーグレイモンとヒカリを交互に見比べ、如何したら良いのか分からず混乱の極みだ。
「ブラックウォーグレイモン！」
大輔が威勢良く声を張り上げ、ブラックウォーグレイモンが視線を向ける。
「もう1回聞くけど、仲間になる気は無いのか！？」
大輔の問いに事情を知らない拓也達は、はぁ！？と驚愕した。
「・・・無い」
ブラックウォーグレイモンは静かに答え、ドラモンキラーを構える。
それを見たブイモンが、大輔の前に立ちはだかった。

ブイモンはワームモンがいないと究極体になれない。
それを見て、状況が悪いなと拓也は歯を噛み締め、ヒカリを見た。

「悪い」

「え・・？」

――ガッ

拓也は一言呟くと、ヒカリの首筋に一撃して気絶させる。

「太一さん！」

「お、おう！」

太一は拓也からヒカリを受け、木陰に連れていった。

「女の子に容赦ないわねぇ」

運悪くそれを目撃した泉が、拓也の頭を抑え込むようにねじる。

「だ～っ！やめぃ！今忙しいんだからっ！」

拓也はそれを振りほどき、ブラックウォーグレイモンへ駆け出した。
ブラックウォーグレイモンは夜空へ飛び上がり、エネルギーを集束させる。

「何だあれ、黒い・・・」

拓也は避けた方が良さそうだと考える中、

「あれは負のエネルギーだ！」

大輔が拓也に説明する。

「負？負って言うと・・・」

拓也は一瞬輝一を見るが、首を横に振られた。

負と言えば闇の力だと思ったが、輝一でも無理らしい。

「＜ガイア・・・フォース＞ッッ！！」

一気に放たれる集束球。

「避けた方が・・！」

拓也は避ける事を選び、龍魂剣を消して大輔の腕を掴み、ブイモンを抱えて飛び立つ。

輝二や輝一も太一達を避難させ、着弾の際の爆発は逃れた。

森の中に、開けた大地が出来上がる。

「おぉぅ、すげぇな」

拓也は上空からその戦況を確認し、地面に降りた。

「知り合い？」

そして大輔とブイモンに確認するが、２人は曖昧に頷くだけ。

「知り合いだけど・・・何て言うか、その・・だな・・・」

「・・？」

歯切れの悪い大輔に、疑問が絶えない拓也。

頭上はクエスチョンマークでいっぱいだ。

「俺達は仲間になろうって言って来たけど・・・」

「あ～・・・何となくだけど分かった・・・」

これ以上聞いても無駄と考えたのか、拓也は頷いて龍魂剣を手に構え直す。

拓也は翼を広げ、飛び立った。

ブラックウォーグレイモンは拓也を今度の相手と認識し、ドラモンキラーを構える。

「おいおい！如何いう状況だこらぁっ！」

すると、シャイングレイモンに乗った大が拳を握った状態で飛んで来た。

「知らねぇよ！俺だってまともな説明受けてないんだからっ！」

「俺の説明、まともじゃなかったのか！？」

拓也の言葉を聞いた大輔が、頭を抱える。

「大輔・・・俺もまともとは思えなかったよ」

ブイモンが正直な感想を口にした為、大輔は完全に落ち込んだ。

「＜ガイア・・・フォース＞ッ！！」

そんな事はお構い無しに、ブラックウォーグレイモンが攻撃を放つ。

標的はシャイングレイモンだ。

大はシャイングレイモンが本気を出せるよう、肩から飛び降りる。

地面に落ちないよう、拓也がキャッチした。

「おっしゃいけぇ！」

大はシャイングレイモンに声を張り上げ、シャイングレイモンはそれを合図に炎を放つ。

「＜グロリアス・・・バースト＞ッ！！」

炎とエネルギー弾がぶつかり、相殺した。

「うおぅ！」

拓也は爆風で吹き飛ばされぬよう、翼を大きく羽ばたかせる。

すると、夜明けが近づき地平線から太陽光が漏れ出した。

「・・・また次だ」

ブラックウォーグレイモンは背を向け、何処かへ飛び去っていく。

「な、何だったんだ・・？」

拓也はキョトンとしたようにそれを見届け、太陽に視線を移した・・・。

67話：黒き竜戦士（後書き）

大「おい！何か数名いなくなってるぞ！」↑眼が覚めた

トーマ「何！？」↑眼が覚めた

――ドォォォォォォォォオオンンッッ！！↑ブラックウォーグレイモンの＜ガイアフォース＞

――ビクッ↑全員起床

大「あの野郎！何勝手に闘ってんだぁ！俺も混ぜろぉぉおおっ！！」↑走る

アグモン「兄貴～！」↑追い駆ける

トーマ「ま、大！？」

淑乃「あぁもう・・・最悪なんですけど・・・」

ララモン「いつもの事でしょ？」

６８話：説明という名の会議（前書き）

今回は馬鹿な拓也がやりそうな事をやっちゃいますっ！

――ブチィッ

おや？

今変な音が聞こえたような気が・・・。

まぁ、とりあえず６８話、参ります！

68話：説明という名の会議

「「「「「「説明！」」」」」」

ほとんどの者が眼を覚まし、集合したところで複数の者が口をそろえて、太一達・大輔達にブラックウォーグレイモンについての説明を強く要求した。

「ぅ・・・」

その大声で、太一に背負われていたヒカリが眼を覚ます。

「起きたか？」

太一は背中からヒカリを下ろし、ヒカリは状況を把握する為に周りを見回した。

「あ～、さっきは悪かった。おもわずつい・・・」

拓也が、首筋に一撃して気絶させた事を、ヒカリに謝る。

「え？・・・あ、大丈夫」

ヒカリは思い出したように首筋をさするが、笑顔を向けて頷いた。

拓也はそれを聞いて安心する。

魂広中だった為、力の制御が上手くいったか不安だったのだ。

「・・・ブラックウォーグレイモンは？」

ヒカリは姿が見えないのを確認して、兄に尋ねる。

「はは、今その事で話してたとこ・・・」

太一は皆に詰め寄られた事を思い出し、苦笑した。

「えっと・・・詳しいのはお前らだけど」

太一は大輔に視線を向けるが、先程拓也に説明したように大輔は説明力に劣る。

故に、大輔達の視線が賢と光子郎に向いた。

「「僕ですか！？」」

2人そろって声を上げ、お互いに顔を見合わせる。

「説明力ありそう・・・」

「それだけ！？」

ブイモンの一声に、賢が反応した。

「えと・・・何処から話しましょうか・・・」

光子郎が困ったような顔を浮かべ、パソコンを開いた・・・。

太一達と大輔達のデジタルワールドは同一世界であり、アルケニモンというデジモンの能力によって、１００本のダークタワーを原料に製造されたデジモン。

それがブラックウォーグレイモン。

厳密には、デジモンではなくダークタワーデジモンだ。

１００本で造られた所為なのか少々誤作動があり、ブラックウォーグレイモンは感情を持って生れてきた。

それ故本人は何故造られたのかを疑問に抱き、今まで強き者を倒しながら、自分の生きる意味を探し続けていたと言う。

が、そもそもダークタワーはデジタルワールドにとって異物のような物。

それが１００本集まれば如何なるか、分かったものではない。

次元が歪み、空間が乱れてしまうのが目に見えている。

「あ～・・・それであんな感じに」

拓也は＜ガイアフォース＞が直撃した地面を見た。

そこは若干乱れが見えている。

それに、ブラックウォーグレイモンが通って来たと思われる場所も、同じくだ。

「で、如何すんだ?このまま放っとくのか?」

大が空間を見だすブラックウォーグレイモンを如何するか、皆に問いかける。

「それは困る。大いに困る!」

拓也はブンブンッと首を横に振って、それを拒否した。

「んじゃ、如何すんだ?」

「それは、だな・・・」

拓也も答える事が出来ず、言葉に詰まる。

「空間を乱すって言ったけど・・・データが悪いんですか?」

純平は光子郎に確認するように問いかけた。

「え、えぇ。恐らくそうだと思いますが・・・」

光子郎も断言は出来ないが、大半はそうだろうと頷いておく。

純平はそれを聞いて、その後デジヴァイスを見た。

「ん~・・・。何とかなるかも・・・」

その一言に皆が驚き、本当!?とそこらじゅうから声が上がる。

それに驚く純平だが、何とかそれを説明した。

「ここのデジタルワールドは何でもデータにする。この木とか、地面とか。それは余所から来たデジモンも同じだし、人間もデータに変換される」

「に、人間も・・？」

トーマが思わず両手を見るが、何も変わっていないように感じた。

それを見た拓也が、

「例えば・・・」

魂広して龍魂剣を握る。

「えと・・・回復よろしく」

「「は？」」

苦笑いを浮かべて、アグモン2体にそう言い、拓也は自分の腹に剣を突き刺した。

「おまっ！何して！？」

皆が驚愕の表情を浮かべる中、輝二達5人は拓也の意図を読み取り納得する。

拓也は痛みを無視し、突き刺した剣を更に横へ移動し脇腹を斬った。

――ヴンッ

巨大なダメージが体を襲い、拓也の体から一輪のデジコードが浮かび上がる。

「に、人間からも・・！？」

今まで、デジモンから浮かび上がる事を普通だと思っていた皆は、それを見て驚いた。

「はぁ、はぁ・・驚いているところ・・・悪いんだけど・・・火ぃくれ・・・」

拓也は脇腹を押えて座り込み、荒い息を突きながら呟く。

大と太一がはっとなり、それぞれアグモンに指示した。

「＜ベビーバーナー＞ッ！」

「＜ベビーフレイム＞ッ！」

両者火球を放ち、拓也の傷が回復する。

「サンキュ～。いっや～、やっぱ分かっててても痛ぇな」

「「「「「「「「「「当然だろっ！」」」」」」」」」」

デジモン達も含めて、一斉に突っ込みが入る。

「ま、まぁ、こんな感じに人間もデータに変わるんだ。だから、ま

ずデジコードを直せばデータを直す事と同じだから、それで何とかなるんじゃないか？」

純平は引き続き説明を続け、言い終えた。

「でも・・・誰が直せるの？それ・・・」

ガブモンが首を傾げて聞き返すと、オファニモンかな？と友樹が返答する。

オファニモン？と、ほとんどの者が首を傾げた。

「このデジタルワールドを守護する三大天使の１人だ」

輝二が簡単に説明すると、なるほどと納得する一同。

「あ、そうそう」

泉が思いだしたようにテイルモンに歩み寄った。

「確かね、テイルモンが退化した・・・プロットモンの究極体だったはずよ」

「へぇ、そうなんだ」

ヒカリがそれを聞いて笑みを浮かべる。

「いや、でもだな・・・」

トーマが少し考え、苦虫を噛み潰したような笑みを浮かべた。

「結局は仲間になってもらわないと、無理じゃないかい？」

確かに、いきなり、データを直すからついてきてくれ、などと言って、ブラックウォーグレイモンが言う通りにするとも思えない。

「「「「「「「「「「「「「あ・・・」」」」」」」」」」」」」

複数のメンバーが顔を固めた・・・。

６８話：説明という名の会議（後書き）

※前書きの続きです。

まぁ、とりあえず６８話、参ります！

――ゴゴゴゴ・・！

竜気「何やら殺気が・・・」

拓也「だ・れ・がぁ、馬鹿だってぇぇえええ!?」↑龍魂剣で斬りかかる

竜気「あ、死線越えたね・・・。これ」

２０分後、救急車が道路を走り抜けたそうです。

いつかの災難再び・・・。

２８日まで更新を停止します。

その訳は活動報告の方に・・・。

６９話：取引の末（前書き）

お久しぶりでございます。

２８日復活と言っておきながら、予想よりも早く復活出来ました。

あ、そういえば私って全く計画性がありませんでしたね。

前にもこういう事があったような・・・。

と、とりあえず・・・これからもよろしくお願いしますね。

では張り切って！

６９話、参ります！

69話：取引の末

トーマの発言で、大きな事に気づく一同。

「け、結局はふりだしかいな・・・」

テントモンがどないしましょ？と光子郎に問いかけるが、光子郎も困っている。

健良は、先程から考えていた事を口に出してみた。

「ブラックウォーグレイモンって・・・強い者を探してるんだっけ？なら強い奴と闘えば満足するの？」

「そこは・・・本人次第ですね」

光子郎は答えようが無く、首を傾げる。

「強い者、ねぇ・・・」

トーマは頭を回転させて強者を探していたが、ふいに閃いた。

「こちらの仲間になれば、いくらでも闘えるのだが・・・」

「それにデータも直せる訳ですから・・・奴にとっては一石二鳥ですね」

トーマの呟きにガオモンが続き、皆もあ！と納得する。

「確かにそれなら仲間に誘えるかもな」

太一も確かめるように頷き、大輔にいけるか？と確認した。

大輔も恐らく大丈夫だろうと考え、頷き返して方針が決定する。

ブラックウォーグレイモンは強者を探しているならば、七大魔王という見事な餌があった。

こちらとしても、データを直してこれ以上の歪みを食い止め、戦力を得るという事になる訳だ。

「で、何処行ったんだ？あいつ」

拓也が天を見上げ、ブラックウォーグレイモンが飛び去った方向を眺める。

全員分からない。

「発信器でも付けときゃ良かった・・・」

「そんな物無いよ」

呟く大輔に、ブイモンが鋭く突っ込んで足にアタックする。

い！？とその痛みに堪える大輔を余所に、啓人がカードポーチをあさっていた。

「あっれ～？確かここに入れたと思ったんだけど・・・」

何かのカードを探しているようだが、なかなか見つからない。
遂にはカード全てを取り出して、1枚1枚めくっていく。
「何探してるの？」
ギルモンが興味深げに覗きこみ、啓人の手元を見つめた。
「カード名は？私のとこにもあるかもしれないし」
留姫は自分のポーチを手に、啓人に尋ねるがあった！と啓人が声を上げる。
一体何のカードかと、留姫達が覗き込んだ。
「持ってて良かったぁ」
安心する啓人のそばで、留姫がやるじゃないと笑みを浮かべる。
カード名、＜サーチ＞。
特定のデジモンを探し出す事が可能。
啓人がそのカードをデジヴァイスに通すと、ギルモンの眼が蒼に染まる。
「如何？いた？」
探索中のギルモンに啓人が声をかけたが、まだ見つからないようで首を横に振られた。

２０秒程待った末、ギルモンが声を上げる。

「いた！」

「何処？」

啓人が待ってましたと、ブラックウォーグレイモンの居場所を聞き出す。

「えっとね・・・湖、かな？あ、チンロンモンと闘ってるよ！」

ギルモンの発言に周りの皆も驚愕し、何！？と目を見開いた。

一行は湖へと急行した・・・。

「＜ガイア・・・フォース＞ッッ！！」

――ズドォォォォォォォォォォォンンンッッ！！！

負のエネルギー球を食らい、デーヴァもろともチンロンモンからデジコードが出現する。

ブラックウォーグレイモンは大した事が無かったのか、その場を立ち去ろうとした。

「ちょぉっと待ったぁぁぁあっ！！」

そこへ一行が到着し、大が大声を張り上げる。

泉はデジコードを回収して、皆と共にブラックウォーグレイモンへ向き直った。

「来たか・・・」

ブラックウォーグレイモンはドラモンキラーを構える。

「待てよ！闘いに来た訳じゃないんだ！」

大輔が慌てて声を張り上げた。

ブラックウォーグレイモンは意味が分からず、警戒する。

「あ、えと、何て言うか・・・。何て言うんスか？」

大輔は隣にいた太一に任せた。

「お前なぁ・・・。まぁいいか。ブラックウォーグレイモン！お前、強い奴探してるんだろ！？」

大輔に呆れる太一だが、表情を引き締め直し問いかける。

「そうだ」

ブラックウォーグレイモンは太一の質問に警戒を緩め、構えを解いた。

「ついでに言うと、データを直して欲しくないか！？」

「何・・だと?」

流石のこれにはブラックウォーグレイモンも驚き、如何答えて良いか分からない。

この先は太一も分からないところがあるので、拓也にパスする。

「俺達の知り合いに、データを直せるデジモンがいる。お前の不安定なデータも、正常になるかもしれない。それに、俺達は強い奴の場所も知ってる。如何だ?」

これは取引のようにも見える状況である。

データを直す代わりに、仲間になれと誘っているようなものだ。

ブラックウォーグレイモンはしばし考え、如何するべきか迷う。

データを直してくれるというのは、悪い話ではないし強い奴と闘えるというのも良しとする。

が、仲間になるというのは如何も抵抗があった。

とはいえ、強い奴を探し求め、このデジタルワールドを行き来するのも面倒な話。

「仲間になるというのは承諾出来ん」

拓也もその返答にやっぱりか、という顔をして如何するか考える。

「だが・・・」

完全に拒否されたと思っていたが、ブラックウォーグレイモンの言葉はまだ続いていた。

「その他2つは受け入れる」

その言葉に拓也は少し考えた。

「って事は・・・データは直す。強い奴とも闘う。けど仲間にはならないって事か?」

「そうだ・・・」

如何する?と困り果てた拓也は、頭の回るトーマに問いかけると・・・。

「それでも良いだろう。こちらにもメリットはある訳だ」

トーマの言う通り、データを直せばこれ以上デジタルワールドの空間が歪む事は無い。

敵も倒してくれるというのだから構わないが、仲間にならないという事は敵のままという事でもある。

そこは我慢するとした。

「よし、んじゃ案内する。まずはデータ直しだ」

拓也はブラックウォーグレイモンにそう言い、純平に方角を確認す

る。

「ここから南西に・・・２４０００キロ」

とんでもない数字が叩き出された。

「２４０００!?何で!?」

「何でって・・・ここが北で目指す場所は最南端。それくらいあるだろ」

驚く大の横で、トーマが冷静に答える。

トーマは純平が持っている地図を覗き込んだ。

「２４０００もあるなら、北に行った方が早いね・・・」

「距離は・・・ざっと８０００キロ、こっちの方が断然早い」

純平が大まかに距離を出し、確かめるように頷く。

「おいおい、北って・・・また凍った海の上飛ぶのか!?」

嘘だろとでも言いたげに、拓也が確認を取った。

「はいはい、ゴタゴタ言わずにさっさと進化するっ」

泉に無理矢理デジヴァイスを握られる拓也だが、他の皆も進化し始めている。

全員がいつもの飛行可能のデジモンに乗り、飛翔した。

その後を、ブラックウォーグレイモンが追う。

一同はオファニモンの城へと向かった・・・。

69話：取引の末（後書き）

拓也「またあの寒い所通るのかよ・・・」

啓人「って、進化してるから温かいんじゃ・・・」

拓也「いや、そうでもない。確かに体温高いけどさぁ、それでも周りが寒かったら寒いんだわ・・・」

啓人「そ、そうなんだ・・・」

珍しくこの2人。

理由など存在しません。

っていうか、ブラックウォーグレイモンの性格、こんな感じでしょうか？

かなり不安でございます・・・。

７０話：データ修復（前書き）

はい、１時間前に更新したばかりですね。

暇なんだろ！

と突っ込む人は、ナイスツッコミ精神です。

では・・・おふざけはやめて７０話、参ります！

70話：データ修復

一同はオファニモンの城を目指し、最短距離である道を飛行中。

ブラックウォーグレイモンは最後尾でその後に続いていたが、どの者達も強敵だと悟る。

少しの警戒心を抱きながら、凍った海の上を飛行していた。

「って事なんだけど、良いかな？」

友樹はデジヴァイスの通信機能を使い、オファニモンに連絡を取っている。

『えぇ、構いませんよ。私に出来る事ならば・・・』

オファニモンはそう答え、大丈夫と皆に頷く友樹。

「でもよ、そのオファニモンでも無理だったら・・・如何するんだ？」

大がもしもの時を考えてそう言うが、友樹は大丈夫と笑った。

「その時はその時で、専門家に頼むから」

「専門家？じゃぁ、最初からそいつに頼めば良いだろ」

「ん～でも、ちょっと面倒な所に住んでるから・・・。そこまで行くのにしんどいし」

友樹は苦笑しながら頬をかき、大の問いに受け答えする。

少しすると氷河の海を終え、南の大陸が見えてきた。

それと同時に、オファニモンの城と広大な花畑が視界に入る。

「うっわ、きれ～」

京が思わず見とれていた。

全員城の前に着地し、とりあえず進化を解く。

拓也は重い扉を押し開け、中へ入った。

「来たぞ～！」

積み上げられた本の山を無視し、奥へと進む。

他の皆も本の量に驚きながらも、中へゾロゾロと入って行った。

ブラックウォーグレイモンは警戒して、中に入ろうとしない。

「オファニモン？何処だ～？」

拓也は更に奥の扉を押し開けて中へ入ろうとすると、天上近くの本棚の所にオファニモンの姿を見つけた。

「よく来て下さいました」

オファニモンは手に持っていた本を棚に納め、床に降りて来る。

ヒカリとテイルモンは、オファニモンを見て呆然としていた。

（究極体だとこうなるんだ・・・）

ヒカリはそう心の中で呟くが、進化系統は幾つにも道筋がある為、オファニモンになるとは限らない。

「それで、データを直す方は・・？」

オファニモンが拓也に問いかけると、ブラックウォーグレイモンが進み出た。

「俺だ・・・。出来るのか・・？」

「分かりませんが・・・失礼しますよ」

ブラックウォーグレイモンが確認すると、オファニモン手をかざしデジコードを出現させる。

ブラックウォーグレイモンのデジコードは、漆黒に染まっていた。

オファニモンが本棚に手を伸ばすと、１冊の本がスッと浮かび上がりオファニモンの手に収まる。

本の内容と照らし合わせながら、デジコードの状態を確認し、

「はい、出来ますね」

オファニモンがそう答えると、一同はホッとした顔になった。

「拓也さん、デジヴァイスをお借りできますか？」

「デジヴァイス？いいけど・・・」

拓也は意味が分からないまま、ポケットからデジヴァイスを取り出し手渡す。

「他の方も出来れば」

「ん？俺達もか」

輝二達もデジヴァイスを差し出し、オファニモンの周囲を浮遊した。

デジヴァイスから大量のデジコードが伸び、球体となる。

その光景を見て、思わずケルビモンを思い出す６人。

「究極体でウイルス種となれば、数は絞られますが・・・」

オファニモンは、ブラックウォーグレイモンと同種族のデジコードだけを抜き出す。

「良かった、足りますね」

残ったデジコードをデジヴァイスに戻し、拓也達に返した。

「少々痛みますが、堪えて下さい」

オファニモンは漆黒のデジコードを手に集め、それと入れ替えるように同種族のデジコードを植え付ける。

ブラックウォーグレイモンは今までと違うデータに顔を歪めるが、苦痛の声は上げない。

すり替わるようにデジコードが変わり、移植が終える。

「はい、終了です」

オファニモンは漆黒のデジコードを圧縮し、遂には消滅させた。

ブラックウォーグレイモンは、特に体に変化は無かったものの気分は良かった為、終わったのだと確信する。

「あっけな・・・」

大が思わず声を漏らし、首の後ろで腕を組んだ。

「デジコードの方は終わりましたが、デジコアがまだです。と言っても、私では出来ませんので他を当たって下さい」

オファニモンはブラックウォーグレイモンと拓也達にそう言い、本を戻す。

「あ～、やっぱデジコアまでは無理だったか・・・」

拓也はやっぱりという顔をし、頭をかいた。

「すいません」

オファニモンは苦笑してそう言うが、ここまでしてくれて文句がある訳もなく拓也は礼を言う。

「次は何処だ・・？」

ブラックウォーグレイモンがそう聞くと、拓也は少し考え、宇宙、と答えた。

「宇宙・・？」

「正確には月だ。さぁてもうひとっ走りするか！」

拓也は屈伸して城の外へ向かう。

「おい、拓也！宇宙って・・・月って如何いう事だ！」

大が意味分からんと叫びながら、拓也の後に続いていく。

皆も外へ飛び出し、ブラックウォーグレイモンは外へ出る直前で立ち止まった。

オファニモンが如何したのかと、ふと視線を向ける。

「・・・礼を言う。助かった」

ブラックウォーグレイモンは静かに呟き、背中の外殻を広げて飛び立った。

オファニモンは小さな笑みを浮かべ、どうもと軽く会釈した・・・。

「で、月って言うのは？」

「そのまんまの意味だ」

大の問いに拓也が答え、会話が一向に進まない。

それを見かねたトーマが、質問の形式を変えて拓也に改めて確認した。

「そのままの意味という事は、その専門家とやらは月にいるのかい？」

「おう」

「月、か・・・。如何やって行けば・・・」

トーマはまだ太陽が照っている大空を見上げ、考える。

「そんなややこしい事考えなくても、飛んできゃ良いじゃねぇか」

大が拳を握ってそう言うと、多くの者から呆れた視線が飛んできた。

「大・・・。宇宙には空気が無いんだぞ？如何やって飛んでいくんだ？」

「あ・・・」

トーマが額に手を当てたまま問いかけると、大は思わず硬直する。

「あ～いや、そんな心配は必要無いから」

拓也が説明し忘れたのを思い出し、トーマに違う違うと手を横に振った。

「ここのデジタルワールド、宇宙でも空気があるんだよ」

その言葉を聞いて、多くの者達が驚愕する。

「さ、流石デジタルワールド・・・。人間界の常識が崩れるな」

丈が眼鏡をかけ直しながら、苦笑した。

少し遅れてブラックウォーグレイモンも外へ出てきた為、一行は再び飛行のグループになり、天へ飛び上がる。

ただし、今は昼なので方向を変えなければならない。

太陽に背を向け、紅い月へ飛び立った・・・。

70話：データ修復（後書き）

次は月へ、何ですが・・・。

分からん！

ブラックウォーグレイモンの性格、こんなんだったっけ！？

くぅぅ・・・難しい奴ですな・・・。

おかしな所があれば、是非注意して下さい！

71話：専門家の騒動（前書き）

71話、参ります！

71話：専門家の騒動

一同は3つの月の1つである、紅い月を目指して宇宙を飛行中だった。

「あれ、何だ？」

大が何かに気づいて立ち上がり、少し向こうの宇宙空間を指差す。

デジタルワールドの大気圏付近から、3つの月に向かって青い川のような物が流れていた。

よく見ると中央で半分に裂けており、月へ流れる川とデジタルワールドに流れる川の2本が目視出来る。

「電磁ストリーム」

輝二が一言で答えたが、余所から来た者達が分かる訳も無く、首を傾げた。

「如何いう川かって言うと・・・」

輝一は立ち上がり、断罪の槍を電磁ストリームへ投じる。

――バチィィッ！

断罪の槍は川に突入する直前、電気のような物に弾かれ輝一のもとへ物凄い速さで戻った。

「っと・・・」

デジタルワールドの宇宙は、重力はあるにはあるが少ない為、こんな風になってしまう。

「まぁ、生身の人間だったら即死じゃないか？」

輝二はさも他人事のようにそう言い、如何でもよさそうに電磁ストリームから視線を外した。

‘即死’という単語に人間達は息を呑み、電磁ストリームを見つめる。

「でもあれに入ると早いんだよね～」

友樹が、ねぇねぇ入らない？と冗談半分でエンシェントグレイモンに話しかけた。

「別に構わんが・・・」

やはりスピリットの影響か、口調がいつもと違う。

泉が、殺す気？と嫌そうな顔をしたが、別に輝二達は魂広や同調で防御力を上げれば問題無い訳で、むしろ純平にとって電気はありがたい。

俺はいいけど、と他人事な純平。

それを聞いて、黙っててっ！と泉がキッと睨む。

ビクッとする純平だが、輝二と輝一は泉の睨みを始めて見たような気がして、顔を見合わせていた。

「電磁ストリームに入りたい人、いますか～？」

友樹が皆に確認すると、遠慮すると苦笑しながらトーマに返されてしまう。

だよね、と友樹も苦笑いを浮かべた。

仕方なくそのまま飛行を続ける一同だが、ギルモンが急に本能をむき出しにして威嚇を始める。

「グルルル・・！」

「如何したの？」

ギルモンの視線の先を追うように、啓人がデジタルワールドの方を見た。

何？と、留姫も気になってそちらを横目で確認する。

「あ、ギズモン！」

「宇宙まで来るなんて、しつこいわね」

啓人と留姫の声が聞こえたのか、皆飛行を止めて振り返った。

ＸＴの群れだ。

それを視界に入れるや否や、ブラックウォーグレイモンは負のエネルギーを集束し、

「＜ガイア・・・フォース＞ッ！！」

一気に群れへと放つ。

1体のギズモンに直撃したかと思うと、宇宙空間だからか凄まじい衝撃波が吹き乱れ、周囲のギズモンを一掃した。

数体残ったものの、インペリアルドラモンの砲撃で撃墜する。

「何しに来たんだ・・？」

呆気なく終わった戦闘に、思わず大が倒されたギズモンを見て呟いた。

デジコードはエンシェントグレイモンが呑み込み、一行は何事も無かったかのように月へ向かう。

（僕達が離れている間に、何も起こらなければ良いんだが・・・）

トーマがデジタルワールドを心配して、心の中で呟いた。

その後は何事も無く、無事に月へ到着する。

地面が紅い光を放っているというのは、如何も不気味であった。

「ここら辺だったよなぁ？」

拓也は近くの岩をコンコンッとノックしながら、輝二達に確認する。

「そのはずなんだが・・・」

輝二も周囲の岩を見て回り、怪訝な顔をした。

「何探してるんだ？」

大が周りの岩を見ながら、ずっと何かを探している6人に問いかける。

「そこら辺の岩で、変な物無いか？それ探してるんだけど・・・」

拓也は岩を叩いた後、次の岩へ移った。

まさか移動したとか？と輝一が疑問を投げかけると、

「あのクソジジイ・・！」

と、拓也が近くの岩を殴る。

因みに同調はしていなかったものの、怒りで中和されたか如何かは知らないが、手は痛くなかった。

「あ！あったあった！」

少し遠くの岩を調べていた友樹が、声を張り上げる。

皆がそちらへ向かうと、確かに一風変わった岩がそこにあった。
岩の形をしているが、表面が如何見ても周りの物と違う。
「お、これこれ！」
拓也はナイスと友樹にサムズアップし、泉に任せた。
泉は岩の前で同調して攻撃力を上げ、
「はぁっ！」
回し蹴りを放って、岩を突き飛ばす。
地面にポッカリと大きな穴が開いており、ヒンヤリとした空気が流れてきた。
階段が下へと伸びており、穴の淵にベルがぶら下がっている。
――チリンチリン・・・
「お～い！いるか！？」
拓也はベルの鳴らし、階段を少し降りて声を張り上げた。
「どうぞ～・・・」
奥から小さな声が反響して聞こえ、誰かいる事を確認する。
拓也は手招きしてブラックウォーグレイモンと共に、月の内部へと

入って行った。

「よぉ、久しぶ・・・り？」

拓也は地下の研究室のような所に入り、手を上げてあいさつしたのだが、地下内の状況に顔を固める。

奥に人型のデジモンが試験管や何やらで研究中だったのだが、その試験管の中に入っている液体は怪しい光を放ち沸騰していた。

一瞬で悟った。

爆発寸前だという事を・・・。

「やべ・・・。戻ってくれ！何か拙い！非常に拙いっ！」

拓也は、降りて来るブラックウォーグレイモンに戻るよう叫ぶ。

その直後、研究室内で爆発が起こった。

――ズドォォンッ！！

「おわっ！？」

「ッ！？」

爆風が地下を駆け巡り、人間である拓也は床に手を突いて爆風に耐える。

風がおさまった為、服のほこりをはたきながら拓也は立ち上がり、

奥で倒れている人型のデジモンに駆け寄った。

「・・・・・・。アウトだな」

眼を回して倒れているデジモンを見ながら、頭を抱える拓也。

そのデジモンの下に巨大な本が開かれており、頭上に2つの石が浮遊していた。

赤紫の布を纏い、その上に頭から白い布を被っている。

ワイズモン

完全体。魔人型。必殺技は＜エターナル・ニルヴァーナ＞

この者が直すのか、と不安を抱くブラックウォーグレイモン。

「お～い、起きろ～」

拓也はワイズモンをガックンガックン揺らして、強引に叩き起こす。

ワイズモンは、はっと黄色い眼を開けて立ち上がった。

「これはこれは・・・申し訳無い。つい実験に夢中でした」

「そりゃいつもの事だろ・・・」

ワイズモンが散らばった本をあらかた集め、机の上に積み上げる。

「にしてもお久しぶりですね。ご用件は何でしょうか・・？」

砕け散った試験管を片付けながら、ワイズモンは拓也に問いかけた。

「今回は頼みがあって来た」

拓也はそう答え、ブラックウォーグレイモンを見る。

ワイズモンは頭上にクエスチョンマークを浮かべ、新たな試験管を用意していた・・・。

71話：専門家の騒動（後書き）

大「な、何だ今の爆発」

輝二「・・・自爆したな」

泉「拓也ドンマイねぇ・・・」

友樹「巻き込まれたね、完全に」

輝二達以外「・・？」

72話：取引成立（前書き）

72話、参ります！

72話：取引成立

「デジコア修復？これまた珍しいですね・・・」

ワイズモンは軽く驚いたように、拓也とブラックウォーグレイモンを見比べる。

やりがいがある、とでも言いたげにワイズモンは頷き、ふむふむと本の内容を確認した。

「修復出来るのは出来ます」

ワイズモンの一言に、おしっと拓也が拳を握る。

「ですが、かなりの激痛を伴いますよ？」

「構わない・・・」

ワイズモンが厳しい顔をするも、ブラックウォーグレイモンは動じずに答えた。

デジコアはデジモンにとって命の次に大切な物、否、命と同等の価値がある物だろう。

それ程貴重な物を修復出来る、というのが半ば信じられない拓也だが、ワイズモンの知識は折り紙付きだ。

そこは信用して良い。

「頑張れよ」

拓也はブラックウォーグレイモンに軽く手を振り、地上へ戻る為階段を上った。

「如何だった？」

出て早々に、太一が不安な顔をして確認を取る。

「直す事は出来るそうです。激痛付きですけど・・・」

苦笑いしながら、拓也は太一にそう返した。

‘激痛付き’という言葉に、太一もだろうなと納得する。

「はい、では失礼しますよ」

ワイズモンはブラックウォーグレイモンに手をかざすと、漆黒の球体が出現した。

恐らくこれがデジコアだ。

完全に黒に染まってしまっている。

時間がかかりそうだと考えるワイズモンだが、ブラックウォーグレイモンはデジコアを外に出しただけでも苦痛を抱いた。

普段外に出さないデジモンが、いきなり外に出せば痛みを覚えるの

も当然だろう。

「始めますよ・・！」

ワイズモンの周囲を浮遊していた2つの石が動きを止め、輝き始めた。

「ぐ・・！」

ブラックウォーグレイモンは突然の痛みに思わず膝を突き、右手のドラモンキラーを床に突き刺す。

体中の神経が、剣で斬り裂かれるような感覚。

腹の奥底から沸き上がって来る、沸騰するような熱い激痛。

「がっ・・！」

かと思えばスッと寒気が走り、直後身を貫く痛みが全身を走った。

「まだ・・・終わらないのか・・！」

あまりの苦痛に、ワイズモンに問いかける。

「これで半分です。我慢して下さい」

漆黒の部分が徐々に青い、正常のデジコアへと変化していった。

まだ半分かと諦める反面、後半分だと自らを鼓舞すブラックウォーグレイモン。

痛みが少しずつ引いていき、遂には感じなくなった。

「終了です。デジコア修復、完了しました」

ワイズモンの声を確認し、ブラックウォーグレイモンは立ち上がる。

先程までそこにあった漆黒の球体はすでに無く、青い輝きを放っていた。

デジコアは静かに戻り、ブラックウォーグレイモンは息が軽くなったような感覚を覚える。

「・・・礼を言う。助かった」

「いえ、デジコア修復なんて貴重な体験、滅多に出来ませんからね。私も勉強になりました」

ワイズモンがそう返すと、緊張の糸が切れたように再び石が浮遊し始める。

ブラックウォーグレイモンはワイズモンに背を向け、地下を去った。

「お、終わったのか」

上がって来たブラックウォーグレイモンを視界に入れると、良かったなと拓也が声をかける。

「世話になった・・・」

一言静かに呟き、ブラックウォーグレイモンは外殻を広げて飛び立った。

「待てよ！」

太一がそこへ声を張り上げ、ふとこちらを見るブラックウォーグレイモン。

「本当に仲間になる気は無いのか？」

「・・・無い」

ブラックウォーグレイモンの答えは変わらず、否定の言葉が返ってきた。

すると、思わぬ事に拓也が知らない情報を口にする。

「中央神殿の地下、そこに強い奴がいるはずだ」

取引の１つである、強い者の居場所を教えるという条件がこれだ。

ブラックウォーグレイモンはそれを聞き、デジタルワールドへと飛び立つ。

「拓也、お前何でそんな事知ってんだよ」

大が首を傾げながら、拓也に確認を取った。

「ほれ、俺ってさ神殿の所で暴走してたんだろ?そん時にな、若干力を感じたんだよ。神殿の下からな」

「んじゃ何でそれを教えてくれなかったんだよ」

「んなもん決まってるだろ」

拓也の返答に、クエスチョンマークを幾つも浮かべる大。

他の皆も分からない者達が多かったが、分かる者は予想していた。

「自信が無かった。以上!」

――ズルッ

変な所で締まる拓也に、大は思い切りずっこけた。

「お前なっ!」

「何だよ」

ムッと言い返す拓也に、言葉を返す気にもなれない大であった。

こいつは・・!と頭の中では怒りながらも、それを抑え込む自分と爆発させたい自分が争っている。

「んじゃ、神殿へ!」

頭を抱え込む大の隣で、デジタルワールドを指差す拓也。

あまりにも対照的な光景に、周りの者達は苦笑する者と笑う者に大きく別れていた。

「ここか・・・」

ブラックウォーグレイモンはデジタルワールドに戻り、神殿上空に到着する。

『中央神殿の地下、そこに強い奴がいるはずだ』

拓也の言葉を思い出し、半ば溶けかけている神殿を見下ろした。

「地下・・・」

ならばとエネルギーを集束させ、＜ガイア・フォース＞を放つ。

思わぬ事に、＜ガイア・フォース＞は青色をしていた。

――ドォォォォォォォォォォォォォォォオオオオオオンンンッッ！！

神殿が崩れていき、山肌が顔を出した。

最初は何も無かったが、少し経つと地響きが大地を駆け巡り、岩山の頂上が崩れていく。

黄金の竜が現れた。

それはデジタルワールドの大気圏を抜け、神殿を目視出来る距離まで来た一同にも見えている。

「な、何じゃありゃ！でかっ！」

大が立ちあがって黄金竜を見つめた。

光子郎がすぐさまパソコンを向ける。

「『ファンロンモン。究極体。神獣型。必殺技は＜大極（たいきょく）＞。四聖獣の頂点に君臨するデジモンであり、体はファンロン鉱という特殊な金属で構成されている。必殺技の＜大極＞は、デジタルワールドの光と闇を分断する』・・・」

光子郎の最後の一言を聞き、輝二と輝一が顔を思わず見合わせた。

一行はとりあえず山肌に着地し、進化する。

ブラックウォーグレイモンもこちらに気づいたようだが、視線をそらしファンロンモンに向き直った。

飛べる者達は頂上へ飛翔し、他の者達は駆け上がる。

ファンロンモンは８つの眼を持ち、背中に１２個のデジコアを出現させていた。

ファンロンモン付近まで接近した者達は、自らの武器を構える。

ムクリと顔を上げ、ファンロンモンが周囲の敵を確認した・・・。

72話：取引成立（後書き）

・・・。

ファンロンモンの＜大極＞って、あんな感じですか？

光と闇に分けてデジタルワールドを消滅させるって説明表記されてたんですけど・・・。

うおぃ！

デジタルワールド消滅させて如何するよ!?

って事でよく分からない結果に・・・。

すいません。

通常技の＜黄廻（おうかい）＞もよく分からないですし・・・。

面倒くさいデジモンですねぇ。（笑）

知っている方がいれば、教えて下さい。↑ペコリ

73話：黄竜堕ちる（前書き）

くそぅ、29日のうちに投稿出来なかったかぁ・・・。

などと悔やんでいないで！

73話、参ります！

73話：黄竜堕ちる

「＜ガイア・・・フォース＞ッッ！！」

ブラックウォーグレイモンが、今日何度目かの集束球を放つ。

ファンロンモンに直撃するが、その黄金の体には傷1つつかない。

それは皆も同じ。

「＜ファイナル・・・エリシオン＞ッ！！」

「＜グレイソード＞ッ！！」

「＜バーストショット＞ッ！！」

一斉に攻撃を仕掛けるが、砲撃も剣も、ミサイルさえも効かない。

目に見えるダメージが現れないのだ。

ただし、攻撃もしてこない。

「寝てるんじゃねぇだろうなっ！」

少しずつムカついてきた大が、思わずと言うように叫ぶ。

「流石にそれは・・・」

トーマがそれは無いだろうと考え苦笑いを浮かべるが、そうとしか

思えない程反応しない。

先程ムクリと顔を上げただけだ。

――ズズ・・！

突如、ファンロンモンが立ち上がる。

来るかと身構える一同の前で、ファンロンモンのデジコアが輝き出した。

「＜大極＞・・・」

――ズズズズッ！

直後地響きが鳴り、山が震える。

「ぐ・・！？」

「がっ・・！？」

かと思えば、光の闘士と闇の闘志の進化が溶け、双子2人が苦しみ出した。

（（焼ける・・！））

体が沸騰するのを感じ、2人の体からそれぞれ光と闇が噴き出す。

辺りに広がり、山全体を包み込んだ。

右を光が、左を闇が覆いこみ、相対する。

「何だ！如何なって・・！」

「暴走なの！？」

「いや、そんなんじゃない！」

訳が分からず、混乱する者が多い。

エンシェントグレイモンはファンロンモンを見上げ、目標を定める。

「＜ガイア・・・トルネード＞ッッ！！」

溶岩の渦がファンロンモンを包み込んだ。

「「っぷはぁっ！」」

その直後に双子は、まるで息を止められていたかのように大きく息を吸い、首の所をさする。

「はぁ、はぁ・・あり得ない。何だ今のは・・！」

「息が苦しくて・・・何かが溢れてくるような・・・」

輝二と輝一は顔を見合わせ、何とか息を整える。

その2人にトーマと淑乃が駆け寄り、背中をさすった。

「がはっ、げほっ」

輝二はせき込み、口に手を当てる。

「体調が悪いのか・・？」

トーマは、さっきまで何も無かったのにと不思議に思いながら、輝二とファンロンモンを交互に見比べた。

「ッ・・！」

――ドサッ

「ちょ、ちょっと！？」

トーマがバッと振り返ると、輝一の方も苦しそうに膝を突いている。

淑乃が慌てて肩を組んでいた。

この2人の体調が急に崩れたのは、十中八九＜大極＞の所為だ。

「ぁ・・・」

トーマの足元で膝を突いていた輝二が、小さく声を漏らした為視線を戻す。

輝二の右手には血が付いていた。

「おいおい・・・吐血か・・！？」

トーマが心配する中、輝二は右手にリヒト・シュベーアトを握る。

驚くトーマを余所に、輝二は光剣を支えに立ち上がった。
対する輝一も、槍を地面に突き刺して体を起こす。
それを見た4体の十闘士は、進化を解いた。
「あり?何でお前ら進化解くんだよ」
大が怪訝な顔をして、拓也に尋ねると、
「まぁ・・・日頃大人しい奴が怒ると、恐ろしいって事だな」
1人納得するように拓也は頷いた。
「いきなり技を使ったかと思えば・・・」
「光と闇を分断させるとはな・・・」
輝二と輝一が静かに呟き、右手にデジヴァイスを握った。
左手にデジコードが交差して出現する。
「「腹が立つ事この上ない・・!!」」
2人同時にデジヴァイスでスキャンした。
「「クロススピリット・・・エボリューションッッ!!」」
2人が巨大なデジコードに包まれた為、近くにいたトーマと淑乃が

慌てて距離を取る。

「ガイオウモン！」

漆黒の鎧と、白銀の妖刀を握る武者が現れた。

ガイオウモンは2対の菊燐を構え、ファンロンモンの正面に肉薄する。

「＜燐火斬＞ッ！！」

菊燐に闇のオーラが纏われ、剣の軌跡が刻まれた。

ファンロンモンは顔面にそれを食らい、思わずのけ反る。

が、ガイオウモンの攻撃はそれだけに留まらず、妖刀を交差させ重なった部分に闇と光が集中した。

「＜ガイアリアクター＞ッッ！！」

――ドゴォォォォォォオオオンンンッッ！！！

正面からもろに直撃する。

――ズゥンッ！

ファンロンモンの巨大な体が崩れ左前脚が1歩退いたのだが、それだけで山が揺れる。

それを見て後少しだと考えたブラックウォーグレイモンは、天へ両

手を挙げエネルギーを集束させた。

ガイオウモンも少し距離を取り、菊燐の柄を合わせて弓を作る。

光で矢を作り、弓につがえた。

「＜ガイア・・・フォース＞ッッ！！」

「＜燐火撃＞ッッ！！」

青いエネルギー球と、光り輝く矢がファンロンモンに直撃する。

――ズズゥンッ・・！

今度は低い地響きが聞こえたかと思うと、ファンロンモンが山頂に崩れていた。

浮かび上がったデジコードは、ガイオウモンの菊燐に吸い込まれる。

ガイオウモンは進化を解き、双子に戻った。

「俺・・・輝二とはよく喧嘩するけど、輝一は怒ったところ初めて見た・・・」

拓也が半ば放心状態で呟くと、泉達もコクリと頷く。

「血を吐くとか・・・最悪だ」

輝二は不機嫌そうに口を拭い、ボソリと呟いた。

輝一は喉をさすって、息が出来るか再度確認している。
デジモン達も進化を解き、集合した。
「何か苦しそうだったけど・・・どんなだった?」
太一が苦笑いを浮かべながら2人に確認すると、輝二と輝一は顔を見合わせ喉に手を当てる。
「「息が苦しい」」
一言、簡潔に答えた。
それを聞いた一同は、思わず自分もそうなった時の事を想像してしまう。
顔を青くする者が相次いだ。
「何も想像しなくても・・・」
それを見たガオモンが、思わずそう言う。
「つ、次は何処だ?」
これ以上想像するのも如何かと考え、拓也が話題を変えようと純平に問いかけた。
「もともと居場所の分かる奴から倒していって、もう分かっている敵がいない」

「そ、そうだった・・・」

拓也は思い出したように肩を落とす。

「古代聖獣型デジモンなら、分かるかもよ」

泉がふとそう言い出した為、拓也が何!?と顔を上げた。

「古代のデジモンなら、オニスモンが知ってそうじゃない?」

「オニスモンが?」

拓也はそうなのか?と大を見るが、大に答えられる訳も無く首を傾げるだけだった。

トーマがふと見上げて確認すると、ブラックウォーグレイモンの姿は何処にも無い。

(まさか、別のデジモンの場所へ行ったのか・・?)

そうなると、ブラックウォーグレイモンは居場所を知っているという事になる。

もしくは、本人も分からないが気配で探している、という可能性もあった。

別に敵を倒してくれる事が、こっちにとって困る事では無いのだが、放っておく気にもなれない。

そんな感情だ。

1人深く考え込むトーマを余所に、一同の中で話が進んでいた・・・。

73話：黄竜堕ちる（後書き）

ふと思ったのですが・・・。

技名に＜ガイア――＞っていうの多いですよね。

この話だけでも3種類出てますよ。

ブラックウォーグレイモンの＜ガイアフォース＞。

エンシェントグレイモンの＜ガイアトルネード＞。

ガイオウモンの＜ガイアリアクター＞。

・・・。

デジモンの技名って、結構適当なんですかね・・・。↑今更そう思うようになって来た

７４話：過去の因縁（前書き）

タイトル、特に気にしないで下さいね。

７４話、参ります！

７４話：過去の因縁

「ミミ、オニスモンと出会った場所って、何処だっけ？」

パルモンが首を傾げてミミに確認するが、う～んとミミも考え込み、

「分かんない」

結局はこの返答だ。

「オイラの記憶が正しければ、同じ大陸内だったはず！」

ゴマモンがやけに自信たっぷりの表情で、丈を見上げる。

珍しい！と丈が驚いたような顔をした為、何だよ～！とゴマモンが拗ねた。

「お、正解。同じ大陸だ」

地図を見た純平がそう言うや否や、エヘンッと胸を張るゴマモン。

「・・・まぐれかいな？」

「違う！」

テントモンの一言に、素早く反応するゴマモンである。

「こっちで解決するから、話を進めてくれ」

丈は苦笑しながら先を促した。

一同は向き合い、場所の確認を始める。

「今がここで、オニスモンと会った場所がここ・・・」

純平が地図を広げて指差していたが、ふと考えなおした。

「オニスモンがまだそこにいるという保障は、無い・・・」

小さく呟いた純平の言葉に、皆が肩を落とす。

「だ～！面倒くせぇな！いっその事呼べば早いじゃねぇか！あいつ困った時は呼べとか何とか、言ってた訳だしっ」

大が頭をかきむしって、思っていた事をぶちまけた。

「でもなぁ、居場所を聞くだけの為に呼ぶっていうのも・・・」

「第一、如何やって呼ぶんだ？」

太一が納得のいかない顔を浮かべ、ヤマトはそもそもの問題に気づく。

だが次の瞬間、一同が立っている地面に巨大な黒い影が差した。

「あ、ごめん。もう呼んじゃった」

泉が悪かった？と困った様子でそう言い、手を合わせてごめんと謝る。

「は?え?呼んだ?如何やって!?」

拓也は頭上にオニスモンがいるのを確認し、混乱しながらも泉に問いかける。

すると、泉ではなくオニスモンが答えた。

「風の知らせだ。風とは便利でな、遠くにいてもいつかは辿り着く。それが操られた物ならば尚更にな・・・」

淡々と説明するオニスモンだが、泉を除く一同は唖然としていた。

こうも簡単に問題が解決するとは思っていなかったからだ。

「やっぱでけぇ・・・」

大空を舞うオニスモンを見上げながら、大のアグモンがポカ~ンと口を開けている。

「ってそうだった・・・。オニスモン、古代聖獣型デジモンの居場所って分かるか!?」

拓也が用件を思い出し、声を張り上げてオニスモンに問いかけた。

「旧友の事か?知らんな、私が蘇ってから一度も会っていない」

オニスモンはそう答えるが、光子郎は今の言葉で確信する。

絶滅したデジモンを七大魔王はわざわざ蘇らせ、自分達の配下にし

ようと考えたのだ。

ならば、生き残っていた古代聖獣型デジモンも、操られている可能性が非常に高い。

「旧友か如何かは知らんが・・・。これも風の知らせで聞いたのだがな、命の里が襲撃されていると聞いた」

「命の里？・・・始まりの地か！」

オニスモンの言葉に、拓也はあそこが！？と驚愕する。

「そいつは拙い！非常に拙いっ！」

「始まりの地か命の里だか知らねぇが、如何いう所なんだ？」

慌てる拓也に、大が確認を取る。

「幼年期のデジモンが育つ場所だ！」

「いぃ！？そりゃ拙いだろ！？」

ようやく危険さを理解した一同は、すぐに向かう為進化しようとした。

「よければおくるが？」

オニスモンは山肌に着地し、体勢を低くして乗りやすくする。

「マジか！そいつは助かるっ」

人間チームはオニスモンに乗り込み、デジモン達は進化したインペリアルドラモンに飛び乗った。

これで大勢を運ぶ事が出来る。

2体は物凄い速さで、始まりの地へ急行した。

――ブォンッ！バサッッ、バサバサッッ！

インペリアルドラモンが着地し、オニスモンが速度を落として舞い降りる。

「木ぃ！？」

「でか・・・」

「巨木・・！」

始まりの地にそびえ立つ、何百年何千年と育ち続けたあの巨大な木を見上げ、それぞれが唖然とした。

そん中、巨木に見慣れていた拓也達はオニスモンに礼を言う。

「ありがとうな、おかげで短時間でこれた」

「これで借りは返したぞ。が、私の力が必要とあらば、また訪れよう」

「おう。そん時はよろしく頼むぞ」

オニスモンはその大きな翼を広げ、天へ飛び立った。

「お～いるいる。古代聖獣型デジモン発見！」

単眼鏡を取り出して巨木の方を眺めていた太一が、声を張り上げて皆に伝える。

「数は・・・たぶん究極体の奴が2体！」

推測ではあったが、細かいところまで知らせてくれた。

「おっしゃ！行くぞアグモン！」

「おう！」

お決まりの如く大とアグモンが飛び出し、敵の陣地へと走り出す。

トーマが呆れながらも、ガオモンと共に続いた。

一同も巨木の根元へ急ぎ、ある者は走りながら進化し、ある者は一度止まって進化後に力を集束させる。

その間にある程度まで近づいた光子郎が、パソコンを開いてデータを読み取った。

「『ディノタイガモン。究極体。古代獣型。必殺技は＜ハイランドファング＞。弱肉強食の闘いに勝ち残り、極少数の個体のみ進化出

来る貴重な存在。大地の金属成分を体内に取り込んでおり、全身に硬質化されている』・・・」

光子郎が読み終えた直後、もう1体のデジモンを見て伊織と丈が声を上げる。

「「あぁ！あのデジモン！」」

その指差す先には、恐らく海老と思われるデジモンがいた。

興味本意で啓人がデジヴァイスを向ける。

「『アノマロカリモン。完全体。古代甲殻類型。必殺技は＜スティンガーサプライズ＞。食欲旺盛で、餌をよく溜めこむ性質を持つ』・・・餌って」

何が餌となるのか、思わず想像してしまった啓人は顔を青くした。

「また、ですね・・・」

「そのようだね・・・」

伊織と丈は何か思い出したのか、顔を見合わせてため息を吐く。

人それぞれ過去に何かあるものだと考え、一同はその2体に向き直った・・・。

７４話：過去の因縁（後書き）

今週、厳しいです・・・。

かなり厳しいでございます。

月曜日まで普通に投稿出来るか如何かも怪しいです。

土日は旅行に行く（らしい）ので、予約投稿で補う（はずの）予定です・・・。

75話：戦闘は静かに（前書き）

75話、参ります！

75話：戦闘は静かに

「何が‘古代聖獣型デジモン’だ！古代系なら何でもありじゃねぇか！しかも全然サプライズじゃないわぁっ！」

拓也が古代甲殻類型であるアノマロカリモンの攻撃、＜スティンガーサプライズ＞を避けながらウダウダと愚痴を叫び散らす。

「うるせぇ！黙って闘えよ！」

流石にカチンと来た大が、思わず怒りの声を飛ばした。

「知るか！っていうか大も人の事言えないだろ！」

拓也は立ち止まって龍魂剣の剣先を大に向ける。

「う、うっせぇな！つ～か後ろ後ろっ！」

大が慌てたように拓也の背後を指差した為、は？と振り返る拓也。

そこへ、アノマロカリモンが容赦無く爪の刃で斬りつけた。

――ザクッ

「おわっ！？」

間一髪で避けた為、刃は地面に突き刺さりめり込んでしまう。

「あっぶな・・・」

ヒヤリと冷や汗を流す拓也に、アノマロカリモンが追撃を仕掛けた。

「＜スティンガーサプライズ＞」

アノマロカリモンは自由自在に両手の鉤爪を操り、拓也に迫る。

「いらっしゃ～い♪」

が、拓也はニヤリと笑ってそれを受け入れ、動こうとしない。

――ブチィッ

直後、何かが切断されるような音と共に、アノマロカリモンが体をねじらせながら呻きを上げる。

「尻尾、取ったぞ」

苦しむアノマロカリモンの背後から、輝二が光剣を手に現れた。

見ればアノマロカリモンの立派な尻尾が、見事に切断されている。

尻尾に毒でもあれば面倒なので、先に斬るという対処法をしておいた。

「・・・容赦無いだぎゃ」

呻くアノマロカリモンを見ながら、小さな声でアルマジモンが呟き伊織がそれに頷く。

尻尾を斬るという過激な方法に、顔を青くしている者も少なくない。

「後は、攻めるだけだ！」

拓也は大きく跳び上がり、アノマロカリモンの背中に着地した。

尻尾は斬り落とし、爪も届かない絶好のポイント。

思う存分攻撃可能である。

「こ・れ・で・・・如何だぁっ！」

龍魂剣に炎を纏わせ、アノマロカリモンの甲殻を抜けて突き刺した。

アノマロカリモンは大きくのけ反ったかと思うと、力無く倒れデジコードを出現させる。

おしっ、と拳を握る拓也はデジヴァイスでスキャンした。

が、その直後拓也の立つ地面に巨大な影が差す。

「避けろぉっ！」

「は？」

大の怒鳴り声が聞こえ振り向く拓也だが、スキャンしていた隙を狙ってディノタイガモンが跳びかかっていた。

遅い。

誰もがそう悟り、無残にも鋭利な鉤爪は振るわれる。

（しまっ――）

――ガキィンッ！

拓也の瞳に剣士が映った。

「馬鹿が！後ろを見ろと言っているだろう！」

いつの間にか進化していたエンシェントガルルモンが、速さを活かしてディノタイガモンの前に立ちふさがっていた。

「馬鹿って言うなぁぁあっっ！！」

拓也は怒りの矛先を何故かディノタイガモンに向け、顔面を思い切り蹴り飛ばす。

魂広していたとは言え、ただの蹴りだと言うのにディノタイガモンは態勢を崩した。

その隙に2人は距離を置き、難を逃れる。

「無事か！？」

大がシャイングレイモンと共に駆け寄り、拓也に問いかけた。

「・・・おう」

拓也は低い声で、いかにも機嫌が悪いという感じである。

それを聞いた大は訳が分からず苦い笑みを浮かべ、何故怒っているのか尋ねた。

エンシェントガルルモンは笑みを浮かべ、ディノタイガモンに斬りかかる為駆け出す。

シャイングレイモンも同じく炎を集中させ、火炎を放った。

「――って言われたからだ・・・」

「何だって？」

最初の声が小さかった為、拓也の声が聞き取れない大。

――ブチィッ！

「い・・・」

何かが切れたような音が響き、大が苦虫を噛み潰したような顔をする。

「馬鹿って言われたからに決まって――」

大きな声で怒鳴り散らす拓也の顔面に、泉の蹴りが直撃した。

「やかましいっ！」

「げふっ！？」

「あ～・・・」

その光景を呆然と眺めている大だが、その間に戦闘が終了する。

エンシェントガルルモンがデジコードをスキャンし、シャイングレイモンと共に進化を解いた。

肝心の拓也は、泉の蹴りにて眼を回している。

「・・・拳で黙らせる方？」

大が思わず泉に問いかけると、コクリと頷き返す泉。

何を思ったのかは知らないが、２人は意気投合してサムズアップした。

輝二と大のアグモンは顔を見合わせ、アグモンはニカッと笑みを浮かべたが輝二は額に手を当てて呆れる。

――バキュゥンッ

「ッ！？」

「何だ！」

「敵襲か！？」

突如一同の近くにレーザーが着弾した為、全員が天を振り仰ぎ太陽光を遮る複数の影を目視した。

この時を狙ってか偶然か、ギズモンＮＴが数十体接近してくる。

「ＮＴ！？」

「しかも数が・・！」

「拙いな・・・」

太一のアグモンと淑乃のララモン、留姫のレナモンがそれぞれ驚き呟いた。

泉は、拓也を気絶させたのは拙かったかと後悔する。

戦力が減ってしまったのが痛い。

「ここへ来たのは、材料の補給といったところか・・・」

トーマが困ったように巨木の方を見つめ、ギズモンを睨む。

ギズモンを作るのにはそれなりのデータが必要とされ、今までに何回もギズモンの大群を送ってきているのだから、データが足りなくなってもおかしくない。

だが、一同が月へ行って留守にしている間に、補給しておかなかったというのも奇妙な話だ。

わざわざ帰って来たところを襲撃する必要は無いだろう。

（まさか・・！）

そこまで考え、トーマは改めて考え直す。

自分達は何も起こっていなかったと思い込んでいるだけで、裏では倉田が何かやらかしていたのかもしれない。

そんなこんな考えを練っているうちに、ギズモン達がすぐそばまで接近し周囲を取り囲んでいた。

「マスター！」

「え、あ、あぁ」

ガオモンの声で、思考の中から引き戻されるトーマ。

「起きてくれないっかな～」

泉が気絶している拓也の服の首根っこを掴み、ため息を吐く。

気絶させたのは自分だろ、と誰もが心で突っ込んだ。

「こりゃぁ・・・厳しいぞ」

完全に包囲されてしまい、太一が冷や汗を流す。

「厳しくても構わねぇ！」

大が右手を握って拳を作り、１体のギズモンに駆け出した。

すかさずレーザーを放つギズモンだが、アグモンが＜ベビーバーナー＞で軌道をずらして外させる。

「おぉおぉおっ！」

――ヴゥンッ

大は思い切り拳を振り切って、デジソウルを出現させた・・・。

７５話：戦闘は静かに（後書き）

きちんと投稿出来ましたぁ。↑安心

今日が文化の日で休日なので、ババッと3話くらい仕上げて・・・で、予約投稿と。

こんなもんですかね。

時間があれば明日も投稿出来るかもしれません。

それでは、この後も７６話を書かなければなりませんので・・・。

失礼しま～す！

７６話：ギズモンの変化（前書き）

分かる方は分かる、あの変化（しんか）です。

と言っても真っ正直に考えないで下さい。

一言で言う、ご都合主義の世界ですので・・・。

では７６話、参ります！

76話：ギズモンの変化

「＜ガイア・・・フォース＞ッッ！！」

「＜ファイナル・・・エリシオン＞ッッ！！」

「＜グロリアスバースト＞ッッ！！」

「＜ポジトロンレーザー＞ッッ！！」

ウォーグレイモン、デュークモン、シャイングレイモン、インペリアルドラモンが一斉に必殺技を放ち、ギズモン1体を確実に撃ち落とす。

初めこそ苦戦していたものの、究極体3・4体ずつに分かれて1体1体を確実に落とすという作戦に変わった。

が、それでも巨木の方のレーザーを防がなければならない為、数は一向に減る様子を見せない。

ギズモン達は恐れを抱かず次々と射撃して来る。

「感情を持たないというのは恐ろしいな・・・」

トーマが歯ぎしりしながら、苦い固唾を飲み込んだ。

完全体チームは必ず5体を目安に動いている。

が、それでも手が足りない。

如何しても隙が出来てしまい、ギズモン達の巨木への攻撃を許してしまった。

――バキュゥンッ！

1発巨木に向けて放たれたが、発射直前にギズモンへシャイングレイモンが体当たりした為、レーザは外れる。

その事に安堵する一同は、再び気を引き締め直して反撃に移った。

運悪く、拓也はまだ眼を覚まさない。

大がガックンガックン揺らして懸命に起こそうとしているが、拓也を更に気持ち悪くさせているようだ。

頭上に星が見え始めているのは気の所為という事にしておこう・・・。

「＜怒涛闇供之舞＞ッ！！」

「＜ダブルクレセントミラージュ＞ッ！！」

レイヴモンとミラージュガオガモンが、また1体撃墜した。

状況を冷静に判断すれば少しずつ減らしているという事に気づくだろうが、巨木の守護とギズモンへの攻撃で手一杯な為誰も気づかない。

「＜アブソリュート・・・ゼロ＞ッ」

「＜ストームゲイザー＞ッ！！」

「＜フリージングブリザード＞ッ！！」

闘士達も天候を操りギズモンを落とす。

が、誰もが思っていた。

これではこちらの気力が持たない、と。

「光子郎、何か手は無いか？」

太一が焦り半分で光子郎に問いかけるが、そうそう都合良く出て来る訳も無い。

光子郎も残念そうに首を横に振り、否定の意を示す。

「トーマは？」

淑乃が念の為に確認を取ると、トーマも首を振って無いと答えた。

「最悪なんですけど・・・」

「全くだ」

日頃から口癖になっている淑乃の呟きに、今回ばかりはトーマも同意見である。

その頃、拓也は夢と現実の狭間にいた。

泉の蹴りの所為か、それとも大の強引な起こし方の所為か頭がクラクラしており、視点も定まっていない。

が、遠くから戦闘をしている音は聞こえた為、早く起きなければと体を動かそうとするが、手が少し動いただけだ。

（早くしねぇと・・・何か、苦戦してる、みたいだからな・・・）

頭ではそう思っているものの、体が動いてくれない。

（泉の奴、思い切り蹴りやがって・・・。仕方ない、あいつ、呼ぶか・・・）

拓也はかすかに動く手に力を集中し、指を地面に潜らせる。

指先から地面の中へと炎を走らせ、遠い場所へと向かわせた。

とある場所。

火山の内部、溶岩の海に沈んでいたデジモンがギラリと目を開けた。

ムクリと静かに顔を上げ、縮めていた体を命一杯伸ばしきる。

溶岩の奥へ奥へと潜り、柔らかい地盤を探してそこを突き抜けた。

（来たな・・・）

少し意識がハッキリしてきた拓也は、眼を開ける。

視点もグラついていたのがだんだんと定まり、普通に見えるようになった。

「おっ、起きたか！」

大が早く立て、と拓也の腕を引っ張る。

「おいおい、起きて早々闘わせる気かよ」

まだ足がふらつくってのに、と文句を愚痴りながらも拓也は龍魂剣を支えに立ち上がった。

「よく起きた。悪いが皆の援護を・・・と、難しいか」

トーマが拓也の状態を見て、考えを改めようとしたが大丈夫と拓也は頷く。

トーマは何が？と聞き返す前に、地震が足元を襲った。

拓也は笑みを浮かべ、頬を叩いて気をハッキリさせる。

皆は地震に戸惑っているが、拓也はこれの正体が何か知っていた。

――ドゴォッ

柔らかい部分の地面から、溶岩に身を包む龍が現れる。
古の孤島の火山で拓也と一戦交えた炎龍、ヴォルクドラモンだ。

「な、何だ!?」

大輔がいきなりの事に眼を丸くし、ヴォルクドラモンを見つめる。

「よぉ!」

拓也は軽く手を挙げて声をかけた。

「む、やはりお主か。炎が来よったぞ」

「届いたってのは安心だな。あの島動いてるらしいから困ったんだけど、まぁ届いて良かった。早速で悪いだけど・・・」

拓也がそう言いかけると、ヴォルクドラモンは分かっているとでも言いたげに頷いた。

「こ奴等の撃墜。違うか・・?」

「はは、あったり~」

拓也の返答を聞くや否や、ヴォルクドラモンはその身に纏う溶岩でギズモン2体を溶かす。

1体は避けられてしまったが、すぐさま熱い液体が包み込んだ。

拓也はヴォルクドラモンの溶岩を体の回復に使い、完全復帰する。

「おぉし、ストレス発散開始ぃっ！」

先程蹴られた恨みもあるのか、そう叫びながら龍魂剣を振るう拓也。

勿論溶岩付きだ。

――ジュォオオッ・・！

機械が溶けるような音を立て、ギズモンが形を変える。

一同は士気を取り戻し、次々と己の武器を振るい敵を撃ち落としていった。

先程までの一進一退の状況が嘘のように反転し、こちら側に勝機が芽生え始めた頃、異変が訪れる。

1体のギズモンがデジコードに包まれたかと思うと、姿を変え装甲を厚くした。

「何だ今のは！」

「進化・・！？」

そのギズモンを相手にしていたエンシェントガルルモンとエンシェントイリスモンが、驚愕の声を上げる。

ヴォルクドラモンが溶岩を浴びせたが、効果が全く無い。

「ふむ、我が溶岩をも弾くか」

生きた年齢からなのか、あまり動揺しないヴォルクドラモン。

「だったらぁっ！」

拓也は溶岩が効かないならばと、剣で斬りかかる。

――ガキィンッ！！

今までの比では無い痺れが、拓也の両腕を走り抜けた。

「かって！」

思わず龍魂剣を手放してしまい、大剣は地面を転がる。

すぐに拾おうとするがそこへ他のギズモンから邪魔が入った為、すぐに回避行動に移った。

「くそっ」

仕方が無いと一度魂広を解いて大剣を消し、再び魂広し直す拓也。

龍魂剣は改めて拓也の手元に現れる。

正面で邪魔をするギズモンの頭を足場にして跳び越え、先程変化したギズモンへ剣を振り上げた。

「今度はこれだっ！」

剣の角度を考え装甲を斬りやすく調整したが、それでも少し刃先が食い込んだだけ。

逆に剣を引き抜き、一旦距離を取る。

「ヤバいか・・？」

斬っても切り傷が少し、溶岩をも弾き返す装甲ならば砲撃やミサイルも効かないと悟った。

皆は残りのギズモンを一掃してくれたが、眼前にいるこのギズモンだけは苦しむだろうと確信する。

それでも構わない。

幼きデジモン達が材料にされるくらいならば苦しむ方がまだましだ、と考える一同の心に揺らぎは無かった・・・。

76話：ギズモンの変化（後書き）

次回はいつ頃でしょうか・・・。

明日・・・無理かも。

明後日・・？

あぁ、いや・・・分かんなくなってきました。

とりあえず・・・4日か5日に1話投稿します。

今時間が余ってますので、今日中にもう1話投稿出来るかも・・？

77話：反撃の策（前書き）

77話、参ります！

77話：反撃の策

「はぁ・・はぁ・・・」

その呼吸が誰の物か、今では分からなくなっていた。

ギズモンを倒すだけで疲れた者達は進化を解き休憩中で、残った1体と戦闘している者はたったの6体。

デュークモンにオメガモン、エンシェントグレイモン、ヴォルクドラモン、シャイングレイモン、インペリアルドラモンだ。

「化物か・・！」

太一があり得ない物でも見るかのように、変化したギズモンを睨む。

「化物すら越えてるんじゃないか・・？」

ヤマトは歯ぎしりしながら、傷1つ付かないあのデジモンに冷めた笑みを向けた。

ギズモンは空間を高速で移動し、そこら中に残像を残す。

眼で追っては負ける為、各自気配を探り場所を特定した。

「そこか！」

「＜グレイソード＞ッ！」

デュークモンがグラムを突き出し、オメガモンが剣を振り切る。
ギズモンを見事に斬りつけたが例の如く硬き装甲に弾かれてしまい、2人は一旦距離を取った。

同時刻。

巨木がそびえ立つ草原の端で、1体のギズモンに乗った倉田が戦況を見守っていた。

「おやおや、実験は見事成功したようですねぇ・・・。これで良い研究報告が出来るというもの・・・さて、そろそろ終戦と行きましょう・・！」

倉田は白衣のポケットから1つのデジヴァイスを取り出す。

大達のデジヴァイスと似ていたが、細部が所々違っていた。

倉田の背後にある森から2体のギズモンが飛び出し、戦場へと向かう。

「さぁ、進化です。ギズモン、ゼヴォリューション・・！」

倉田の持つデジヴァイスから大量のデジコードが伸び、ギズモン2体を包み込んだ。

装甲をより強化されたギズモンが、その姿を現す。

2体は戦場へ乱入した。

――バキュゥンッ！

「何！？」

一同は新たな敵に面食らい、対処が遅れる。

ギズモンが更に2体出現し、レーザーを乱射した。

「・・・こうなっては仕方無い」

ヴォルクドラモンは小さく呟き、その身をデジコードに包む。

「ヴォルクドラモン、究極進化・・！」

土色の鱗に身を包む、竜が現れた。

背中に幾つもの刃を尖らせる、巨大な恐竜。

――――――

スピノモン

究極体。恐竜型。必殺技は＜ソニックスラッシュレイン＞

――――――

「進化出来るのか・・・」

エンシェントグレイモンはそれを見て、意外だとでも言いたげな視線を向ける。

「我とて孤島の主。それくらい出来んとして何とする・・！」

スピノモンは体内に蓄積した金属を１５０００度まで加熱し、それがプラズマ化して出現した。

「＜ブループロミネンス＞・・！」

唸りを上げて青い光がギズモン達の間を駆け抜け、装甲を焦がす。

「ッ！」

それを見て、トーマの頭脳が士気を取り戻し起動し始めた。

（そうか・・！これならば・・・）

１つの策を考え、ニヤリと笑みを浮かべる。

「ちょっと良いかい？」

その策を実行するのに必要なオメガモンの力を借りる為、トーマはまず太一とヤマトに声をかけた。

太一も策が無く困っていたので、トーマの意見を聞いて勝機を見据える。

「了解だ」

「任せてくれ」

太一とヤマトは深く頷き、トーマに頼もしい返事を返した。

「＜ブループロミネンス＞・・！」

スピノモンに超高音の炎を放って欲しかったトーマだが、言わなくてもスピノモンは青いプラズマを打ち出す。

ギズモンの装甲は更に焼け、紅く染まった。

「今だ！」

トーマは太一に合図を送る。

「了解！」

「オメガモン！」

太一がトーマに手を挙げて返し、ヤマトがそれを確認してオメガモンに指示を送った。

オメガモンは右腕の銃口を1体のギズモンに向け、冷気を集束する。

「＜ガルル・・・キャノン＞ッ！！」

――ドゥンッ！

冷気の集束弾が勢い良く発射され、ギズモンの焼けた装甲に着弾した。

急激に冷やされ、装甲の強度は大幅に減少する。

トーマの狙いはこれだ。

「＜ソニックスラッシュレイン＞・・！」

スピノモンもそれを理解し、背中の刃を連続して発射する。

次々と、脆くなった装甲に刃が突き刺さっていった。

「良し、効いてる・・！」

太一も思わず拳を握り、他の皆も策の狙いを理解する。

エンシェントグレイモンは溶岩を沸騰させ、出来る限りまで温度を上昇させた。

頭上に溶岩を集中して業火球を作り上げ、そこへシャイングレイモンの炎も融合する。

「＜ガイア・・・トルネード＞ッッ！！」

直径５０メートルはあろうかという巨大な火球が、逃げ場を許さずギズモン2体を包み込んだ。

――ジュゥゥゥッ・・！

装甲が１００００度を超える熱さに耐え切れず、紅く染まっていく。

「＜ガルルキャノン＞ッ！！」

――ドゥンッドゥンッ！！

冷気弾が2発発射され、ギズモンの熱くなった装甲を一気に冷やした。

「＜ロイヤルセーバー＞ッ！！」

「＜ポジトロンレーザー＞ッ！！」

デュークモンがグラムで1体を突き刺し、インペリアルドラモンが砲撃で撃墜する。

浮かび上がったデジコードは、エンシェントグレイモンが呑み込んだ。

「おや、負けてしまいましたか。自信作だったのですがねぇ・・・」

倉田は眼鏡をかけ直し、ふむと一息つく。

デジヴァイスをポケットに戻し、乗っていたギズモンに撤退を合図した。

「今日のところはこれで十分でしょう。材料補給はここでもしておきたかったのですが・・・まぁ、仕方ないでしょう」

倉田は不気味な笑みを浮かべ、自らの拠点へと帰還する・・・。

77話：反撃の策（後書き）

ふぅ、何とか投稿出来ました。

5日に予約投稿を入れときます。

・・・たぶん。

拓也「おい！」

78話：七大魔王集結（前書き）

ついに奴等が・・！

そして暴食が動き出す！

78話、参ります！

78話：七大魔王集結

ダークエリア。

それはデジタルワールドの中枢にある暗闇の世界であり、そこに七大魔王が居座っていた・・・。

何処からか姿を現し、7体がそろう。

白衣を纏い10枚の翼を持った、傲慢なる天使、ルーチェモン。

悪魔の翼を広げ左肩に五亡星を刻む、憤怒の魔王、デーモン。

巨大な紅い体を伸ばし全てを呑み込む口を持つ、嫉妬の悪魔獣、リヴァイアモン。

黒紫の衣を身につけ美しさを誇る、色欲の魔女、リリスモン。

2対のショットガンを腰に携える、暴食の黒狼、ベルゼブモン。

白く長い髭と髪を持ち魔杖で敵を操る、強欲の策略者、バルバモン。

一見可愛らしい印象を持つ、怠惰の魔獣、ベルフェモン。

ルーチェモン

成長期。天使型。必殺技は＜グランドクロス＞

デーモン

究極体。悪魔型。必殺技は＜フレイムインフェルノ＞

リヴァイアモン

究極体。魔王型。必殺技は＜ロストルム＞

リリスモン

究極体。魔王型。必殺技は＜ファントムペイン＞

ベルゼブモン

究極体。魔王型。必殺技は＜ダブルインパクト＞

バルバモン

究極体。魔王型。必殺技は＜パンデモニウムロスト＞

ベルフェモン

究極体。魔王型。必殺技は＜ランプランツス＞

「人間ごときに我等が手を借りるとはな・・・」

リヴァイアモンがノソリと顔を上げ、倉田の事を思い浮かべる。

ルーチェモンは如何でも良いとでも言いたげに、フッと鼻で笑った。

「あの人間は利用価値がある。・・・間違っているかい？」

「小童が・・・」

ルーチェモンに子供をあざ笑うような視線を向けるバルバモンだが、ルーチェモンは得意げに笑みを浮かべた。

「酷いな。誰のおかげで蘇ったと思っているんだい・・？」

そう。

一度拓也達がルーチェモンを倒したものの僅かな微粒子データが残っていた為、それが再生を繰り返してルーチェモンが復活した。

蘇ったルーチェモンが七大魔王を全員を復活させたのだ。
更には別次元で選ばれし子供達に恨みを持つ者達も集めた。
それは倒された、もしくは閉じ込められた一部の魔王も同じく。
その為、デーモン、ベルフェモンは2体存在していた。
例外としてベルゼブモン。

「あんの野郎、俺の誘いを断りやがった・・！」

別次元の片割れへ声をかけたベルゼブモンだが、その代わりに1発の銃弾を右肩に浴びた。
その為ベルゼブモンの右肩装甲には、弾の後が残っている。

「向こうのお前(奴)は堕ちなかったか・・・愚かな」

バルバモンが魔杖を右手に、薄く笑みを浮かべて冷めた声を発した。

「それで?そっちは順調な訳・・?」

リリスモンが腕の衣で口元を覆い、上品気にこちらのデーモンに問いかけた。

「愚問だな・・・」

「あらそう」

デーモンは一言答えた後、再び闇の中へ消えた。

別次元から来た者達はここにはおらず、別の場所で動いている。

続いてリリスモンとリヴァイアモンも暗闇に消え、ベルゼブモンはショットガンの銃弾を確認した。

「俺、出るぞ。腹が減っててなぁ・・・」

「‘食う’のではなく‘殺る’、か・・？」

ベルゼブモンはバルバモンの一言に歩き出した足を止め、ヒヒッと不気味な笑みを返して闇に消える。

バルバモンは、若造が・・・と小さくぼやきながら杖を振って姿を消した。

ベルフェモンは先程から眠りこけている為、身動き1つしない。

ルーチェモンは妙に考え深い顔をして、何故か諦めのため息を漏らし立ち去った。

「選ばれし・・・子供、か・・・」

その顔には憎しみの表情が浮かんでいるとも知らず、十闘士の事を思い出すのだった・・・。

「ククク・・！」

ベルゼブモンは暗黒の雲に覆われた岩山の山頂で世界を見下ろし、面白げに笑う。

一暴れ出来るのが嬉しいのか、それともストレスが溜まっていたのかは自分でも分からないが、とにかく体を動かしたい衝動にかられていた。

――ジャキッ

腰のポーチから2対のショットガンを取り出し、右手に握ったショットガンの銃口を天へ向ける。

――ガゥンッ！

「血祭りってか・・！」

1発黒い雲を突き抜けて射撃したベルゼブモンの視界には、この大陸を訪れた少年達が映っていた・・・。

――ガゥンッ！

1発の銃声が、歩みを進めていた一同の耳に突き刺さる。

一同は西の巨大な闇の大陸に進路を変え、大陸の最南端に来ていた。

天はどす黒い暗雲に覆われ、まともに太陽の光が差し込まないでいる。

銃声が聞こえると共にザッと足を止める一同は、巨大な岩山の頂上を見上げた。

「人影が見えるけど・・・」

太一は眼を凝らしても見えない為、単眼鏡を取り出して標準を定める。

単眼鏡に黒い人型のデジモンが映るが、そのデジモンは単眼鏡のレンズ目がけて拳銃の狙いをつけた。

「ッ！？」

――ガゥンッ！

太一は咄嗟に身をかがめた直後、銃声が響く。

――チュンッ

弾丸は外れて地面にめり込み、一同の視界を一瞬で通り抜けた。

「た、太一！大丈夫！？」

アグモンが尻もちをついている太一に駆け寄り、身の安全を確認するが太一はギリギリで避けた為無傷である。

大丈夫だと手を挙げて制す太一。

単眼鏡をポケットにしまいながら立ち上がり、もう一度山の頂を見

上げた。

「狙いは完璧だね・・・」

地面にめり込んだ銃弾を見ながら、トーマが正確に判断する。

「誰だ？」

大も太一に続いて山頂を見上げるが、先程までの人影は見当たらない。

――ガゥン！ガゥンッ！

「がっ！？」

「うぁっ！」

銃声と共にガブモンとテリアモンが悲鳴を上げる。

「ガブモン！？」

「テリアモン、撃たれたのか！？」

ヤマトと健良がそれぞれパートナーデジモンに駆け寄り、傷口を確認した。

ガブモンは左腕に、テリアモンは大きな右耳にそれぞれ銃痕が見られる。

健良は慌ててカードポーチをあさり、１枚のカードをスキャンした。

「カードスラッシュ、＜生還＞っ！」

テリアモンとガブモンの傷口か無かったかのように塞ぎ切り、完全回復を終える。

「す、すまない」

ヤマトは突然の事に驚いていたものの、とりあえず健良に礼を言った。

「いえ。それより今の銃声・・！」

健良はもしやと啓人達と顔を見合わせ、頷き合う。

啓人は山頂をもう一度見上げ、小さく呟いた。

「ベルゼブモン・・・」

と・・・。

78話：七大魔王集結（後書き）

何とか投稿出来ましたが、6日は無理ですね。

断言出来る程、無理です・・・。

申し訳ございません。

次の投稿は7日、もしくは8日となります。

待っていて下さい！

79話：黒い気配（前書き）

79話、参ります！

79話：黒い気配

――ガゥンッ！

「きゃっ！」

1発の銃声と共に淑乃が声を上げた。

幸い直撃はしなかったものの、右腕を銃弾がかすめて通り過ぎる。

「淑乃！」

ララモンが様子を確認する中、大丈夫だからと顔を歪めながらも淑乃が手で制した。

ベルゼブモンの射撃は少しずつ過激になっており、デジモンだけでなく人も狙い始めている。

拓也達6人はかなりの警戒態勢で、魂広を行い武器を手にしていた。

一部のデジモン達は究極体へ進化した状態で、周囲を睨んでいる。

「一体何処から・・！」

「姿見えまへんで！」

光子郎が森の中へ視線を走らすが、木々が邪魔をして人影の姿は全く見えない。

テントモンも眼を凝らしているが、何処にいるのかさえ掴めない状況。

天には青空が広がり太陽光が照らしているのに、だ。

運が悪いのか、それともベルゼブモンが気配を消しているのか。

それに弾もそうだ。

前に撃った場所ではなく、毎回毎回移動しているのか全く違う所から射撃される。

本当に1人なのかと疑ったが、デジモン達や拓也達の五感が1人だと告げていた。

が、場所が分からない。

「いい加減出て来やがれぇっ！」

堪忍袋が今にもはち切れそうな大は、思い切り息を吸い込んで声を張り上げた。

――ガゥンッ！

威嚇射撃のように、大の足元に銃弾が飛来する。

「く・・！」

大も銃相手では太刀打ち出来ず、相手を挑発出来ないでいた。

「ムカつくなぁ・・！」

拓也も飛び出したくてウズウズしている模様だが、輝二がガシッと肩を掴んで動かさない。

すると、拓也の背中をイクトが突いた。

何だ?と振り返る拓也に、イクトが小さく耳打ちする。

「頼み、ある」

「・・?」

イクトからの頼みを受け入れ、拓也がＯＫと頷き返した。

「イクト、どした?」

大が不思議に思って問いかけると、イクトは笑みを浮かべて何でも無いと首を横に振る。

拓也を呼んでおいて何でも無い訳が無いのだが、大は不満げな表情のまま聞き返すのを止めた。

再び周囲に集中する一同の中、イクトがニヤリと笑みを浮かべている。

――コクリ

イクトは周りの皆に気づかれぬよう視線で拓也と合図し、右足に巻いていた布から筒状の物を取り出した。

静かに安全ピンを引き抜き、天へ投げ上げる。

「え・・？」

誰もがその行動を不思議に思った直後、森全体に眩い閃光が覆い尽くした。

「おわっ！？」

「眩し・・！」

「閃光弾・・！？」

ほとんどの者が目を覆い、トーマはイクトが投げ上げた筒状の正体を言い当てる。

――ザザッ

草が何かにこすれるような音がしたかと思うと、閃光は静かに収まっていった。

一同は眼を開けて何が如何なったのか周りを見回し、トーマはイクトに声をかける。

「今のは・・？」

「シ～ッ」

トーマの声を、イクトは人差し指を立てて静かにと合図した。

誰もが首を傾げるが、輝二がふと気付く。

「・・・あの馬鹿が・・！」

拓也が消えている事に気づいて小さく舌打ちし、イクトの考えている意図が読めてきた。

だが、１人で敵の陣地へ飛び込んでいった拓也に、輝二は苛立ちを覚える。

（終わったら殴る・・・）

輝二の怒りも知らず、拓也は森の中を駆けていた。

（この辺か・・？）

拓也はふと足を止め、木の陰に身を潜める。

――ゾワァッ・・！

悪魔のような気配が周囲を覆いこみ、拓也は思わずブルリと震えた。

呑み込むような黒い気配がすぐ近くにいる、と第六感がうるさい程に叫んでいる。

「さっきの閃光は目眩ましか・・・」

――ザッ、ザッ

低い声と共に、足音と気配が近づいてきた。

――ガゥンッ！

「ッ！」

銃声が聞こえる寸前背中に殺気が走った為、拓也はバッと木の上へ跳び移る。

木に銃痕が残り、気配の主が森の中から顔を出した。

「良い反射神経してんなぁ」

「お前がベルゼブモンとやらか・・・」

拓也が目の前の強敵に引きつった笑みを浮かべ、思わず如何動くか判断に迷う。

「俺の前に立つたぁ、良い度胸してんじゃねぇか」

ベルゼブモンは右手に握るショットガンの銃口を、スッと拓也に向けた。

――ガゥンッ！

「ッ！」

響いた銃声にピクリとイクトが反応し、聞こえた方へ駆けていく。

「イ、イクト！？」

大が驚きながらも慌てて後に続き、皆も追い駆けた。

「何処行くんだよ！」

「いいから、こっち！ファルコモン！」

大の声にイクトが声を張り上げて言い返し、上空を飛行するファルコモンに合図する。

「ＯＫイクト！」

ファルコモンは飛行しながら銃声が響いた場所の上空へ素早く移動し、信号弾を天へ放った。

あそこ、とイクトが指を差し皆が驚きながらもそこへ急ぐ。

――ザッ！

一同が到着した時、血まみれの拓也が膝を突いていた。

「遅いんじゃ、ないか・・？」

息が苦しそうに喘ぐ拓也が、イクトに一言文句を言う。

「すまない。遅くなった」

イクトは懐から1つの木の実を取り出し、拓也に食えと差し出した。
拓也は不信気にそれを受け取り、ゴクリと呑み込んだ。
すると少しして息が楽になり、お?と喉をさする。
と言っても出血は止まらない為、脇腹の傷に大のアグモンが火を吹きかけた。
「あ、悪い。助かった」
「奴は?」
イクトが手っ取り早く敵の居場所を確認すると、拓也が森の中を指差す。
「すぐそこ。5メートル先っ!」
――ガゥンッ!
拓也が叫んだ直後銃声が木霊した。
――チュンッ
「危ねっ!」
大輔が反射的に体を右に反らしたそこへ、銃弾が通過し木へ突き刺さる。

「大輔ナイス！」

「こっちの身にもなれ！」

ブイモンがグッとサムズアップするものの、狙われた当人には冷や汗ものであった。

「オメガモン、そこだ！」

「分かった！」

太一が1本の木を指差し、オメガモンが＜ガルルキャノン＞を発射する。

――ドゥンッ！

冷弾が木に直撃する寸前、ザザッと影が跳び出した。

「惜しいねぇ」

――ガゥンッガゥンッ！

飛び出したベルゼブモンが木の枝に跳び移りながら、2発発射する。

デュークモンが盾で銃弾を弾き、身を守った。

「やはり・・！」

ベルゼブモンを視界に納めた直後、デュークモン達は戦友であった者の姿を重ねてしまった・・・。

79話：黒い気配（後書き）

大「イクト、お前何で俺達に教えてくれなかったんだよ」

イクト「大、拓也ほど速くない。それに、普通の人間だから、気配も掴めない」

大「うぐ・・・！」←言葉の槍が突き刺さる

イクト「あと、皆で変な動きしたら、怪しまれる。人数は、少ない方が良い」

大「・・・」←言葉の槍にてすでに気絶

拓也（イクトって思った事、そのまま言うんだな・・・容赦無ぇ）

８０話：２人の悪魔（前書き）

今回はいろいろなハプニング（？）です。

っていうか、この話読んでえぇ～！？ってがっかりする人もいるかもしれません。

もしかしたら喜ぶ人もいるかもしれませんが、その可能性は薄いです。

でも！

８０話、参ります！

80話：2人の悪魔

「おらおらぁ！」

――ガゥンッ！ガゥンガゥンッ！

ベルゼブモンはショットガンを手に、次々と連発する。

デュークモンが皆の前に立ち、盾イージスで弾き返した。

「さっきからドカドカと撃ち過ぎだぞこの野郎がっ！」

流石にキレた大の怒鳴り声と共に、シャイングレイモンが剣を手に飛び立つ。

「おぉおぉっ！」

――ブォンッ！ザシュッ！

シャイングレイモンはベルゼブモンが立っていた木を斬り倒すが、少し早くベルゼブモンが地面に降り立った。

「遅ぇ遅ぇ！」

――ガゥンッ！

ベルゼブモンが1発発射するが、シャイングレイモンの装甲は硬く弾かれる。

小さく舌打ちしたベルゼブモンだが、次の瞬間姿を消した。

「何処・・！？」

誰かが声を発し、一同が周囲を見回す。

「きゃぁっ！」

女子の悲鳴が聞こえたかと思うと、ザザッと草村が揺れた。

そちらを見ると、ベルゼブモンは人質としてヒカリを捕まえている。

しかも口を押さえているらしく、息が出来ていない。

「ヒカリッ！」

「てめぇ、ヒカリちゃんを放せっ！」

太一が思わず駆け寄ろうとしたが思い留まって足を止め、大輔が額に怒りのマークを浮かべて叫び散らす。

下手に近づけば、ベルゼブモンがその手に持つショットガンで撃ち抜かれるのがおちだ。

もしくはヒカリが撃たれるかもしれない。

「〜〜っ！」

息が出来ずにベルゼブモンの腕を掴むヒカリだが、普通の人が究極体のデジモンに敵う訳も無い。

「ヒカリ！」

「おっと」

危険を承知で近づこうとした太一を見ると、ベルゼブモンはショットガンをヒカリの頭に突きつけた。

「ッ！」

太一はグッと足を止め、歯を噛み締める。

握りしめる拳から血がにじみ出るのでは無いかと思った程に、強く激しく怒りを覚えた。

「ッ・・！」

少ししてヒカリの腕がダランと垂れ、眼を閉じる。

「ヒ、ヒカリ！お前、放せよっ！」

太一が叫ぶが、ベルゼブモンはヒカリが気絶したと知って不気味な笑みを浮かべた。

その直後である。

――ザッ

「おぉぉっ！」

得意の速さを活かし、輝二がベルゼブモンの背後に回り込み光剣を一閃する。

「がっ、何!?」

その速さには流石のベルゼブモンも驚愕し、その拍子にヒカリを落とした。

地面に倒れる直前にその機を待っていた輝一が素早く動き、ヒカリを受け止め後方へ跳び退る。

それと入れ替わるように拓也が前へ跳び出した。

「ゴホッ、ゲホッ」

ヒカリが意識を取り戻して激しく咳き込む。

輝一が背中をさすり、太一と大輔がすぐに駆け寄った。

「ヒカリちゃん!」

「ヒカリ、大丈夫か!?」

血相を変える2人だが、ヒカリは息を整えるのに必死だ。

輝一は、ヒカリが無事だと言う事を手を振って前衛の者達に知らせると、輝二と拓也が即座に動き出す。

「さっきの借りだっ!」

拓也が撃たれた恨みを持ってベルゼブモンに斬りかかると、ショットガンの側面で容易に防がれてしまった。

――ブンッ

だが、その背後に輝二が回り込み一閃する。

「くっ、この・・！」

ベルゼブモンは木の枝へ跳び上がり、ショットガンで撃った。

「危なっ！」

拓也は大剣でそれらを弾き、皆のもとへ飛ばさないよう防ぐ。

「援護っ！」

「おうよ！」

拓也が援護を求めると、シャイングレイモンが動き出した。

「あ、ありが、と。もう、大丈夫・・・だから」

喉を押さえながら、ヒカリが背中をさすってくれていた輝一に礼を言う。

輝一はヒカリの肩に腕を回し、太一に預けた。

「すまない。助かった」

「礼なら輝二にどうぞ」

輝一は軽い笑みを浮かべて戦場へと走っていく。

ヒカリはぼやける視界で輝一の背を見ながら、自分の中にある思いが蠢いているのを感じていた・・・。

「しゃぁねぇ。＜ダブルインパクト＞ッ！」

――ドゥンッ！ドゥンッ！

ベルゼブモンは弾丸に力を集中させて強化し、銃口が火を吹いた。

――ガキィンッ！

「うぉ！？」

今までの威力とは桁外れなのを感じながら、拓也は大剣で銃弾を弾き返す。

シャイングレイモンの装甲には傷が走った。

「＜ガルルキャノン＞ッ！」

オメガモンが冷気弾を発射し、ベルゼブモンを狙い撃つ。

ベルゼブモンは避けようとしたが少し遅く、足に着弾して地面に縛り付けられた。

「ちっ・・！」

ショットガンで氷を撃ち砕き、すぐに抜け出す。

「＜ダブルインパクト＞

後方へ跳びながら、強化された弾丸を1発速射した。

狙いはデュークモンだったが、イージスで弾かれる。

「残念」

ニヤリと笑い、すぐに2発目を発射するベルゼブモンの狙いは・・・人間の伊織だ。

「え――」

自分に銃口が向けられてたじろぐ伊織だが、次の瞬間には目の前に弾丸が迫っている。

――ガゥンッ！キィンッ！

「何！？」

直後、命中すると思われた弾が、銃声と共に弾かれた。

――ザッザッ・・！

「久しぶりな面子がいるじゃねぇか」

森の中から現れたのは、もう1人のベルゼブモンであった・・・。

80話：2人の悪魔（後書き）

はい！

申し訳ございませんでしたっ！！↑土下座

ヒカリがどんな感情を抱いたか、皆さんお察しの通りですっ！

岳を期待していた方、まことに申し訳ございません。

反対する人が多いですよね・・・。

正直言って、この話投稿するのが一番怖かったです。

それにベルゼブモン。

これは賛否両論あると思います。

感想でぶちまけて下さいっ！↑ガクガクブルブル・・！（（？？｜？？））

８１話：気合と武術（前書き）

輝一×ヒカリは意外にも好評でした。

輝二×泉ももしかしたらするかもしれません。

他にもしてほしい者達がいれば、どうぞ言って下さい。

因みにヤマトと空はまだ付き合っていない、という関係です。

では８１話、参ります！

81話：気合と武術

「ふ、2人!?」

太一が驚いたように2人の暴食を見比べる。

違いが無く、多くの者達は敵と考えるが先程銃弾を防いでくれた為、容易に動けない。

「何故この世界へ・・!?」

デュークモンが驚愕して眼を見開く。

味方と思われるベルゼブモンは、右手に握るショットガンの弾数を確認しながら口を開いた。

「何で来たかって?んなもん知るか、こっちが聞きてぇ。そいつの後をつけてったらここに辿りついただけだ」

ベルゼブモンが自分の映し見であるもう1人を、銃口で示す。

――ドゥンッ!

両者同時に引き金を引き、2つの銃弾が弾き合ってそばの木にめり込んだ。

「てめぇ、俺の誘い断りやがった上に尾行してやがったか・・!」

「はっ、あったりまえだ。誰が手下に落ちるか。そもそも、暴食が

2人いる自体気に入らねぇっ！」

ベルゼブモンの背中から黒紫の翼が生え、右腕が変化する。

――バチバチィッ！

データが膨張し、ベルゼブモンの瞳が赤から緑へ変わった。

何より、右腕に陽電子砲が装備されている。

――――――

ベルゼブモン　ブラストモード

究極体。魔王型。必殺技は＜カオスフレア＞

――――――

「ちぃっ！」

真の魔王であるベルゼブモンは、ブラストモードへ移行した敵を確認しその姿を消した。

「あ？」

ブラストモードとなったベルゼブモンは、拍子抜けしたように通常モードへ移行する。

皆が進化を解き、啓人が一番にベルゼブモンに駆け寄った。

「何があったの？」

「は？・・・前から思ってたんだが、全然話が噛み合ってねぇな」

「う～」

啓人は髪をかきむしって何と言えば良いのか、懸命に考える。

「何でこっちに来たのかって聞いてるのよ！」

焦れた留姫が、啓人を押しのけてベルゼブモンに迫った。

「だから言ってるだろうが！あいつをつけてったらここに着いたって！お前耳悪いのか！？」

「悪くないわよ！あんたが説明力低いだけ！」

「んだと！？」

「ス、ストップストップ！」

健良が慌てていがみ合う2人を放し、何とか話を整理する。

と言ってもベルゼブモンの話はそのままだったのだが・・・。

「敵か味方か！どっち」

拓也が手っ取り早く啓人に確認すると、啓人は如何なのかとベルゼブモンに視線を送る。

どっちでも良い、と適当な返事が返って来たので多数決で味方と決定。

この多数決自体もかなり適当だったのだが。

ベルゼブモンはもう1人の自分を倒したいらしく、共に行動すると言う事になった。

「あぁぁぁぁあっっ！！」

突如、泉が大きな声を上げた為、一同がビクッと反応する。

「な、何だよ」

拓也が嫌な事ならば聞きたくないと思いながらも、一応声をかけてみた。

「この状況、拙くない？」

「はぁ？」

「いやだって・・・七大魔王から抜けたとはいえ、暴食の1人がここにいたら――」

――ドゴォォォォォォンッッ！！

「ほらやっぱりぃっ！」

泉の言葉が途中で遮断され、爆音と共に泉が叫ぶ。

爆発が起きた方を見てみると、ブラックウォーグレイモンが立っていた。

それを見た瞬間、ベルゼブモン意外はその意味を理解して拙いと悟る。

「な、なるほど・・・」

トーマは引きつった笑みを浮かべこれから如何対応するかを考える為、脳をフル回転させた。

「・・・七大魔王の1人、だな・・？」

ブラックウォーグレイモンは静かに問いかけるが、ベルゼブモンは面倒くさそうに頬をかいている。

啓人がベルゼブモンの前に立った。

「違う違う！確かに元七大魔王だけど、今は違うんだ！」

「本物はついさっき帰ってった」

啓人の後に、大が付け足す。

ブラックウォーグレイモンはまともに信じようとせず、ドラモンキラーを構えた。

――パンパンッ

「はいストップ、とにかく説明といくぞ～」

太一がここで争われては困る為、手を叩いて場を静める。
啓人が大まかに説明し、渋々とブラックウォーグレイモンは了承し何事も無かったかのように去っていった。

「ふぅ・・・」

啓人が一息ついたように安堵し、肩の荷を下ろしたような気分になる。

「これから如何する？」

太一が目標を確認する為に皆へ問いかけると、大が当然のように答えた。

「ボスだろ、そりゃ」

「場所が分かれば苦労しない」

間髪入れずトーマが一言突っ込む。

「いや、何処にいるかは大体分かるんだけど・・・」

拓也がおずおずとそう言ったが、拓也達もダークエリアへの行き方が分からない。

「何とかなるだろ、突っ切れば良い！」

「何て猪突猛進思考・・！誰かさんそっくり・・・」

泉が思わず額に手を当て、大の考え方に呆れた。

「失敬な！」

拓也が自分の事だと悟ってすぐさま言い返すが、大の方が怒っている。

「俺は拓也程ば――頭悪くないぞ！」

「・・・今言い直したな？」

拓也の突っ込みを無視して、大と泉が言い合いを始めた。

「いや、そんなに変わらないんじゃ――」

「それは無い！絶対に無い！」

「兄貴、諦めろよ～」

「アグモン、お前俺が頭悪いって思ってるだろ！」

「おう」

アグモンが即答して頷く為、大は頭垂れた。

その背後、思い切り失礼な会話を聞いていた拓也は、額に怒りのマークを浮かべたまま我慢している。

「ともかく俺はそんなに弱くない！」

「んじゃ私と一戦します？因みに魂広も同調も無しにしますけど」

完全に嘗められた大は以前泉にかかと落としを食らった事も忘れ、その挑戦を受けてしまった。

「はぁぁ・・・」

その後方で、トーマが思い切り深いため息を吐いている。

数名の者達は、大が負けるなと確信していた。

大がすぐさま泉に殴りかかる。

――パシッ、パンッ

泉はその拳を避けて右手で大の腕を弾き、左手でその腕を下にはたき落した。

すぐに足に力を込め、大の胸倉を手首を掴み一本背負いを繰り出す。

「ってぇ！」

大は腰に痛みが走るのを感じて声を荒げた。

あの弾いたりする技もジークンドーの技である。

いつもは気合で殴っている大も、正式な武術には敵わないという事だ。

「・・・変わった奴等だな」

ベルゼブモンがボソリと呟き、それを耳にした遼が言えてると笑みを浮かべた・・・。

81話：気合と武術（後書き）

大「いってぇ！少しは加減しろよ！」

泉「えぇ～」

トーマ「こいつに加減はいらないな。思い切りやってくれ」

大「トーマ！てめぇ、どっちの味方だ！」

トーマ「どっちって・・・勿論こっち」↑泉側

大「お前ぇぇぇえええっ！！」↑頭を抱え込む

８２話：あの時の・・・（前書き）

今回は～改～で登場したあの町が、久しぶりに出て来ます！

あの町と言えばこのイベント！

という訳で！↑如何いう訳だ！

８２話、参ります！

82話：あの時の・・・

「前から思ってたんだけど・・・」

一行が西の大陸を目指し、中央大陸を南西に移動中の時だった。

最後尾を歩いていたベルゼブモンに、大輔が声をかける。

「何だ・・？」

「成長期辺りまで退化出来ないのか・・？ずっとそのままだと疲れるんじゃねぇの？」

大輔の心配事を聞いて、ベルゼブモンは鼻で笑った。

「ちっせい心配すんじゃねぇ。これくらいで疲れてたまるかってんだ。ま、このままってのもなんだしな。退化してやるよ」

ベルゼブモンは首の後ろを軽くかきながらデジコードに包まれ、小悪魔のような姿へ変わる。

インプモン

成長期。小悪魔型。必殺技は＜ナイト・オブ・ファイア＞

大輔は退化して現れたインプモンを、驚いて凝視した。

「な、何だよ・・？」

ずっと見られて不快だったのか、インプモンは不満げに聞き返す。

「お前・・・小さくなったら案外可愛いもん――」

「うるせぇ！」

――ドガッ！

「いでっ！？」

必死に笑いを堪える大輔だが、言い終える前にインプモンが大輔の額に跳び蹴りを食らわし、大輔が昏倒した。

「だ、大輔！？」

ブイモンが何やってるんだとでも言いたげな表情を浮かべ、眼を回している大輔に駆け寄る。

インプモンはと言うと、若干顔を赤らめているものの平気な顔をして歩いていた。

額には怒りのマークを浮かべていたが・・・。

「言っちゃった・・・」

啓人がついにやったか、と額に手を当てて大輔に同情する。

あれでインプモン（本人）も気にしているのだろうか。

大輔が頭を振って起き上がり、赤くなった額をさすりながら立ち上がる。

「いってぇな！」

「今のは・・・大輔君が悪いと思うよ」

ヒカリが苦笑しながら言うと、大輔がヒカリちゃんまで！？と落ち込んでいた。

そんな大輔にヒカリは苦い笑みを向けながら、一行の前方で歩を進めている輝一の背を見つめる。

「ヒカリ、如何した？」

テイルモンが不思議そうにヒカリを見上げ、問いかけた。

「ううん、何でも無いよ」

ヒカリは笑みを浮かべて笑顔で返し、ゆっくりと首を横に振る。

少し気になったものの、テイルモンは前に視線を向けて再び歩き出した。

すると、前方を歩いていた者達の中で拓也が突如足を止める。

「どした？」

気になった大が声をかけてみるものの、拓也は必死に脳を目まぐるしく回転させており返事など出来たものではなかった。

「あの時は・・・いやいや待てよ、年は分からない訳だし・・・んじゃ今は・・？って言ってもそれも分からないし・・・」

何やら1人で必死に考え事をしている拓也。

「お～い、戻ってこいよ～」

拓也の眼の前でブンブンと腕を振っている大のアグモンだが、全く持って反応無し。

「もしかしたら・・・いやでもそんな偶然・・・。でもあるかもしれない訳で・・！」

「・・・」

大は少し考え、珍しく大の脳に電球が灯った。

「おい馬鹿！」

――ブチィッ！

「誰が馬鹿かぁぁああっ！！」

大の一言に拓也が鋭く反応し、すぐさま回し蹴りを繰り出す。

「おわっ！？」

大もこうなる事はある程度予想していた為、寸でのところでヒラリとかわした。

「コントか」

それを見ていたヤマトが、思わず呆れながら呟く。

「ってか何考えてたんだよ」

「誰かさんの所為で忘れちまったわっ！」

「マジでか！ドンマイだなお前！」

「誰の所為だと思ってんだ！」

歩きながらも言い合う大と拓也。

「あの2人、息が合うんだか合わないんだか・・・」

「確かにね、あはは」

太一の発言にアグモンが笑い、喧嘩の行く先を見守る。

「あぁそうそう、思い出した。大、喧嘩したいか？」

拓也が何かを思い出したかと思えば、今度は理解不能な問いを投げかけてきた。

「は？喧嘩？いやまぁ・・・したい、けど・・・」

答えるのに困った大は、正直なところを思って頷く。

「いよっしゃ！少し寄り道になるけど、持って乞いの場所があるぜ！」

拓也は大の腕を掴み、いきなり進行方向を右へ変更した。

「何だよ、何処行くってんだ！？」

大の問いには一切答えず、拓也は草原を突っ切って駆けていく。

残された一同は、互いに顔を見合わせて2人の後に続いた。

「来たぜ！バトルシティッ！」

拓也は拳を天に突き上げ、町に到着した事を喜ぶ。

この町は以前、拓也達が冒険中に立ち寄った町であり、ここでバトル大会を行ったのだ。

毎年やっていたはずなので、今日やっているという根拠は無かったものの来られずにはいられなかった拓也である。

「はぁ、はぁ・・！いきなり走るなよ、しかも長距離走らせやがって！」

腕を引っ張られてついてきた大は、喜んでいる拓也に思い切りぶち

まけた。

拓也はいいからいいから、と更に大を連行し町の中へ突入する。

「なぁ、バトル大会っていつやってるんだ？」

近くにいた町のデジモンに声をかける拓也。

そのデジモンは人間がいる事にまず驚き、おずおずと問いに答える。

「そ、その大会なら・・・あ、明日行うらしいけど・・・」

小さく答えながら、近くの幟（のぼり）を指差した。

幟に書かれた文字を読み、大がおぉ！と復活する。

〈明日、この町でバトル大会を行います！！〉

と表記されており、大もその意味を理解した。

「明日、か。それまで何すっかなぁ・・・」

拓也が意外に近かった事に驚き、とりあえず何をして1日を過ごすか考える。

そこへ遅れに遅れて皆が到着した。

「い、いきなり走って、如何したんだよ？」

太一が息を整えながらも先に到着した2人に問いかけると、大がこ

れを見よ!と幟の文字を指差す。

「「「「「「「「「バ、バトル大会ぃいっ!?」」」」」」」」」

大きく反応したのはパートナーデジモン達であり、人間達は顔を見合わせていた。

輝二達に至ってはやっぱりか・・・と脱力している。

この町に来る理由はそれほど多くない。

拓也や大が好むものであり、急ぐ程のものと言えば分かっていた。

輝一は例外として、だ。

「ま、まさか出るの?」

嫌そうな表情を浮かべたピヨモンが、思わず空に近寄る。

「出るのは出たい奴だけ、な」

拓也が当然だろ、と返した直後良かったぁと数名の者達が安堵の息を吐いた・・・。

82話：あの時の・・・（後書き）

・・・ベルゼブモン（&インプモン）の性格や口調って、こんなんだったけぇぇえ!?↑困惑の極み

間違っていたら、どうぞ指摘して下さい！

土曜に1話くらい投稿出来る・・・かもしれませんが、日曜は用事があって難しいです。

日曜の午後、それも夕方あたりなら投稿出来る・・・とは思います。

すいません。↑m（＿＿）m

８３話：苦い決断（前書き）

ちょっと残念な結果になってしまう最後です。

８３話、参ります！

83話：苦い決断

「「「「「「「「「「「「「「・・・」」」」」」」」」」」」」」

町のデジモンを含む多くの者達が、自らの視界に映っている出来事に唖然としていた。

その視線は一点に集中しており、その先にいるのはカレーをひたすら頬張る泉。

「・・・前にもこんな事あったよなぁ」

拓也が食事処の壁に頭を打ち付け、秋葉マーケットにて同じ事があったのを思い出す。

カレーライスを30皿食えば何やら貰えるらしく、食べ切る事が出来ればお代も要らないと言う店のデジモンの言葉を聞き、泉が食らいついたのだ。

泉の腹に潜むブラックホールを知らない者達は、現在20皿を余裕で食べ終えた光景に眼を丸くしている。

拓也達に至ってはもう知らないと、完全に放置状態で店の外にて待機していた。

「足りないわよ～、ジャンジャン持って来て～」

空になった23皿目をブンブンと振りながら、厨房の方へ声を張り上げる泉。

そもそもは明日開催されるバトル大会までの暇潰しだったのだが、この店の幟を見つけた途端に泉の眼が変わったのである。

「い、泉ちゃんすごいね・・・」

「あり得ない・・・」

呆然とするヒカリとテイルモン。

その2人の発言に、周りにいた観客のデジモンまでもが激しく首を振って頷いた。

「一体どんな腹してるんだろ・・？」

モノドラモンが興味深げに呟くと、遼が顎に手を当てて考え込む。

「腹にブラックホールでも飼ってんじゃないか・・？」

「おぉ、それなら理解出来るな」

遼の言葉に頷くモノドラモンだが、ブラックホールを腹に飼うという事自体あり得ない、とレナモンが言い返す。

レナモンの隣で、カードポーチを整理している留姫。

今のうちにカードの位置を把握しておくんだとか・・・。

「これは僕にも理解不能だな・・・」

トーマが苦笑しながら頭をかく。

「マスター、外へ出ませんか。少し暑苦しい気が・・・」

ガオモンが額に汗を浮かべながらトーマを見上げ、外へ出る事を進めた。

そうだな、トーマは頷き涼しい風を当たりに店から出る。

外へ出ると双子2人と友樹、純平の4人が楽しそうに話していたが、拓也の姿が見えなかった。

「1人いないようだが・・・」

「あぁ、バトルする場所の様子を見に行く、とか言って町の中に消えましたよ」

辺りを見回して探して入るトーマに、輝一が説明する。

かと思えば、道の真ん中を走ってこちらへ駆け抜けて来る拓也を発見した。

よほど急いで来たらしく、輝二達の前で息を整える。

「た、大変だっ。ギ、ギズモンが来たぞ・・！」

息が整っていないまま慌てて放す為声が揺れていたが、その場にいた者達は顔を見合わせて理解した。

直後店内から歓声が上がる。

如何やら３０皿食べ終えたらしい。

「何貰ったの～？」

「秘密で～す」

ワイワイ騒ぎながら、淑乃と泉を先頭に店内から一同が出て来る。

泉の腹は、例の如く膨れた様子は全く無い。

「食べ終わったところ悪いんだが、ゆっくりしている暇は無いぞ」

輝二が呑気に話し合っている泉達に鋭く声を発し、会話を遮断させる。

「何で？」

「ギズモンだ。急げ」

輝二の一言で、全員の顔から笑みが消え真剣な顔つきになった。

「まずはこの町から出る。ここのデジモン達に被害を出さない為だ」

トーマが素早く判断し、一同は町を離れ草原に辿り着く。

ギズモンは一行の上空で浮遊しており、主にＸＴが多い。

ＮＴは１体もおらず、ＸＴや数体のＡＴのみだ。

珍しいとは思いながらも、パートナーデジモン達は完全体辺りまで進化する。

インプモンは容赦無く究極体のベルゼブモンに進化し、次々とギズモンを撃ち落としていった。

やはり七大魔王のデジモンがいるのは頼もしいと感じ、一同の士気が上がる。

「いっけぇ！メタルグレイモン！」

「あぁ！」

「ライズグレイモン！撃ち落とせっ！」

「おうよ！」

太一と大が声を張り上げ、メタルグレイモンとライズグレイモンは必殺技でＸＴ数体を撃墜する。

「メガログラウモン、右に3体！」

「任せて！」

「パイルドラモン、気をつけろ！」

「後ろだよ！」

「了解だ！」

啓人や大輔、賢もパートナーデジモンを指示して注意を促した。

「でぇりゃぁぁあっ！」

拓也は魂広して龍魂剣を握り、ＡＴ全て斬り裂く。

啓人達も見ているだけでなく、カードの援護を行っていた。

「カードスラッシュッ、＜天の祝福＞！」

啓人が１枚のカードを火花を散らせながらデジヴァイスにスキャンし、味方パーティの攻防力を上げる。

「おぉぉっ！」

ベルゼブモンが弾丸を連発し、ギズモン達の体に穴を開けていった。

レイピアを使って竜巻を巻き起こしていた泉の背後に、１体のＸＴが迫る。

――ザシュンッ！

接近していたＸＴを輝二が一閃して斬り捨てた。

「背後」

「あ、ありがと」

泉は油断していた訳では無いが、それでも助けてもらった訳だから礼を言う。

輝二はすぐに別の個体へと走って行ったが、妙にその背中が頼もしいと感じる泉。

軽く笑みを浮かべて、レイピアを握る手に力を込めた。

――ゴォォォォッ！

竜巻を発生させ、ＸＴ数体を一気に巻き込む。

ほどなくして戦闘は幕を閉じ、進化していた者は成長期まで退化した。

戦闘中にトーマがバトル大会について考え判断をしかねていたのだが、拓也と大には悪いと思いながらも決意する。

「２人には悪いんだが・・・早々にあの町を去ろうと思う」

トーマが遠くに見える、バトル大会開催地であるあの町を指差してそう言った。

「・・・何で？」

拓也が意味が分からないとでも言いたげに、トーマと町を見比べる。

「いつギズモンが襲ってくるとも分からない中、長時間も‘町’という無関係なデジモン達を巻きこむ場所にはいられない」

「むむ・・・」

大もトーマの意見は正しいと思っていたので、反論のしようが無い。

町は早々に去る。

それつまり、バトル大会には出場しないという事だ。

拓也と大は勿論の事、少し出たかったらしいブイモンと大輔も肩を落としている。

「すまないね」

トーマは苦い笑みを浮かべながら、次の目的地を検討する為に純平と相談を始めていた・・・。

83話：苦い決断（後書き）

大「次の大会は来年か！？」

拓也「そうなるな」

アグモン「1年も待つなんて退屈すぎる！」

ブイモン「俺も同じくそう思う！」

大輔「何熱論してんだよ」

拓也「それだけ出たかった、って事だろ」

大輔「ふ～ん、ブイモンが、ねぇ・・・」

ブイモン（何か視線を感じる・・・）←ブルリ

如何でしょうか。

最後は残念な結果となってしまったものの、泉の心に変化です！

他にも要望があれば、お気軽にどうぞ！

８４話：テイルモン消滅！？（前書き）

題名からしてかなりやばいですね。

今回はテイルモン大ピンチです！

８４話、参ります！

８４話：テイルモン消滅！？

「むっずかしいなぁ・・・」

純平が苛立ちを覚えて髪をかきむしり、トーマと共に地図と睨めっこしている。

「残っているのは・・・七大魔王とロイヤルナイツ、それに四大竜なんかもだな・・・」

「他にも古代聖獣型デジモン達が残っています」

トーマの言葉にガオモンが付け足し、あぁそうだったと２人は思い出した。

これは例外だが、余所のデジタルワールドから来た者達もいる。

「何だっけ？ダーク・・・なんちゃら」

「マスターズ！」

とぼける純平に、丈がビシッと言い切った。

そうそうと頷く純平だが、ダークマスターズが何処にいるのかも分からない。

「四大竜・・・あ、チンロンモンはブラックウォーグレイモンが倒してたな・・・。でもやっぱ・・・神殿みたいな場所にいるのか・・？」

純平は地図をむむむと眺めるが、中央神殿は粉々のドロドロに溶けてしまっている。

「陸でダメなら・・・海か！」

純平ははっとしたように地図へ眼を走らせたが、トーマは怪訝な顔をした。

「海底に神殿でもあるのかい・・？」

「あったはず・・・なんだけどあれは何処だったっけなぁ・・・」

1人悩む純平の周りでは、皆が呑気に会話している。

喧嘩に走っている者達もいる訳だが・・・。

ヒカリはボ～ッと輝一の背を見つめ、膝を抱えて顔を埋めていた。

「ヒカリ、如何した？最近変だぞ」

テイルモンが心配して声をかけると、はっとしたようにヒカリが顔を上げる。

「あ、ごめん。何？」

「・・・何でも無い。気にしないで」

頭上にクエスチョンマークを浮かべるヒカリだが、テイルモンは納得がいかないようである。

ヒカリは心を固め、喧嘩中の2人を眺めている輝一に歩み寄った。

「あ、あの・・・」

「え・・？」

いきなり声をかけられた輝一は、誰かと背後に振り返る。

ヒカリが立っている事を視界に納め、何？と聞き返した。

「えと・・・この前のお礼、ありがとう・・・」

ヒカリは頬を赤らめて、人質になった時の礼を言う。

輝一はいつの事かと考えてあっと思い出し、思い出したうえで不思議に思っていた。

「あれ？お礼は言われたと思ったけど・・・太一さんだったかな・・？」

記憶が如何も曖昧な輝一は、変だと頭をかく。

ヒカリもその時は意識が朦朧としていた為、良く覚えていなかったもののすでに礼を言っていたと知り、ほっと安心した。

助けてもらったと言うのに礼もしていなかったとなれば、嫌われると思ったのだ。

（嫌われる・・？何で、こんなに嫌なんだろ・・・）

ヒカリは，嫌われる，という言葉を妙に不思議に思い、深く考えている。

「――ん、――リちゃん、お～い」

気づけば輝一に肩を掴まれ、揺さぶられていた。

「あ、はい！」

思わず驚いて背筋を伸ばしてしまうヒカリ。

輝一は疲れてるんじゃないか？と言ってきたが、正直なところ疲れておらずただ考え事でボ～ッとしていただけなのだ。

「だ、大丈夫。疲れてないよ。えっと・・・輝一君で、向こうが輝二君だよね・・？」

「そう。見分けにくいかな・・？」

輝一が頬をかいて苦笑しながら、自分を輝二がどれほど似ているのか確認してみる。

「そうでもないよ。輝一君は帽子被ってるし、輝二君はバンダナしてるから・・・」

ヒカリは少し離れた所にいる輝二と、目の前の輝一を見比べ、本当に似ている事を改めて認識した。

それもそうだ、と輝一は笑みを浮かべ大丈夫だなと安心する。

「・・・こ、輝一君って――」

「シッ」

声をかけようとしたヒカリに、輝一が静かにと人差し指を立てて合図した。

その眼は戦闘時のような真剣な瞳である。

見れば周りのデジモン達もピクリと反応し、一斉にバッと天へ視線を向けた。

テイルモンがすぐさまヒカリの前に立ち、大空より舞い降りて来る敵を睨む。

「ＸＴ、か」

輝一が視力を上げて正体を掴んだ。

ＡＴ、ＮＴの姿は共に無く、今回はＸＴのみである。

「かなりの数だな・・・。ちょっと下がってて」

輝一は敵を見上げたまま、ヒカリを後方へ下がらせた。

ヒカリはコクリと頷き、スッと後ろへ身を引く。

「君、パートナーデジモンならしっかりと守りなよ？」

「誰に言っている」

輝一がテイルモンに冗談半分でそう言うと、テイルモンは鼻で笑って言い返してきた。

「上等上等」

輝一は満足気に頷き、皆と共に敵を撃つ為槍を手に駆け出す。

輝一の隣に輝二が近寄って来た。

「俺は右」

「なら左」

短く言葉で交わし、2人は左右へ散開する。

輝二が右へ、輝一が左へ、そして中央に拓也だ。

「狙いは一撃必倒ぉ！」

拓也は龍魂剣を頭上に振りかぶり、ギズモンに斬りつける。

否、叩きつけたようなものだ。

それに進化したライズグレイモンが続き、銃弾を連発する。

「＜ダブルインパクト＞！」

ベルゼブモンもいつの間にか進化しており、両サイドにいたギズモ

ン４体程を撃ち落とした。
ヒカリの紋章が輝き、テイルモンが光に包まれる。
「テイルモン、超進化っ！・・・エンジェウーモン！」
白衣を纏い、腕に弓の身となる羽を生やし、背中には白き翼を持っていた。

――――――

エンジェウーモン
完全体。天使型。必殺技は＜ホーリーアロー＞

――――――

エンジェウーモンは右手の弓に光の矢をつがえ、１体のギズモンを撃ち落とす。
倒されて出現したデジコードは、拓也達がすぐさまスキャンしていった。
あらかた倒し終わり、後数体という時だった。
――バキュゥンッ！
「きゃぁっ！」
レーザー音とデジモンの悲鳴が聞こえる。

全員の視線が集まると、1体のギズモンの前でエンジェウーモンが倒れていた。

「エンジェウーモン！」

ヒカリが駆け寄り、大丈夫!?と声をかける。

エンジェウーモンは左足を撃たれたらしく、そこからデータが光となって消えかけていった。

ヒカリが立つ地面に影が差す。

バッと振り仰ぐと、ＸＴがレーザーを放とうとしていた・・・。

８４話：テイルモン消滅！？（後書き）

今回は輝一とヒカリを少し近づけました。

輝一は全く持って自覚無し。

そしてエンジェウーモン大ピンチ！

ヒカリも危険！

絶対絶命か！？

続きは次回です！↑初めてまともに宣伝した

８５話：癒しの川（前書き）

８２話の後書きで書いておきながら、予約投稿出来ました。

ま、こんなの皆さん慣れちゃいましたよね。

私、全く計画性無いですもん。

皆さんにとって分かり切った事、はい。

これからも何日に投稿が難しくなる、とか言うのがあると思いますが、あまり信用しない方が良いかもしれませんね。（笑）

まぁ、それは置いといて・・・。

果たしてエンジェウーモンとヒカリの運命は・・！

最後にはヒカリが・・！？

８５話、参ります！

85話：癒しの川

ヒカリが立つ地面に大きな影が差し、ギズモンがレーザーを放とうとエネルギーを溜めていた。

ヒカリは撃たれると自覚していたが、足がすくんで動けない。

「ヒカリ！」

太一の大声ではっとし、それと同時にレーザーが放たれた。

――ザシュッ！チュンッ

何かが貫くような音が聞こえ、地面にレーザーが直撃する。

ヒカリは、いつまで経っても痛みを感じない為、顔を上げた。

「ッ・・！」

目の前に槍の穂先が迫っていたのが、視界に入って眼を見開く。

槍はギズモンを見事に貫き、ヒカリに当たる寸前で止まっていた。

「ふぅ・・・」

遠くにいた輝一がセーフと息を吐き、ヒカリに槍の穂先が当たらなかった事に安心する。

力加減に自信が無かったものの、何とか成功したらしい。

走っても間に合わないと判断したので、瞬時に槍を投擲したのだ。

（投げるなんて事、滅多にしないんだけど・・・）

今のを入れても、片手で数える程しか槍を投げた事が無い。

ギズモンから槍を引き抜き、浮かび上がったデジコードをスキャンする。

「ヒカリ、無事か？」

太一が蒼白な顔でヒカリに駆け寄り、無事な事を確認した。

「ッ！エンジェウーモン！」

ヒカリがバッと振り返ると、エンジェウーモンはテイルモンに退化しており、左足は消えている。

周りのデジモン達も進化を解き、心配そうに駆け寄った。

一番に健良が駆け寄り、カードポーチをあさる。

「カードスラッシュ、＜生還＞！」

前に、銃で撃たれたテイルモンとガブモンの傷を回復したカードだ。

今回も効くかと思われたカードは、データ消滅には力を発揮しない。

「ダメ、か。啓人、何か持ってない？」

健良は啓人も含めて3人に問いかけるものの、データ消滅に対するカードなんて誰も持っていない。

3人共首を横に振って否定の意を示す。

「テイルモン、テイルモン・・！」

ヒカリは瞳に涙を溜め、必死に呼びかけるものの眼を開けないテイルモン。

テイルモンを抱きかかえるヒカリを見ていた輝一は、はっと何か重大な事を思い出す。

（傷を直す、場所・・！）

魂広したままだが、槍は消して現在の場所を確認した。

（中央大陸、西側・・・。行ける！）

ヒカリに歩みより、手を取る。

「え・・？」

「傷を直す場所がある。こっちだ」

ヒカリの顔がパァッと輝き、大きく頷いた後すぐに立ち上がった。

「すぐ戻る」

「急げよ！」

輝一は拓也に一声かけ、エンシェントスフィンクモンの能力である空を駆ける力を使用し、天へ舞い上がる。

「何処行ったんだ？」

大輔が心配になって拓也に尋ねた。

「‘癒しの川’だ。傷がたちまち治るっていう水が流れてる。ここからそんなに遠くはないけど、間に合うか如何かは微妙。それにあの水で治るかも分からない。つっても、ここで何もしないよりはましだな」

うん、と拓也は頷き、首の後ろで手を組む。

間に合わなければ消滅してしまう為、無理でも間に合わなければならない。

――トッ、トッ

空中を輝一が駆け、足音が波紋のように広がる。

「テイルモン・・！」

ヒカリは右手で抱きしめたテイルモンの名を呟き、流れ落ちる涙を止められないでいた。

「大丈夫」

輝一が下に広がる森を見渡しながら、ヒカリに声をかける。

「間に合わなくても、間に合わせる」

前方に鋭い視線を飛ばしながら、川を探す輝一。

「うん・・！」

ヒカリは下半身が消えてしまったテイルモンを強く抱き締め、間に合う事を心から願った。

――ザッ

輝一が足を止め、広大な森の上空で立ち止まる。

周囲に視線をさまよわせ、川を探した。

（何処だ・・！この辺りに・・・）

ふと視界の端で、光る物が見える。

「あった・・！」

輝一が見つけると同時に、ヒカリがはっと顔を上げた。

テイルモンが胸の部分まで消えているのを確認し、輝一は一気に駆け出す。

――ダンッ！

地面に着地し、小川の淵にヒカリを下ろした。

「水に・・！」

輝一の意図を悟り、ヒカリはバッと駆け出してテイルモンの体を水に浸ける。

「お願い、戻って・・！」

ヒカリが手を組んで祈り、ボロボロと涙を流した。

テイルモンには生気が無く、冷たく冷え切っており鼓動を感じない。

「・・・」

輝一は祈るヒカリをジッと見つめ、小川を見た。

（確かにこの川だ・・・。間違ってない）

自信を持って頷き、ヒカリを励ますように肩に手を置く。

「大丈夫」

テイルモンを真っ直ぐに見つめたまま、確固たる意志で頷いた。

「テイルモン・・・。戻って！」

ヒカリが強く思うと同時に、胸の紋章が輝き出す。

諦めという、暗闇、に落ちず、信じるという、光、を浴びたのだ。

――キュィィィンッッ！！

小川の水が眩い光を放ち、森の一部を一面の白に変える。

消滅したデータが集い、テイルモンに集束していった。

ヒカリの顔がパッと明るくなり、頬を伝う涙の量が多くなる。

閃光が静まった時には全身を取り戻したテイルモンが眠っており、ヒカリが抱き上げた。

「テイルモン、良かった・・・」

安堵の息を漏らすヒカリだが、テイルモンが目を覚まさない事に気づいて不安になり、輝一を見上げる。

「はは、大丈夫。疲れて眠ってるだけだ」

それを聞いて安心するヒカリ。

輝一は右腕を小川の水に浸した。

不思議そうにそれを見ていたヒカリだが、輝一の手首から血が滲み出ているのに気づく。

それも、ここまで来るまでに自分が掴んでいた部分だった。

恐らく手に力を込めすぎて爪で切っていたのだろうが、テイルモンの事が気がかりで気づかなかったのだろう。

輝一は文句の1つも言わず、痛みをねじ伏せてこの川を探してくれていたのだ。

「ご、ごめんなさい・・！」

「ん？あぁこれ？大した事無いよ、こんなのよくある切り傷だから」

輝一はそう言って視線を水に落とすと、フッと輝一の眼から光が消え夢を見ているような朦朧とした瞳へと変化する。

突如輝一の体から闇が溢れだし、水面を伝って川の上を流れた。

不安になるヒカリだが、傷口が塞がっていくのを確認する。

輝一は少しの間水に浸けていると、傷口が塞がったのを確認して体を起こした。

闇は輝一のもとへ吸い込まれるように戻り、その力を漲らせる。

傷は無かったかのように塞がっており、体力も力も共に回復していた。

「ありがとう。テイルモンを助けてくれて」

ヒカリは頬を伝っていた涙を拭いながら、輝一に礼を言う。

「どういたしまして」

輝一はスッと帽子を軽く上げて会釈し、軽く笑みを浮かべた。

「よし、帰ろうか」

輝一は座り込んでいるヒカリに手を伸ばし、森の中を見つめる。

ヒカリは一瞬戸惑ったものの輝一の手を取って立ち上がり、森の中を見ている輝一の横顔を見つめていた。

（あぁ、そっか・・・。私、あの夜で正面から会った瞬間から、輝一君の事・・・）

そこまで考え思わず頬を赤らめるヒカリだが、輝一は額に冷や汗を浮かべていた・・・。

85話：癒しの川（後書き）

如何だったでしょうか、最後。

私こういうの苦手で、得意じゃないんですけど・・・。

ヒカリはついに！

ですね。

でも告白はまだ先、ですかねぇ・・・。

ヒカリって積極的なタイプじゃないと思うんです、私的には、ですけど・・・。

如何なんでしょう？

積極タイプなんでしょうか・・・。

教えていただければ、それなりに考えようかなと思っております。

あと、太一と空、もしくはヤマトと空をした方が良いのでしょうか・・？

岳が大輔好きって良く聞きますけど、本当なんですかね。

いや、書きませんよ・・？

空が恋ってのは書くと思いますけど、岳は・・・無いですよねぇ。

空がどっちを好きになるのか、皆さんのご希望にお任せします。

８６話：魂話の尋ね（前書き）

ヒ、ヒカリの性格が分からない・・・。

とりあえず８６話、参ります！

86話：魂話の尋ね

「ど、如何したの？」

輝一が困ったように顎に手を当てて考えているのを見、ヒカリが怪訝な顔で問いかけてみる。

「あ、いや・・・まぁとりあえず」

輝一は曖昧に答えてヒカリの手を握り、再び空へと駆け上がった。

いきなり手を握られて頬を染めているヒカリは、顔を隠す為俯く。

輝一は森の向こうを見渡し、何処までも草原が森を覆うように広がっている事を知った。

（ちょっと・・・しくじったかな）

苦い笑みを浮かべて如何するかを考える。

ふとヒカリを見下ろすと、俯いている為気分が悪いのかと勘違いしてしまった。

「何処か悪いのか・・？」

「う、ううん。全然大丈夫・・・。それより如何したの？さっきから困ったような顔してるけど・・・」

ヒカリが不思議そうに首を傾げると、輝一は空いた左手で頬を書く。

「これがまた情けない事に・・・迷った」

「・・・・・・。え」

輝一の一言でヒカリは思わず身を固めてしまい、しばらくそのままだった。

輝一は皆の気配を探そうとしたが、何より離れ過ぎてしまったようでそこら辺にいるデジモンと間違えてしまう。

そしてもう1つ。

先程からずっとしている所為か、ヒカリの手を握っている右腕が痺れてきた。

これぱかりは痛みよしきつい。

早く何とかしなければ痺れで麻痺してしまい、ヒカリを落としてしまう。

「ちょっとごめん」

「え・・？」

輝一が呟くと同時にフワッと上へ投げ上げられるヒカリだが、次の時には輝一に背負われていた。

「え、え？」

一瞬の事で状況が掴めないヒカリは、テイルモンを右脇に抱えたまま周囲を見回してしまう。

「ごめんごめん。腕が痺れてきたから、仕方無くこうさせてもらった」

「え、あ、こっちこそ持ってもらっているのに・・・私、重いかな・・？」

「いや、泉よりは軽いから」

輝一はそう言った瞬間何故か背中に悪寒を感じたような気がして、小さく震える。

「む・・・」

同時刻、何故かは知らないが泉は顔をしかめていた。

「さぁて、如何やって帰るか・・・」

輝一は森を取り囲む草原を睨み、一同の居場所を考える。

少し考えてふと気付く。

魂話があったではないか、と・・・。

すぐに己の魂に集中し、ブワァッと自らの気配を広げた。
これが何処かにいる皆のもとへ届けば、拓也達と会話出来るはず。
【拓也、輝二・・・。誰でも良い、返事を】
そう心の声を飛ばして少しすると、向こうから返事が返って来た。
【輝一か？そっちは如何なってる】
受け取ったのは輝二らしい。
流石双子と言えようか、何処にいても反応は早いようだ。
【こっちは無事に終わった。のは良いんだが、帰り道が分からなくなった。情けない事にな】
【つまり迷子と・・？】
【その言い方はやめてくれ】
輝二の呆れたような返事を聞き、思わず苦笑する輝一。
ヒカリは急に苦笑いした輝一に怪訝な顔をしていたが、魂話中の輝一は全く気付いていない。
【悪いんだが、何か目印になるような物を空へ放ってくれないか？】
【目印になるような物？・・・了解した】

そこで魂話は切れ、輝一はとりあえず何とかなったと安堵の息を漏らす。

「もう少ししたら信号が来る。周りを注意して見て欲しいんだ」

輝一は自分の背にいるヒカリに声をかけ、草原の方を見つめた。

「良いけど・・・如何してそんな事が分かるの？」

ヒカリは当然のように聞き返してくるが、輝一は返答に困る。

ヒカリは魂話を知らない訳だ。

ならば一から放した方が良いか、と考える。

「魂話って、知ってる？」

「魂話？ううん、知らないよ。聞いた事も無いかな」

「だろうな。魂話って言うのは、魂の会話の事で遠くに離れていてもその人と話す事が出来るんだ」

輝一の説明にヒカリが驚いたような顔をした。

「その魂話、私も出来るの？」

「出来るはずだけど」

輝一はそう答えたものの、魂話を自然と出来るようになっていた為、如何やってするのかと問われても分からない。

丁度その時、草原から信号弾が炸裂した。

時間は少し遡り・・・。

「さて・・・」

輝一からの魂話を受け取った輝二は、如何やって場所を伝えるか考える。

ふと大達と話しているイクトに眼が止まった。

イクトが信号弾を持っていた事を思い出し、肩を叩く。

「何だ？」

イクトが不思議そうに振り返った。

「信号弾、貸してくれ」

「信号弾？良いぞ」

イクトは懐から拳大の物を取り出し、輝二に渡す。

渡す際に投げ方やピンの抜き方も教え、輝二がそれを実践した。

――パァンッ！

天高くまで閃光が走り、降り注ぐ太陽光が強くなったように感じる。

「何やってんだ？」

拓也が破裂した信号弾を見上げ、輝二に問いかけた。

輝二は魂話を受け取ったという事を簡単に説明し、拓也はなるほどと頷く。

「魂話って、何？」

その会話を聞いていた皆を代表して、淑乃が疑問を投げかけた。

拓也は説明力が劣るので、代わりに輝二が簡潔に説明する。

「へぇ、そんな事を出来るの」

「あぁ」

淑乃がすごいわね、と感心しているのを見て拓也が魂話を繋いでみた。

【こんな感じにな】

それを聞いた皆が驚いたように耳を触る。

「すごい、頭の中に響いてきた・・・」

「如何やってやるんだ？」

大輔が面白そうに興味を示し、拓也に詰め寄った。
拓也は説明が苦手なうえに、魂話の事を如何やって教えたら良いのかと困る。
「如何って言われてもな・・・」

「もうすぐ、だな」
輝一が空を駆けながら、ヒカリに到着を知らせた。
「ぅ・・・」
丁度テイルモンが目を覚まし、ヒカリが起きた!と顔を輝かせている。
「ここは・・?私は確か、撃たれて・・・」
「大丈夫、もう治ったから」
ヒカリは若干目尻に涙を溜め、テイルモンに状況を説明した。
テイルモンが輝一に礼を言うが、輝一は笑って返す。
ヒカリはもうすぐ着く、という輝一の言葉を思い出してはっとした。
今更ながら、輝一に背負われているという事に気が付く。

「こ、輝一君、出来れば下ろしてくれない？」

少し頬を赤くして慌てながら、ヒカリが言葉を発した。

「え、まぁ、良いけど」

輝一は理由が分からなかったものの、ヒカリを背中から下ろし手を握った状態で運ぶ。

ヒカリが安堵の息を漏らすのに、テイルモンは怪訝な顔をしていた・・・。

８６話：魂話の尋ね（後書き）

大「魂話って何だよ！」

拓也「だぁかぁらぁ！今分かりやすい説明考えてるって言ってるだろ！」

大「お前の説明、分かりやすい時あったか！？」

拓也「やかましいっ！」

87話：気配を引け（前書き）

87話、参ります！

87話：気配を引け

皆と合流する輝一とヒカリ、テイルモン。

帰った直後、テイルモンが治っている事に驚いた面々。

特にトーマの反応は大きかった。

回復不可能だと思い込んでいたトーマの考え方を、丸ごとひっくり返された瞬間である。

輝一は言い合っている拓也と大を見て、何があったのかと輝二に確認した。

「・・・魂話の説明で」

その一言で充分だったらしく、もういいと輝一が手で制す。

こっちでも同じ事があった、と苦笑いを浮かべる輝一に輝二が慰めるようにポンポンッと肩を叩いた。

「さっさと教えろよ！」

「いいから待てよ！こちとら考えてるんだからっ！」

バチバチと火花を散らす2人を止める事無く、アグモンが笑いながら見ている。

「お2人さん？」

――ギクッ

2人の横に腕を組んだ泉が立つと、2人は喧嘩を止めて引きつった笑みだったものの仲直りを始めた。

恐ろしい、と周りの者達が泉を見つめ、淑乃に至っては泉という人材に感謝している。

「大がああも簡単に操作出来るとなると、嬉しいわね～」

「淑乃、何考えてるの？」

ララモンが疑いの眼を向けて淑乃をジ～ッと見つめるが、淑乃は鼻歌で誤魔化した。

トーマは待っている時間が勿体無いので、純平と相談して目的地を話し合う。

丁度その時、あっと拓也が顔を上げた。

「何つ～の？魂に意識を集中させて、気配みたいのを広げる。みたいな？」

「疑問形で返されてもこっちが困るだけだ！」

大はそう言い返すものの、1つ試しにやってみる。

「えぇっと、何だって？魂に意識を集中させて・・？」

「たぶんそう」

拓也も自信が無い方なので断言は出来ないが、それに近いと思っていた為コクリと頷いた。

それを聞いていた皆も同じように試してみるが、後少しというところで繋がらない。

魂に集中するというのは出来るようだが、広げるというのが難しいようだ。

普段から炎や光を纏った事が無いのだから、‘広げる’以前に‘纏う’も分からないだろう。

「もうひと押し、って感じだな」

拓也が頬をかきながら少し考え、魂話を繋いでみた。

【聞こえるよな?】

「お、聞こえる聞こえる」

【広げるのが難しんだったら、こっちから引っ張ってやるっ】

「・・・は?」

拓也がニヤッと笑うと、大は引きつった笑みを浮かべたまま表情を固めた。

【よい・・・しょぉぉぉおおっ!!】

「うぉ！？」

大は突然強風に吹かれたように感じ、自分の気配が引っ張られるのを悟る。

「心の中で話してみろよ」

拓也があえて声を使って発し、大に促してみた。

こんな一瞬で出来る訳が、とは思いつつもやってみたくなった大は興味に勝てず心の中で言葉を話す。

【で、出来たか？】

大の声が頭に響いてきた為、拓也がグッと拳を握った。

「おぉ～出来た出来た！俺の説明ナイス！」

「いや、お前の説明が良くて出来た訳じゃないと思うぞ！」

大が素早く突っ込んで否定する。

大の声は拓也だけに聞こえていたようで、周りの皆は顔を見合わせて首を傾げていた。

喧嘩を始める2人は放っておき、輝二達は他の皆にもして欲しいと頼まれた為行動に移る。

と言っても、如何しても1人ずつになってしまうのだが。

「これ、かなりの人数だよな・・・」

輝二達が皆の気配を外へ広げている最中に、半分は終わったところで輝一が顔を上げた。

デジモンも含めると５０近い。

――ツンツン

後ろから肩を突かれ、輝一が振り返ったところヒカリがいた。

「私、まだだからして欲しいんだ」

「あ、やっぱ魂話してみたかったんだ」

輝一はＯＫと頷き、ヒカリの気配を外へ引っ張り出す。

グゥンと心深い所にある何かを引きずり出されるような感覚を覚え、足がふらついた。

「はいしっかり」

「ヒカリ、足足」

輝一がガシッと肩を掴み、テイルモンがポンポンとヒカリの叩く。

「う、うん。何かグラッと来るね」

ヒカリは視界が落ち着いてきたのを感じて口を開き、ふぅと一息つ

いた。

輝一はしゃがんでテイルモンに移り、また気配を引く。

「おっと」

テイルモンもふらついたようだが、自分でバランスを取っていた。

「よし、終了」

輝一は終わった終わったと立ち上がり、他の皆も魂話が出来るようになっているのを確認する。

それぞれ、魂話が使えるようになった事を喜んでいた。

「これなら作戦も上手く伝えられるな」

頭の回転が速いトーマは、戦闘方面でも役に立つ事に気づいている。

「こ、これ、何かとこっちに疲れ来ない？」

皆の気配を引っ張り終えた泉が、額を伝う汗を拭いながら息を整えた。

「魂が弱い」

近くにいた輝二が間髪入れず呟き、泉がムッとして腕を組む。

「失礼ね。あんた達化物人間と一緒にしないでくれる？」

「化物人間・・・」

泉の言葉に思わず引きつった笑みを浮かべる輝二だが、忘れる事にした。

あんた達と泉は言った為、拓也と同類、という事に気づく輝二。

「おい泉――」

振り返って文句の1つでも言おうと思っていた輝二だが、泉はすでに姿を消していた。

場所は変わって目的地相談。

トーマは顎に手を当てて困ったように喉を鳴らす。

純平が海底にあった遺跡のような場所を思い出そうとしているが、あれは中まで入った訳では無いし視界の端に一瞬入っただけの建物だ。

記憶をあさっても出て来ない。

「ん？これは・・？」

地図に眼を走らせていたトーマがふいに一ヶ所を指差し、純平に尋ねる。

差した場所は地図の北西。

西の大陸、北側。

そこにポッカリと切りぬかれたような、くっきりとした円形の湖がある。

地図を眺めて何度も見てきた湖だが、薄くバツが書かれているのに気づいた。

あまりにも薄すぎて今まで気づかなかったが、注意して見ればしっかりと書かれている。

「ここは・・・」

特に何も無かったはずだ。

周りは森に囲まれ、湖の海底には・・・。

「塔・・！」

純平ははっきりと思い出す。

確かにあった。

深い水の底に巨大な塔がそびえ立っているのを、今はっきりと思い出す。

純平の眼を見開く表情を見て、トーマは次の目的地が決定したなと笑みを浮かべた・・・。

８７話：気配を引け（後書き）

今回で輝二と泉をびみょ～うに近づけ・・・てない！

あの２人難しいなこんちくしょうっ！↑キャラ崩壊

あ、そういえば空×ヤマトが１票入りました！

他にもあればどうぞ！

８８話：古代文字（前書き）

さて、今回では古代文字が出て来ます。
読める人はいるのでしょうか。
では８８話、参ります！

88話：古代文字

一行は西の大陸へ降り立ち、湖へと歩を進めていた。

「俺を馬鹿（あいつ）と一緒にするな」

輝二が、前に泉が言っていた言葉を思い出し、泉に文句を言う。

「え、何か違う訳？」

とぼけたように笑みを浮かべる泉。

思わず額に手を当てて返事を返すのも面倒になる輝二は、もういいと手を振った。

泉は何事も無かったかのように鼻歌を歌い、陽気な気分で歩を進める。

対して輝一とヒカリは、言葉を交わしているものの手は繋がないという適度な距離を置いていた。

恐らくヒカリが恥ずかしくて出来ないのだろうが、輝一は全く気付いていない。

「むぅ・・・」

その2人を後方から睨んでいる大輔がいた。

岳は大輔のそばにいたブイモンを引き寄せ、何故大輔が2人を、特

に輝一を睨んでいるのか問いかける。

「ヒカリを取られて悔しがってるんだ」

「悔しがる?」

ブイモンの言葉を聞いたパタモンが、頭上にクエスチョンマークを浮かべた。

岳はなるほど~と頷き、大輔の肩にポンと手を置く。

「何だよ」

「まぁ、頑張れ」

「は・・?」

せめての言葉をおくる岳だが、いきなり言われた大輔は理解出来ていない。

素っ頓狂な声を上げて、ポカンを口を開けたまま硬直する大輔。

「はは。面白いな大輔君は」

完全に他人事だと認識している岳は、大輔の肩を叩きながら笑った。

「大輔君って、ヒカリちゃんの事好きだったりするの・・?」

密かにそれを見ていた空が、ヒカリの兄である太一に声をかける。

太一はたぶんと頷くが、大輔の思いは届かないだろうと輝一を見ながら思った。

兄だからか、ヒカリが誰に思いを寄せているのかくらいは分かっているつもりだ。

（大輔、頑張れよ・・・）

苦笑しながら、太一は大輔に慰めとも取れる言葉をおくった。

――ピコン、ピコン

直後、何かの着信音が聞こえ、一同は視線を彷徨わせる。

最終的には、光子郎へと視線が集中した。

「え・・・」

光子郎は一瞬何かと戸惑ったが、パソコンから聞こえているのに気づいて背中から下ろす。

開いて起動させると、あっと声を上げた。

「ゲ・・・ゲンナイさんからです」

光子郎が太一に視線を送ると、太一と大輔が顔を見合わせ何ぃ！？と少し遅れて反応する。

バッと光子郎のパソコンへ集合する太一達と大輔達。

事情を知らない者達は、何だ何だとそばで話を聞いていた。

「ゲンナイさん如何したんですか！？」

いきなり着信が入ったものだから、急用だと思い込む光子郎。

パソコンの画面には短髪の男性が映っており、ゲンナイと言われたその者はノイズ混じりの声で言った。

『君達がいきなり消えたから心配――探し――そしたら、２３番のデジタルワールド――いて驚いた。無事なようで安心――何事も無くて良かった』

「は、はぁ・・・。というよりデジタルワールドに番号なんて・・・」

『パラレルワールドの番号で――因みに、私がいる――ワールドは１４番――』

流石にノイズが酷過ぎて聞こえずらいが、意味は分かる。

『あと、こちらで発見したんだが新たな紋章が――そっちに――』

「「「「「「「「「「「「えぇぇぇっ！？」」」」」」」」」」」」

ゲンナイの言葉に複数の者達が驚愕の声を上げ、お互いに顔を見合わせた。

するとデジコードがパソコンを包み込み、そこから紋章が６つ飛び出す。

それらは大輔、京、伊織、岳、ヒカリ、賢のもとへ浮遊し、正面で止まった。

思わず手を出して受け止める6人。

『‘奇跡’と‘知性’、‘情熱’と‘絆’、それに‘信頼’と‘冷静’だ。どれが誰の――分からないから――何とか――』

一応大事な部分は聞き取れたが、その後が全くだ。

そこで通信は途切れてしまう。

「あ、ゲンナイさん！」

光子郎が繋ぎ直そうとするが、デジタルワールドの壁を越えられない。

仕方なくパソコンを閉じた。

「まさか新しい紋章とはな・・・」

太一が興味深げに大輔の紋章を見つめる。

6つの紋章は突如浮かび上がり、それぞれのDターミナルへ入ってしまった。

「あ、ありゃ・・？」

大輔は勝手に入って行った紋章を取り出そうと操作するが、出て来

る気配が無い。

まぁいっか、と諦める大輔。

誰が何の紋章か分からない、というのは痛かった。

「仕方無い、か・・・」

太一も頭をかいて渋々了承し、紋章を手に入れる事が出来ただけでも良しとする。

終わったのを確認して、様子を伺っていた者達は再び歩を進め始めた。

湖へ行く間も紋章の話で騒がしい。

「大輔って情熱じゃない？」

京が絶対そうよ！と自信あり気に言うが、伊織が京さんもあり得ますよと冗談気に言った。

えぇ～、と京は顔を歪める。

「賢は冷静か知性だよな。うん、そうだ」

大輔が１人納得しながら頷き、賢は照れて首を横に振った。

「伊織君も入りそう」

「確かに」

岳の呟きにヒカリも同意する。

だといいですが、と伊織は苦笑し自分の足元を歩くアルマジモンを見下ろした。

どんなデジモンへ進化するのだろうと、期待と不安が入り混じる。

正しき進化をしてくれればそれで良いと、その時はただそれだけを願っていた。

「着いたぞ～」

拓也が湖のほとりに立って皆に到着の声を上げ、大きく手を振って知らせる。

皆が走ってその湖を眺めるが、塔らしきものは何処にも見えない。

「何処にあるんだ？」

「底」

「底ぉ！？如何やって行くんだよ」

「知らん」

大の問いにキッパリと言い切る拓也。

おい！と思わず拍子抜けする大を、サラリと受け流す拓也だった。

「ねぇ、これ何？」

湖のほとりに沿って歩いていた留姫が、声を上げる。

指差す先には、縦に2メートル程の巨大な石板が立てられていた。

「あぁそれ？ずっと前からあるみたいなんだけどね・・・」

泉が駆け寄って苦笑する。

古くて苔が生えている石板だが、掘られている文字はハッキリと読める。

？？？？？？？？？？　？？？？？？？？　？？？？？？？？？
？？？？？？　？？？？？？？？？？

「・・・デジモンの文字だ」

レナモンが小さく呟き、興味を示したトーマや光子郎が歩み寄った。

「全く読めないな」

「同じくです」

読めないとは分かりながらも、見知らぬ文字に笑みを浮かべる。

「レナモン、読める？」

留姫が石板の文字を見つめながら、隣にいたパートナーに問いかけた。

レナモンもデジモン文字だとは分かったが、何処か不自然な気がして読もうとしても読めない。

「古代の文字、だと思う」

「そう」

留姫は考えるように顎に手を当てて、喉を低く鳴らした。

「誰かデジモン文字、それも古代のを読める人いるか～？」

拓也が皆に声をかけるが、誰も首を縦に振らない。

困り果て、一同の進みは止まった・・・。

88話：古代文字（後書き）

読めた人、いるでしょうか。

因みにちょいとした規則性はあったりします。

頑張って見つけて下さい。

フフフ・・！↑不気味な笑み

８９話：水の中へ（前書き）

関係無いですが、私がデジモンシリーズ書き始めて２ヶ月です。

早いですねぇ・・・。

ババくさいです、はい・・・。

オホンッ、気を取り直して・・！

あのデジモン文字が一部だけ明かされます！

それをもとに一同解析！

８９話、参ります！

89話：水の中へ

「これは水だ！」

「違うって、道だよ！」

石板に書かれたデジモン文字を解読しようと、パートナーデジモン達が言い合っている。

言い合うといっても、一部の者達は見守る側に付いていた。

先程から一文字目の単語をめぐって、ブイモンと太一のアグモンが喧嘩している。

「何で喧嘩に発展するの～？」

頬かきながら面倒くさそうに啓人が疑問形で問いかけてみると、

「「そっちが間違ってる！」」

と、2体そろえて声を上げた。

ダメだ、と諦める啓人の隣では、喧嘩の原因レベルが低い事に呆れるインプモン。

「ちゃんと読める奴、いねぇのかよ・・・」

大輔が喧嘩を止めないブイモンを眺め、頬杖を突いたまま無意識に呟いていた。

それにぼんやりと頷く太一。
顔には如何でも良い、と書かれている。
バチバチと火花を散らす2体を見かねて、トーマが無理矢理引き離した。
「はいそこまで。馬鹿は大だけで十分だ・・・」
「んだとトーマ！」
最後に一言小さく呟いたトーマだったが、鋭く聞きつけた大が反応する。
トーマに詰め寄ろうとした大の足を、素早く泉がはらった。
「どわっ！？」
「あぁ、ありがとう」
「どうも～♪」
こける大を挟んで、トーマと泉が手を振り合う。
「やりやがったなぁ～！」
怒る大だが、泉はとぼける気も無く素直にコクリと頷いた。
大が立ち上がろうと1歩踏み出した瞬間、泉が大の腕を掴んで引っ

張り上げる。

「おわっ！？」

一瞬の浮遊感を覚える大だが、泉は左足を軸に右足で回し蹴りを繰り出した。

「一撃必倒ぉぉぉおっ！！」

大の脇腹に鋭い蹴りがねじ込まれ、吹き飛ばされる大。

近くの地面に転がり、大は眼を回して昏倒した。

「厄介払い終了しました～♪」

ニッコリ笑顔でトーマに敬礼する泉。

トーマは、いつも悪いねと動じる様子も無く礼を言っていたが、周りの者達は背筋を震わせていた。

（（（（（（（（（（（（（（（お、恐ろしい・・！）））））））））））））））

皆の心が1つになる瞬間であった・・・。

「とりあえず、はっきり分かっている部分だけでも教えてくれないかい？」

トーマがデジモン達に問いかけると、レナモンが石板の文字を粗方説明してくれる。

「これは水、こっちは塔。それから・・・いわれ、身、保つ。だと思うが・・・」

レナモンの一言で、水と証言していたアグモンがやっぱり！と胸を張った。

むむむ・・！と睨み返しながらも、文句を言えないブイモン。

「水、塔、いわれ、身、保つ・・・か。分かりそうで分からないな・・・」

トーマは石板を食い入るように見つめ、言葉を考えながら頭をかいた。

大輔の頭上にピコンッと電球が灯る。

「んじゃこんなのは？水の塔、いわれで身を保つっての！どうよ？」

「・・・すまないが全く意味が分からないし、そのままだ」

トーマが悪そうに返すと、ガーンと効果音が聞こえそうなくらい大輔が項垂れる。

そこへブイモンも駆け寄って、自分の考えが外れた事を根に同じく落ち込んだ。

黒いカーテンのような物まで見え始めた為、近くにいたものはさり気なくその場から距離を取る。

落ち込む1人と1体を、哀れみの視線で見つめる一同。

「復活は・・・厳しいかな？」

京が苦笑しながら大輔とブイモンを見て、思わず思っていた事を口にした。

隣にいた岳と伊織もコクリと、無言で同意する。

ヒカリは、輝一とある程度の距離にいた。

「これが分かれば、何とかなるかもしれないと言うのに・・・」

トーマは思わず歯がみして、読めない石板を睨む。

「とりあえず何かやってみようぜ。水に手当たりしだいやれば良いんだろ？」

拓也がブンブンと腕を回して、湖の水に手を突っ込み魂広した。

「名付けて沸騰大作戦！何ちってな」

などと拓也が言っている間、水の温度は上昇してお湯までの温度になる。

だが何の反応も無く、沸騰大作戦という物は失敗に終わった。

「ダメか～。次友樹な」

「え、僕！？」

友樹は拓也と入れ替わるように水に手を浸け、湖面を凍らせていく。
またもや変化無しだ。
「次は・・・って何かあるかよ他に」
水と言えばお湯になるか、氷になるか蒸発するかのいずれかだ。
皆も何か考えてみたものの、そう簡単に思いつくはずもない。
友樹は、とりあえず凍った湖面を元に戻しておく。
「潜った方が早いんじゃ・・・」
伊織がデジヴァイスを握ってポツリと呟き、アルマジモンを見つめた。
「それもそうだ」
「んじゃオイラも行くよ！」
頷く丈の横で、ゴマモンが歩み出る。
伊織はデジメンタルを使おうとしたが、進化が出来ない。
「あ、あれ？」
「如何した？」

不思議に思った大輔が近寄り、伊織のデジメンタルが使えない事を知る。

理由は不明だったが、とりあえずゴマモンが調査に出かけ、1体だけでは心配という丈の言葉に拓也が頷いて飛び込んだ。

少し悪い気がする丈だが、拓也は良いですよと言って勝手に水の中へ消える。

数分してゴマモンが返って来た。

少し慌てている様子で、ゴマモンが小さな前脚で表しながら言った。

「〇％＃！□×！＆¥！＝＊％＋！！」

「「「「「「「「「・・・・・」」」」」」」」」」

慌て過ぎて舌が回っていないゴマモンの言葉に、一同は沈黙する。

「ゴ、ゴマモン、慌てるのは分かるけどもう少し落ち着いて」

丈がドウドウと冗談半分で気を静めるように押さえ、ゴマモンに落ち着くよう促した。

「ダ、ダークタワーダークタワーダークタワー！！」

何度も繰り返して叫ぶゴマモンだが、そこへ拓也が現れる。

いや水の中から宙へ投げ出された。

しかも魂広しているらしく、龍魂剣を手に炎を纏っている。

――ズザザァッ！

「と・ま・れぇぇぇいいっ！！」

拓也は地面に着地するも勢いが物凄く、１０メートル程地面をすべったものの何とか停止する。

何があったのかと誰もが疑問を抱いた。

「何があった」

輝二が手っ取り早く聞いたが、拓也に説明を求めたのが失敗だったらしい。

「海蛇海蛇！塔があるのはいいけど、その周りに黒いタワー複数！」

「・・・は？」

２つ目は理解出来るとして、１つ目が分からない。

輝二も含めて、一同はキョトンとした表情を浮かべた・・・。

89話：水の中へ（後書き）

丈「ゴマモン、よくあんな宇宙人みたいに話せたねぇ・・・」

ゴマモン「急いでたんだ！仕方ないんだっ！！」↑必死の言い訳

丈「ふ～ん・・・」↑疑いの眼

９０話：進化不可能（前書き）

９０話、参ります！

90話：進化不可能

――ドッパァァァァァァァアアアンンッッ！！

「うわっ！」

「冷た！」

「何！？」

突如湖から水柱が立ち上り、一同に水しぶきが降りかかる。

湖の湖面から巨大な海蛇が姿を現した。

「あいつはっ！」

「メタルシードラモン！？」

「こんな所に！？」

太一達が驚いたように海蛇――メタルシードラモンを見上げ反射的にデジヴァイスを手に取る。

パートナーデジモンにデジヴァイスを向けるが、何とも反応しない。

「な、何で？」

「太一、後ろ後ろ！」

混乱している太一に、アグモンか注意を飛ばした。

バッと背後を振りかえる太一に、メタルシードラモンが襲いかかる。

「しま――」

「おぉぉぉおりゃぁぁぁぁぁあっっ！！」

そこへ大が乱入し、メタルシードラモンの頭部装甲を殴り飛ばした。

人間だと言うのに恐るべき力で突き飛ばし、メタルシードラモンは大きくのけ反って湖へ倒れる。

啓人はデジヴァイスで浮き出たデータを読み上げた。

「『メタルシードラモン。究極体。必殺技は＜アルティメットストリーム＞。全身を最強金属のクロンデジソイド合金で覆われた、シードラモン種の最終形態。あらゆる攻撃を跳ね返し、水棲デジモンの中では最速の移動スピードを誇る』」

「いってぇっ！」

メタルシードラモンの鼻先を殴り飛ばした大は、その合金に手を痛めてブンブンと振る。

「ってかデジソウルが出ねぇのは何でだ！？」

デジモンを思い切り殴り飛ばしたと言うのに、大の右手にはデジソウルが浮かび上がらなかった。

トーマもデジソウルを出そうとするが、出て来ないらしい。

「変だな・・・」

怪訝な顔を浮かべて考えるトーマだが、そんな時間は無い。

メタルシードラモンは体勢を立て直し、鼻先の砲身から砲撃を発射する。

「＜アルティメットストリーム＞」

竜巻のような砲撃が一同の地面に直撃し、突風を巻き起こした。

「うわぁぁっ！」

「きゃぁぁっ！」

「ぐぁっ！」

それぞれ悲鳴を上げる一同の中、唯一平然としていられたのが・・・。

「気持ちいい～♪」

風の闘士である泉だ。

そよ風に当たるかのようで、その金髪がなびいている。

「ごちそうさまでした～♪」

決して食べた訳ではないのだが、泉は食らった竜巻を集束して自分のものに上乗せした。

それをメタルシードラモンへ投げ返す。

水しぶきと共に押されるメタルシードラモン。

「出鱈目な・・！」

トーマは思わず唖然としながらも、服に付いた砂埃をはたき落す。

「ギルモン！」

啓人は進化しようとカードを握った。

「カードスラッシュ、＜超進化プラグインＳ＞！」

「ギルモン、進・・・化？」

「え・・？」

一瞬光に包まれたギルモンだったが、成長期のまま姿を現す。

「まさか・・！」

啓人は確認の為、デジヴァイスをギルモンにかざすが何の反応も無い。

究極体にもなれないのだ。

「おいおいって事は・・！」

拓也は左手を凝視するも、デジコードは出現しない。

「同じく」

輝二も反応無し、と手を振った。

「お、俺達は!?」

ブイモンが大輔に声をかけるも、大輔が無理だと首を振った。

通常進化もアーマー進化も不可能。

スピリット進化、デジソウル、カード、紋章も全てだ。

「何が如何なってんだ!?」

「ダークタワーか・・！」

訳が分からない大の横で、太一が奥歯を噛み締める。

以前より遥かに強化されている、と大輔達・太一達は悟った。

【おい、如何なってんだよ!】

拓也は自分の相棒に魂話を繋ぐ。

【分からない。何かの力に束縛されている】

アグニモンは冷静に答え、魂話を切った。

「とりあえず魂広は出来る・・・。って究極体に魂広だけってのも厳しい訳で・・・」

冷や汗を浮かべる拓也の前で、メタルシードラモンは体を起こす。

その瞳は黒く淀んでいる。

「七大魔王の奴等、操ってる・・！」

太一は自分達が苦戦を強いられたあのメタルシードラモンを、いとも簡単に操ってみせる七大魔王。

その強大さを今頃気づいたような気がして、思わず悪寒を覚えた。

「もしかして他のカードも・・・」

留姫が不安気にカードポーチへ手を伸ばし、1枚のカードを取り出す。

「カードスラッシュ、＜ホーリーヒーリング＞・・！」

留姫がカードをスキャンすると、テイルモンのホーリーリングが輝き出した。

検討違いの所に効果が出た為、留姫はカードを凝視する。

「テ、テイルモン、何か変化ある？」

ヒカリはテイルモンに確認を取るが、テイルモンは顔をしかめた。

「後少し、何かが足りない」

「そう・・・」

「呑気に話してる場合でもなさそうだ・・・」

ヒカリの横で、輝一が断罪の槍を構える。

見ればメタルシードラモンが砲身にエネルギーを溜めていた。

一気に発射される竜巻。

それを泉が受ける。

「盾は私がやるから、攻撃担当よろしく～」

「了解」

泉がそう言うと、リヒト・シュベーアトを構えた輝二が跳び出した。

砲撃を発射しているメタルシードラモンの、すぐ横に位置する。

光剣を一閃するものの、硬い合金で弾かれた。

「く・・！」

体勢を崩し、下へ落下を開始するものの泉が風で浮かせる。

「んじゃ俺も！」

拓也も泉に風を貰い、大剣で斬る事を諦め叩きつけた。

――ゴォォンッ・・！

鈍い音が響き渡ると共に、大剣を手放す拓也。

「っつ～！！」

思わず両手が痺れてしまったのだ。

メタルシードラモンは狙いを拓也へ変更し、噛みつこうとする。

そこへ大が駆け出した。

「おぉぉぉぉぉぉっっ！！」

拳を握りしめ、思い切り殴り飛ばす。

僅かに怯むメタルシードラモンだが、ダメージは小さい。

逆に高くまで跳び上がった大は、落下を始めてしまう為泉が風をおくる。

啓人がはっとしてインプモンを見るが、インプモンも進化が出来ないようで首を振った。

「殴りたい方、蹴りたい方はどうぞ。風で援護するから！」

泉がそういうと、デジモン達は成長期だと分かっていながら必殺技を放ち始めた・・・。

９０話：進化不可能（後書き）

ついに進化不可能と・・・！

次回は究極体進化可能・・・！？

お楽しみに～！

９１話：皆の絆（前書き）

今回は究極体へ！

紋章が１つ明らかに～！

では９１話、参ります！

91話：皆の絆

「＜ベビーバーナー＞！」

「＜ベビーフレイム＞！」

「＜ファイアーボール＞！」

アグモン2体とギルモンの火球が合わさり、巨大化してメタルシードラモンに襲いかかる。

「＜狐葉楔＞・・！」

「＜ブレイジングファイア＞！」

「＜ビートナックル＞！」

レナモンの鋭利な葉がテリアモンに包まれ、それをモノドラモンが纏い突撃する。

メタルシードラモンの顔面に直撃し、双方体勢を崩した。

モノドラモンを泉が風で受け止め、地面へ下ろす。

「＜ポイズンアイビー＞！」

「＜プチファイアー＞！」

「＜マジカルファイアー＞！」

「＜プチサンダー＞！」

パルモンのツタがメタルシードラモンを痺れさせ、その隙に炎や雷が襲う。

パルモンは攻撃が終わるのを確認して、ツタを放した。

巻きつけたままにしておけば、自分が持っていかれるかもしれないからだ。

「＜ナッツシュート＞！」

「＜ローリングアッパー＞！」

「＜苦無羽（くないばね）＞！」

ララモンが攻撃して牽制している隙に、ガオモンが懐へ突っ込み一撃。

空からはファルコモンが爆発する矢羽を放つ。

「＜ブイモンヘッド＞！」

「＜フェザースラッシュ＞！」

「＜ローリングストーン＞！」

「＜エアショット＞！」

「＜ネコパンチ＞！」

ブイモン達も攻撃を繰り出し、お互いにメタルシードラモンの注意が向かわないようかばい合う。

唯一デジモン達の中で成熟期だったテイルモンの技が、一番攻撃力があったもののそれでも小さい。

メタルシードラモンは煩わしそうに体を震わせ、砲撃を発射する。

それを泉が受け、無効にした。

皆がここまで協力し合った事など、今回が初めてだ。

進化も出来ず、敵と対等になる事さえ不可能。

だが諦める気は全く無い。

テイルモンはふと振り返って見てみると、最近仲間になったばかりのインプモンまで必死に闘っている。

全員を支えているものは何か。

ヒカリは協力し合う皆を結び付けているものを、その眼で理解した。

「「絆・・・」」

ヒカリとテイルモンは視線を交錯させ、お互いに意図を悟る。

（大丈夫、勝てる。進化出来なくたってここまで闘える・・！）

ヒカリはギュッと拳を握り胸に当て、意を固めた。

テイルモンのホーリーリングが輝きを増す。

「やるよ、ヒカリ」

「うん・・！」

ヒカリは絆で皆を結ばれている事が、何より嬉しかった。

ホーリーリングも、留姫がカードで強化してくれる。

テイルモンのホーリーリングが輝きを増すと、留姫がそれに気づいてカードをもう一度スキャンし、重ねがけした。

ヒカリは留姫にありがとうと笑みを返すと、頑張りなさいよとでも言いたげにヒカリの肩に手を置く留姫。

「大丈夫。勝てる・・！」

ヒカリは自分の肩に置かれた留姫の手から暖かさを感じ、背中を押されている感覚を抱いた。

隣では輝一も後衛の皆を守る為、いつでも出撃出来るように槍を手にしている。

（皆に支えられて、皆がいる・・・私がいる・・！）

――キュィィィィィイイッッ！！

突如ホーリーリングとDターミナル内の紋章は、共鳴するように輝き出す。

ヒカリが感じているものは、テイルモンにも反響した。

（暖かい・・！）

皆の絆を感じたテイルモンは、光に包まれる。

「テイルモン、ワープ進化っ！」

全員の視線が集中し、現れた桃色の巨竜に注がれた。

「ホーリードラモン！」

ホーリードラモン

究極体。聖竜型。必殺技は＜ホーリーフレイム＞

「進化した・・！」

ヒカリは驚いたように目を見開き、ホーリードラモンを見上げる。

それを見た前衛の者達は場を開け、思う存分攻撃が出来るよう配慮した。

ホーリードラモンはメタルシードラモンの背後へ回り込み、死角を取る。

「＜ホーリーフレイム＞！」

桃色の炎が吹き出し、メタルシードラモンの合金を焼き尽くした。

操られているメタルシードラモンは、悲鳴は上げないものの熱そうに湖の中へ潜り込む。

「させない！＜マーチングフィッシィーズ＞！」

ゴマモンが水中の魚達を操り、メタルシードラモンを水上へ突き上げた。

そこへ炎を溜めていたホーリードラモンは待ち受ける。

「＜ホーリーフレイム＞ッ！」

膨大な量の炎がメタルシードラモンを包み込み、合金のメタルごと焼き尽くした。

デジコードが浮かび上がり、それを泉がスキャンする。

ホーリードラモンは疲れたのか進化を解き、テイルモンに戻った。

「やったよ、テイルモン！」

ヒカリはテイルモンを抱き止め、満面の笑みを浮かべる。

「でも何で進化出来たんだろ・・・」

不思議そうに大輔が頭をかき、紋章か！と閃いた。

紋章ならば進化が出来る、という事に皆も考えが一致したようでヒカリとテイルモンを褒める。

これで少しは希望が見えたというものだ。

「ってかダークタワーの事忘れてるだろ」

拓也が鋭い突っ込みを入れ、太一達・大輔達はあっとなる。

結局はあの石板に戻ってしまった。

「またふりだしかよ！」

大輔はもういやだ～！と頭をかきむしり、ブイモンはヘナヘナ～と倒れ込む。

「兄貴～、俺腹減った～」

大のアグモンが愚痴を腹を押さえるが、大も腹が空いているのであった。

土でも食っとけ、と適当に受け流す大。

泉は戦闘が終わったというのにまた石板、その事に腹を立てている。

「この石板、本当に意味あるのかしら・・・」

ジ～ッと石板を睨み、ムッと頬を膨らました。

「湖にでもストレス発散すれば・・？」

拓也は石板を見ながら、冗談半分で言うと泉はそれをまともに受ける。

「それ良いわね！」

「え・・・」

泉はすぐに魂広し、右手に風を集中させた。

皆はすぐに距離を取って離れる。

特に大の反応は大きく、トラウマにでもなったのだろうか。

「一撃・・・必倒ぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉっ！！！」

何故かいつもより気合十分な泉は、思い切り拳を突き出し湖を半分に割った。

――ザッパァァァァァァァァァアアアアンンンンッッ！！！！

水が割れ、底にあった塔が垣間見え、周囲を取り囲むように3本のダークタワーがそびえ立っている。

真っ直ぐなタワーでは無く、根元は3本、尖端は1本という巨大なタワーだった。

半分に切断された水は、勢いを無くした所から崩れ始め水しぶきを立てて元の湖に戻る。

「あ～スッキリしたぁ♪」

笑顔満面の泉だが、皆は顔面蒼白であった。

逆らわない方が良いと、心に刻む一同。

――ズズズズッ・・！

突如足元を地響きが襲い、湖面が下へ下がっていく。

「水が・・・引いてる！」

トーマがすぐにそれを目視し、確信した。

水が全部引けば、底を歩けると。

水は最終的に水たまり程度にまで引き、一同が立っている場所を底は5メートル差となった。

水が引き、塔やダークタワーまではっきりと見える。

「ど、如何なってんだ・・？」

それは誰が呟いた言葉であろうか・・・。

91話：皆の絆（後書き）

お分かりいただけたでしょうか。

ヒカリが『絆』の紋章でございます。

進化する前の心の動きって、あんな感じでしょうか。

難しいです、むぅ・・・。

次回は塔へ！

お楽しみに～！

92話：下へ降りろ（前書き）

今回は一斉突っ込みがあります。

92話、参ります！

92話：下へ降りろ

「何で水が・・・」

湖の水が完全に引いたのを目前にし、一同は困惑する。

「とにかく行ってみようぜ！」

大が駆け出して底へ降りようと飛び出したが、トーマがガシッと掴んで止めた。

「底まで１０メートルあるんだが・・？」

「何言ってんだ！２０メートル上からドリモゲモンの背に降りても、足骨折しなかったじゃねぇか！」

「あれはドリモゲモンの背が、弾力性があったからで――」

「んな難しい事言われて俺が納得するとでも――」

「ガタガタ言わずにさっさと落ちる！」

トーマの言葉を遮った大だが、更に泉の蹴りによって底へ落とされる。

「どわっ！？」

「兄貴、可哀想～」

アグモンはさも他人事のようにそれを眺め、自分もとうっ！と下へ降りた。

大は湖のそこでピクピクと痙攣した状態で、倒れている。

「君、容赦無いね・・・」

「女は厳しくあれ！ってね～」

泉は鼻歌交じりで風を纏い、下へ降りた。

「それには同感」

意外にも留姫が頷き、レナモンと共に飛び降りる。

レナモンは留姫より一足先に降り立ち、落ちて来る留姫を受け止めた。

「ひょいっとな」

拓也も続いて降り立ち、輝二達も降りる。

デジモン達も進んで降りるが、人間は１０メートルの高さから降りるのには抵抗があった。

ヒカリは勇気を出して飛び降りると、下にいた輝一が受け止める。

それを悔しそうに見ている大輔。

トーマは運動神経を活かして、壁を滑り降りる。

太一とヤマト、賢、遼もそれに習い、砂埃を巻き上げて底へ降りた。
中学生チームも降り立ち、残るは小学生ばかりだ。

「っと」

啓人は足を踏み出して飛び出すと、ギルモンがそれを受け止める。

「カードスラッシュ、＜白い羽＞」

健良は1枚のカードをスキャンし、テリアモンの背に羽を出現させた。

難なく底へ降り立つ。

ララモンは淑乃を下へ運んだ。

「淑乃、重い」

「失礼ね」

空はサッカー部に入っていた為、足腰は丈夫だ。

ミミを背負ってバランス良く下へ降りる。

「とうっ！」

大輔は勇気を出して踏み出すが、ダンッ！という大きな音を立ててしばらくの間痙攣していた。

「～～～～！！」

呻き声のようなものが聞こえるが、気の所為という事にしておこう。

岳も少し不安だったものの壁を滑り下り、何とか地面に降り立った。

「ふぅ・・・」

安心して一息つく。

伊織は降りようとするも、後1歩踏み出せずにいた。

それを見たイクトが、手をガシッと掴み飛び出す。

「えぇ！？」

予期せぬ行動に驚く伊織だが、イクトは伊織を抱えたまま難なく降り立った。

足が痺れた様子も無く、平然としているイクトに思わず大輔が声をかける。

「足、痛くないのか？」

「受け身取れば、痛くない。それに、良くやってる」

１０メートルの高さから降りる事を良くやってる、という言葉に大輔は日頃何してるのか気になった。

残るは京だけである。

「京さ～ん、降りてきても大丈夫ですよ～」

ホークモンが下から声をかけるが、無理無理無理！と首を振る京。

それを見たイクトは、壁の前に立つ。

「よい・・・しょっ！」

足に力を込めて跳び上がり、壁をタンタンッと器用に上っていった。

最終的には一番上まで辿り着き、京の手を無理矢理掴み下へ跳び出す。

「いぃぃぃぃやぁぁぁぁぁぁぁあああっっ！！」

京の悲鳴が木霊したが、ダンッ！！という大きな音と共に消えた。

「つ～！」

さっきは平気だったイクトだが、今回は足を押さえる。

「意外に、重い・・！」

「そ、そんな事ないわよ！」

京は顔を赤らめて反論するが、まぁまぁと伊織がおさめた。

「し、身長差ですよ身長差！」

伊織が上手い事京を押さえ、イクトも足の痺れから解放させ一同はまた歩き出す。

「壊してく？」

塔の少し前まで来て、周りのダークタワーを見ながら拓也が言った。

「壊せるか如何か・・・」

強化されている事を知った太一は、出来るか如何か不安である。

んじゃいいや、と拓也はすんなりと諦め先を目指した。

珍しい、と輝二が呟いたのにも反応しない。

輝二と泉は顔を見合わせ、拓也の反応少なさに驚く。

それは他の皆も同じだったが、とりあえず置いていかれないように歩き出した。

塔の前に到着すると、トーマと光子郎が歩みを止めて左右へ散る。

トーマは右側、光子郎は塔の左側へと歩き、塔の壁を眺めていた。

「如何したんだ？」

復活した大がトーマに声をかけると、

「これ、全部デジモン文字じゃないか？」

なんと、模様だと思っていた全てがデジモン文字だった。

これ全部か！？と大が塔を見上げ、唖然とする。

泉は皆が驚いている間に塔の扉へと歩み寄り、力を溜めた。

「一撃・・・必倒ぉぉぉぉおおおおっっ！！」

――ゴォォォォォォォオオンンンッッ！！・・・ズゥゥゥゥゥンッ・・！

扉は鈍い音を立てて開け放たれ、ついには壁との繋ぎ目から外れて中へ倒れるように開く。

「開けるんであって、壊した訳じゃないわよ」

泉は呆然としていた皆に、念の為言っておいた。

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「壊したじゃんっ！」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」

一斉に突っ込む一同。

「・・・・・・・・♪～♪♪～」

泉はとぼけて鼻歌を歌い、中へと入っていった。

中は暗く、拓也に炎を纏ってもらい光源を保っている。

「ふぁ～ぁ・・・」

緊張感が無いというか、拓也が欠伸した。

大も飽きているような表情を浮かべ、周りを見回している。

突如ヒカリが歩みを止め、ギュッと拳を握った。

「何か・・・いる・・！」

無意識に輝一の手を握り、恐怖を抱く。

一同は前方へ意識を集中し、警戒したが真っ暗で何も見えない。

かと思った瞬間足元の感覚が無くなった。

「「「「「「「「「うわぁぁぁぁぁぁあああっ！」」」」」」」」」

「「「「「きゃぁぁぁぁあああっ！」」」」」

「「「「「何じゃこりゃぁぁぁあああっ！」」」」」

一同の声が木霊し、下へと消えていく。

落とし穴に落ちたらしい・・・。

92話：下へ降りろ（後書き）

大「思いっきりぶち破ったぞ、あのでけぇ扉を・・・」

啓人「す、凄いよね」

大輔「凄いを超えて恐ろしいの枠に入ってるけど」

泉「え、何て？」

大輔「な、何でもないですっ！」

９３話：遊園地・・？（前書き）

今回は笑いあり・・・にしたかったんです！

笑えると良いのですが・・・。

９３話、参ります！

93話：遊園地・・？

暗い中、底深き落とし穴に落とされた一同。

しかもばらばらになってしまったらしく、チームも何も関係ない。

幾つもの穴に分かれ、全員が散らばる。

幸い、パートナーデジモンと離れる事は無かった。

＜穴その1＞

「いいいいいいやぁぁぁぁぁあああああっっ！！」

真っ逆さまに落ちながら、京が長い悲鳴を上げて周囲へ反響する。

「うるさい・・・」

一緒に落ちた輝二は顔をしかめ、泉は仕方ないでしょ女の子なんだから、と頬を膨らませていた。

いやだがな、と反論し始める輝二。

呑気に会話している2人を見て、唖然としている空とミミ。

「と、とりあえず何処まで続いているのかなぁ・・・これは」

落下しながら引きつった笑みを浮かべる空。

この穴に落ちたのは京、空、ミミ、輝二、泉とパートナーデジモン達。

輝二は男1人らしいが、全く照れる様子も無く逆に泉を言い合っている。

「良いじゃない、女の子よ。女の子！」

「だからと言って叫ばれても困る」

「分かってないわね～」

輝二が鈍感なのに対して、思わずため息を漏らす泉。

輝二はふと穴の大きさを測り、横3メートル程だと悟った。

体に光を纏って光源を確保し、落ちた先を見ようとしたのが間違いである。

「ッ！？」

見えたのは針の山。

「泉！」

「分かってるわよ！」

泉も針を見て刺されても困る為、全員に風を纏わせて宙で停止する。

輝二はリヒト・シュベーアトを手に、針を切断して場所を作った。

ある程度斬り裂いて足を床に付けると、ボウッと火が灯る。
如何やら壁にかけてあったろうそくに、火が灯ったらしく辺りが見渡せた。

「「「ッ！」」」

空、ミミ、京の3人は思わず驚愕し、泉はあらぁ・・・と口に手を当てる。

針の山には骨らしき物が多数、こびり付いていた。

（デジモンか・・・。浮かび上がったデジコードを処理する者が誰もおらず、死んだってとこだな・・・）

輝二は考えをまとめて頷き、とりあえず奥に進む為道を作る。

だが針の数は半端無く、何処までも敷き詰められるように広がっていた。

「これだけあると切りが無いな。風をくれ」

「はいは～い」

輝二の光剣に風を纏わせ、衝撃波として放つと針は全て切断される。

真っ平らな床が完成した。

「おぉ～、すご～い」

京は呑気に拍手して輝二を褒める。

「拍手している暇があったら、さっさと歩け」

輝二はため息混じりに冷たく反応し、先を目指した。

京はクールだねぇと泉に耳打ちし、泉はそうなんですよぉと面倒くさげに返す。

「如何して奥へ行くの?落ちてきた穴を飛んでいけば外に出られるのに・・・」

ミミが不思議そうに天井を見つめたが、泉に先に進まないとダメですよ、と返されたしまった。

「ヒカリちゃんが何かいる、と言っていたのでその正体をつきとめないと、ですし」

「あ、そっか・・・」

――ガコンッ

頷いて1歩踏み出したミミだが、足元が下へ下がるのを感じた。

「え・・・」

――ヒュカッ、ビィィンンッ!

変に思った次の瞬間、ミミのすぐ前を矢が通り過ぎて反対側の壁へ

突き刺さる。

「し、仕掛け・・！」

ミミは今のがもし当たっていたらと身を震わせた。

空は大丈夫とミミを安心させ、慎重に進む一行。

「こ、こういう所って落とし穴とか、矢が飛んできたりとか、槍が飛んできたりしますよね？」

京が震えながら空に言うと、テレビの話でしょ！と空も怖がりながら返事する。

「大丈夫、私達が守ります！」

「頼むよ、ホークモン！」

「はい！」

――ガコンッ！

「え・・・」

ホークモンの足元が1段下がり、天井がゆっくりと開く。

空達が今度は何！？と天井を見上げていたが、斧がふって来た。

「「「きゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁあああああっっ！！！」」」

お互いに抱き合って叫ぶ3人。

輝二が前方で振り返ったが、特に驚いた様子も無く任せたと手を振ってまた先を目指す。

任された相手は勿論、泉だ。

「一撃・・・必倒ぉぉぉぉおおおおおっっ！！」

ダンッと跳び上がり、斧を蹴り飛ばす。

――ガラァァン、ガララァァンンッ！

斧は転がって床に落ち、3人共怪我はしなかった。

「「「ありがと～！」」」

空達は涙気に泉の手を取り、助けてくれた事に礼を言う。

ホークモンは次こそ守ってみせる！と翼（こぶし）を握っていた。

「あと・・・両側から壁が迫って来るっていうのも、テレビで見た気が・・・」

「ま、まさかぁ・・・」

京の言葉にそれはないでしょ、と返す空だが足元が1段下がる。

――ガコンッ！

「まさか、ね・・・」

壁を見つめる空だが、横幅5メートル弱の壁は少しずつ迫って来ていた。

――ズズズッ・・！

「「「やっぱりいいいいいいっっ！！」」」

「えっと・・・」

これには泉も如何対応すれば良いのか分からず、壁の接近を許す。

横幅はどんどん狭くなり、場所も少なくなっていった。

「ここで死ぬなんて嫌っ！」

「ミミちゃん気が早いわよ！」

「って、如何やって止めるんですかこの壁！」

3人共迫って来る壁に慌て、冷静な判断が出来ないでいる。

泉はと言うと、如何しよっかな～と呑気に考えていた。

――ズズズッ・・・

突如壁の進行が止まり、横幅3メートル程である。

えっと顔を上げる3人。

「止まった・・？」

パルモンは両側の壁を凝視して、ピヨモンやホークモンを見るが何もしていない。

「さっきから後方でギャーギャーと、騒がしい事この上無い・・！」

若干怒り気味の輝二が、前方で光剣を壁に挟み進行を止めていた。

リヒト・シュベーアトを1本に繋ぎ、壁と壁の間につっかえ棒として挟んでいる。

「輝二ナイス～♪」

泉はグッジョブとサムズアップし、輝二に言ったのだが・・・。

「抜くぞ・・？」

怒り気味の輝二はつっかえにしている光剣に手をかけて、泉達に早く歩くよう促す。

「短気ね～、カルシウム取りなさい！カルシウム！」

――ガコンッ！

泉が歩きながら言っていると、床が1段下がった。

「またぁ～？」

もう飽きたように、泉が壁から突き出した槍を裏拳で弾く。

――ガコンッ、ガコンッ、ガコンッ！

泉の後ろを歩いていたパルモンとホークモン、ピヨモンが一気に踏んだ。

全員が嫌そうな顔を浮かべた直後、床が傾いて後方から岩が転がって来る。

「「「やぁぁぁぁぁぁぁぁぁあああっっ！！」」」

空とミミ、京は一目散に駆け出して輝二を追い抜いた。

「最初からその速さで歩けよ・・・」

「後よろしく♪」

呆れている輝二の横を、笑顔で泉が通り過ぎパートナーデジモンもそれに続く。

「・・・」

輝二は無言でそれを見送り、深いため息を吐いた直後支えにしていた光剣を消した。

再び迫り始める壁だが、今度は岩がつっかえになって止まる。

岩も壁に挟まれて転がる事は無かった。

「ここは遊園地か・・・！」

思わずそんな愚痴をこぼしてしまう輝二である・・・。

93話：遊園地・・？（後書き）

これはまだ先の話なんですが、～ファイナル～が落ち着いたら私のもう1つの作品である、『魔物と術師』とコラボやろうかな～と考えております。

・・・ゴタゴタになりそうな予感がします。

リンク「よろしく～」

・・・ここで出て良いの？

リンク「良いんじゃない？」

じゃ、良いって事で。↑流されやすい

９４話：冷静であれ（前書き）

岳って・・・こんな性格でした？

まぁとりあえず９４話、参ります！

９４話：冷静であれ

＜穴その２＞

この穴に落ちたメンバーは・・・。

「ここ、面白い！」

イクト。

「何が面白いんだ・・・」

トーマ。

「緊張感が無いと言うか何と言うか、みたいな？」

岳。

「退屈はしないね」

健良。

「最悪なんですけど・・・」

淑乃。

そのパートナーデジモン達である。

イクトにとってここはカラクリ屋敷。

一行が通過した道は矢や槍、斧等が壊された状態で散乱していた。

――ガコンッ！

イクトは鋭い視力で罠のスイッチを見つけ出し、自分から押す。

「勘弁してくれ・・・」

トーマはため息を吐きながら、額に手を当てた。

右側の壁がパカッと開き、槍が数本飛び出してくる。

イクトは遊びながらそれをかわし、槍を折った。

「こんなに楽しい所、初めてだ！」

満面の笑みを浮かべるイクトはどんどん先へ進み、次々と仕掛けを破壊する。

「この通路は何処まで続くんだ・・？」

「横穴とか無いかな？」

岳は興味本意で壁を触っていると、ガコンッとへこんだ。

床が傾き、滑り台のようになる。

傾き方が異常で、最終的には４５度程傾いた。

「く・・！」

「落ちる・・！？」

「抵抗しないで落ちる！」

トーマと健良は床に手を突いてぶら下がるが、ララモンは下へ落ちるよう促す。

イクトは下へ落ちる・・・というより走っていた。

「ファルコモン、行くぞ！」

「ＯＫ！」

イクトはファルコモンの足に掴まり、一気に急降下する。

――ダンッ！

「ふぅ・・・」

無事最下層に着地するイクトとファルコモン、トーマ達も到着した。

滑りながら来たらしく、足が痺れる事は無い。

ろうそくが壁に掛けられており、広い場所が見渡せる。

そこに奴がいた。

「あいつは・・！」

岳が敵を確認して怒りを覚える。

健良はデジヴァイスを向けて、浮かび上がったデータを読み上げた。

「『ピノッキモン。究極体。パペット型。必殺技は＜ブリットハンマー＞。操り人形のような姿をしているが、自らの意志を持ち行動する事が出来る。性格は悪く嘘つきであり、他人をよく騙す癖がある』・・・騙す、か」

健良は頭に居座っているテリアモンを見て、気が合いそう・・・と密かに思っている。

「意地悪するの～してみてよ～」

テリアモンはクルクル回りながらそう言うが、ピノッキモンは無言でハンマーを振り上げた。

慌てて散開する一同。

――ドガァンッ！

床がへこんで形を変える。

「そうか・・・操られているんだったな」

トーマはメタルシードラモンを思い出し、ガオモンに指示を出した。

「攻撃はそこそこ。防御に徹してくれ！」

「ＹＥＳ！マスター！」

ピノッキモンは操られているとは言え究極体。

進化出来ないこの状況では、一撃食らっただけでも危ない。

防御するのが普通だ。

「ピノッキモン・・！」

岳はピノッキモンと言い合った仲の為、昔を思い出して奥歯を噛み締める。

「岳、落ち着いて」

岳の気持ちが高ぶっていくのを感じたパタモンが、岳を落ち着かせようとした。

（あいつは・・・あいつは・・！）

自分達を弄び、仲間割れまでさせた張本人。

仲間をばらばらに飛び交わさせ、迷子のように扱うデジモン。

「岳、もっと冷静になろう？」

パタモンが不安な顔をして自分を見ている事に気づき、岳は一瞬後悔した。

（何やってるんだ僕は・・！パタモンを不安にさせて・・・）

頬を叩き、シャキッとする岳の視界にトーマが映る。

「ガオモン、４時の方向！」

「ＹＥＳ！」

いつも冷静で皆を指示していくトーマ。

その指示を忠実にクリアしていくガオモン。

（僕もあんな風に出来るのかな・・・）

岳はパタモンを見つめ、デジヴァイスを握る。

「如何したの、岳」

「・・・僕もトーマさんみたいに、パタモンを守れるかなって・・・」

「出来るよ、だって岳だもん！」

パタモンが根拠になってない事を言う為、思わず小さく吹き出してしまう岳。

「やっぱりパタモンだなぁ・・・。よし、やろう！」

パタモンは笑顔になって地面に降り、いつでも良いよと岳の指示を待つ。

（大丈夫。‘冷静’になれば、‘希望’だって見えて来るんだ。それは誰よりも、僕が知ってた事じゃないか・・！）

――キュィィィィンンッッ！

岳のDターミナルから紋章が輝き出し、デジヴァイスと共に共鳴した。

「パタモン、ワープ進化っ！」

パタモンが光に包まれ、鎧に身を包む天使が現れる。

「セラフィモン！」

――――

セラフィモン

究極体。熾天使型。必殺技は＜セブンヘブンズ＞

――――

蒼と白銀の鎧を纏い、背中に黄金の翼を持つ天使デジモン。

トーマは究極体に進化出来た事を素早く悟り、ガオモンを引かせる。

「よく頑張った」

「いえ」

トーマはピノッキモン相手に立ち回っていたガオモンに賞賛をおくり、後の事は岳とセラフィモンに任せた。

「＜ブリットハンマー＞」

ピノッキモンはハンマーを振るいセラフィモンを攻撃するが、セラフィモンは瞬間的に背後へ回り込む。

「＜セブン・・・ヘブンズ＞！」

7つの光球を一気に放ち、ピノッキモンの背中に直撃した。

吹き飛ばされて壁に激突するピノッキモンだが、すぐに立ち上がってまた攻撃する。

ピノッキモンが消えたと思うと、セラフィモンの背後に出現した。

「後ろ！」

岳が指示を出し、セラフィモンが素早く反応する。

ピノッキモンが振るったハンマーの柄を掴み、空いた左手で光球を発射した。

「＜セブンヘブンズ＞ッ！」

――ドゴォォォオオンッッ！！

至近距離からまともに食らったピノッキモンから、デジコードが出現する。

「しまった・・・。デジコードをスキャン出来る者がいない・・・」

トーマがはっと気づくが、岳は大丈夫ですと頷いた。

セラフィモンがデータを一時的に持ち、球体として保存する。

デジタマは天井を突き抜けて空へと上っていった。

「終わったよ～」

パタモンに戻り、岳に抱きつく。

「ご苦労さま！」

岳はパタモンが持っているデジコードの球体を、一時Dターミナルに納めた。

これでまた1体、紋章を使用する事が出来るようになった・・・。

９４話：冷静であれ（後書き）

お分かりでしょうか？

岳が冷静の紋章です！

さぁて次は何処の穴にしようっかな～・・・ってまず穴その１グループを！

９５話：情熱を燃やせ（前書き）

９５話、参ります！

95話：情熱を燃やせ

＜穴その1＞

一行は広い場所へ到着する。

そこに巨大な影が居座っていた。

――――――

ムゲンドラモン

究極体。マシーン型。必殺技は＜∞（ムゲン）キャノン＞

――――――

「ムゲンドラモン・・！」

空が声を漏らし、ミミと顔を見合わせる。

「奴の攻撃は？」

輝二がリヒト・シュベーアトを両手に、空達に確認を取った。

空は無言でムゲンドラモンを指差し、ミミが砲撃よ！と叫ぶ。

「＜∞キャノン＞」

両肩に装備されている2砲から、エネルギー波が発射され一同に襲

いかかった。

空はミミを連れて横へ身を投げ出し、泉が京を抱いて横っ跳びに回避する。

デジモン達も素早く回避し、輝二は天井高く跳び上がった。

砲撃が通過した直後、輝二は床に降り立つ。

（動きは遅いが・・・装甲が問題だな）

輝二はムゲンドラモンの装甲を見て、光剣が通じるかを疑問に抱いた。

「援護」

「はいはい」

輝二は背後にいた泉に一声かけ、ムゲンドラモンへ駆け出す。

「1人じゃ無理よ、ピヨモン！せめて援護だけでも！」

「うん！」

ムゲンドラモンの強さを知っている空は、ピヨモンに輝二の加勢を頼んだ。

ピヨモンに続いてホークモンも飛び出し、パルモンは人間チームを守る為の護衛役となる。

「＜８キャノン＞」

再び発射される砲撃の狙いは輝二だったが、輝二は自ら砲撃の中へ身を投げた。

「無理するわねぇ」

泉はそれを援護する為、風で砲撃の軌道を反らす。

ガラ空きの所へ輝二が突っ込んだ。

――ガキィンッ！

斬りつけるも硬い装甲によって弾かれ、輝二は一時体勢を崩す。

ムゲンドラモンは腕を振るって、輝二を突き飛ばした。

だが、輝二も突き飛ばされる寸前光剣を重ねて防いだ為、逆に壁に足を付けて反動を利用し急接近する。

――ガギィィッ！

すれ違いざま斬りつけたが、やはり刃が通らずに弾かれた。

「拙いな・・・」

こちらは斬る者と風をぶるける者が今のところの攻撃手段であり、成長期では攻撃など通りはしない。

斬る事も意味が無くなった。

残るは風だが、剣で出来なかった事が風に出来る訳も無い。

「勝てないの！？」

京が状況を悟って思わず声を出す。

「大丈夫ですよ、何とかします！」

「何とかって・・・」

ホークモンが言葉をおくるが、不安な気持ちは拭い去る事など出来ない。

蒼白な顔をする京だが、バシンッと強く空に背中を叩かれた。

「いっ！？」

思わず眼鏡が外れそうになり、慌てて押さえる。

「な、何するんですか！？」

「弱気にならない！ＯＫ！？」

「は、はいっ！」

空にカッと言われ、頬をパシッとはたいて気をハッキリさせる京。

（そうよ、弱気になっちゃダメなんだから・・！）

京はデジヴァイスを見つめ、進化出来ない事が分かっていても思わず握りしめた。

弱気になれば、空が励ましてくれる。

背中を強く叩いて、自分を繋ぎ止めてくれた。

（弱気になっちゃダメ！私なら、逆に高ぶった方が合ってるんだ！）

「ホークモン、ガンガン行くよ！」

「はいっ！」

京の明るい声にホークモンはパッと顔を輝かせ、笑顔で頷き返す。

――キュィィィィィンッッ！！

京のDターミナルが輝き出し、デジヴァイスと共に眩い光を放った。

「ホークモン、ワープ進化っ！」

ホークモンが光に包まれ、腰に剣を携え背中にはクロスボウを背負う鳥人のようなデジモンが現れる。

「ヴァルキリモン！」

――――

ヴァルキリモン

究極体。戦士型。必殺技は＜サンクションストーム＞

「行きますよ・・！」

ヴァルキリモンは腰の剣の鞘を掴み、右手で柄を握る。

体勢を少し低くしたのを視界の端で捉えた輝二は、場所を開けて後退した。

入れ替わるようにヴァルキリモンがムゲンドラモンの懐に急接近し、剣を鞘から抜く。

「＜フェンリルソード＞！」

剣は装甲に通らなかったものの、当たった部分を氷結させた。

「＜∞キャノン＞」

ムゲンドラモンが砲撃を放つと、タイミング良く後退して剣を納刀し今度はクロスボウを取り出すヴァルキリモン。

矢を弦につがえ、思い切り引き絞って狙いを付けると、勢い良く放たれた。

「＜アウルヴァンディル＞！」

矢はムゲンドラモンの装甲に突き刺さり、中の機械を破壊する。

「通った・・！」

それを見た輝二は矢の威力に驚き、軽く眼を見開いた。

ヴァルキリモンは弓を右手に、左手の鋭利な盾の先をムゲンドラモンに向ける。

「＜サンクション・・・ストーム＞ッ！」

盾がガシャンという音を立てて外れ、ムゲンドラモンへ発射された。

盾は複数に分かれ、ムゲンドラモンを中心に竜巻を巻き起こす。

風の刃に乗り、鋭利な盾が斬り裂いていった。

やがてダメージが蓄積したムゲンドラモンから、デジコードが浮かび上がり輝二がスキャンする。

盾はヴァルキリモンのもとに戻り、進化を解いた。

「ホークモン、ビンゴビンゴォッ！」

勝てた事がよほど嬉しかったのか、京はホークモンに抱きつく。

「私達も負けてられないわね～」

ミミがパルモンを見て、うんうんと頷いた。

意味が分からないパルモンは首を傾げたが、空はそうかも・・・と苦笑している。

輝二はとりあえず戦闘が終わった事に安堵し、光剣を消した。

「一件落着、ね」

泉は大きく背伸びして緊張を解く。

「で？」

「・・・で？」

泉が満面の笑みで輝二に尋ねたが、意味が分からず鸚鵡返しで問い返した。

「これ、出口まで戻らないといけない訳？」

「・・・」

輝二の沈黙は、肯定を現していたという事を記しておく・・・。

９５話：情熱を燃やせ（後書き）

『情熱』の紋章が京なんですが、そこまで情熱燃やしてない・・・。

難しいの一言に尽きます・・・。

あと１つ、お知らせが。

１１月最後の辺りにテストがございますので、更新が格段と遅くなります。

完全に停止はしないと思われますね。

今までの経験上・・・。

３日に１話、４日に１話になるかもしれません。

それでもお待ちいただけると嬉しいです。

９６話：声無き体（前書き）

奴が登場します！

嫌いに思う人も多いのでは・・？

９６話、参ります！

９６話：声無き体

＜穴その３＞

「ったく、よりにもよってこの状況・・・」

大輔は後悔するように落ち込み、休憩も兼ねて座り込む。

「大輔～、だらしないぞ～」

そう言うブイモンだが、自分も座り込んで休憩していた。

人の事言えるのか、と内心突っ込む大輔だが恐らく言えない・・・。

この穴に落ちたのは１人＋１匹だけだ。

先程からのトラップに飽き始め、面倒くさそうにゴロンと寝転がる大輔。

――ガコンッ！

「「・・・はぁぁぁ～」」

本日何度目かの鈍い音に、２人共深いため息を吐いた。

床が４５度傾き、２人は滑り台のように落ちていく。

抵抗する気力すら無いらしい。

ブイモンなど遊び半分で楽しんでいる状況だ。

ふいに床が消え、大輔とブイモンは真っ逆さまに落とされた。

「のわぁぁぁぁあっ！？」

「下が無いぃぃぃぃぃぃっ！！」

――ドスンッ！ポフッ

大輔が新たな床に激突し、そこへブイモンが着地する。

決まった・・・と心で胸を張っているブイモンだが、その下では大輔が呻き声を上げていた。

「ぐ、お・・・重いぃぃぃ・・！」

「あぁ！ごめん大輔！」

ブイモンは慌てて場所をどき、大輔の怪我を見るが何処も異常無しだった。

「誰かいるのか～？」

遠くから声が反響して響き渡り、大輔とブイモンははっとして顔を見合わせる。

バッと立ち上がって声が聞こえた方へ駆け出した。

「いるぞ～！」

「こっちこっち～！」

少し走っていくと、トーマ達一行が視界に入った。

「あれ、大輔君」

「岳はこのチームか」

再開を喜ぶ2人と、その下で同じく喜び合う2匹。

「悪いんだが、喜ぶのはここから出た後にしてくれ」

トーマはばつが悪そうな表情を浮かべ、大輔達に先を促す。

また歩き始める一同は、出口を探した。

＜穴その４＞

「ふぁ～ぁ・・・」

拓也は緊張感の欠片も無い声を上げて、欠伸する。

「ここ、結構面白いな！」

大は飛んできた矢をかわしながら、面白い玩具を見つけた子供のように笑みをうかべた。

「兄貴～、それは俺が壊すんだ～！」

アグモンが、大が折っている矢を指差しながら文句を言う。

俺のもんだ、と意地の悪い笑みを浮かべる大。

「呑気な奴等だよなぁ・・・」

太一は啓人と並んで歩を進め、陽気な者達に苦い笑みを向けた。

「退屈はしませんけど、騒がしいですね」

啓人も苦笑を浮かべながら、前方を楽しそうに歩んでいくアグモンとギルモンを眺める。

2体はすっかり意気投合したようで、愉快に話し合っていた。

「ギルモンパン、美味しいんだよ～」

「良いなぁ。僕も欲しい」

その会話を聞いて、それ作るの僕・・・と思わず自分を指差す啓人。

この穴に入った・・・と言うより落ちたのは以上だ。

「拓也、お前さっきから眠そうだな」

「お～ぅ、俺、最近あまり寝て無いんだわ・・・」

大が不思議に思って声をかけてみると、意外な返事が返って来る。

「いっつも夜寝てんじゃねぇか」

「いや、実は模擬戦やってるだけ・・・」

そう。

毎夜毎夜、魂広して自分の相棒と模擬戦をしていた拓也は、睡眠時間が極限に少ない。

それで先程から欠伸ばかりしていたのだ。

――ガコンッ！

太一の足元が低く下がった。

「またかよ、おい・・・」

太一は嫌そうな顔を浮かべ、大が飛んできた矢をかわして折る。

何かが飛んで来ては壊している為、一行が通った場所には武器の残骸が転がっていた。

啓人は振り返ってその惨状を眺め、思わず苦笑する。

「眠い、眠い・・・」

拓也はカクンカクンと顔を揺らし、壁伝いに歩いていった。

――ガコンッ！

壁に手を突いた拓也だが、壁の岩がへこむ。

突如床が傾き、滑り始める一同。

「面白ぇなここ！」

大はズザザァッと下へ滑り降り、やがて広い空間に到着する。

今の出来事で眼が覚めたのでは、と拓也を見る啓人だったが、壁に寄りかかって寝始めていた。

「えぇ！？」

ここで眠られては困る為、急いで起こす。

「シッ、静かに・・！」

太一が人差し指を立てて合図し、全員に沈黙を促した。

その視線の先には、背中に４本の剣を背負ったピエロのようなデジモンがこちらを見据えている。

ピエモン

究極体。魔人型。必殺技は＜トランプ・ソード＞

「気を付けろよ、特に人形にされたら拙い」

「人形？」

太一の言葉に、大のアグモンがキョトンとして聞き返す。

「率直に言うとだな・・・」

太一がそう口を開いている間も、ピエモンは懐からハンカチのような物を取り出していた。

「ハンカチは避けろっ！」

「「はぁ！？」」

「ど、如何いう事ですか？」

一同が驚いている中、ピエモンのハンカチが消え太一の背後に現れる。

太一は予想していたので、横へ跳んで避けた。

ハンカチは一瞬で巨大化し、誰もいなくなった所を包み込むように覆いかぶさる。

「眠い時に・・・」

拓也は面倒くさそうに龍魂剣を握り、右手で頬をつねって眼を覚まさせた。

と言っても、若干眠気は残っているが。

ハンカチが消え、今度はギルモンの背後に出現する。

「カードスラッシュ、＜インターフェース＞！」

啓人がすぐさまカードをスキャンし、ギルモンの周囲にバリアを張った。

このバリアは特殊で、触れた物を全て弾き返す。

ハンカチはギルモンを包む事が出来ず、啓人に狙いを変えた。

「おりゃぁぁっ！」

大がそこへ突っ込んで殴るが、ハンカチはスルリと避け大を包む。

「しまった！」

太一が後悔するように歯ぎしりし、大が消えるのを見ていた。

ポトリと人形が落ち、すぐさま太一が拾う。

「アグモン、持ってろよ！」

太一は大のアグモンに渡し、首を傾げているアグモンにそれが大だ！と叫び散らしてしまった。

「えぇぇっ！？・・・・・・食うの？」

「阿呆かっ！」

検討違いの事を言うアグモンに、思わず突っ込んでしまう太一。

太一ははっとして周囲を見回し、拓也の姿が無い事に気付いた・・・。

９６話：声無き体（後書き）

と、投稿出来ました・・・。

ってか勉強しなければ、テストが・・！

日本語難しい！

何さ修飾語って、接続後って何さ！

主語述語は分かるよ、何さ感動詞って！

何さ副詞って！

あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁあああああああああっっ！！！

↑頭を抱える

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8269w/

デジモンフロンティア～ファイナル～

2011年11月21日23時47分発行